
カラポン・ザ・ストーリー

鈍行彗星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カラポン・ザ・ストーリー

【Nコード】

N1178H

【作者名】

鈍行彗星

【あらすじ】

キス魔な彼女は、ロボットかもしれない？ 俺、殺されるかも――

―― 次回更新予定：1月23日

0『プロローグ（無題）』（前書き）

この小説は、一応全年齢対象ですが、16歳以上の方に推奨いたします。

0『プロローグ（無題）』

夕日、というには、あまりにも真っ赤だった。そして雲が多く、風も強い。

ここは小高い丘、そして“彼女”はそのてっぺんに立っていた。

「林檎……………」

しやり、しやりと、俺が歩くたびに雑草を踏みつける大きな音がある。あいつにだって聞こえているはずなのだ。

「カラポン？」

カラポン……………俺のアダ名をつぶやいた彼女は、ゆっくりと俺の方へと振り返る。短いスカートが風によく揺れているが、その下に穿いている緑の短パンが全部台無しにしていた。さんざんやめると言ってるのに。

「やっと来たんだね、遅かったじゃん。

私、すごいワクワクしてたんだから。

がっかりさせないでよね？」

彼女…蒼井林檎の顔は、笑っていた。とても、恐ろしい目で、俺のことを見下ろしながら。

「違う…！」

俺はお前とそんなことをするために来たんじゃない！

戻ってこいよ！ もう、馬鹿な真似はやめろ…！」

ああ、どうしてこんな思ってもいないことをスラスラと言えるんだろう？ そして彼女もまた、スラスラと俺に向かってよくしゃべってくるのだ。

「あははは…！」

何言ってるのカラポン。

私と遊ぶ約束したじゃん？

私あれからずーっと待ってたんだから。

カラポンが来るのを、ずーっと待ってたんだよっ！！ あはははは！！！！！！

遊ぼうよカラポン！！！！！！」

巻き起こる渦を巻く空気。林檎の足元から放たれたそれは、草を、土を削ぎ飛ばし、爆発するかのように弾けとんだ。俺はそれに吹き飛ばされないように立っているのが精一杯で、林檎がどうなっているのか全く見る余裕さえなかった。

「！？」

ひゅうウンツ、という嫌な音が聞こえたと思った瞬間、俺はそれが危険な物だと本能的に察知して横に飛んでいた。すぐに爆発が起こって、俺の立っていた辺りは黒煙の塊になっていた。

「よかった、ちゃんと避けてくれたんだね。

すぐに死んじやったらつまんないよ？」

起き上がると、林檎はすぐそこに“浮かんで”いた。ブレザーが破れ、両方の袖からは白い翼が突き出て、元の腕はだらしくだらんと垂れるような格好だった。

まるで翼の方が本当の方の腕だと言っているかのように。

「林檎……！！

やめるんだっ！！

俺達が戦うことに意味なんか無いだろう！？

今すぐ下りて来い！！！！」

違和感を感じ始めたのはこの頃だった。林檎も……俺自身も、何かがおかしい。でも、それ以上のことにその時気付くことはできなかった。

「あはははは！

行くよカラポン！！

全部、ぜんぶ避けてよね！！

これぐらいカラポンになら出来るはずじゃん！！」

次々と撃ち放たれるミサイルというミサイル。その全ては……あのスカートの下短パンと足の隙間から飛び出していた。などと冷静に観察している場合じゃない……！

「うわっ！」

ズガンッ！ ドウン！ ダダダダダダ……！！！！……次々と近づいてくる爆風から逃れるため、俺は丘を下へ下へと走った。

一度止んだかと思えば、今度は林檎が俺の真横に現われて射撃してきて、俺もまたその射線から離れるために方向を変えて逃げていく。その繰り返しだった。

「カラポン待つてよお！」

逃げるのはダメなの！

私と遊ぶんだから逃げちゃダメえ……！！

遮る物は何もなく、木の一本でさえも生えていない。そしてこの丘、いったいどこまで続くのだろうか？　ずっと下り続けているはずなのに、全然景色が変わらない。俺は林檎から逃げられないということなのだろうか？

「……！！」

足をつまずいた！　俺は坂道の草っぱらに倒れこみ、そしてこのチャンスを林檎が逃さないわけがなかった。次々と白い弾頭ミサイルが降り注ぎ、視界には煙が、そして耳には爆音しか感じられなくなった――

ドンドンドンドン……！！！！！！！！

「あははは……！」

なあんだ、もう終わりなのカラポン？

つまんなあい、つまないよおカラポン！！

あはははははー！！」

地面へ舞い降りると、ほとんど前を見ることができないほどに煙は濃厚だった。しかし、風が少しずつ煙を飛ばして視界が開けてきて、倒れているカラポンを見つけるのに時間は掛からなかった。

「カラポン……死んじやったかな？」

「……そう、もう終わりなんだ。」

死んじやったならしょうがないね、残念」

うつぶせに倒れているカラポンを見つけ、翼を格納……元の間の人に帰った私は、その横へとしゃがみこんだ。カラポンはもう息は無く、目も閉じてしまっていた。

「かわいそうなカラポン……お別れのキスをしようね……？」

いつものやり取りだった。朝に会ってはキスをして、昼に会ってはキスをして、夜に別れる時もキスをした。……それが、これを最後にできなくなる。……優しく背中にも手を回し、私とカラポンは寄り添った。

「ばいばいカラポン……大好きだよ——」

バンっ

「お目覚めの——」

「うアアアアアアアあああ！……！！！！！！！！！！」

ゴチン——

……目覚めて早々、頭が痛かった。何て言うか、物理的にも精神的にも……。

「う~~~~っ、カラポン痛い！

ヒドイじゃん！

せっかくお目覚めのキスをしてあげようと思ったのにつ——！」

「お目覚めの……キス？」

周りの景色は、見慣れた教室。時間はまだ……昼休みだ。

思い出してみよう。俺の名前は唐林拓二、16歳。そしてそのキス魔は……青井林檎、永遠の1歳児……もとい高校三年生、本人談。……決してロボットなんかじゃない、人間だ。よし、オーケー。

「夢……、だったんだな……」

そう。よく考えればありえないとすぐ分かること。体から翼が生えたり、ミサイルが出たり、俺の腕が銃になったり。そもそも自分の姿が見えるって時点で、夢って確定な要素じゃないか。全然気にする必要なんてないんだぜ、ハハハ！

そんな夢を見るのが、“初めて”だったなら。きっとそう思うことができただろう。

でもそうじゃなかった。青井林檎に会った時から、俺はこの夢を、同じ夢を、何度も、何度も見てきていた。

“夢じゃない”のかもしれない、そう思ってしまいそうになるくらいに――。

「夢なんかじゃないよ」

（え……………？）

ドキリ、とした。でも林檎がしたのは、いきなり俺の頭を抱えて、唇を奪っただけ。いつものように、いつものような濃厚なやり方で、いつものような長い時間。周りが無視する冷めた空気も、気にならないくらい慣れてしまった。

「……………」

初めの頃はとても緊張していたのに、回数を重ねる毎にその重みは薄く、更に薄く感じるようになった。

『これ』が林檎のクセなんだと。そして『これ』ができないと、林檎すぐく機嫌を悪くする。そうなったら、林檎は何をやらかすかわからない。

俺に危害が及ぶだけならまだしも、すれ違う見ず知らずの人を巻き込むこともあるから、俺は林檎の機嫌を常に伺わないといけないかった。

（好きとか、嫌いとかじゃないんだよね……………）

それが、俺と、青井林檎が未だに付き合い続けている理由。

男子からも女子からも、先生からでさえも冷たい目で見られ、別れる、釣り合わない、お前もダメになると言われ続けていても、未だに付き合い続けている。

決して俺は幸せじゃないけれど、誰かの幸せを、俺の勝手な気持ちで壊すわけにはいかない。たぶん、林檎の幸せも。

「ぷはあ！」

カラポン今度はすっぱい味じゃん、朝は納豆味だったのに。
お昼何食べたの？」

「……………日の丸弁当」

青井林檎は、料理をしない。

この物語は、キス魔の青井林檎と、カラポンこと俺、唐林拓二とを巡る物語。

ロボットなんか全然関係ない、現代の、ありふれた学園バカップル物語の一つでしかない。

あの女に、出会つまでは……………。

- 0 - 『 無題 』、) e n d

0『プロローグ（無題）』（後書き）

この物語は、以前鈍行彗星がシナリオを書いていた同人ゲームの、世界観のみを流用した小説です。

どっちも未だ完成してないんですが、まあ少しずつ（苦笑

P・S・町田先生、お元気ですか。

1 『メディア部』（前書き）

カラポンを始め、メディア部のメンバーは星流山岳公園で自主制作ドラマの撮影をやっていた。

林檎との仲について心配してきたブシドーに、カラポンは本音をばやく。

どんこめ式『ちよつとHなSF田舎ストーリー』！

カラポン・ザ・ストーリー、いよいよ本編スタート！

1 『メディア部』

- 1 - 『メディア部』

『私…… あなたのことを、ずっと好きだったの』

目いっぱい映る彼女の顔は、今まで見たことが無いくらいに綺麗だった。どうして毎日彼女を見ていて気付かなかったんだろう？　しなやかな、黒く、長い髪が風に揺れ、舞い散る桜の花びらともあいまって、彼女の美しさを何倍にも引き立てている。

今の彼女は、とても可愛いかった。

『お願い答えて…… 私知りたいの、あなたの気持ち…… 私のこと……、好き？』

「…… ゆき、こゆきっ……！」

「…… あ、か、カットでえす！」

ポカン という漫画みたいな音で我に返った俺は、RECボタンを押してビデオを止めた。

「いつてえ〜ッ?! ゆきちゃん、台本が鼻直撃ッたってばよお〜……」

「わ、わ!? ごごごめんなさい栗野先輩！」

メディア部、っていう変な部活がある。元々は放送部から発展したものらしいのだが、今では自作のテレビドラマの撮影をやったり、ゲームをやりまくったり、と思ったらプラモを作りまくってたり……。表現の自由と自主性の尊重を都合よく履き違えたような、あまり聞いたことの無い部活だ。

なんかの小説に出てきた『世界を大いに……とかいう団』ってのが、ちよっただけ似てかな？

ちなみに、今現在やっている活動というのはまだしつかりとした物の方で、自主制作の青春テレビドラマを作っているところだ。わざわざ日曜出勤して、景色のいい近くの山岳公園まで来て撮影に挑んでいたりする。

「あああゝゝゝもう超恥ずかしかったあああ、二度と言えないよこんなセリフ！」

「いつひっひ、最高だったぜブシドー。身の毛もよだつとは、まさにこのことだな」

ちよつとそれどうゆう意味よー！ と叫んでるのが、2年の寒来魂子。ブシドーっていうのは名字が“さむらい”って読むのと、元々剣道部だったってことに由来してる。メディア部は兼部だ。

鼻を押さえながら軽口を叩いている方は2年の栗野平助、ただのバカだ。名前も“アホのすけべい”って読み間違えられるしな。

「おいおい俺は褒め言葉で言ってるんだぜ？ わっ、カラポンタッチだぜー！」

「へ？ あっ…おい！」

いきなり俺の肩を“ドツいて”いくと、栗野の奴はそそくさと俺の後へと逃げていった。人をからかうだけからかっておいて、最後の始末を俺に任せるのがあいつの悪い癖だ。

「あっ……………もうっ！ ……カラポン監督は、どうだった？」

「ん……………あ、ああ」

正直な感想は、何の文句の付けようが無い、ブシドーは完璧な演技だった。カメラ越しに見ていて、目の中いっぱい彼女の姿を映された俺は、陶醉したような感動さえ覚えたほどだったのだから。

ただ……………その感想を素直そのままには答えるわけにはいかない。それには理由があった。

「カーラ、ポーン！ 私にも見せてよおん、ブシちゃんの演技見たいー！」

あんまり褒めすぎると、“彼女”が機嫌を損ねてしまうからだ。

少しでも機嫌を損ねたなら…

「わかった、わかったから！ … 林檎、皆が見てるだろ、ちょっと離れ…ぷ！？」

…このように、いきなり抱きついて、キスを迫ってくるのだ。

先に断っておくが、彼女、『蒼井林檎』のこの行為は、必ずしも俺にとって嬉しいものではない。むしろ迷惑に感じることも多い。

…今だってこうやって、友人や後輩達から、冷めた目で見られてしまっているのだから。

「わひゃ！？」

「おーおー、急に熱くなってきたなあカラポンよお。熱すぎて小雪ちゃんのお顔が、瞬時に真っ赤っ赤だぜえい？」

小雪ちゃんというのは、メディア部に入っただけの一年生の女の子だ。真面目、ウブ、ちゃんまの三要素をこねて固めてできたような、眼鏡のよく似合うおさげ髪の女の子だ。

…今日が初めてでこそないものの、俺と林檎のキスを見ただけでこの有様だ。

「ほら小雪、しっかりしなさいって」

「あ、…う、うん、ごめん…」

ポン、と、台本で小雪ちゃんを小突いたのは、ぼたんちゃん。ぼたんちゃんも、小雪ちゃんと一緒に入ってきた一年生で、二人は常にセツトで行動している。しっかりしている反面、ちょっとキツイ印象を受ける時もある子だ。

「それで、カラポン先輩。今の魂子先輩の演技はどうだったんですか？ OKですか、リテイクですか？」

「お、おう。一発OKだ、すげーいい演技だったぜブシドー」

「えっ、ホント？ マジ！？ やったあ！」

撮りなおしにならなくて安心したのだろう。ブシドーはホッ、と、息をついていた。カメラ越しでは全然分らなかったけど、やっぱり緊張していたんだな。

「ええ」と……、シーン7の5が終わったから、ええとえと……」

「ゆき、私も今の魂子先輩の演技モニターで見たいな。ちょっと休憩にしよう？」

「ぷにちゃんにさんせーいっ！ 私もブシちゃんの演技をもう一回見たいでえーすう」

…『ぷにちゃん』というのは、林檎がぼたんちゃんに勝手につけたあだ名だ。いつだったか、林檎とぼたんちゃんがケンカした時があつて、その時ぼたんちゃんのほっぺたを引っ張った林檎が、あまりの柔らかさにゲラゲラ笑い出してしまったことがあつた。

それ以来、林檎はぼたんちゃんのことを『ぷにちゃん』と呼ぶようになっていた。…この話を聞いて分かったかもしれないが、俺のあだ名である『カラポン』というのを命名したのも、蒼井林檎だ。

ちなみに、当たり前のように溶け込んでいるが、林檎はメディア部の部員じゃない。本当は陸上部なのだが、そっちはずっと長いこと、ほったらかしにしていやがる。短距離で結構速いって、評判良かったんだぜ？ あのキス魔。

「ええと…どうしますか、カラポン先輩？」

「あたしも休みたいなー、だってもう1時間くらいぶっ続けだよ！ ねえカラポン！」

「わかった、わかったって！ それじゃ、少し休憩にしよう。3時になったら再開な」

さて、早速芝生に座りこんだ栗野や林檎達は、ビデオを巻き戻して今日撮ったシーンのチェックを始めようとしていた。

「カラポンどこ行くの、チェックしてかないの？」

さりげなくその場を離れようとした所を、ブシドーが寄って引きとめてきた。

「ん、ちよつと自販機に。チェックはずっとカメラで見てたし、編集の時に嫌ってほど見るからいいよ。ブシドーの演技も完璧だった

しな」

「本当？　ありがと！　あたしも買いにいくから、一緒に行こつ」

「おつ、俺にもコーラ買ってきてくれよー」

聞き耳を立てていたのか、栗野がすかさず百二十円を投げってきた。

「あたしりんごジュース、雪ちゃんとぷにちゃんは一？」

「あつ…………え、えと、私は…………」

「私、ストレートティー。甘いのが無かったら、いいです」

二人は、さも当然のように言い放ったあげく、一切財布の紐を緩めようとはしなかった。林檎はともかく、ぼたんちゃんはたいした根性だよな！

「…………へいへい。じゃ、ちよつくら行ってくるよ」

「あつ、すすすみません！　私、よくいお茶で…………すみません、細かいのが無いので」

小雪ちゃんは五千円札を渡そうとしてきたのだが、残念ながら自販機では使えない。『今度学校で』と言って俺が断ると、申し訳なさそうに、すみません…………と頭を下げていった。

その後の方では、既に林檎達がビデオを見ながらワイワイと騒ぎ始めていた。

ガラコン。

「ぼたんちゃん、ストレートティーだっけ？」

「大きいペットボトルしかないね。しかもコレ、ストレートなのにちよつと甘い奴じゃなかった？」

実に困った品揃えだ。しかも山の上の観光地だからコーラも十円高かった。あとで栗野に請求しないと…………。

「じゃあいいよ。コレ買って、いらないうつようだったら俺が飲む」

「…………あんまり甘やかさない方がいいんじゃないの？　あの子、ちょ

つと調子に乗ってる所があるし、ビシつと言っておかないと」

さすがブシドー、同じことを考えていたんだな。

「いいんだよ、まだ入ったばっかなんだし。林檎なんかに比べたら、扱いやすい方さ」

「あんたも苦勞してんのねえ。あつ、運ぶならちよつと待って」

何だろうと思ったら、ブシドーはスカートのポケットから綺麗に折畳んだビニール袋を取り出した。ちようど、5本くらいの飲み物が入るくらいの大きさだった。

「おおつ、さすがブシドー」

「何かしら使えるでしょ？ あたしつて気が利く」

当然その袋は俺が持った、というより持たされた。5本も入っていると、結構な重たさだったしな。

「カラポンってさ、林檎先輩と付き合い始めてからどれぐらいだったけ？」

自販機からの帰り道。唐突にブシドーはそんな話題を振ってきた。あまり林檎のことを話したくない俺は、あえて不機嫌そうに答えた。
「ん…？ 1年ちよつとかな、高校入る前から知り合いではあったけど。…それがどうした？」

「べえつちにー？ ただ、何であんな人と付き合い始めたのかなーって思つて。いっつも嫌そうな顔してるじゃん、カラポンは」

「――」

たしかに、ブシドーの言うとおりだった。正直に言えば、俺は林檎があまり好きではない。性格も、服装も、それから化粧だって。付き合い始めてから見えてきた嫌な所が、あまりにも多すぎた。

「ホントは今すぐにでも、別れたいとか思ってるんじゃないのかなー、なんて思つてみたりみなかつたり」

「ああ、そうだよ」

あつさりと肯定しすぎたかな？ ブシドーは声も出さず、ぽかんと間抜けな顔をしていた。

「できることなら、さっさと別れちまいたい。正直言つて、ウザい」

「なら言っちゃえばいいじゃない！ お前みたいなのと付き合ってられっかって。このままだとズルズル言って卒業後も付き合うことになるんじゃないの？ あたしはソレ、プラスじゃないと思うけどなー」

ブシドーの言う通りだろう。遠まわしに、メディア部の活動の邪魔をさせるなど言っているような気もした。

だけど、

「あいつ、怒るとヤバイんだ」

「それが理由？ …… あきれた。カラポンさ、男として、そういうの情けないと思わないの？」

ブシドーはまだ、本当にキレた林檎を見たことがない。だからそんなことが言えるんだ、と言いたい気持ちは胸にしまった。ブシドーに言ったところで、あいつがどう変わるということじゃないんだから。

「カラポンさ、疲れてるんじゃない？ カラポンの出ないシーンから先にやっておくから、どうかで少し休んできなよ。林檎先輩にはうまく言っておくからさ」

「…悪い、そうしてもらえるか？」

ブシドーは俺からビニール袋を受け取ると、何を思ったか、バシンッ！ と空いている方の手で俺の肩を掴んできた。

「カラポンっ、元気出せよ！」

それだけ言うと、ブシドーは180度振り返って林檎達の方へへと小走りに駆けていった。…なんだか、栗野よりいい男友達やつてるみたいないきがした。

（でもあいつ、女の子なんだよな…）

そう感じたのは、振り向き際にふわっと揺れた髪からこぼれた、甘い香りがずつと残っていたからなのかもしれない。何より、はためく制服のスカートから垣間見えた赤の水玉パンツが、彼女が女の子であることを主張しているような、そんな気がした。

「実はいちごだったりして……何を考えてんだ俺」

せつかくブシドーが、俺と林檎を切り離れた自由な時間を用意してくれたのだ。ありがたく使わせてもらおう。

俺は、山岳公園の端の方にある、展望台の方へと向かった。

俺達が今来ているここ、星流山岳公園は、キャンプ場と自然公園が一つになったような感じのただっ広い公園で、しゃれた名前の割にたいして何も無いのがその特徴だ。

星流というのは『せな』と読んで、ここら一帯の地域はほとんどの名前だ。星流湖、星流川、星流本町、星流川高校、星流川溪流鉄道なんてのまである。逆に、それだけ他に名前をつけるような物が何もないということの裏返しでもあるわけだ。

そんなたいして何にも無い星流山岳公園でも、個人的に気に入っている場所があった。

その一つが、ここ。第一展望台、通称『電車広場』。木製の柵の手前に有料双眼鏡の並んだ崖があつて、その手前は広い草っぱらになっている。

草っぱらには昔の電車が3、4両階段状に置かれていて、その中も山々の風景が楽しめる休憩所となっているわけだ。

「別に電車には興味ないけど……だいたい誰もいないんだよな、ここ」昔の電車とはいえ、窓は開くし、座席のクッションがある車両を選べば昼寝にはもってこいの場所だった。

俺は座席をベッドのように使つて横になり、目を閉じた。薄暗く、ほとんど木製の車内が持つ独特の臭いはほどよい眠気を誘い、時々吹く風が窓ガラスを揺らしていい子守唄になった――。

（ああ………静かに眠れそうだ）

一方その頃、撮影場所では林檎達がビデオを見て盛り上がっていた。

「おまたせー、買ってきたよ………って、おーい？」

「わっ、いたそ……」

「あははは！ アホ助君、派手に転びすぎ！ お腹よじれちゃいそうっ、あははは……！」

「せんぱーい、そのアホ助って呼び方がいいかげんやめてもらえないっすかねー？」

「あ、魂子先輩。ストレートティーありました？ ……ペットボトルですか、…甘いかも？ ……うーん」

ぼたんはほんの一口だけ口をつけると、いかにも微妙そうな顔をして、魂子に礼も言わずにキャップを閉めてしまった。『甘いのか無かったら、いいって言ったのに……』と、呟きながら。

また、同じだった。

夕焼けが綺麗に見える丘で、俺はそいつのことを見上げていた。

「カラポン」

彼女は、俺のことをいつもそう言うように、小さな声で呼んだ。制服のミニスカートからはジャージをめくったのがはみ出ている、せつかくの絶景を台無しにしている。

散々やめろと言ってるのに。

「林檎………」

残酷だ。この世界で俺ができることはただ一つ。彼女の名前、『蒼井林檎』を呼ぶことだけ。

彼女はこれから、ベラベラと喋り続けるというのに。

「私ね、もう我慢できないの。気持ちがあふれ出ちゃう、漏れてきちゃってるよ、カラポン」

普段からよくかったるそうな顔をしていた林檎。今はもう、生きることさえかったるそうな、生気のかけらもない表情をしていた。

「……………林檎」

「カラポンがいけないんだよ？ 全部、カラポンのせい。あははハ」
笑いながら、彼女は怒っている。笑いながら、彼女は、泣いていた。

謝ることも、慰めることも、何もできない。

だって——だから。俺は、彼女の名前を呼ぶことしか
できない。

「……りん、ご………！」

「だから、お願い——」

それから数秒間、俺は何も思い出せなくなる。見れば既視感に
苛まれるのに、何度も見たはずなのに、俺は思い出すことができな
い。

思い出したくないのだと思う。頭が拒否しているのを、俺は感じ
ていた。

そしていつの間にか。

ロボットになってしまった林檎を、ロボットになってしまった俺
が——

「……！！」

「……ゆ、夢か………」

悪夢から目覚めた俺は、勢い余って座席から落下してしまってい
た。変な所を打ったのか、ヒジやら頭がズキズキと痛かった。

「大丈夫うカラポン？」

「……！！？ 林檎………何でここに？」

いったいいつからここにいたんだ？ 林檎は、俺が元いた座席のす

ぐ隣に、並ぶようにして座っていた。

…さっきの夢を思い出して、身体中に鳥肌が立つのを感じていたのだが、俺はそれを悟られまいと、不機嫌そうなのを装って林檎を睨んだ。

「眠かったなら言ってくればいいのに。ほら、膝枕」

リズムを取るように、林檎は恥じらいもなくスカートをふあふあさと上げ下げしてアピールしてみせた。見えそうな角度なんだけど……

「ジャージ、やめろって言ってるだろ、それ…」

日曜とはいえ学園物の撮影なので、今日は全員が制服だった。林檎も同じように制服だったのだが……なぜかいつも、スカートの下に緑のジャージを穿いている。もったいかげん梅雨も近いって時期なのに、暑くないんだろうか。

林檎は小さく笑って、

「ごめんカラポン」

と、おもむろにジャージをももの根元ぐらいまでめくりあげてみせた。急に肌色の見える部分が増え、妙に色っぽく感じてしまった。

「バ…！」

「フアスナー当たると痛いもんね。ハイ、これで膝枕おつけー、どうぞ」

そういうことを言ってるんじゃないって……。

林檎はにばにば笑いながら、両手を広げて俺を招いていた。はしたなくもスカートをおっ広げ、お行儀よく端を綺麗に折り畳んで。

「もう寝ないんだって！」

床に転がっていた俺は、立ち上がって抗議した。何分寝てたかはわからない。が、いかげん撮影に戻らないといけないし、そもそもここに林檎が来てしまったからには、根本的な意味が無いのだ。

「えー、じゃあ今度は私が寝る！カラポン、腕枕うでまくらあくん」

「わゆ！？や、やめろ馬鹿、引つ張るなコラッ！！うわっ！！

？」

腕にしがみつかれ後に押された俺は、座席に足をぶつけてバランスを崩し、林檎を巻き込みながら再び床へ倒れてしまった。

勢いよく背中を打ちつけて、俺は一瞬めまいさえ感じたほどだった。

「あはは、ようやく観念したねカラポン！ 私と一緒に寝ようね――

んっ……」

林檎は頬と、顔を自分の方に向け、唇にキスを“3秒ずつ”すると、満足そうに俺の左腕を枕にし、ゆっくりと目を閉じた。これでもか、というぐらいに体を密着させ、足は絡ませて――こんな光景を見ていると、さっきの恐ろしい夢がまるで嘘のように感じてくる。…夢は、嘘？

（……………そうだな。あの夢は、嘘なんだ。林檎がロボットであるわけが、ないんだ。夢が嘘で、いいんじゃないか…）

「…で、そろそろ満足しましたか、先輩？」

「……？」

薄れていた意識が、ガラスを踏んづけられたみたいに一瞬で崩れ散った。いったいどこからそんな声がしたんだ、と思って体を起こしたら、それは思った以上に近い所から聞こえていたことに気が付いた。

「小雪が見たら卒倒しそうな光景ですね。ああ、エロエロしい、エロエロしい！」

真上の窓からだった。ぼたんちゃんが、汚らしい物を見るような目で俺達を見下ろしていた。

「そういうお前も顔が赤くなってんぞ」

「う、うるさいです。高校生にはちよつとばかり過激なんですよ、

先輩達は！」

「うっんうっ」

気付いてるんだか気付いてないんだか、林檎は子供が駄々をこねてるような声を上げて、更に強い力で身体にまとわりついてきた。

ええい、暑苦しい。

「お前も起きろっ、ていうか寝てないだろ。撮影の続きをやりに戻るぞ！」

「えーん、もつと寝てたいよおー、一緒に寝ようよおカラポオン」

この後、腕にしがみついた林檎をひつぺがすのにどれだけ苦労したか、ここで話せないのがまったく残念だ。なぜなら十八禁規制に引っかかっちゃまいそうだからな、内容的に。

とにもかくにも、俺はぼたんちゃんに見下ろされながら、なんとか林檎を立ち上がらせ、電車の外へと出て行った。太陽が妙に眩しかったのに、腕時計を見たら、入ってからまだ十五分ぐらいしか経っていなかった。

「待たせたなぼたんちゃん。でも、何でここがわかったんだ？」

「林檎先輩の後を追っかけてきただけです。カラポン先輩がいなくて、林檎先輩がいきなりどっか行こうとするから」

…なるほど、それなら納得がいく。

「ふーむ、なかなかいい物を見せてもらったぜ、カラポン？」

ジー、という音と視線を背後から一斉に感じた。何だ？ と思ったら、栗野がビデオカメラを向けて俺の後に立っていた。その後は、ブシドーが小雪ちゃんの目をふさぎながらヨチヨチと歩いてきていた。

「…あう。カラポン先輩、出てきたんですか？」

「そうねー、もうちょい雪ちゃんは見つづけてた方がいいかなー」

…もしかして、全員俺達を覗いてたんだろっか？ ということは、栗野も…

「…おまえ、まさかそのカメラで、」

「いつひっひ、俺達参加する部門変更するか？ テレビドラマから、官能ドキュメントに…… あああっ！ 何をするカラポンー！」

カメラマンは俺だ、という自分でもよくわからない謎な理屈で、俺は栗野から強引にカメラを取り上げた。俺は無言でテープを取り

出すと、それを……

「ああっ！？ カラポン、ダメ！！ ソレさっきのあたしの演技も

……」

「！」

……ビーっと、黒いテープを引っ張ってしまった後だった……
しまった……。

「あわわ……え、えと、それ、さっき私達が巻き戻して見てたテープ
ですよ？」

「えっ、なに？ それじゃもしかして、俺元々潰してたってこと？

あ、いや、再生した後にやったから……あ、あれー？」

「ふ……た……り……と……も……」

あ……殺気が………剣道部的な、殺氣的な何かが………。

夕刻。その日予定していた撮影はほぼ無事に終了することができた。俺が伸ばしてしまったテープも普通に再生することができたし、その後の使用にも十分耐えることができた。伸びた部分に録画されていたのも（冷静に考えれば当たり前なのだが）俺と林檎のあられもない映像部分だったことが後に判明して、とりあえず一安心だ。

「みんな、今日はお疲れ様。特に小雪ちゃんとぼたんちゃんは、日曜日なのにわざわざ来てもらってありがとうね。結構、こういうのやる時とかはあることだから、覚悟しといてくれると助かるかな」

「うげえ、そうなんですかあ……」

小雪ちゃんの言葉に、なぜかブシドーが吹き出した。どういうツボだ？

「あっはっは……ごめんごめん、続けてカラポン」

「お、おう………とりあえず、今日の所はこれで終わりにして、また明日放課後に校内での撮影をやりたいと思う。またいつもの時間に放送室集合、って感じで」

全員がそれぞれ適当な返事をして、今日はこれで解散になる。と言っても、全員同じ電車に乗って山を下りることには変わりないのだけれど。

夕方の星流湖東駅は、日曜日ということもあって家族連れとか、リュックサックを背負ったおじいさんおばあさん達がベンチを占拠していた。

ふと、値段の高い自販機が目に入った。

(そっぴや喉渇いたな………うん?)

自販機にぼたんちゃんが近づいてきて、カバンの中からペットボトルを取り出し、ゴミ箱に入れようとしていた。ほとんど、というより開けてすらいらないように見える。俺はゴミ箱に入る直前のペットボトルとぼたんちゃんの手を掴んで制止した。

「ぼたんちゃん、これ昼間買った奴だろ？ 飲まなかったの？」

「…甘いのが無かったらいらなくて言ったじゃないですか。どうせ持っても後で捨てるだけです」

もったいない。捨てるにしたって、中身を残したまま捨てるのだってどうかと思うぞ。

「俺が飲むよ。悪かったな、頼んでもないの買ってきて」

わざと不機嫌そうな声を出して、有無を言わず俺はそのペットボトルを取り上げた。思った通り、ズッシリと中身は全部入っていた。

「え…？ あ、先輩…、それ…！」

ぐび、ぐび、ごく………完全にぬるまりきっていたが、渴いた喉にはちょうどいい。一気に半分ぐらい飲み干した俺は、ふと栗野に十円請求しなければいけなかったことを思い出して、栗野達のいる所へと戻っていった。

「おい栗野、昼間に買ったコーラなんだけだよ…」

「あーっ、カラポンだけズルーい！ あたしにも紅茶頂戴ちょうだいー！」

邪魔された…。

「〜？ カラポーン、これぬるいじゃーん。やっぱ私らない、飲んでえ〜」

「お前…人から取り上げといて……………」

その時、パチンという電気的なノイズが聞こえたかと思うと、鼓膜が破れそうな大音量でスピーカーが奇声を上げた。…いや、正確には駅員が奇声を上げてるんだが…。

『お待たぜをい、だじまじダーっ！ ま、もなぐ折返し北貝梨行きが……………』

「わひいやっ？！ す、すごい声……………」

「ぶつぶつぶ……………いちいち面白いなあ、小雪ちゃんはもう！」

小さな電車が2両しか繋がっていないので、車内の座席はすぐに埋まってしまった。なんとか確保できたボックス席を女子達に譲って、俺と栗野は吊革を掴むことにした。ちなみに冷房なんてハイテクな物は積んでないので、窓は全開になっていた。走っていればある程度マシなのだが、それでも少し暑いぐらいだ。

「夕暮れの森っていうのもいいよねー。太陽が見えたり隠れたりして、キラキラ光ってるように見えるよ」

「こういう風景も何かで使えるんじゃないか？」

森の中を走ったり、トンネルをくぐったり、川沿いに沿ったりと、車窓は次々と違う魅力を持った風景を見せてくれる。俺はそんな光景を、なんとなくカメラを回して撮っていた。時々、部員の皆の様子とかも撮りながら。

「わあ！？ カラポン先輩何撮ってるんですか！ 盗撮ですよ、犯罪ですよ！ 私なんか撮ったっておいしくなんかありませんよ！！」

「ゆき、声でかい……………」

やがて太陽が山に隠れ、残光だけが空を照らし始めた頃。電車は、途中の主要駅『星流本町』に着いた。ブシドーはここで降りてしまう。

「じゃあね皆、また明日！ カラポン、今日はありがとね！」

「頑張ったのはブシドーの方だろ、特に今日は。また頼むな」

「おつかれ」

「バイバイ、ブシちゃん！」

「「魂子先輩、お疲れ様でしたー」」

星流本町を出発した電車は、それからしばらく星流川の流れに沿って山を下っていく。たわいもない話で盛り上がっていた所に、突然林檎が声を上げた。

「カラポンっ、見て見て！！ アレ！」

「ん？」

窓から乗り出して指さした方向には、もちろん川があった。外はもう暗くなり始めていたのだが、川を渡る橋に電灯がついていて、その付近だけが明るくなっていた。よく見ると、川の中で二人の男女が遊んでいるような様子が見えた。

「まさかとは思うけど……………」

「うん！ カラポン行こう！」

その“まさか”だった。

ぴちゃ。じよぼんっ。

「つんめてえ……………」

途中下車する頃には、すっかり辺りは夜になっていた。小雪ちゃんとぼたんちゃんを栗野に任せ、俺と林檎は川へと降りてきていた。「あっははは！ きもちーい！！ ほらっ、カラポンもおいでよー！」

川に入ろっ！ なんて言い出して驚いたのは、むしろ栗野達の方だった。俺はなんとなくそんな予感はしていたし、これくらいの突発イベントでいちいち驚いていたら、林檎の彼氏なんてとうていできないだろう。

（もちろん俺だって、こんな女の彼氏なんかすぐにもやめたいのだけど……………っ?!）

「ねえっ、カラポン！ えいっ！」

「わっ、冷てえ！? ばか野郎、何すんだ！ 危ないんだから早く戻って来いっ、服が濡れたらどうすんだ！」

だってえー、と、口をとんがらせる林檎の顔も、半分見えなくなってきたような暗さだ。滑りでもしたら……………一発アウトだろう。俺は川岸の石の上に座って、早く林檎が飽きて戻ってくるのを待っていた。林檎が脱ぎ捨てた、ジャージズボンと、ホワイトソックスの護衛をしつつ。

「大丈夫っ、濡れたらジャージ穿けばいいもん！ ほおら、いいじゃんっ、カラポあーん！」

じゃぶん———ジョバあん———。

「カラポ——んっ……………！」

しぶきを上げながら戻ってきた林檎は、有無を言わさず唇を突き出してきた。反射的に目を瞑った俺は、抗わずその身体を受け止め、互いの背中に両手を……………。

「……………ひっ!? つんめんツ、てえ~~~~!!!!」

「やあん、カラポンのエッチっ！ 林檎の胸に勝手に触らないで！ アハハハ——！」

俺はどこからツツこめばいい……………? 背中がヒンヤリと手形の形を感じるほどに冷たい。林檎はくるくる回りながら、また川の中へ入っていった———。

「あっ———と、とっ……」

回転していた林檎は、いきなり川のと真ん中でリンボーダンスを……………するだろうか、普通?

「!?! 林檎っ!! 危ない!!!」

気付いた時には、もう、手遅れだった。足を滑らせた林檎は、お尻から勢い良く真っ暗闇の川に消え、派手に飛び散った水しぶきだけが、林檎が立っていた場所を教えていた。川の流れが強すぎて、

落ちた音さえ聞こえなかったぐらいだったというのに――！

「あのバカ……！ だから早く戻れって！」

この時は考えもしなかったけれど、もしかしたら本当のバカは俺の方だったのかもしれない。だって、靴も、ワイシャツも脱がずに飛び込んでいたのだから。結果論かな？

「林檎っ！ 林檎っ、どこだ、林檎………っ！！」

流れを掻き分けて川に入った俺は、その違和感にすぐ気がついてしまった。同時に、つい口からこぼしまったことを、果たして誰が責められるだろうか。

「カラ、ポンっ！」

「うげっ、しまっ、たあゝあっ？！！」

ざっばーあん！！！！

「…………… ねえ。ごめん、って言ってるでしょ？ ねえ、聞いているのカラポン？」

「……………」

俺は川に入る前、三つ冷静な判断に欠けていたことがあった。

1・川の深さはせいぜい膝上程度で、十分足がついていたこと↓林檎の立ち姿を見ていれば気付けたはず！

2・1を踏まえて、転んでも流されることなく立ち上がったはずだということ。↓俺は助けに行くことなかった！

3・転んだのが、他でもない蒼井林檎であったこと。↓こいつが何をしでかすか予測すべきだった！

「…………… ねえ、ねえってば。返事してよカラポン！」

「聞こえてるよ……」

被害状況を報告しよう。ワイシャツは完全に水に浸かり、Ｔシャツもびちょびちょ。ズボンもぐちょぐちょで、トランクスはまだか

ろうじてマシな被害だった。靴に至っては……脱いだら、メダカみたいなのが飛び出てきた有様だ。

転んですぐ、水に潜って岩陰に隠れた林檎は、俺を驚かそうと、近づいてきたのを見計らって抱きついてきたのだ。ところが、林檎自身も予想以上に服が水を吸っていたらしく、重みでバランスを崩し、再び転倒。…言うまでもなく、俺をも巻き込んで、この有様だ。（最悪だ…）

川を上がって早々、俺は砂利の上に生えた大きな木の陰に隠れ、トランクス一枚になった。制服が吸い込んだ水は絞っても絞っても抜けきらなくて、しばらく着れそうにない。

これじゃあ電車にも乗れない。かと言って、歩いて帰れる距離でもないし、歩いて帰るのも問題あるよな…。ある程度渴くのを待つしかないな。

「……………気持ち悪い」

「自業自得だろ…少し渴くまで我慢してろよ。お前はまだ、ジャージがあるんだし」

林檎はどうしてるのかと思ったが、俺がいる木のすぐ裏側に来ているらしく、同じように服を脱いでいるらしかった。見たわけじゃないぞ、衣擦れの音が聞こえたんだいつ。

「…そうじゃないの。……………なんか、変なのが……………入ってる」

「変なの？ どこに？」

急に林檎の声が小さくなって、川の流れの音に消されて聞こえなくなってしまった。転んだ時にザリガニでも入ったんだろうか？

「聞こえないよ。もっと大きい声で言えよ、俺何もできないけどさ」

「……………つ……………て……………」

林檎は何を言ってるんだ？ だんだん寒くなってきた俺は、林檎の戯言より風邪を引かないだろうかと、予備の制服はどこにしまってたであつただろうかとか、そっちの方が気がかりになっていた。

「だから…！ ……私の……………の中に……………入ってるから……………その……………」

ゴソゴソと衣擦れの音が聞こえて、気配が近づいてきた。案の定、ブラジャー姿の林檎が、上目遣いで俺の様子を伺いにきていた。どういうわけか、脱いだのはワイシャツだけで、下はまだスカートを穿いたままだった。

「…な、なんだよ…… 本当に聞こえないんだから、もう一回言えよ」

「……………カラポンのいじわる、恥ずかしいから何度も言わせないで……………」

どうしたって言うんだ？ 林檎の様子は明らかにおかしかった。キス魔の蒼井林檎が二人きりのこの状況下、今更いつたい何を恥ずかしがると言うのだろう？

「じゃあ…………… もう一回だけ、言うよ？ 大きい声で言いたくないから、もうちょっと近くいくよ？」

「おう……………」

… なんだか、妙な緊張感が漂ってきた。林檎は俺の座っている木の根っこに滑り込み、俺の耳に手を当てて顔を近づけた。

（不覚にも胸が…）

ええい、そんなことを気にしている場合じゃない！ 邪念を振り払い、意識を集中させて、林檎の生暖かい吐息交じりの声に耳を傾けた。

「あのね…………… さっきから、変なのが入ってる感じがするの…………… すっごく小さいけれど…………… 時々コロ、って動いて、怖い……………」

「… だから、それがいつたいどこに入ってたんだよ。俺に取ってもらいたいから、言ってるんだろう？ どこだよ、背中か？」

「……………」

林檎は一度言葉を切ると、初めて見るような恥ずかしさでいっぱいのような表情をして、俯いていた。モジモジと、両手はスカートの裾を何度もいじっていた。

「…カラポン。優しく…………… してね？」

「何言って……………？」

林檎は、少し膝を曲げ、屈んだぐらいの姿勢で立ち上がった。そして、俺が驚く間も与えずに、それからの行程を一気にやってのけたのだ。

「こ……ここに、入り込んだみたいなの——！」

「——っ……だ、だっっておまえ、そこ……」

絶句。

その時俺は、果たしてどんな言葉を発するのが正解だったのだろうか。…正解なんてあったのか？

「ここに何か入っている——！！　お願い、早く取って——！！」

林檎が左手で指さした所、それは……両足の付け根の中心ともヘソの下とも言えなくもない場所。…早い話が、股間だった。

（嘘だろ……嘘に決まってるだろ？　これも何か、林檎の悪い冗談に決まってる……）

しかし、林檎はスカートをたくしあげたままだった。目を凝らすと、泥や藻、小さな砂利があちらこちらに付いていて、まだ雫も滴り落ちていた。

「ねえ…お願い、カラポン……早く…取って……」

「じ、自分で脱いで取ってこいよ！　そんな所に手をつ込むわけにいかないだろ！」

ゴミ、めだか、蟹、藻………　　「いたい何がそんな所に入り込んだんだ？　もしかして…ヒルか？」

（確かにそんなのが入ってたら、俺だって触りたくはねーけど………　　「あーっ、もうしゃあねえ！」）

いつまでも迷っているわけにはいかない。お互いこんな格好をし続けてるわけにもいかないし…林檎の目が、俺には耐えられなかった。覚悟を決めるしかない——。

「…わかったよ。スカートから手を離せ、林檎」

ようやくスカートを元に戻した林檎は、少し目を泳がせながら、

俺に言われた通り立ち上がって、両手を広げた。

「……………パンツを下ろす。俺は絶対見ないからな、絶対見ないからな！ 足まで下ろしてきたらすぐにジャージを穿け」

「…うん」

ああ、何をやってるんだろう俺……………。何でこんな、トランクス一丁の格好で、女子校生の……………。それもずぶ濡れになったスカートの中に両手をつ込んで、パンツをずり下ろさなきゃいけないんだ……………。願わくば誰にも見られませんが、特に巡回中のおまわりさんとか……………。

フーン！！

「……」

電車の警笛だった。真っ暗になってすっかり忘れていたが、俺達がいる川岸の上、堤防のてっぺんには線路があつて、その向こうには線路に沿って道路だつてあるのだ。当然家とかお店だつて……………。なんだか急に心臓がバクバクしてきて、半裸なせいもあつて指先がガクガクと震えてきていた。

「カラポン……………そこ、パンツじゃないよ……………」

「わ、悪い！ ……見えねえんだよ、わかんねえんだよ……………」

目の前いっぱいには紺色の縦模様、その内側でモゾモゾと俺の手が上の方を目指してきている。…右手が布の端っころしき物を掴んだ。

「…うん、それ」

「…わかった。ゆっくり行くぞ、痛かったら言え……………」

ひとさし指を布と肌の隙間に潜り込ませ、めくるように引っ張りながら下向きの力を加えはじめ……………。その、思っていた以上の重みに少し動揺していた。水を吸いまくっているのか、肌にべったりとくっついてしまっているのか、思うように動かすことができなかった。

「あ……………んんっ……………やだ、……………」

「痛いのか…？」

少し何かが引つかかっているような抵抗も感じた。かなり小さいが……小石のような何か？　が、入っているらしい。少し肌に食い込んでしまったのだろうか…と、冷や汗をかいた。

「……………気持ちいい」

「…ばか、一気に行くぞ…！」

すっかり忘れていた。蒼井林檎はそういう女だった！　半ばキレ気味になった俺は、もう力任せに足元に向けて引っ張った。突然、大きく何かが引つかかって、林檎が膝を曲げてきた。

「痛い！」

「わっ、あぶねえよ、ばか！」

しかし、膝を曲げたおかげか、その後スルスルとパンツが靴下の付近まで落っこちてきた。

（え…エロい……………）

くしゃくしゃに縮まり、なんともエロい。しかし、これで終わりじゃない。林檎は『わあ…』という感嘆を漏らすと、足を片方ずつ上げてそれを俺に取るように促した。俺はもう、目を逸らすのに必死だった。

「み、見てないからな！　見てない！　見てない！！　さっさとジャージ穿け！」

手探りでやっとそれを掴み、俺は何とも表現しがたい気分浸っていた。蒼井林檎のパンツは川水を吸い込んでひどく重くなっている、その正体さえ知っていなければすぐにでも捨てたいぐらいの奇妙な触感を持った物体でしかなかったからだ。

（……………いったい何が入り込んでいたんだ？　うわ……………これすね毛じゃないよな……………ん？）

ゴソゴソと、ジャージを穿きこんでいる林檎に背中を向けてそれを調べていると、一箇所妙に硬くなっている所があった。布が複雑に重なり合ったり、細長い変な藻みたいなのが邪魔していて、なかなかそこを開くことができない。

「……からぼん、よかつたらそれあげるよ？」

「うるさい！ いらねえよバカ！！」

正直に言おう。今、俺の中で、二つの心の片方が大泣きしていることを。そのもう片方の心が慰めるのに必死になっていることを……

「カラポンのえっちい」

「――」

でも、次の瞬間。

俺は、時が止まる音を聞いたような気がした。鳥肌が立った、いや……それ以上の恐怖……悪寒が全身を貫いた。

「な……」

遠くで、林檎が軽口を言っているようなのが聞こえた気がした。

遠く？ 林檎は今、すぐ後にいるじゃないか。何でこんなに声が聞こえないんだ？

（なん……で……？）

「――ぼん、……らぼ……？」

声が聞こえる……？ そうだ、コレを――

「――っ！！」

シュツ――ぽちゃん。

「……どうしたのカラポン？ 今、何投げたの？」

「……取れたんだよ、ほら。絞って乾かせばまた穿けるだろ。もう大丈夫だ」

知らず知らずの内に、林檎のパンツを握り締めていた。それを見た林檎はちよつと困ったように笑いながら、

「ありがと、カラポン」

受け取るよりも先に、俺にキスをした。

「……」

その後、俺達は服の水を絞りに絞って、なんとか電車に乗って家路に着いた。座席ががら空きなのに二人だけ立っててちよつと変な

目で見られたが、無事に帰れただけまだいいだろう。

「じゃあまた明日ね、カラポン」

「……………また明日」

すっかり夜も更けた、日曜の改札口。人ごみの中、制服姿の俺達二人は目立っていた。白のブラが透け透けになっている林檎は、尚更だった。

「……………ん……………」

さよならのキスをして、尚更目立った。苦笑いして後ろ指さす人もいた。『若いっていいね』『うらやましいわ』『そんな声も聞こえた。』

でも俺は、決して幸せじゃなかった。

（蒼井林檎は、ロボットかもしれない……………）

その疑いが晴れるまで、俺が蒼井林檎を本当に愛せることはないのだろう。

（俺は蒼井林檎に……………殺されるかもしれない）

蒼井林檎が本当にロボットならば。そして、

（……………俺もまた、本当はロボットであり……………）

蒼井林檎を、殺してしまうかもしれない。……………夢の通りならば……………。

「……………本当に、あれは夢なんだろうか……………」

もしも、本当に夢だったなら。蒼井林檎が普通の人間だったならば。そんなはずがないのに。

なぜ、『蒼井林檎のパンツ』から、『ネジ』が出てきたのだろっ？

「蒼井林檎は本当にロボットだと思う？」

「！！？」

妙に甲高い声だった。いったい誰……そんな疑問と同時に浮かんだのは、

（俺以外にあの夢を見た人がいるのか……？）

という、そんな恐怖にも似た感情だった。

しかし、周りを見回しても、その声の主と思わしき人が見つからなかった。

「どこ見てんの？ こっちこっち！」

こっちって……下？

「あ………」

「へへっ、見つかったやつた……」

その人……小学生ぐらいの女の子が、体育座りをして俺のことを覗き込んでいた。さっきの声は……この子が？

「随分と遅いご帰宅！ 日曜日なのに制服デスか？ 蒼ちゃんとのキスって何の味？ 蜜の味？ レモン味？」

「……なに……？」

何なんだこの子は……？ いきなり出てきてとんでもねえこと聞いてきたぞ……？

パツと見た印象はただのガキ。水色の袖なしに、ピンク色の短パン。サッパリした髪は、見方によったら男にも見えそうだ。言ったら怒るんだろうなあ。

「もしかしてイチゴ味？！」

「……う、うるせえな。何でそんなことお前に言わなきゃなんねーんだよ。……林檎の知り合いか？」

ちがうよー、と、少女は首を振った。

「今日初めて見たよ。すっごいよねー、ホントにキスたくさんして

くれるんだねー！　こんの幸せものーおん！！　にへへへへ」

「……………؟؟？」

少女への第一印象は、まず、“気持ち悪い”だった。やたらキスの話題を振ってくるし、さつきから顔が変な風にニヤけていやがる。バカにされてんのか、俺は。

「それでそれで！　キスより先ってどんなことを——」

「さっきのはどういう意味だ」

語気を強めるつもりは無かったが、彼女の言葉を遮り、俺は投げつけるように言い放っていた。そこに怒りを感じたのか、少女は目を丸くした後、少し不満そうな顔をして俺を見上げていた。

「だからー、蒼井林檎は本当にロボットだと思うの？　って、聞いただけだよお兄ちゃん」

「お兄ちゃんってのはやめろ……………って、何だ、俺の名前は知らないのか」

「知ってるわけないじゃん」

何故だろう、今すんげえ殺意にも似た感情が湧き出ただけど…

……………俺、正常だよな？

「蒼井林檎は……………蒼ちゃんは、特別な存在だから。おに……………ん……………んっ！　が知らないところで有名人なのー！」

「どこで有名だっていうんだよ……………ていうか人の名前を勝手に『んー』にするな。宇宙人か俺は」

「じゃー宇宙人！　やい宇宙人！　宇宙人は蒼ちゃんが本当にロボットだと思うの！？　どうなの！　答えろおい！」

「ぐべっ！？」

ぱ、パンチをくらった……………それも容赦ねえ、力いっぱいやってきた感じだぜおい！

（こ、こんにやろお……………！）

……………とか何とか騒ぎ出したせいで、周りの目は一気に俺達の方へ向いてきていた。

「…なあ、あんま騒ぐなよ。話聞いてやるから、とりあえずそこに

でも入ろう、な？」

何てこと無い、俺は駅前にあるファミレスを指差してそう言っただけだった。そのまんまの意味だったのだけれど――、

「その必要はありません。あなたは質問に答えさえすれば良いのですから」

……急に後ろから肩を叩かれて、俺はかなり動揺した。

低い声、タバコくさい臭い。背中からの気配は、何かとてつもなくヤバそうな雰囲気を漂わせていたからだ。

「し……質問って、何です……？」

スツと出てきた顔は、予想を遥かに裏切る優しそうな表情をしていた。黒のスーツパンツにワイシャツ、オレンジのサングラスが妙に似合っている。……もしかして、ヤーさん？

「何度かスージイが尋ねたでしょう。蒼井林檎はロボットであるかどうか、です」

スージー？

……ああ、この子の名前なんだろうな。とは思いつつも、日本人離れた名前には随分違和感があった。

ハーフの血さえ感じさせないぐらいの日本人ぶりだし。強いてあげるなら、声がデカいことぐらいか？

「おまえ、スージー？」

「スージ“い”！ スージい・長万部！ 『スジマン』って呼んで！」

ああ、いよいよヤバい空気になってきたかと、俺は感じた。後ろのおじさんもピクツと動いたぐらいだし……。

「……私達は妥協して、『スージマン』と呼ぶことにしています」

「……そおですか」

じゃあさようなら……というわけにはいかないらしく、おじさんの握力はどんどん増していつていた。

「あの、痛いんですけど………」

「まだご回答を確認しておりませんので。スージい……………スージマン、もう一度だけ質問してあげなさい」

「いいよ！ 宇宙人っ、よく私の目を見てなさいよ！！」

そう言うスージマン……………もとい、スージマンは、俺の膝を踏み台にし、両肩を掴み、そして最後には首根っこまで掴んで俺にしがみついてきやがった。つまりまな板べったんこ……………じゃなくて、こりゃ“だっこ”だよ、抱っこ！

「何すんだよ?!」

「うわっ、びっしょびしょ！ どうしたの宇宙人、川にでも落っこちたの？」

おじさんはおじさんで肩を掴んで離さないし、スージマンも眼前で不敵に笑ってて実に不気味だ。無言の圧力？

何されんの俺！？ てか、助けてよ周りの皆さんっ、駅員さん！！

「まあいいや。いいからアンタは、アタシの目を見て答えなさい！

蒼井林檎は、本当にロボットだと思うの？ どうなの!？」

そして一瞬。スージマンの目が大きく見開いたかと思ったその瞬間……………。

「そうっ。わかった、ありがとう！」

「…へ？」

スージマンは唐突に俺から飛び降りると、満足した顔をして、ウンウンと一人頷いて両手を組んでいた。何をそんなに納得したというんだろっ？

「スージマン。そろそろ時間が迫っているぞ」

いつの間にか、おじさんが俺達の真正面に来ている、スージマンに懐中時計を見せて促した。

「ほわっと！ もうそんなに？ そんなじゃあ仕方ないね、もうちょっとお話したかったけど、今日はこれでおしまい！ じゃあね宇宙人っ、また今度ね！」

「あ…おい」

スージマンは、おじさんの背中に飛び乗ると、さも当然のように両肩に手を回し、前を指さした。おじさんも両足をしっかりと掴んで、肩車の完成だ。…何なんだこいつら。

「しゅっぱつしんこー！」

「きゅうりのみそづけー」

一人、俺だけが何もわからないまま残っていた。電車が着いたらしく、改札口を人が通り抜けていって、スージマンとおじさんはその雑踏にまぎれいつの間にか見えなくなっていた。

「……………また今度、って言ってたよな…」

また会う気なのか？ ていうか、また会わないといけないの？

……………俺は考えるのをやめた。

面倒くさかったからかもしれないし、体が臭かったせいかもしれない。早く帰って、風呂に入りたかった。

- 1 - 『メディア部』 e n d

- 2 - に続く…

2『スージマン』スージい・長万部』

- 2 - 『スージマン』スージい・長万部』

「はい、あーん」

「ぐ……………」

いてっ…、喉の奥に入れすぎなんだよ。

中庭にある芝生のだ真ん中を陣取った俺達は、いつものように弁当を食っていた。

『いつものように』っていうのは、こういう風に周りの視線が刺さるのを感じながら、一つの弁当を、一つの箸で、二人であーんしながら食っている様子のことを言うわけで。……………さすがにこれだけは慣れることができない、恥ずかしすぎる。

「カラポン、私にも！」

「へいへい……………ほらよ。……………ん？」

ミートボールを林檎の口に放り込もうとしたら、林檎の奴は不機嫌そうに口をツンとさせて閉じてしまった。…やっぱ、やらなきゃダメってか…。

「んーっ！」

「わかった、わかったって！ ……ほら、開けろ、あーん……………」

ああ恥ずかしい、恥ずかしい……………。どうして林檎は、こんなに恥ずかしげも無く、“イツちまった”みたいな顔してミートボールを食ってられるんだろう……………それにしても、本当につまそうに食べるんだよな、こいつ。

「なあ、最後の一個もらってもいい？」

「だーめ！ さっき食べたじゃん！」

言うが早いか手が早いか、最後のミートボールを手づかみで奪い取った林檎は、文句を言う隙すら与えず口の中に放り込んでしまった。お行儀が悪い。

「ちえっ……つぶ?!」

突然口の中に肉々しい味が染み込んできて、トロトロとした粘液みたいなのが舌やら歯やら唇やらにまとわりついてくるような感じがした。……不意を打たれた。

「はい、おすそわけっ。どう、おいしかった?」

「……ここ、まだついてるぞ」

唇の下にミートボールの色がついていたのを見つけて、俺は仕返しとばかりに、そこをわざと汚らしいように舐めてやった。

「やんっ……ばかぁ……」

またその仕返しとばかりにキスを返す林檎。こういう時の、抜け切れてしまったような表情とかは嫌いじゃない。

自分は大して熱意を出していないのに、林檎が勝手に壊れてしまってるようで、可愛げがあつて、そして滑稽であり、林檎という年上の女を見下すことができる瞬間——その優越感を、俺はどうも嫌いじゃないらしい。

だから俺は、蒼井林檎が『嫌いではなかった』。だけど——

「うっは……見ろよあれ。きつたねえキッス、」

「お互い臭くしょうがねーべ、弁当食った後じゃよお。きひひ」

「」

俺は何も言えなかった。口は塞がってるし、言えば林檎も気付いて、機嫌を損ねるだろう。

だから俺は、顔を持つフリをして、林檎の両耳を塞いだ。

「ん……」

何を勘違いしたのか、林檎はますます体を密着させてきた。柔らかい感触が服越しに押し迫ってきているのを感じながらも、俺は耳からは手を離さないように気をつけた。

「じゃあねカラポン！　また放課後！」

「ああ」

さよならのキスをして、バイバイと手を振り、階段を上っていく林檎。段を上がることに少しずつ見えてくる、スカートの中のジャージが、また俺の気分を滅入らせていく。それは、同時に、やっと解放されたという安堵感も生んでくれるのだから、皮肉な話だ。

（最初はもっとドキドキしたんだけどな………今じゃ、楽しささえ感じられない）

「あつ、そうだ！」

しまった、顔に出たか？　と、俺は慌てて何でもないような表情を作って上を見上げた。階段の手すりから、林檎が身を乗り出して顔を覗かせていた。

「ごめんカラポンっ、今日病院行く日だった！　やっぱ今日は放送室行けない！」

「あ、ああ、わかった。…じゃあ、また明日、だな。」

「寂しいなあ………えいっ！」

何か思いついた顔をしたかと思うと、林檎はいきなり手すりの上をまたいで、下の段の手すりに降りてきたかと思うと、また足を広げ、手すりの両脇に足を乗せ、前かがみになった。

「な、何やってんだよ！」

「すべり台！」

両手をお尻の後に持っていて、自分の体を押すと、不安定に上下左右へ大きく体を揺らしながら、林檎は手すりの上を滑り………どちらかと言うと、『摺り落ちて』きた。

「わっ！　あぶねえよ馬鹿！」

「わわわあ、はあ〜！」

…たぶん、そのまま滑ってくればたいしたこと無かったと思うのだけれど、林檎は手すりの終わる直前に馬跳びのようにして跳ね上がってしまった。受け止めに行った俺は、モロにその膝蹴りを顔面で喰らうハメになった。

「ふがつ!？」

鼻から奇妙な感覚がしたのを感じながら、俺は林檎に床へ押さえつけられてしまった。林檎は俺の腹辺りから上に交差するように重なったらしく、胸が圧迫されて息がしづらかった。

「うゝっ、いったあい…カラポンごめん、大丈夫?」

「……………死んでは、いない……………」

下の階から上ってきた生徒とか教師達が、俺達を見てギョっとしたような顔をして、目を逸らして行った。……………叱るか心配するか、どっちかしてください…。

「……………遅刻するぞ。俺は大丈夫だから、行けよ」

「…うん」

というか、どいてくれないと俺が遅刻する。しかし、林檎はすぐにはどいてくれなかった。というのも、

「カラポン、好き」

やっぱり、キスを。それも、長く、十秒くらいしてから、ようやく階段を上っていったのだ。パンチラならぬ、ジャーチラを見送った俺は、ようやく身体を起こし、呆然と窓から降り注ぐ、白い光を受け止めていた。

「……………鼻血、出てるっぽいな」

こういうのが、俺と林檎のいつもの昼休み。俺は全然昼“休み”になってないっていうのは、言うまでもないだろう?

コーンキーン、カーンコーン……………。

校長が変わってから付けられたというチャイムは、すこぶる評判が悪かった。チャイムという定着しきったメロディを裏切られる、何ともへっぴこなストレスがあるからだ。

これが今日最後のチャイム。ようやくへっぴこなストレスから解消されるってもんだ。

「栗野、ティツシユまだあるか？」

「何だよ、まだ止まんねーのか？ 林檎先輩と過激なえっちのしすぎなんじゃねーの」

栗野はティツシユではなく、教卓の中に入ってるトイレットペーパーを取って渡してきた。昼休みの一件以降、鼻の両穴にティツシユを詰め込んでいたのだが、午後の二時間の間どうも止まらなくて困っていた。

「うるせーな。俺だって、あそこまでやりたくてやってるわけじゃねーよ」

「何だよそれ、不満だったのか？ ぜーくだよなあお前！ 林檎先輩いいじゃねえかよ！ 上も下もムツチムチの、ボツ！ キュツ！ ボンッ！ 顔立ちもいい、トロンとした垂れ目に薔薇の薔みのような清楚な唇！ どこを取っても不足無し！

おまけに陸上部では全国大会が期待される超速スプリンター！ そんな完全無欠な先輩と！ 毎日抱き合って、キスをしまくって！ あの胸と！ 尻と！ 唇を！ 全部独り占めしておいて、お前はいったい何が不満だった言うんだよおっ！」

…… 栗野はわーざと声を大にして、全身全霊を込めたパフォーマンスを加えて俺に詰め寄ってくる。教室の男子の一部は、おもむるに『ウンウン』と頷いている奴までいた。

「…… 林檎は料理しないぞ」

「そおんつれええが、贅沢だと言っただあぁっ！！！！」

激しく机を三回叩かれた…。

「…別にいいじゃねえかよ、お前三次元の女には興味が無いって言うてたじゃねえか」

「いや！ この頃カラポンを見ていて考えが変わり始めてきたんだ。二次元の彼女達は確かに理想的……しかし！ 俺が生きる世界は『三次元』！ 彼女達とは、決して会えない、触れ合えない、声すら掛けられない……この絶望に気付いた時、俺は人生の分岐点に立たされたと感じたのさ！

真実の愛を、二次元を貫くのか！ それとも実感のある、触れることのできる、不完全な三次元の愛を選ぶのか！

あああ！……！ 俺はどうしたらいいっ、どうしたらいいんだあ！……！

…教室の空気はさつきとガラリと変わって、俺を非難する目から、いつの間にか栗野を蔑む目に変わり始めていた。

「……アホのスケベえ、本領発揮か」

「その名前で呼ぶなっ！ ……なあカラポン、お前はどれだけ幸福なのかってのを考えたことはあるか？ いや、無いな！ お前は自分がどれだけ恵まれてるかかってことに気付いていないんだよ！」

どういうことだ？ ティッシュを詰め替えながら、俺は黙って話を聞いていた。

「林檎先輩とはつまり、二次元の、絵に描いたような完璧なプロポーションと設定を持ちながら、三次元の実感ある柔らかさ！ 触れ合える身近さ！ そして愛！ 二次元と三次元の全てを兼ね備えた完璧な女性！ その全てをお前はああああ……！！！」

……ダメだ、もうついていけない。二次元と三次元がごっちゃになった栗野を止めるのには、二、三時間は必要になるだろう。

「えーと……今日来れないんだっけか、ブシドー？」

「…へっ、あ、アタシ？！」

前振りも無く話しかけたものだから、ブシドーはすっとな狂な声を上げてビクンッ！ と、反応した。…何でそんなに驚いてるんだ？

「…たしか今日は剣道部だろう？ そろそろ主役のブシドーがいないと撮れないシーンしか無くなってきたし、来れないなら来れないでアフレコとかもやらないと行けないだろ？」

「あ………うん、ごめん。今日は剣道の方に出させて。明日は、ちゃんと出れるから！」

「ごめん！ と両手をパチンと合わせると、ブシドーは鞆と竹刀を持って、逃げるように教室の外へと走っていった。途中、ドアの所に鞆をぶつけたりと、何だか落ち着きが無い様子だった。

「……………試合が近いのかな？」

「俺を無視するとはいい度胸だなあ、カアラポォーン」

おお、すっかり忘れていたぞアホのスケベエ。

「…あれ、誰もいないのか？」

メディア部の活動場所は放送室。ビデオカメラとか、パソコンとか、アフレコ用のマイクやミキサーとかも全部揃ってる、絶好の活動場所ってわけだ。元々が放送部だった、ってのもあるけどな。

「だいたい誰かいるはずなんだけど……………うん？」

鍵の掛かったドアに、小さく折畳んだ紙が挟まっていた。引き抜いてみると、表には『カラポン先輩』とだけ書かれてていた。

「……………小雪ちゃんとぼたんちゃんか」

『今日は文化祭のクラスの準備があるので、私と小雪は出れません。すみません。 ぼたん』

メモ帳か何かのページを綺麗に切り取ったような紙に、それだけが書かれていた。猫とウサギのキャラクターが薄くプリントされていて、何とも可愛らしい。

（ぼたんちゃんも、こういう可愛いのが好きなんだなあ）

女の子だから当然と言えば当然なのだが、ちよつとそういうイメージが無かったので意外だった。…いや、ちよつと待てよ？

「林檎がいない、ブシドーがいない、小雪ちゃんもぼたんちゃんもいなくて……………栗野も来ないとか言ってたし……………」

つまり、今日は放送室に誰も来ないのだ。…俺以外のメディア部

部員、全員不在。

「……………一人で撮影もできねえし、今日は帰るか」

俺は顧問の柴本先生の所に寄って、今日は帰ることを告げてから

校舎を出ることにした。途中、渡り廊下から格技場が見えて、剣道部が激しく竹刀をぶつけ合っている様子がよく確認できた。

こっちのいいかげんな部活と違って、向こうはきっちり部活をしているらしかった。

（ブシドーも大変だよなあ。助っ人って言っても、ほとんどメデイア部を兼部してるようなもんだもんなあ…）

ホント、頭が下がる思いだった。自然と、頭が深々と格技場に向かってお辞儀をしまっていた、

梅雨の合間の、晴れ晴れとした青い空。遠くの山の向こうには、モクモクとした入道雲が垣間見えて、もう夏なんだよ！ と、えびりに来ているようにさえ思える。田んぼの稲も青々とした穂を実らせ、時折車が吹かせる風に合わせて、そよそよと静かに揺れていた。こないいい日は、絶好の撮影日和なだけけど、キャストもいないし、スタッフもいない。

仕方なく、一人家路に自転車で向かう俺。なんか寂しい。

「寄り道でもしてくかー」

帰っても、撮影した映像の編集ぐらいしかやることがないしな。

『それが一番大変な作業なんだ』っていうツツコミとか、『宿題とかは無いんかい』ってツツコミは、この際スルーだ、スルー！。

（たまにはこんな息抜きも、いいんじゃないかな）

田んぼと住宅街を挟む道路を抜けていくと、田んぼ側の方に突然、こんもりとした形の小さな森が出現する。昔からセミとか、カブトとか、昆虫の宝庫みたいな所で、小さい頃にはよく網を持って突撃した覚えのある場所だ。

俺はその入口である、木々のトンネルで覆われた小道を登り始めた。このてっぺんには、ほったらかしにされた感じの小さな神社があつて、いかにも怪しげな伝説とかが眠っていそうな雰囲気を持つ

ているのだけれど、残念ながらそれを勾わせる碑文とか、お社も何も置いてはいなかった。

こっちは裏道で、鳥居がある方とは逆側に出る道だった。

「…この森の隙間から見える景色が、結構好きだったんだよな」

田んぼがずーっと奥の方へと広がって、その中心には星流川。その星流川に吸い寄せられるように線路が大きくカーブしていて、そして二つが合流するようにして山の中へと消えていつている。

電車がその上をゆっくりと動いていつては消えていく様子が、特別にお気に入りだった。

「ここもどつかのシーンで入れたいなあ」

ネタ帳、メモ。思いついたら、これ、基本だな。

神社のベンチで一休みして、無理やり自転車を転がしつつ石段を降りてきた俺は、田んぼ密集地帯に沿って走る道路を、わざわざ家路から離れるのを分りながら自転車に乗っていた。なんとなく、今日はそうしてみたい気分だったんだろう。

（林檎とかメディア部とか、そういう負担から解放されていく感じがする…ああ、いい気持ちだ！ ……ん？）

後から、クラクションの音がした。大型車？　たいして車が通ることも無いような裏道なのに？

（…路線バス？　こんな所に通ってたっけ）

あぜの方に一步降りて道を譲ると、銀色車体に紅帯を巻いたバスはブロロ……と、エンジンを軽やかに唸らせて通り抜けていった。小さな女の子が一番後ろを独り占めしていて、両手を付いて後を見ているのがわかった。見た感じ、他に誰も乗っていないらしかった。「こんなとこにバス停が…なんだ、一日三本しか無いじゃないか」信号の無い交差点の手前に、ポツンと小さな棒がつっ立てるだけみたいなバス停があった。

上についていたらしい丸い板はひっくり返って土台の傍に落ちてい

た。『水車小屋交差点』と古めかしい字で書かれていて、赤茶色の錆がビツシリと浮いている。

さっきのバスは、そこから更に少し進んだ所で左に曲がっていった。田んぼが切れて、山道への入口のようになっていた場所があるのだ。

（ここは知ってる。反対側へ行けば家の方へ出れるんだ）

その坂道の脇に、やはり小さなバス停がぼつんと置いてあった。

『上根田折返場』。バスがそこに止まっていなければ、バス停と気付かないかもしれないような場所だったが、折り返しができるようにと、少し広くなっていた。

「乗ってるのかな、このバス」

なんて、経営状況を心配する理由も無くて。『回送』の幕を出してこつちを向いているバスの前を横切つて、家路へと向かった。

坂道の方には行かないで、山を避けるように伸びる道へ、再び田んぼ道。北貝梨の街が、ようやく近くに見えてきた。

「……ん？」

プップ、

後から、クラクションの音がした。大型車？　たいして車が通ることも無いような………って、あれ？

「………さっきのバス？」

『回送』の幕を出した、銀色車体に紅帯のバスが、ソロソロと近づいてきていた。田んぼの稲穂とまったく溶け合わない色なだけに、えらく浮き出て目立っている。

あぜの中に一步入って避けると、なぜか、バスは自分の横まで来て停車し、中扉を開いた。バス停も無いのに？

プー、プシューー。

『整理券をお取りください。バス共通カードをご利用の方は………』

録音された女性の声が、放り投げるように適当な音量で繰り返されている。

…もちろんのことだが、降りてくる人も乗ろうとする人もいない。しかし、中扉は開きっぱなしだった。冷房もほとんどん抜け出て行っているのもお構いなしだ。

すると、バスの中からドタドタドタ——という、騒がしい音が聞こえてきた。

「うちゅーじいんんん……、みいつけえッ！……！」

「ぬわっ？！……お前は昨日の……」

スージい長万部！ 中扉に現われたのは、昨日北貝梨駅で出会った、あのやかましい少女だった。

「ようこそ！ あなたを幻想郷へと導く素敵な真紅の路線バス、その名もスジマン線！ パンパカパーン！！ 栄えあるお客様第一号に選ばれたのは、あなた！ 北貝梨市在住のうちゅーじいさんでえーっす！！」

ドンドンぱふふな音が聞こえそうだと、思ってたなら、本当に太鼓とかおもちゃのラッパとかを鳴らしていやがった。いったいどこから出したんだ。

「『つまり貸切というわけです。遠慮なさらずに、どうぞご乗車くださいませ』」

案内音声が続切れて、聞き覚えのある男の音がスピーカーから割って入って来た。プシューという音がして、前扉が開くと、サンダラスをした運転手が、身体を乗り出して、どうぞと言わんばかりに俺を促していた。

「…よく見えないけど、あの人って」

「うん、パパだよ」

…パパだったのかあの人。どうりで肩車とかしてたわけだ。

「いや、それもそうだけど……お前の父さんはバスの運転手だったのか？ なんか昨日は“我々”とか言ってた気がしたけど」

「違うよ。シユミで大型二種免許を持ってるだけ！ 観光バスとか、

ハイヤーとかだって運転できるんだから！」

訳が分からん……。だいたい二種免許って趣味で取れるものなのか？ 少なくとも、勝手に路線バスを貸切ることなんてできないと思うんだが…。

「ま！ こんな所で立ち話も何だから。とにかく乗れ、うちゅーじゅん！ タダで乗っていいぞ、タダ！ 無料、フリー、庶民の味方！」
スージマンはグイグイと俺をバスの中に引っ張りこもうとした。
が、そんな拉致監禁行為を認めるわけにはいかない。俺は地面に踏ん張り立つことで抗議した。

「乗るか。あとさ、その『宇宙人』って呼び方やめろよ。俺はお前と同じ地球人だつての」

「いいじゃん、名前知らないんだし。とにかく乗れ！ うちゅーじゅん、早くしろおい！」

絶対こいつは人の話を聞くつもりはないらしい……。しびれを切らしたのか、スージマンはバスから降りて、後ろから俺の背中を押し始めた。それでも駄目だと思ったのか、しまいには自分も後ろを向いて、おしくらまんじゅうみたいにケツをぶつけた。もちろん俺はビクとも動かない。

（かつてえケツ……林檎はもつと柔らかかったのに、成長の違いか？）

「いや〜ん！ お兄ちゃんのえつちい！ 後ろはだめえ〜ん」

「あつ！ 汚ねえぞてめえ！ 人聞きの悪いこと言っくんじゃねえコラー！」

田んぼ道のと真ん中で誰かに聞かれるわけがないのだけれど。

あかんべーをして逃げるスージマンを、俺は無意識に捕まえようと追いかけていた。

「きやははは！ ほらほら！ 早くワタシを捕まえてよー、ノロマうちゅーじんっ！ きやはははは！ 犯されちゃうーっ！……！」

「黙って逃げろやこらあーっ！ ホントに襲ちっまうぞバカヤロおおー！！！」

あぜ道に下りて、田んぼの泥を飛ばして走って、道路に上がって……冷静に考えられたなら、何でもこんなアホみたいなことをやるんだらうと、立ち止まることのできただろう。

でなければ、自然と足は止まっていたはずだ。バスのステップを踏んだその時に。

『発車します。お掴まりください』

「え？」

ブーツ、ぶしゅわ……。

非情な録音された女性の声を合図に、バスはゴロゴロと唸りを上げて、ゆっくりと田んぼ道を動き出した。……スージマンは一番後ろの座席を陣取り、この女王様を気取るかのように、偉そうに足を組んで座っていた。

「やあつと乗ってくれた！もちつと素直に乗ってくれるかなーって思ったんだけどなあ。引力が弱くなってたのかな？」

足をわざとらしく組み直し、短いスカートが大袈裟にヒラリとはためいた。

「……お前の引力なんざ、たいしたことねえよ」

ゴロゴロとエンジンを響かせるバスの中。……俺は、なんだかどうでもいいような気分になってきて、近くの座席に崩れるようにして座り込んだ。丸い銀色の冷房の吹き出し口が自分に向いていて、えらく寒い。それを左手でいじって、直接冷気が当たらないようにそっぽを向かせた。

「……自転車、置いてきちまったな」

窓から後を覗いたが、既に田んぼ道をだいぶ走ってしまったらしく、俺の自転車らしき物を見つけることはできなかった。バスは交差点を曲がったらしく、田んぼ道を離れ、住宅が並ぶ一般道へと入っていた。

「後でまた戻ってきてあげるから！」

「ぬわっ?! 隣に来るな、気色悪い!!」

走行中の席の移動は非常に危険です、って、誰かに習わなかったのか? 不気味にもいやらしくも、ニヤニヤ笑っているのだから尚のこと気持ちが悪かった。

「ふひひひ。そんなに避けたりしないでよお、やっと二人きりになれたんだしい! ねえゝええんっ」

「触るなっ、ウザい、キモい、ベタベタする! おまえ、飴玉かなんか触った後だろ!？」

右腕に抱き付かれた瞬間、ペツタリと引っ付くような感触があった。その瞬間にはもう、俺は不快感をむき出しにして払いのけようとしていた。

スージマンも、踏み潰されたまんじゅうみたいな顔をして、プンスカと怒っていた。

「飴なんか触ってないっ! 何でそんなに嫌がるの? 蒼ちゃんと、は、ベツ・タ・ベタ・やあってたくせに〜い」

…蒼ちゃんって、蒼井林檎のことか?

「そだよ。あたし、ぜーんぶ見てたんだから。二人が川に入って、イチャイチャしながら、それはもうそれはもう、びっちょびちょの濡れ濡れの、グッショグショになるまで、熱く、激しく、情熱的にうんぐうーッ!!!」

「覗きはいけないなあ覗きはあゝゝゝ」

顎を下から摘みあげると、これまた焼過ぎて破裂した餅みたいにしわくちやになって、えらく面白い顔ができあがっていた。こいつは尻よりも、ほっぺたの方が柔らかいかもしれないな。

「ぶひゅやふよお!!! いたあいつ、ぶつぞお!!!」

と、言い終わる前にはポカリと頭をひっぱたかれた。その手でスージマンは、たいそう痛そうに自分の頬を撫でながら、半べそをかいていた。

「ぶつ前に言え、ぶつ前に……昨日も聞いたかもしれないけど、お前は林檎の何なんだ。友達か、親戚なのか?」

「だから違うつて言ったでしょう？ 私は蒼ちゃんを、昨日初めて見た。まだ話したことも直接会ったこともないよ」

たしかにそんな話を聞いたような気がする。…が、なぜかスージマンと話したことを思い出そうとしても、ハッキリとした記憶を掘り起こすことができずにいた。つい昨日のことなのに。

「うちゅーじんはどうなの？ 蒼ちゃんとはどういう関係？ 恋人？ 恋人なの？？ 教えてくれないと答えてあげない」

「だからそのうちゅーじんつての……カラポンだ、カラポンって呼べ。そっちの方がまだ慣れてる」

スージマンは一瞬キョトンとしたような顔をしたが、すぐに目をキラキラさせて、

「カラポン星人？」

と聞いてきた。

「違うつつの」

もう一度俺は、びろおおんと伸びる、柔らかほつぺたを堪能した。

バスはどこに向かっているのやら、だんだん木々の数が多くなってきたような、そんな堀の深い丘を上ったり下ったりを繰り返していた。

走り出して5、6分。まだ目的地には着いてないらしい。

「…ふん。じゃ、キスより先はまだなんだ」

「当たり前だ！ …俺達はまだ、高校生なんだから」

スージマンは、俺と林檎の関係についてしつこく質問してきた。出会ったのはいつか、付き合い始めたのはいつか、ファーストキスはいつか、どこで、何時何分何秒何曜日、どんなシチュエーション

で……などなど。

「でもさー、蒼ちゃんって人間なら17歳で結婚できるんでしょー？ いいなあー」

「……人間ならとか言うな。あいつはロボットなんかじゃない……」
交差点を右折したらしく、体が左に持っついていかれた。スージマンも同様に傾いてきて、それを狙ってたかのように腕にへばり付き、浮き上がった両足なんか、そのまま俺の膝の上に乗っけてきやがった。お姫様抱っこでもしろって言うのか？

「おい……だから引っ付くなって——」

「蒼井林檎はロボットかもしれない」

——ぞくり、と。

利き過ぎる冷房が、吹雪みたいに感じるぐらいに、………体から、血の気が引いていった。

スージマンは、ニッコリと笑って、

「っていうのは、昨日も言ったじゃん。ね、カラポン？」

と、林檎の真似をしたぞ、どうだ！ というような口振りで言った。なぜか、目が黒くて綺麗だなど、見当違いなことを考えていた。

「私達ね、蒼ちゃんの秘密を知ってるかもしれないんだ。だから恋人のカラポンには、それを教えてあげたいなーって思ってる。カラポンだって知りたいでしょ、蒼井林檎の秘密」

「それは——」

知りたい。本当のことを、知りたい。でもそれはきつと、林檎にとっては知られたくないことのはず。……秘密なんだから。

なのに、なんで——

(………なんて、綺麗な、瞳、なんだ、………)

黒。吸い寄せられるような、黒の瞳。全ての意識が、スージマンの2つの瞳に釘付けになっているような気さえする。………何なんだ、この、黒は………？

「教えてあげるよ、蒼ちゃんの秘密。でも、あたしも知りたいこと

がいつぱいあるんだ。バスが着くまで、もつとお話しよつ。ね？」

「あ、ああ……」

頭より口が先に動いているような、そんな違和感。……俺達を乗せた紅筋のバスは、ますます訳の分からない方向へと向かっている、そんなような気がしてならなかった。

- 2 - 『スージマン ｽｰｼﾞい・長万部』 e n d

つづく…

2 『スージマン』とスージイ・長万部』（後書き）

ようやく物語の、本当の意味でのスタートに持っ
てける……………次回、
急展開?!

3 『株式会社コイントス』（前書き）

カラポンが連れてこられたのは、地下の駐車場だった

3 『株式会社コイントス』

- 3 - 『株式会社コイントス』

近くに高速道路の陸橋が見えてきた。その下をくぐるトンネル、と言っても、長さは三〇m程度で、高さも幅も、このバスがギリギリ通れるぐらいしか無いだろう。

しかし、バスは迷うことなく、アクセルを踏んでいった。

「おい、いったいいつになったら着くんだ？ もう20分ぐらいは乗ってるだろ、いいかげんどこへ向かってるのか教えるよ」

「んー、Secret!! 着くまでは教えないのーだ!」

あんまりいい顔をしていなかったのだろう。急に不機嫌そうになったスージマンは、何故か、いきなり俺の脇腹にストリートパンチをぶち込んできやがった。

「ちよええい!!!」

「ごふあっ!!?!? …… な、何しやる!!!」

その瞬間、車内が真っ暗になって、車体が大きく左に傾いた。いや、曲がった？

(だってここはトンネル…… って、ええ?)

出口が、無い。

それどころか、後ろにあったはずの入口も、無い。

真っ暗闇は、唐突に灯されたヘッドライトが打破るが、しかし、その先に光は無い。ただ、ただ、闇に包まれたトンネルが、どこまでも続いているように見えた。

「…………… 何だ、ここ?」

「秘密トンネル」

… 実に分かりやすい。

「ここを越えたら、もうすぐだよ」

「本当かよ……」

うまくストレートパンチのことをかわされてしまったが……。トンネルは下り坂になっていくらしく、落ちるような浮遊感を伴って走っている。

やがて、速度を落としたかと思うと、一度平坦になって、また今度は上り坂になった。エンジンが唸りっぱなしで、すごいGを感じる。

『カラポンさん、もうまもなく我が社の駐車場に着きます。お降りの準備をお願い致します』

「……………あんたにカラポンって言われるのは、ちょっとなあ」

向こうの、スージマンパパの声はスピーカーから聞こえるのだが、こっちの声はトンネルの轟音に消されておそらく聞こえていない。

「…我が社って、何だ？」

バスは、坂を上りきって停車した。

ピピッ。

そんな、軽い電子音の開けゴマによって、壁は真つ二つに引き裂かれた。たぶん、スージマンパパがカード認証か何かを行ったのだろう。バスは、ゆっくりと中に入っていた。

「……………ホントだ」

その場所を一言で説明するのなら、ずばり駐車場その物だった。止まっている車のほとんどは大型トラックで、それぞれ違った会社のマークが付いていた。

時々、同じマークのトラックが、何台も続けて駐車してたり、段ボールとかコンテナの積み降ろしを行ってる様子も見受けられた。

バスは通用口近くの、一段段差のできた所の隣に停車した。

「サゲちゃんよお、随分早くねえか！　オラもつと休みてえんだけどナァ！」

白髪まじりのおじいさんが、タバコを吸いながらデカイ声で何か叫んでいた。すると、バスの前扉と中扉が開いて、スージマンパパ（サゲちゃん？）が降りて何か話していた。

「さ、降りよ！」

スージマンは立ち上がって、俺の手を引いた。

「……なあ。サゲちゃんって言ってたけど、お前の父さんって何て名前なんだ？」

「え？ サージェス・長万部だよ」

「……………それでサゲちゃんか。コイツのことだからきつと、

「家にいる時はね、私も“サゲマン”って——」

「言わなくていいっ」

案の定、ふくれっ面になったスージマンは、空いている手で俺の腹に一撃を叩き込みやがった。

ところがどっこい！ 俺も馬鹿じゃない、学習する人間だ。奴が暴力行為に出ることを予測して、腹に力を加えておいたのだ！

「ハンっ、全然痛くもかゆくもないね！」

「ぬう~~~~！ うりゃあッ！！」

G O T H I N ! ! !

「~~~~~！！！！」

……………思わずアルファベット表記をしたくなるような、容赦の無い膝蹴り……………炸裂箇所は言うまでもなく、股間だ。

「おうおう、相変わらず元気だなあスジマン社長さんハあヨお。そいつぁ新しいボーイフレンド力あ？」

「そ！ 見て見てっ、アタシらお似合いでしょ、ぎゅ〜」

「社長……………？」

さっきの暴力娘から一転、いや、反転……………林檎にも負けず劣らずな猫撫で声を出しやがったスージマンは、まぶたを細くして、俺を見上げた。

「もつと驚けよ、KY星人！ 社長だぞ〜、社長なんだぞお、え〜らいんだぞお〜！」

「偉いって言われても……………なあ」

機嫌がいいんだか悪いんだかよくわからない奴だ。じいさんとス

「ジマンは勝手にペラペラと喋ってるし、俺の話をしてるのに、俺の居場所が無い。そんな、変な感じ。」

「盛り上がっているところ大変申し訳ないのですが」

ズイっと、スージマンパパ（サーゲスさん？）が間に割って入ってきた。

「アーん？ もう終わっちゃったのかよ。もちつとゆっくりガス入れるってんだよ、なあ？」

「夕方に運休させるわけにいかないでしょう。借りておいて言うのもアレですが、私の運転じゃここから貝梨まで15分じゃ帰れないですよ。引き継ぎます」

『12行路』と書かれたハガキ大のカードを差し出すと、おじいさんは灰皿にタバコをすり潰した。

「違えねえ。俺なら5分で戻るけどナ、あッハッハ！！！」

壁に掛けてあった帽子を深々と被ると、おじいさんはバスの前扉に乗っていった。エンジンは掛かった。

「じゃあナあサゲちゃんよお！ またサボりに来るぜえ、いつでも言ってくれナあ！」

「バイバイ、運ちゃん！ またバス貸してねー！」

とても路線バスとは思えない急発進をしたバスは、車体を傾けながら駐車場をクネクネと曲がって出ていった。テールライトの残像がすごい形に目に焼きついていて、尚更それを引き立てているような気がした。

「では、参りましょう。ご案内いたします」

「ちょ、ちよつと待ってください、スルーですか、今の、説明してくださいよ、どういうことか」

「説明も何も、運ちゃんにバス借りてて、返しただけだよ。見てわかんなかった？」

そのまんま過ぎるだろ…。それで説明できてしまっただけののだろうか、なんか。

「あの方は私がバスを借りなくてもサボってしまうので。運休させ

るよりかはよっぽどいいのではないかと思ひましてね、ついですが、休憩前の閑散路線を担当してきたわけです。実際今日の乗客はスージいだけでしたし」

そりゃサボりたくもなるわな………って、ダメだろ色々と！

「まー、細かいことは気にしないの！ とにかく来てっ、私の会社を見せたげるから！」

「あっ、おい！？」

不条理、なんて嘆いたところで、もう遅かったのだろう。それとも、俺の常識という物の方がおかしかつたんじゃないだろうか？

…そう疑いたくなるまで、さほど時間は掛からなかった。

「お疲れ様です社長！」

「社長、お疲れ様です！」

「社長！」

「社長っ！」

「しゃちようっ！……！！」

「いよっ、みんな働いてるかー？ あはっ、秀ちゃん！ 元気い？ こないだの工場の話ってどうなったー？ ……うん、うん。そっかー、なんとかかなりそうなんだあ！ じゃあさあ、」

「………ウソ、だろ……？」

駐車場を出ると、地上階まで吹き抜けになっている大きなロビーに突き当たった。そこにはたくさんさんのスーツ姿の男女がひっきりなしに動き回っていて、スージマンの姿を見ると、“必ず”立ち止まって深々と頭を下げていた。

「全員スージいの部下です。スージいが友達感覚で話掛けるもので

すから、社員の中にもくだけた言葉遣いをする者もありまして、困ったものです」

「そりゃそうだろ……」

と、思いつつも、実はスージマンの姿にちよつと関心していた。何を考えてるんだかわけの分らないことばかりを言っていた奴が、ずっと年上の人達と仕事の話をスラスラと喋っている。話の内容はよくわからなかったが、『社長』と呼ばれるだけあって、部下達の信頼は集めているらしかった。

「お前……いや、社長つてすげーな……」

「すげえだろ、すげえだろ！　だつて社長なんだもん！　でもいいよ、カラポン星人にはスジマンって呼ばせたげる！　社長つて呼ばれるのは会社だけで十分だし！」

鉄板胸を反り返らせるスージマンの顔は、いつになく活き活きしているように思えた。……何の会社なのかは、未だにわかってないわけだけど。

「スージマン。お客様がお待ちだ、適当に切り上げなさい」

「ほーい。じゃ、秀ちゃん、工場の件よろしくね！　行こつ、カラポン星人！」

再び手を引っ張られて、俺はロビー奥のエレベーターへと連れて行かれる。ここも綺麗に薄クリーム色に塗られていて、会社というよりはまるでホテルみたいな高級感が漂っていた。

（うちゅーじんの次はカラポン星人か……明日になったらまた変わってるかもな）

ここでもエレベーターから降りてきた人が、深々と挨拶して去っていった。

ところが、空っぽのエレベーターに俺達三人が乗り込むと、なぜか、他に待っていた人がいたにも関わらず、誰一人俺達と一緒にエレベーターに乗ろうとはしなかった。数秒して、静かにドアは閉まった。

「あの、ボタン押してないみたいですけど……」

「実はボタンでは行けない階がありましたね」

おもむろに開閉ボタンの下のカバーを開けたサーゲスおじさんは、胸ポケットから鍵を差し込んで、それを回した。すると、ボタンのランプもついていないにも関わらず、エレベーターは突然上に向かってグングンと動き出した。

「ぬふふー、ここからは秘密エリアなのだー！ 社員でも限られた人しか入れないんだぞー！」

……俺をそんな所へ連れて行って、いったいどうするつもりなんだろう。不安が顔に出たのだろう、サーゲスおじさんが声を掛けてきた。

「どうってことはありません。取って焼いて、食うだけですから」

「……にこやかに言ってなかったら心臓止まるところでしたよ」

十分怖いんだけどさ……グラサンが不気味に光っててさ。

エレベーターは、ボタンに無い階を表示しながら、どんどん上っていく。どこまで行くのだろう。このまま天国にでも逝ってしまうんじゃないだろうか。……エレベーターは、まだまだ止まらなかった。

ズドおおん、という大きな音がした割に、エレベーターは衝動なくゆっくりと停止した。故障かな？ と思った瞬間、ドアがゆっくりと開いた。目の前は、薄暗い廊下のＴ字路になっていた。

「今電気が点きますので……点きました。では、こちらへどうぞ」

「は、はあ……」

正面の廊下の蛍光灯だけが、手前からパツ、パツ、パパパッと奥に向かって灯っていく。廊下は壁に突き当たり、そこから右へ曲がると、目の前に一枚の扉が現われた。

壁にはカードリーダーのような物と、それっぽいナンバーテンキー、更には何かを映し出す液晶のような物がついていて、いかにも『こ

「これは秘密な場所ですよ」と教えているようなものだ。

「この部屋には指紋認証か、ＩＤカードを持つてる人じゃないと入れないんだよ。ふひひひ、カラポン星人はＩＤ持つてない？　じゃ入れないねー、残念でしたー！」

「……んじゃ帰るわ」

正直本当に帰りがかった。なんだか、どんどん関わりたくないような世界に足を踏み入れているような気がする。もう戻れなくなるような、そんな危ない臭いさえした。

冗談で後ろに引き返そうとすると、いきなり、後ろからズボンを肉ごと引っ掴まれた。

「いつで………何すんだ——」

「意気地無し」

え……？

その声がスージマンだとすぐ分からないくらい、俺は驚いていた。だって、スージマンの声はこんなに低くない。あのワイワイ甲高いスージマンの声とは、あまりにかけ離れていたのだから。

「蒼井林檎の秘密を知りたいんじゃないの？　あなたはここまで来たんじゃない、“連れて来られた”。その意味をよく考えなさい」

「——」

「まただ。また、この感じ……」

スージマンの目を見ていると、全ての意識がそこに集中してしまう。ちゃんとした返事ができない………いや、

（返事が………書き換えられている………？）

まばたきすらできない、目を逸らすことすらできない。

………スージマンは、俺は、今、何て言った……？

「じゅめん」

突然、ふっと身体が動かせたのだが、ただ身体の力が抜け、前の

めりに倒れてしまったただけだった。

腕も足も、水の塊にみたいに感じ、やっぱり動かすことはできなかった。

「痛かった？ でも大丈夫だよ、ちょっと血流を止めたただけだからもうちょっとしたら元に戻るから」

（血流を止めた……………？）

声も出せず、口の筋肉でさえピクピクとしている。…少しマシになつてきたかなと思つたら、ビリビリとした、気色悪いしびれが全身を覆い始めた。

（いったい、何を…）

痛い。動く度に痛い、だけど、動かずにはいられない。文字通り、体中がかゆい。かゆくて、かゆくて仕方が無いくらいに。

「あなたは逃げられない。逃がす訳にはいかないの。いじめてるわけじゃないんだよ。あなたの協力が、私達には必要なの。ごめんなさい。」

でも、お願い。私達に協力して」

やっと動かせた顔は、無意識に正面を見上げるような方向を向いていた。なぜならそこには、“黒い目”がある。しゃがみこみ、俺の顔を覗き込むスージマンの目が、黒く、奇麗だったからだ。

「私達が知っている、蒼井林檎の全てをあなたに教える。だからあなたも、あなたが知っている蒼井林檎の全てを教えてほしい。教えてくれるよね、カラポン星人…？」

「う…あ…」

焦点が合わない、ぼやけた視野に何が映っているのか、もはやわからない。記憶が次々と引っこ抜かれているみたいに、頭の中がぼんやりとしていった。

（あの黒い目が……………黒い眼は……………いったい…？）

「すーっ……………パンツ覗くなボケェ！！！」

「でっ！？？」

まばたきをした瞬間、足も、腕も、指も、体に自由が戻っていた。唯一動かせなかったのは、スージマンに踏んづけられた頭ぐらいか。

「降格降格！ 『カラポン星人』 は今日たった今から『パンツ覗き魔星人』 に降格！ わかったかこんにやろーめ！」

「ぐぎぎぎ……痛いはいっ、やめろ、やめろつつってんだろおいつ……！」

そもそも頭を踏んづけてたら、それこそ目の前でスカート全開になつてることぐらい気づけないのだろうか、このバカ娘は……？

（しかしこの光景は林檎じゃぜってー見れないよな……何であいつスカートとジャージを重ねて穿くんだ……？）

って、冷静に俺は何を考えてるんだ！ 我に返った俺は、自由が戻った両手でスージマンの生足を掴み、強引に頭から外そうと持ち上げていた。

「わっ、わわわわ」

「あ……おい、あぶね——」

宙に浮いたスージマンは、そのまま胸を反らすような格好になつて、そこから先は見えてられなくて思わず目を瞑ってしまった。

（……………あれ？）

いくら待っても、スージマンが倒れる音がしない。俺は恐る恐る目を開くと、スージマンは誰かに支えられて、かろうじて立っていた。

「お怪我はありませんか、スージイ様。こんな狭い所で暴れては危ないですよ」

それは、とても優しい声だった。いったいいつからそこにいたのだろう。彼女は、スージマンを後ろから支えて、立っていた。

「……ありがと、アヤビー。もう平気」

スージマンの秘書……なんだろうか。黒の上着に、スリットの深いタイトスカートを履いた彼女は、俺を見てにっこりと微笑むと、倒

れてる俺に手を差し出してくれた。

「申し訳ありません、社長は新しい友達を見つけると興奮してしまうんです。仲良くしてあげてくださいね」

「あ…はい、そりゃ、もちろん」

一瞬しまった…と思ったのだが、なんだかヒンヤリとした手の感触で頭がいつぱいになっていた。ドキドキしてるのが自分でもよく分かるくらいだ。

「アヤビーも気をつけた方がいいよ！ こいつ、パンツ覗き魔星人だから！」

「な……………なんてこと言うんだ、バカッ！！ だいたい俺はお前のパンツなんざ見たかないん——」

「まあまあ、その辺で。アヤミクB。こちらの方に登録証を発行しなさい、セキュリティランクはAだ」

スージマンパパは俺とスージマンを引き離すと、彼女にそう命令した。アヤビー？ アヤミクB？ なんか、変わった名前だな。

「A…で、よろしいのですか？ ゲストアカウントは、ランクEで作成とマニュアルされておりますが」

「彼はただのゲストじゃない。グリーン・アップルに関する貴重な証言者だ、君も応対には気をつけたまえ」

何か思い当たる節があったのか、彼女は少し驚いたような顔をした後、改まって深々と俺にお辞儀をしていた。

「大変失礼を致しました。私はアヤミク・B。この部屋の管理を任されている者です。あなたの登録証を発行しますので、お名前を教えてくださいいただけますか？」

「あ、はい…唐林、」

「カラポンだよっ！！」

その瞬間、扉の横にあったモニターがピカツと光って、小気味のいい電子音と共に赤いカードが吐き出されてきた。アヤミクさんはそれを取り出すと、ご確認くださいとそれを俺に手渡した。

『KARABAYASHI KARAPON』…唐林カラポン、

って……」

単なる印刷ではなくて、キャッシュカードみたいな浮き出た文字でそうname欄に刻まれていた。券面には大きくAと白文字で書かれていて、うっかり銀行のATMで入れてしまいそうなデザインをしていた。

「Aランクの再発行には結構面倒な手続きが必要でして……」

「……いいすよもう……」

スージイ達は指紋認証、俺はカード認証で部屋に入ると、そこには会議室のようになっていて、四角形に並んだ机と大きなホワイトボード、それから天井には映写機らしき物が釣り下がっていた。

「この部屋は後で使います。どうぞこちらへ」

もう一枚扉があつて、そこにも指紋とカードの認証をする機械が備え付けられていた。入るとすぐに下りの階段があつて、足元だけが小さく緑色のランプがついているだけで、周りは真っ暗で何も見えない。なんだか、油っぽい臭いがして、小さく機械音みたいなのが聞こえて不気味だった。

「ふひひひ、カラポン驚かないでね？ すっごい物を見せてあげるからっ！」

暗闇の中から、前を歩いていたスージマンの声が響いた。……響く？ そんなに広いのか、ここ？

「……それは、林檎の秘密つて奴と関係があるんだろうな？」

「それは見てからの楽しみ！ いいよアヤビー、電源を入れて！」

少し離れた辺りから、『はい』という声が聞こえたかと思うと、突然天井中から真っ白い光が降り注いで、目がおかしくなりそうだった。強烈な光の正体はただの照明だったようだが、その数が半端じゃない、いや、たくさん点ける必要があるぐらい、この部屋が広いのだ。

「な……」

そして俺は、その光を浴びている物達を見て、思わず言葉を失ってしまった。だって、こんな光景、見たこともないし、想像もしたことが無いんだから。なんて、なんて……何だっていうんだ。部屋の中央ではスージマンが両手を広げ、誇らしげに胸を反らしていた。

「これが私達の技術力！ 株式会社コイントス・テクノロジーの結晶！ ……そして、蒼井林檎の秘密の鍵になるはずだよ、カラポン星人？」

鳴り響く起動音。回転するエンジンの音。……それはいつか、夢に見たような、嫌な音だったような気もする。

二人。

二人の少女がいた。

一人は液体の入ったカプセルの中で丸くなり、一人は手術台のような上で、眠っているように見えた。

「こんな……そんな、」

彼女達は眠っているのだろうか、それとも……。

カプセルの中はオレンジ色の液体で満たされていて、時々小さな泡が浮かび上がってきている。…その中で、何かの管が“繋がった”茶髪の彼女は、手足を丸めてふわふわとしている。

一方ベッドに寝ている白髪の少女の方は、白いシーツが掛けられているだけで、なんだかまるで生気を感じない。

どうしたらいいかと戸惑っていると、スージマンが白髪の少女に近付いて、シーツをめくっていた。

「あーれ〜？ 何でイエリー起動しないの？ ちゃんと給油してないんじゃないの？」

「いえ、そんなはずは…また起動不良でしょうか」

起動不良？　どういうことだろう、と考えていると、スージマンは一切躊躇せず、ガバツとシーツをめくってしまった。なんと、眠っている少女は何も着ていなかったのだ。

「わっ?!」

露になった胸や白い肌に驚いて目を逸らした俺だったが、それから彼女達は奇妙なことを始めたらしかった。

「イッチ、ニツ！　イッチ、ニツ！」

「フーッ！　フーッ！」

…なんか、掛け声みたいなのと、息を吹き掛けるような音が聞こえてくる。ベコツ、ベコツ、って、何かがへこんでるような音もしてるし、……………何だ？

「別に目を逸らすほどのことではありません。見てご覧なさい」

「…そうですか？」

スージマンパパにそう言われ、俺は恐る恐る振り返った。

「……………え？」

その光景を、なんとなく説明できるような気がしたのだが、しかし、あまりにも場違いな状況に、俺は混乱する他無かった。

「イッチ、ニツ！　イッチ、ニツ！」

「フーッ！　フーッ！」

「……………人工、呼吸？」

スージマンが少女の口に息を吹き込み、アヤミクさんが心臓マッサージをして、それを二人が繰り返していた。…何で？

「イエリー・マナヤはディーゼル式内燃機関を搭載しています。長時間放置すると接触部にホコリが溜まり、起動不良を起こすので、あのようにホコリを飛ばして手動接触を行う必要があるのです」

「ディーゼルって……………まさか、この子は……………」

その時、グルルンと、何かが回転し始める音がした。眠っていた少女の身体が小刻みに震え、だんだんそれが小さくなってゆく。

「スージい様、イエリー・マナヤが起動致しました」

「ようしっ！ エルグナの方はどう、順調？」

ザバア ！という水の音がして、皆がその方向に振り返った。カプセルが開き、そこから大量の白い湯気みたいな物が溢れていた。「エルグナ・ラクサ起動うっ！」

スージマンが興奮した声で叫び、湯気の溢れるカプセルにぴったりと張り付いた。だんだんと湯気が薄くなってきた、その姿がハッキリと見えてきている。

「スージイ、そこにいるんでしょう？ よくも私を封印なんかしてくれたわねっ、早くここから出なさい！！」

上半身を水面から出した少女が、長い栗色の髪をかき上げ水を払っていた。

「ま、また裸……」

「別にいいけどー？ そのためにエルグナを起動させたんだからっ、出ておいでよ！」

「ほんと？ アンタが素直な時ってなくんか怪しいのよね。まあいいわ。よっしょー！」

豪快にも、カプセルの上によじ登った彼女は、迷うことなく俺達のいる床めがけ飛び降りた。どう見たって2、3mはあったのに、まったく平気そうな顔をしていた。

俺が啞然としていると、向こうはコツチに気付いて一度目を向けた後、ブチブチと肌についていたケーブルの束を抜き始めた。

「んもうっ、邪魔つけねコレ！ それでスージイ。私の封印をこんなに早く解除したってことは、それなりの色男を連れてきてくれたってことなんでしょうね？ まさか、このチビチン小僧が色男だとでも言うんじゃないでしょうねえ。冗談きつい！」

「カラポン星人が？ うきゃきゃきゃっはっはっは！！！！ それ面白！！ 面白いよエルグウ、カラポン星人が色男って！！ ないない、きゃっはっはっは！！！！」

……なんか、スージマンが壊れた。ひっくり返って床を叩きながら奇妙奇天烈な笑い声を上げて、しまいにや何か硬そうな物を思いつ

きり叩いてしまつて、不憫にも一人で痛がつていた。

「大丈夫ですかスージイ様?!」

「ううゝ……………いったいけど、平気……………あつ!」

ガバツと起き上がったスージマンは、片手でスカートを押さえ、もう一方の手で俺とスージマンパパを指さしていた。

「見たでしょ! 今! 絶対見た、パンツ!」

「裸の前でそれを言うか!! 裸の前で!!」

「なあにい? あんたアタシに向かつてそういう口利くわけえ?

あんた人間でしょう、裸で生まれてきたんでしょうが。裸を否定するぐらいならもつとセンスの良い服を着てみせてから言うことね。あんたの服はかつらよ! 醜い裸を隠してるだけにすぎないわ、この全身ツラ男!!」

「づ、ツラ男……………」

言い返したくても、相手が真つ裸なだけに、何にも言うことができない。何でこんなボロクソに言われなきゃいけないんだと思いつつ、さつきからぶるんぶるん震えてる豊満な胸やら何やらが勝手に視野に入りこんで、ロクな思考が働いてくれていなかった。

「いいぞーっ、もつとやれえーい」

「止めるよバカ! 何で俺がこんなこと言われなきゃならねえんだよ、ちきしょうっ……………」

アヤミクさんがタオルとシーツみたいな物を持ってきて、エルグナと呼ばれていた少女はそれをマントのように羽織り、身体を拭いていた。

「スージイ様、イエリーも起動致しました。二人を別室で着替えさせて参ります」

「んっ、よろしく!」

アヤミクさんの後にさつきの人工呼吸を受けていた少女が、やはり同じように毛布を掛けられてぼんやりと立っていた。その様子を見る限り、やっぱり彼女も裸だったのだろう。

「……………」

「ど、どうも……」

軽く会釈したのだが、何の反応も示さず、ただ前をぼんやりと見つめていた。アヤミクさんが背中 hands を添えて、初めて反応らしい反応を見せて、二人は奥の扉から部屋を出て行った。

去り際にエルグナが、「覗くんじゃないわよっ、バカ人間！」とわざわざ怒鳴っていていた。

（なんだ……あいつだって恥ずかしいって気持ちがあるんじゃないか……）

「彼女達について、どのような感想を持ちましたかな」

ホッとしていた所に声をかけられ、驚いて跳ね上がってしまった。スージマンがニヤニヤしていやがる。

「感想って……変わった子達だなあ、って思いましたけど」

「アヤミクBについては、どうです？」

スージマンパパの表情はあくまで真剣だった。アヤミク：B、さん。……彼女に対する感想？

「惚れた？惚れた？蒼ちゃんから乗り換えるなら私から言っとくよ？ いひひひ！」

「……アヤミクさんは、普通の人のように感じましたけれど」

スージマンの軽口の一つ一つ相手していたらキリがない。いいかげん、俺は話す相手を選ぶべきかもしれないと感じていた。

「そうですか！」

それだけ一言、やけに大きな声でスージマンパパは言った。どういうことだろうと、スージマンに目を向けると、露骨に不満そうな顔をして、目を背けられてしまった。

「無視する奴とは話さない……」

「あそう……」

「唐林拓二さん」

名前を呼ばれて、ドキッとした。カラポン、カラポンと呼ばれてばかりだったから、尚いっそう嫌な予感がした。学年主任に成績のことで呼ばれた時に似てるかもしれない。

「蒼井林檎さんは、ロボットかもしれない。あなたはそう仰いましたね？」

「え……あ、えっ……」

……言った、のかな俺…？

でも、スージマンは何故かそのことを知っていた。『蒼井林檎はロボットかもしれない』。彼女は俺に会う前から、既に知っていたらしかった。

だけど、

（俺……この人達に、そのことを話したことがあったっけか……
…？ いや、ちよつと待てよ…？）

「……まあいいでしょう、重要なのはそこではありません。私達が唐林さんをここへ連れてきたのは他でもありません。あなたと彼女達三人に会わせるためでした」

この強烈な違和感に、俺は何度か気付いていた。その度に気のせいだ、忘れていただけだと思い込んでいた。

でもそれは、違っていたんだ。

「三人って……アヤミクさんも、ってことですか…？」

「そうです。私達は唐林さんにお約束していたはずですよ。蒼井林檎の秘密に“関わる物”をお見せしますよ、と」

「……ま、まさか……彼女達は……」

俺は、一度も――

「アヤミク・B、イエリー・マナヤ、エルグナ・ラクサ。三人は全て、我が株式会社コイントスが開発に成功した、人型アンドロイド……つまり、“ロボット”です」

――この二人に、『唐林拓二』と名乗っていないのだ。

さっきの会議室のような所に連れてこられて、俺はホワイトボードが正面になるように座らされた。向かって左側の机にスージマンとスージマンパパ、反対側には着替えたイエリーとエルグナが座っていた。

「コーヒーです、どうぞ」

「あ、どうも……」

アヤミクさんだけ、一步外れたパイプ椅子に座って待機していた。給仕係……ということなんだろうか？

「それじゃあ改めて。ようこそ唐林拓二殿、我がコイントスへ！

私は社長のスージイ・長万部っ、スジマンって呼ばないとぶっ飛ばすからね！」

「副社長兼取締役のサーゲス・長万部です。娘……スージマン”からは、『サゲマン』と呼ばれております」

まともな社員なんていねえだろうなあ、この会社。……トップ2がこんなんだし。

「早速だけど本題に入るよ！ 蒼ちゃんはたぶんロボ！ だから協力してね、ヨロツ」

「……………は？」

ヨロツ……って言われても……………。

「スージマン、それじゃあ唐林さんがよくわからないでしょう。ちゃんと説明をしてください」

「ぶーっ、めんどくさいけど、しょうがないからやっただげる。そんなじゃ、まずこれを見て！」

スージマンがパソコンを操作すると、フォンという排気音と共にプロジェクトが起動し、青い画面がスクリーンに映し出された。会社のロゴみたいなのが表示され、ポインタがせわしなくファイルを選択して、砂時計になったり矢印へ化けたりとを繰り返していた。

「コイントスはいわゆる『おもちゃメーカー』なんだけど、主力は何と言っても子供向けの動物ロボット！ 知ってるでしょ、『ファ

「ブー」とか『A s o b o』とか」

「ファーブーは毛むくじやらの豚、A s o b oは小型犬を模したおもちゃロボットのことだ。両方とも社会現象を起こすほどの爆発的ヒットを記録しながら、いつの間にかひっそりと市場から消えていた。」

「あれってコイントスの商品だったんだ……」

「そう！　そういうこと！　みんな、ファーブーとかA s o b oのことは知ってるのに、うちの会社の名前は全然広まっていなかったの！！　ファーブーもA s o b oも、他の会社がつけた新しいロボットに埋もれて、次第に売れなくなっちゃったし！　でも私達はその度に新しいロボットを作り出して巻き返しを図ってきたんだけど、もうそろそろ限界？　やっぱりおもちゃは所詮おもちゃだし！」

「たぶんその通りなんだろうけど、スージマンが言うとなんだか無性に腹が立つんだよな。パソコンの扱い方からしたって、頬杖つくわ、足は机に乗せるわ、乱暴にキーを人差し指で叩いてるわで、なんともお行儀が悪い。その辺ちゃんと教育してくださいよ、副社長兼取締役さん。」

「で！　私達は本気を出さないといけないと思ったわけ！！　他が真似できないような、超フレッシュでインパクトがドカーン！　って感じの、新商品を作ろう！　って、私が提案したわけ。そして完成したのがっ……」

「カチャッ、というキーを叩く音と同時に、パツと画面が変わる。」

そこに映し出されたのは、背中が開かれ、内部の機械やケーブルがむき出しにされているイエリーの写真だった。

「電気司令式ディーゼル駆動・電子演算方式・人造人間、イエリー・マナヤ！　それからっ、」

「パツと写真が代わり、今度は手術台のような所で、大勢の白衣達に囲まれて眠るエルグナの写真が映し出された。」

「神経接続式有機駆動・有機演算方式人造人間、エルグナ・ラクサ！　玩具界どころか、世界中を震撼させる世紀の大発明でしょ！！」

これが市場に出せたら、コイントスは地球一の大企業に発展できるんだからっ！！ どうつ、すごいでしょう！？」

「すごいでしょ、って言われても……」

正直に言うつ、何て答えたらいいのかわからなかった。こいつのやったことはすごいのかもしれない。だけど、素直にスージマンを褒め称えるのには、どうしても抵抗があるよう感じていた。

「……何で、ロボットじゃなくて、人造人間なんだ？」

「だって、ロボだとメカメカしてるイメージじゃん。見た目がほとんど人間なんだし、いいじゃん人造人間で」

そういう単純な意味ならいいのだが……俺の心配をまるで気にしていないのか、スージマンは次の説明へと移っていた。

「イエリーもエルグナも、見た目は基本的には人間そのもの！ でも、内部的には全然違う構造で出来てるの。」

イエリーは軽油を使ったディーゼルエンジンを内蔵していて、動力とかシステムの電源にしてて、構造はとっても単純。メンテナンスだっておバカなカラポン星人でもできちゃうよ！

だけど、エルグナはものすごい繊細！ 神経接続式っていう、すごい高度な技術を使ってるから、たぶんカラポン星人に言っただけでわかんないよね！ 簡単に言つとね、動き方がとっても動物的なので、自然で滑らかな動きだったでしょ？ より人間らしくするために、極力電子機械を使つてない構造になってるってわけ。

筋肉があるって言えばいいのかな？ イエリーはほとんどシリコンが詰まった袋が入ってるだけなんだけど、エルグナには本物の筋肉が組み込まれてるの！

だからエルグナは人間と同じゴハンも食べられるし、おしっこもうんちもするんだよ！」

「ちよつとお！ そんなこと言わなくなつていいでしょうつ、バツカじゃないのお！！？」

スージマンは両手を合わせて、舌を出してエルグナに頭を下げた。当のエルグナは耳を少し赤くして、ぷいと俺から目を逸らしていた。

「なんだかそう聞くとますます思うんだけど……イエリーはディーゼルが体に入ってるからまだわかるけどさ、エルグナはいつたい何がロボットなんだ？ 筋肉がある、神経がある、それじゃあ人間そのものじゃないか」

そう。俺が一番気になっていたのはそこだった。こいつらが作っているのははやロボットじゃない。文字通り人造人間……人間が造った、人間じゃないか。

立ち上がった説明していたスージマンは、少し不機嫌そうに口をとがらせながら、ボスつと自分の座席に座り込んだ。

「……うん。コイントスの究極の目標としては、人間の手で人間を造ること。それはカラポン星人の言うとおりだよ。でも、エルグナでも、イエリーでも、アヤビーも、完全な人間とはいえない。一箇所だけ……本物の人間とは全く違う部分があるの」

カチ、カチと、マウスを弾く音が部屋に響く。何枚かの写真がパツパツと切り替わり、最後に、灰色の四角い箱のような機械が映し出された。説明書きには、『G・B・A・I』と大きく書かれていて、小さく略す前の単語が書かれていた。

「ゲームボール・アドバンス・インターナショナル？」

「ちいがー！ うつ！ そんなおもちゃみたいな名前じゃなあ……！」

……おもちゃ会社の社長がおもちゃを否定しやがった。横から肩を叩かれ、誰かと思ったらエルグナが俺に耳打ちをしてきた。

「スージイはゲーム会社の任侠堂に強いライバル意識を持ってるのよつ。あんま刺激しないことね」

「ああ、なるほど……」

おもちゃとゲームじゃ犬猿の仲か……。

「ふんっ、あんな赤緑の親父がでつかくなって何が面白いのよつ、チュピカーなんか全然可愛くないし……あーっ話が逸れた！ 変なこと言うなあカラポン星人！！ G・B・A・Iは、Growing Brain Artificial Intelligence

nce! 『成長する脳、人工知能』って意味!! “脳無し”カラポン星人に脳の話してもわかんなかったかなあ?”

「イチイチム力つく喋り方すんな。つまり、脳だけは作れなかったってことなんだろう? その代わりに用意されたのがその機械ってどこか」

“能無し”の俺にも、それぐらいの予想は付いていた。そんなことができていたら……色々と黙ってない人がいるだろう。宗教とか、政府とか、何かしら偉い人達が、さ。

「造れたよ」

「…は? 何を」

スージマンパパは沈黙し、エルグナは目を逸らし、イエリーはただ正面を見据えいた。

「だから、脳。人間の脳と同じ動きをする脳、造れたよ。機械的なのと、有機的な、両方」

何てこともないように、スージマンはさりと云ってのけた。

「だけど、皆には積んでない」

「…脳が無いのに、これだけリアルな………人造人間が、できるのか…?」

言葉を選びながら慎重に聞き返したが、やはりスージマンは不愉快そうに語気を荒げた。

「だからそうじゃなくて?。脳と同じ物はないけど、代わりになる物が、この『G・B・A・I』なの! 今からその説明をするから、黙って聞いてて!」

これだから脳無しカラポン星人は、と毒まで吐かれた。…いったい何が奴を腹立たせてるんだ?

「もしや頭が空っぽだからカラポンなのですか?」

「そういうのは今はいいデスからッ」

スージマンパパ、空気を読んでください…ソレ当たり前なんですけどね!

「脳ってというのは――」

画面には人型と吹き出しみたいなイメージ画が映し出されていた。二つの人型には名前が付けられていて、片方は『人間』、片方は『G・B・A・I』と書かれていた。

「単なる記憶装置だけじゃなくて、身体中にあーしろこーしろって、指示を出す物でしょう？ だから脳を人工的に再現するには、ある程度のルールを作りつつ、融通が利くようにしないといけないわけ。そのルールってというのは何に基づかっていうと、人間の場合は興味と経験からできてるわけ」

『人間』の方の吹き出しに、“興味”と“経験”という文字が入った。

「赤ん坊は何も知らないから、手当たり次第に興味のある物を口に入れてるでしょ？」

それで叱られた物は食べちゃ駄目、怒られた物は食べていい、って覚えていくわけ。

立ったまま物を食べちゃいけないとか、勉強すると褒められるとか、そういった経験を積み重ねていつて出来上がったルールにより、性格、口調、行儀良さとか、個性が出て来る。

それに更に身体的特徴が組み合わさって、千差万別の人間が出来上がってくるわけ。人間の場合はね、で」

今度は『G・B・A・I』の吹き出しに文字が入った。内容は、“成長応用部”と、“絶対基本部”とが表示された。

「成長応用は時と場合によって変化していいルールのことで、人間の興味とほぼ一緒。

人間と同じように、記録されていない未知の物体に対して、データを得ようとする。

新たに入った情報と、今まであったデータを照合して、これまでのルールと比較してどうかを判断し、常に更新するってわけ」

「なんだか難しそうな話になってきたな」

「そして――」

目が止めるなと言ってる。黙って聞いといた方が良さそうだ。

「その、成長応用を更新するかどうかの判断する、管理を行うのが、絶対基本。」

これは、人間と違って最初からプログラムされてる物だし、人間の経験とも違う。

経験しても、その後の判断に影響されないから、経験とは言えないの。

どういうことかって言うとな………イエリー！」

名前を呼ばれたイエリーは顔を上げ、小さく『ハイ』と返事した。
「今すぐカラポン星人を殺しなさい！」

「はあっ！？ な、何言ってるやがんだゴラァ！！！」

ガタン、と音を立てて、イエリーが立ち上がった。無機質な表情のまま、彼女はヒタヒタと俺に近付いてくる。

俺は慌てて席を立て身構えた。

「マスター・スジマン、命令を確認します。殺人対象『カラポン星人』は、この人間のことでよろしいのでしょうか」

「……！」

場違いなのは承知だが、初めてまともに聞いた彼女の声に、俺は心を奪われてしまっていた。白い肌に似つかわしく、透き通るような彼女の声は、まるで歌っているかのようだ。とてもこれから俺を殺そうとしてる人のようにとは思えなかったぐらいに。

「うん、ソだよ。早いとこ殺っちゃって」

「ふざけんな！ てめえ何様のつもりだコラ！！！」

「……………」

イエリーは何度か俺とスジマンの顔を見比べて考えているようだった。

数秒経った後、

「絶対基本エラー」

と、言った。

「0001：人間を殺してはならない。命令は絶対基本部により、

キャンセルされました」

「了解イエリー。座っていいよ」

『ハイ』と返事をする、彼女は来た道のりを綺麗になぞるようにして、自分の席へと戻っていった。

隣のエルグナは呆れるようにふんり返っていて、スージマンはニヤニヤ笑っていた。

「これが、絶対基本ってわけ」

「……………だから、何だってんだ!!」

でかい声を出したものの、腰が抜けて座り込んでしまった。情けないから不機嫌そうなふりをしておいたが…。

「絶対基本は覆る（くつがえる）ことのない絶対のルール。彼女達が、私達人間にとって不都合なことを絶対に行わないようにするために、あらかじめプログラムさせておいたデータのこと。その第一項目が、『人間を殺してはならない』ってことなわけ。たとえば私がどんなに命令したとしても、イエリーにはカラポン星人は殺せないんだよ」

「……………最初は結構マジな目だったぞ」

でなければ、あんなに慌てたりはしなかっただろう。無表情とはいえ、最初に何の迷いなく俺の方へ近づいてきた時は、本当に殺されると思ったのだから。

「……0002：人間に危害を与える物は、適切に処理しなければならぬ。あなたはこれに該当すると、命令および初期計算で判断した。」

地球外生命体・インベーター・カラポン“星人”はマスター・スジマンに危害を及ぼす恐れありと推測。

しかし、当該生物カラポン星人は、赤外線反応等のデータ照合の結果、地球生命体、すなわち人間であると確認。

カラポン星人とは固有名詞であり、0001対象の保護に該当する。

よって、私は絶対基本0001により、人間・カラポン星人を殺

すことはできません」

「宇宙人だと思っただけえ？ あんたとんだポンコツロボね、お笑いだわ！」

判断基準は違っただろうが、エルグナは最初から、イエリーが俺を殺すわけがないと思っただようだった。でなければ、あんなバカにした態度は取らないだろう。

（それともこの二人仲が悪いんだろうか……？）

俺はまだ若干震える足で無理やりに立ちあがった。アヤミクさんが倒れている椅子を元に戻してくれ、席へ促してくれた。

「プログラムされた絶対基本を、私達が自らの意志で破ることはできません。それは、私達が人間より優位に立つことなく、人間を守るためでもあるのです。私達はあくまでも人間よりも下位の存在であり、人間より造られ、人間に役立つために産まれた存在であり、決して、人間より強くも、偉くもない。なってはならないのです。」

「……アヤミクさんにも入ってるんだ」

につこりと微笑むと、アヤミクさんは後の自分の席へと戻っていた。

今になつて気付いたのだが、アヤミクさんのスカートからコードのような物が伸びていて、その先は壁のコンセントへと繋がっていた。……なるほど、充電しているってわけか。

（ケータイみたいだな……）

「……あつ」

俺の視線に気付いたアヤミクさんは、恥ずかしそうにそのスカートから伸びる（卑猥な）コードを引っ張って、自分の後に隠そうとしていた。スカートが引っ張られ、太腿が少し覗いていることには気付いていないらかった。

「リミッター、あるいは、安全装置とでも言いましょうか。G・B

・A・Iがある限り、ロボットが人間に危害を加えることは絶対にありえません。逆に、G・B・A・Iを積んでないロボットが存在するならば、それは恐ろしい危険性を秘めたロボットであると言え

るのです」

咳払いと共に、話が戻された。真面目な話だぞ、これは、俺。

「パパが言ってる意味、わかる？ イエリーも、エルグナも、アヤビーも G・B・A・I を積んでるから絶対の安全が保証されてる。

だけど、そうじゃないロボットがいたとしたら？ それってヤバくない？ 捕まえて、なんとかしないとイケないと思わない？ ね、ね！」

……なるほど、そういうことか。ようやく、俺がここに連れてこられた意味が、わかったかもしれない。

「……………林檎の、ことなのか」

「ご名答！！ 蒼ちゃんこと蒼井林檎はロボットでありながら、G・B・A・I、あるいはそれに順ずる制御装置を積んでいない可能性が大・大・大、特大！！ ゼーったいありえないよ！！！」

危険な野良ロボット。何をしてくすかわからないから、捕まえてそのゲームボール……じゃねえや、G・B・A・I とかいう奴を積みませようとか、そういうことを考えているのだろう。

「わかった……………確かに、お前らの言ってることには納得がいく。あいつも時々、何を考えてるかわかんねえ時があるしな。

だがちよつと待て！ まだ、あいつがロボットだと決まったわけじゃない。

お前らが説明したのは、あいつがロボットだった場合の危険性だけで、あいつがロボットだという証拠はどこにも無いんだろっ」

「そだよ」

ガクツ、ときた。一番大事な所だろ、そこ……………。

「だーかーらー、カラポン星人にはそれを確かめてもらいたい、つてわけ！ そこんとこ、ヨロ！」

「は？」

「バーカねえ、ここまで言われたら普通流れでわかるでしょう。空気も読めないほどバカなのアンタ？ あんたホントに、頭からっばの脳無し“カラポン星人”なんじゃないのお？」

…何を言っているのだろうか、こいつらは？ 俺にいったい何を期待してるんだろうか？

「ロボットは…、我が社製のロボットもそうですが、必ず保守点検用の『継ぎ目』が存在するはずです。エルグナのような神経接続式、人工皮膚を被せているタイプでさえ、見えにくい所に点検用の『ふた』が用意されています。蒼井林檎もきっとそう………彼女がロボットであるならば、人間なら存在しないはずの、『線』か『ふた』が、身体の表面のどこかに隠されているはずなのです」

「……………それって、どういう…？」

スージマンパパは、ぼやかしつつも伝えようとしている。……………のだが、そんな心遣いも微塵も感じてないのか、水溜りにできた氷を踏んづけるかのように、

「蒼ちゃんの裸を見てきてほしいの。私達に協力もできてー、カラポン星人は蒼ちゃんの裸もじーっくり見れてー、一石二鳥！ 彼氏なんだし、それぐらい簡単でしょ？」

スージマンが身も蓋も無い解説をしてくれて、ようやく納得がいった。

- 3 - 『株式会社コイントス』 e n d

つづく…

3 『株式会社コイントス』（後書き）

次回の更新は、年末ごろかも

4 『イエリー・マナヤ』前編（前書き）

コイントス社から帰ってきたカラポンは、田んぼに置いたままにしてきた自転車を取りに行くのだが……

4『イエリー・マナヤ』前編

「じゃあ自転車はどうしたの？」

「ほったらかし。今日になって思い出したから、これから拾いに行くところ」

田んぼ道を歩く俺たちの他に、人はおろか、カラスやスズメさえも見当たらない。稲穂が風にそよぐ音だけが規則的に聞こえ、晴天の空に雲は静かに座り込んでるようだった。

ふと、林檎がピツタリとくつついてきた。

「…やめろよ、恥ずかしい」

「誰も見てないじゃん。手でもいいよ」

組もうとした腕を離し、林檎は手を握ろうとするのだが、俺の左手はポケットに突っ込んだままだ。手だって十分恥ずかしい。

「んもうっ、いじわるっ」

意固地になった林檎は、強引に握りこぶしを引っこ抜くと、こぶしのまま包むように手を掴んできた。…どうしても、繋がっていたらしい。

「あつた…クソ、田んぼに落ちてやがる」

道路の脇に止めておいたはずの俺の自転車は、横倒しになって田んぼの中に落ちていた。風が、ひよっとしたら車がぶつけていったのか…まあ、盗られてないだけマシと考えるしかないな。

「ちよつと待ってろ」

「もう離れちゃうの…？」

ズボンに泥が跳ねるのもお構いなしに、俺はジャボジャボと田んぼの中へ入って、さてどうしたものかと考えていた。

（左半分泥まみれだもんな…転がしてくしかないか）

ずっぽりとハマったハンドルがなかなか抜けなくて、しかもサドルまで泥まみれになって座れたもんじゃない。まあ、林檎を後ろに寄せなくて済む口実にはなりそうだけどな。

「ねえ。そのスージマンって子は結局カラポンに何を見せたかったの？」

退屈になったのか、林檎は道路にしゃがんで声を掛けてきた。昨日のことについては、まだ断片的にしか話してなかった。

「んー？ 大したことじゃねーよ、ロボットがどーたらこーたらとか。なあ、聞いてくれよ」

え？

「なあに？ 何が面白いの？」

いや、待てよ俺。それは林檎に言ったら、マズいつて。

「それがさ、面白いこと言い出すんだよアイツら。バカバカしくて笑っちゃうぜ？」

ダメだ、目を逸らしちゃいけない。今アイツから目を逸らしたら

.....

「へえ.....教えてよカラポン。どんなこと言ってたのか」

「それがさ、そいつらはロボットを作ってる会社の人間だったんだけどさ」

やめろ、やめるんだ。もうそれ以上言う必要なんか無いだろう、俺っ。

「お前がロボットかもしれない、なんて言っただよ林檎。馬鹿みたいな話だろ、なあ？」

——逃げろ、俺。

「——へえ、よく気付いたじゃん」

「…………え？」

ギューイイイイ イ イ イ！！！！！！！！！

「うわっ、あああ！！？」

金属が切断される嫌な音。不気味に響き渡るモーターの駆動音は、かつて聞いたことのあるソレと全く変わらない。

…チェーンソー。

自転車のフレームを切り裂いたそれは、泥を巻き上げた後に、たった今停止した。

「どこまで気付いてるのかな、私の右手がチェーンソーになること？
私其实是空を飛べること？」

私の体中からはミサイルが撃ちまくれること？

あはは、黙ってたらわかんないじゃん、カラポン。教えてよ、ねえ」

再び唸りを上げ、振動で泥しぶきが周りに飛び散りまわる。

…林檎の右肘から先は、本当に後から取って付けたかのように、巨大なチェーンソーへと変わり果ててしまっていた。

間一髪でそれをかわした俺だったが、田んぼに尻餅をついてしまっていて、手も足も出せない状況になっていた。

「林檎…………まさか、本当に…？」

「そおだよオ？ カラポンだって本当はもっと前から気付いてたんでしょ。」

…見ちゃったじゃんねえ、私のパンツの中から出てきた“ネジ”。アレ、大事なトコの奴だったから、捨てないでほしかったんだけどなあ」

ブオンツ、と、右腕を遊ぶように振り回す林檎。…その目に、迷いなんて物はまるで浮かんでいない。

「…俺を、殺すのか？」

「んー、カラポンの答え方次第かな。約束してくれたら、殺さないでおいてあげる」

そう言いながらも、林檎はわざとらしくチェーンソーを振り上げ、ブオン！ と、エンジンをふかした。

殺される。

最初から考えるつもりも無いんだ、こいつは。

「やめるバカ！？」

「避けちゃダメじゃんカラポン！

避けないって約束してよカラポン！！

アッハッハッ！！！！」

道路は林檎の後ろ、反対は足場の悪い田んぼ。…選択肢は、一つしかなかった。

「クソツ！」

稲穂を掻き分け俺は田んぼを走った。半分汚れた制服だ、俺はためらい無く泥の中を転がり、低姿勢を維持する。少しでも背の高い稲穂で体を隠すためだ。

「遅いよ！」

「！？」

突然、目の前の稲穂が刈り取られ、ポツカリと空いた空間に林檎が立ちふさがった。

「言ったでしょ？ 空飛べるって」

「…………左手はどうした、落っことしちまったのか？」

冗談で言ってるわけじゃない。林檎の左腕は、太いカッターナイフの刃みたいな変てこな形になっていたのだ。

熱を帯びているのか、その周りの空気が不気味に揺らいでいた。

「これえ？ 決まってるじゃん、こっちはねえ、カラポンの首を斬る時に使うの。」

だってチエーンソーで斬ったらグチャグチャになっちゃうじゃん？ 綺麗に斬ってあげるよカラポン、だから………避けないでねええ

！ ！ ！ ！ ！

「……………！！！！」

不快な甲低いエンジン音が、風ごと俺を切り裂いた――。

「あれえ？

……そつかあ。カラポンも持ってたんじゃない。隠してたなんて、カラポンのいじわる」

その言葉の意味は分からなかったのに、何故か、俺の口はスラスラと動き、身体も意図せず次の行動を取っていた。

「……いじわるなんかじゃない。お前を確実に斬るためだ」

雄叫びのようなチエーンソーの駆動音。林檎はチエーンソーを弾かれながらも、すぐに態勢を切り換えし、再び俺の身体を裂くべく右腕を振りかざしてきた。

すかさず俺はそれを受け止める。チエーンソーに変わってしまった、
た、“俺の右腕”で。

「アハハハは……！！」

そうだよカラポン。………そうこなくつ、ちゃ……！！」

緩急つけて襲い来る林檎。田んぼの稲がどんどん刈られるのもお構いなしに、俺は、俺達は、互いのチエーンソーを夢中でぶつけあっていた。

表情を崩さない林檎に対し、俺のなんとスタミナの無いことか。

加えて向こうは両手が凶器だ。必然的に、俺の方が後ろへ押されていた。

ザシャウアアツ——！！！！

「くっ……い、」

「取れたア！ 取れた、取れたア！！」

ほらカラポオン、チェーンソー落っこちちゃったよ、拾わないのお？

いらなのかな？」

右肩からゴツソリ切り落とされたチェーンソーが、動いたまま地面を這い付き回り、泥を撒き散らかす。

だというのに、右肩からはほとんど出血もしてないし、痛みらしい痛みも無い。電氣的なシビれだけが、ジリジリ広がり始めていた。
(少しずつロボになり始めてるってのか…？)

………ちきしょうッ！)

離れないと、次こそは殺される。そんな予感が脳裏をかすめ、俺はまた田んぼを走ろうとした。

が、なんと運の無いことが、暴れ回ったチェーンソーが地面をデコボコにしたせいで、俺は何かにつまずいて泥の中へ派手に転倒してしまった。

「おしまいだよ！」

「！」

振り向く間もない。本能的に、そう感じた——。

ザシャウウワアアア——。

嘖き続ける、何か水のようなしぶきの音。

どんな風に、どんな色が噴き続けているのかも分からない。

ただその、甲高く、泡でも混じってるんじゃないかと思える、ズブズブという音が、やけに耳に残っていた。

(……動けないけど、痛くない)

もう完全に、ロボットになってしまったのだろう。そんな、諦めの気持ち、ごく自然と身体から力を抜いていた。

悟っていた。俺はもうすぐ、死ぬ――。

「……いたい……、たい……よお……」

……林檎の、声が聞こえた。声、と言うよりは、空気が漏れているだけのようない

、……とても弱々しい声だった。

「林檎……？」

身体は動かなかったが、首と目が動かせるらしい。赤黒い斑点の散る泥に頬を擦りながら、俺は恐る恐る後ろに振り返った。

「……うそだろ？」

不思議なぐらい、自分は冷静だった。何も込み上げる物も、感情さえもなく、ただ冷淡に感想を述べるだけの言葉が、頭に浮かんできた。串刺しじゃないか、林檎……」

それだけ。

無惨にも、穴だらけになって、宙に浮いている林檎を見ても、たったそれだけの感想しか出なかった。

ハリネズミみたいに、俺の背中に生えた、鋭く細長い針に突き刺さった、林檎の顔が見えても――。

「か……ポん……い……た、イ――！」

突如として、林檎の姿が小さくなり、視界から消えた。

針が伸びて、そして遠くへと林檎を運び去ってしまったらしい。

俺はもう、首を動かせるだけの力さえ残っていなかった。

(なのに見える……感じる……林檎の身体が、どんどん引

っ張られていくのが、見える)

まるで抱き寄せて、《目の前で引き裂いている》みたいに、ハッキリと。

声も臭いも感じないのに、なぜか、映像だけはハッキリと――

「……………裂けた」

よくできた映像だった。林檎の全身に刺さった針がだんだん太くなって、強引に穴を広げてゆくのだ。耐えきれなくなった身体は、細い足や指先から、バラバラに裂けていった。

見たくもないのに、その身が裂けゆく、林檎の恐怖の表情までもハッキリと。

(……………声が聞きたかったな) 数瞬遅れて、頭に冷たい何かが掛かるのを感じた。

ポツ、ぽつぽつと、雨でも降るかのように。

ドスっ、と、最後に大きな雨が墜ちてきた。毛むくじやらで、黒々としたそれにも、大きな穴は2つ空いていた。林檎の、頭だった。「……………さよなら、林檎。俺もすぐに逝くさ……………」

うつすらと消えゆく意識の中、俺の両目は、林檎の首を捉えて離さなかった。

あんなに嫌いだったのに。

どうしても俺は、嫌いになりきれないらかった。

「……………んわけねーよ」

目が覚めると、いつものポスターが目に入ってきた。天井に貼り付けた、バーチャルアイドル『初音メテオさん』の販促ポスターだ。強調された太腿が艶めかしくてたまらないね。

「……………割とマシな夢だったかな」

ヒドい時は、あれから更に林檎の生首が襲ってきて、それを俺が踏み潰したりするのだ。

不思議なことに、何度も同じような夢を見ても、最終的に殺されるのは林檎の方で、俺が殺される夢は一度も見ることがなかった。

（そもそも……………何でこんなに同じ夢を見るんだろう。初めて見たのは忘れもしない……………あの——、）

——ドンドン。

…床が、不機嫌そうな音を鳴らした。音に合わせて、俺のベッドは突き上げられるように小さく振動した。

「……………起きてるよ」

“返事”として、俺は足だけを布団から出し、床を2、3度蹴っ飛ばした。

これで、俺が起きてることを“下”に伝えているのだ。

（今日は学校が休みだっというのに…）

と言っても、時計は既に十時半を指そうとしていた。朝飯に起こすのには遅いし、昼には早すぎる。

台所では俺を起こした張本人……………母さんが、天井に向けて槍みtainな棒をまさに構えてる最中だった。

「……………もう降りてきたよ」

母さんはいつもの不機嫌面を、更に不機嫌にされたような顔をし

て俺を睨んだ。棒を槍に突き立てる姿がなんか、江戸時代の役人みたいな凄みさえ感じてしまう。おっかねえ。

「起きてるならサッサと降りて来なさいっ、何度も呼んでんてしょ！」

「いいじゃん今日休みだし……………メシは？」

しかし、テーブルには親父が読み散らかしたらしい新聞が置いてあるだけで、特に何も用意されていなかった。

「その前に、コレ。何なの、いったい」

「何、って…？」

母さんは足元に置いてあった段ボールを、棒の底で叩いて俺に示した。それも2箱。

どちらもメートル四方はありそうなドデカい真四角をしていた。「…何コレ？」

「あたしが聞きたいわいッ。ったく、運ぶの大変だったんだからねー、宅配便の人に手伝ってもらってやっとここまで入れたんだから。あとは自分で運びなさいよ」

「……………無理だろ」

何かの懸賞にでも当たったんだろうか？　と言っても、ここ最近特に送った覚えもないし、通販だつてやってない。

だというのに、確かに宛名は『から林たく二さま』になっていた。差出人は書いてなかったが、このえらく汚ない字がたぶんヒントなんだろう。

（まさかな……………）

よく見ると、書き損じたのか、宛先の紙が二重に貼り付けられていて、赤ペンで大きな『×』が書かれていた。そりゃあそうだろう、宛名が『カラボンせい人』になっていたのだから。

「……………他に、何か届いてた？」

「それだけだけど。で、なあにコレ？　邪魔だから早く片付けてちようたい。あたしゃ手伝わないかんね」

そんなわけで、二階の部屋に段ボール二箱を持っていったわけなんだけど、冗談抜きで大変だった。両方ともとにかく重い。

持ち上げて移動するだけでも大変だというのに、階段を昇るのはもはや拷問だった。段ボールにはポタポタと汗が落ちた跡がついて、少しふやけてしまった。

二人掛かりでもよっぽど辛かったのだろう、本当に母さんは少しも手伝ってはくれなかった。

「たいしたもん入ってなかったらただじゃおかねえぞ……スージマンめ……」

まず間違いないだろう。なにしろ俺のことをカラポン星人なんて呼ぶのは、スージマンしかないのだから。

だからこそ、下の階で母さんの前で開けるのにはどうも抵抗があった。何かとんでもない物を仕込んでるやもしれないと、俺の勘がビリビリ伝えているのだ。

「さて……開けるか。いったい何を送って来たんだあの野郎……」
ガムテープを剥がし、伝票ごとゴミ箱へ放り投げ、いよいよ箱のフタに手を掛ける。

中は真っ白な緩衝材が敷き詰められていて、すぐには何が入っているのか分からなかった。

「めんどくせえ………そんなに大事な物なら直接渡しにくりゃいいだろ、って………?」

——　　なんか、変なのが見えた。緩衝材の隙間から見たのは、普通、段ボールでは絶対に運ばないような物だったのだ。

さらに緩衝材をどけていくと、その“姿”が少しずつ露になっていく。

「……………冗談キツイぜ、スージマンよお」

一階で開けなくて本当によかった——最初に思ったのはまずそれだった。

『イエリー・マナヤ』

スージマンがあの時俺に見せた、人型ロボットの一体が、裸で、しかもご丁寧に体育座りをした格好で梱包されていたのだ。

「こっちの箱は……うげっ、何だこのタンクは……？」

よく、灯油なんかを入れるのに使う、赤いポリタンクがあるだろう？ 段ボールには、あれと同じ物が3つも入っていた。『軽油・可燃物注意』と書かれたラベル付きで……。

「ん……？」

ポリタンクの脇に、A5大くらいの小さな冊子が貼り付けられていた。表紙には小さな印字で、『電気指令式・ディーゼル駆動・電子演算方式・汎用型人造人間Type・E・A・取扱説明書』と書かれていた。

「何これ、押し売り？」

クーリングオフするか？ などと思いつつ、取説とやらを一応開いてみた。

中はほとんど英和辞典みたいな細い文字で書かれていて、時々イメージ図みたいなのが申し訳程度に出てくる程度だった。

かと思いきや、蛍光ペンでマークされていたり、赤文字で（それも汚ない字で）『これ、だいぢ！』なんて書かれていたりして、要所所に注釈がちゃんと分かるように入っていた。スージマンがやってくれたのだろう。

「いや、だから待てっつて。何で俺がこの娘を受けとらにやならんだって、何も聞いとらんぞ俺は！」

裏表紙に、何か書いてあった。

『おそっちゃ、めーだぞ（はあと）』、アホか！

「……コイツは自分がここに來た理由を知ってるんだよな……？」

段ボール箱に入ったままのイエリーを見た。さっきから全く動い

ていないので、おそらく電源スイッチが何かが切られているのだらう。

遠めに見れば、死体を箱詰めにして隠しているようにも見えなくもないので、何だか不気味だった。

（そういえばあの時も裸だったな……あの時スージマン達はたしか……）

覚えてる。なんか起動しないとかなんとか騒いで、アヤミクさんとで人工呼吸と心臓マッサージみたいなことをしていたんだ。かなり強烈な光景だったから、忘れるわけがない。

まさか……と思い、俺はマニュアルを手についた。しかし、俺はほっと思をついた。

「電源投入：背面にある電源ボタンを、2秒以上長押しする………」

それでも起動しない時は口から息を吹き込んで、油を吸ったほこりを飛ばし、メインエンジンを手で動かしてみる、とのことだった。よーするに、人工呼吸と心臓マッサージはこれなわけだ。

「……まずは、やってみるか」

マニュアルによれば、背中にはちょうつがいが開くようになっていた。フタがあつて、その中に電源スイッチやら何やらがあるんだとか。

早速、箱の中で体育座りしているイエリーの背中を調べてみた。

「……あつた、これか。よし——」

ドンドンッ！

「……誰かが来た！？」

「拓二、入るわよー？」

「や、やべ、母さん……！？ ちょっと待って、今片付けるから……！こんな所を見られたら何を言われるか……！」

とにかく彼女だけは隠さないと、と思い、俺はとっさに布団を取って、箱ごと彼女に覆い被せた。

(不自然かな…異様に盛り上がったやつてるし)

とはいえ、母さんを待たせたら余計怪しまれる。俺は自分から部屋のドアを開けた。

「…お待たせ」

「相変わらずきつたない部屋だねえ、ホントに片付けたの？」

うるさいなあ、と言いつつ、身体で部屋に入られないようガードする。すぐにそれを察知したのか、母さんの目が怪しく光った。

「布団干すからどきなさいよ」

「ふ、布団……？！ あ、いや……、まだ寒いから置いといてよ
何てピンポイントなんだ！　もしかして本当はもう気付いてるんじゃないだろうか……？」

「馬鹿言ってんじゃないよ、6月のジメジメした日にどういう感覚してんだい」

「いいから、俺が出しておくて！」

半ば強引に部屋から追い出して、なんとかドアを閉めることができた。かなり怪しまれただろうけど……

「……あんま怪しまれる前に、さっさと起動させて事情を聞こう
布団を剥ぐと、再び裸の少女の姿が現われる。布団の重みでか、首が少しうなだれるように垂れていた。

「それじゃ今度こそ、スイッチを……ん？」

ドガン！

有無を言わせないような強烈な音と共に、俺の部屋のドアは全開に開かれていた。ま、まさか……。

「拓にいー、ハサミ貸して〜」

「わっ、馬鹿！　今入って来んな！」

忘れていた……母さんよりもよっぽど危険な存在がいたことを
！！

突然部屋に入ってきたのは、俺の5つ下の妹、『桂^{けい}』だった。

「えー？　いいじゃん、ちょっと借りるだけなんだから。…何、何

やってんの？ クサイよこの部屋、イカ臭くない？」

「お前の鼻がもげてんだろっ！」

通せんぼする俺の腕をくぐろうとしたり、足の間を抜けようとちよこまか動き回りやがる。このしつこさは、母さんよりよっぽどタチが悪い。

「わかった、わかったから！ 俺が持つてきてやるから、お前そこで待ってる。いいな！」

はい、と、意外にもあっさりと桂は引き下がり、ぱたん、とドアを閉めた。…………… こういう時は怪しい、少し待ってからいきなり入ってくるかもしれない。

「そうだ、これを…………… よっ！」

俺はポリタンクの入った段ボールを扉の前に持つてきて、ドアが開かないように引っ付けて置いた。これなら桂の力じゃ、さすがに開けられないだろう。

「しかし問題はこつちだ……………」

部屋の中央に、体育座りをした少女が梱包された段ボールが鎮座。誰がどう見たって異常なわけだが、ことさらにうちの母妹おやこが見たら、どんな尾ひれはひれがついてご近所様に伝わるかわからない。

…ここは、やはり隠すしかないだろう。

「机の下…………… いや、無理だろ、見える見える…………… くそっ、何で俺の部屋には押入れが無いんだよ、ちきしょう……………」

迷っている暇はどうもあまり無いらしい。桂の奴がドンドンドン！とドアを叩いているらしく、『あけるー』というわめき声まであげているらしかった。そんなにハサミが必要ななら、下行って母さんから借りりやいいのに……………。

「お兄ちゃん早く開けてえー、漏れちゃうよおー！」

「また人聞きの悪いデタラメをしゃーしゃーと…………… お…ちようど入るかも？」

制服とかが掛かっている洋服掛けは、ちようど段ボールが1つ入るぐらいの広さがあった。上から掛かっている洋服がちようど目隠

しになるし、うまく服を寄せれば入りそうだ。

段ボールごと持ち上げるのはもういいかげん勘弁してほしかったので、洋服掛けに大きめの座布団を敷いて、そこにイエリーを抱え上げて座らせることにした。…いわゆる、お姫様抱っこというのに初めて挑戦した瞬間だった。

（やわらかい……本当に、本当の人間みたいだ）

なんだかそう思うと申し訳なくなってきた、ベッドにあつた掛け布団を持ってきてイエリーにかけることにした。少し服が膨らんでいるようにも見えな^{ロボットだけ}いが、まさかこの中に人が隠れてるなんて思わないだろう。俺洋服掛けの所のカーテンを閉めて、最後の隠蔽工作を終えた。

「鬼いゝ！ お兄ちゃんはそのら辺の草むらでだってできるでしょー！ 早く開けてよー！！」

「俺の部屋はトイレじゃねえだろ！ …ほらよ、ハサミだ」

ドアを開けるや、桂は猫みたいな俊敏な動きで俺の部屋に侵入し、真っ先に中央の空っぽの段ボール箱を覗き込んだ。かと思ったら、すぐさま振り返って、俺の手からハサミをひったくると、礼も言わずにドタドタと階段を下りていった。

「お母さんごめんー、やつぱり拓にい隠しちゃったみたいー」

「ぶっ！！？」

お、恐ろしい小娘め…！ てか母さんもさあ、…はあ…………。

「…コイントス社に電話してみるか。スージマンの名前を出せば繋げてくれるだろ」

「スージイ様、外線1番でお電話です」

「はい！ もしもしー、どーせカラポン星人でしょー？ そろそろ掛かってくるんじゃないかなーって思ってたんだよねー。イヒヒ、もう押し倒しちゃった？」

んなことするか！ という唐林様の大きな声が、私にまでハッキリと聞こえました。部屋中のガラスが、ギシギシと音を立てたようにも思えたぐらいです。

「いやはは、やっぱしー、驚いたかなカナ？ …… ああんもう、そんなにおこないでよー。うん、うん。 …… うん、まー、つまりね？ 目には目を、ロボット調査にはロボットを、とゆーことでね、送ってみた。うん、クール快速便で。服はそっちで用意してあげてね、男の子の服でも文句言わないと思うから、イエリーは。軽油が足りなくなったら言ってね、送ったげる：こ」

会話の内容から察するに、唐林様のご自宅にイエリーが到着したのでしょうか。それにしても…… 唐林様とイエリーには同情致します。

（やはり、イエリーにはまだ荷が重かったのでは…？）

と、突然スージイ様は叩きつけるようにして受話器を切ってしまいました。それも、表情はとてにこやかに…。

「アヤビー！ 電話線引っこ抜いという！ カラポン星人がきつとイタズラ電話しかけてくるから！ ほら、早く早くう！」

「は、はあ…？」

イタズラ…電話ですか？ 私がそう聞き返すよりも早く、スージイ様はデスクから降りて、正面の展望ガラスへと駆けて行きました。「うふひひひ…楽しみだなあ、どんな風になっちゃうんだろ！」

決めた！ アヤビー、見に行くよ！ イエリーの新生活を応援しに行かなくっちゃー！」

「応援…本当ですか？ なんだかスージイ様、とても楽しそうにしていらっしやいます」

えへっ、ばれちゃった？ なんて、おっしゃられて、スージイ様は自分の頭をペシリと叩いていました。

「だってコイントスのロボットが、初めて社外で人間と生活を始めるんだよ！ 歴史モノ、教科書モノ、伝説モノ！ 決定的瞬間に立会いにいかなくっちゃ！ サゲマンにバスをお願いしといてね！」

タツタカタツタ・ター　なりズムに乗って、ご機嫌なスージイ様は飛行機のポーズで社長室を飛び出して行ってしまう。こうなっては……わたくしも従うほかありませんね。

「では早速、サーゲス様にご連絡を……あら、なんにも音がしない……？」

見ると、電話器の下でコードがプラプラ……そういえばさつき、電話線を抜いたばかりでした。プラグを差し込んだ瞬間、待っていたかのように大きな着信音が……

「くすつ、しくじり損のくたびれ儲け、ですね。……はい、こちら社長室アヤミクです……あら、唐林様——」

『あら、唐林様』

電話に出たのはまたしてもアヤミクさんだった。一度切れてしまうと、もう一度受付を通さないといけないらしく、社長室に繋がるまでの時間がわずらわしくてしょうがなかった。

「あの、スージマン……スージイは？」

『先ほど社長室を出て行かれました。申し訳ありませんが、しばらくは戻らないかと思えます。』

伝言をお預かりいたしましょうか』

伝言つたつて……文句しか無いしな。でもせっかくだし、イエリーのことを聞いてみるのもいいだろうと思った。

「あの……イエリーマナヤのこと、知ってますよね？」

俺、ほんと、どうしたらいいかわかんないんですよ。マニュアルだつて分厚くて、どこ読めばいいかもわかんないし」

『イエリーは起動したんですか？』

いいえ、と答えると、アヤミクさんは『やっぱり』とため息をついた。

『あの子はただでさえ起動時間が長くて、しかも起動不良を起こし

やすいんです。お恥ずかしい話ですが、唐林様にはご迷惑をお掛けすることになると思います』

「はぁ……………それでその、俺は…」

『唐林様。イエリーには必要な情報を全て持たせてあります。イエリーが起動したら、段ボール箱の中にディスクケースがありますから、それを渡してあげてください。あとのことは、イエリーが説明してくれます。』

あ、でも待つてください。もしかしたら、またいつもの…?』

そこまで言って、アヤミクさんは黙ってしまった。受話器の向こうから、かすかにカリカリという音が聞こえたような気がした。

「アヤミクさん? …アヤミクさん、」「ちよいと」

肩を叩いてきたのは、母さんだった。

「いつまで話し込んでんだい。ちよつと使っただからどきなさい、携帯あんでしょ」

「ち……………わかったよ。アヤミクさん、また後で掛け直しますね。」

……………アヤミクさん? あーやみーくさーん?」

どうしちゃったんだろう、急に返事もなくなっちゃったけど…。母さんが後から突っついてきたりするので、仕方なく俺は、アヤミクさんの返事を待たずに受話器を切ることにした。

「ほら、どいたどいた!」

「押すな、押すなっ!」

「ったく…どうせ俺がどいたところで、今度は母さんが長話するだけだろうに……………なーんてことが言えたなら、俺はもう少しこの家での地位を保てたんだろうけれど。」

……………はい、無理でした。とぼとぼ二階へ向かいます、俺……………そつだよ林檎にだってそんなこと言えないもん、俺……………ん?

「なんだ、一階にいたんじゃないかったのか?」

「…!」

階段を上ろうとしたところで、さっき一階に下りたはずの桂と鉢合わせた。俺に気付くや、ビクッと体を震わせて、両手で自分の身

を守るようにして後ずさっていた。

「おい、何か言えよ。それかそこどけて」

「……………人殺し」

…え？ 次の瞬間、体が凍りついたかのように、血の気がサーッと引いていくのを感じ、言葉も発せられなかった。

「拓にいのバカ！ 鬼畜！ クズ！ 林檎お姉ちゃんに言いつけてやる！！！！！」

ドンツ！ ドタドタドタ……………。

…最初の音は、俺が階段の壁に突き飛ばされる音で、桂は一目散に走り去っていった。俺はというと……………心臓がだんだん早くなるのを感じながらも、頭の中が真っ白に、それこそカラッポ・カラッポになっていくのを感じていた。

「……………見た、のか……………？」

桂のやつ、さては俺が電話してる隙に……………でも何で人殺しなんだ？ だってイエリーはロボットなんだし、まだ起動だって……………、あつ、

（息もしてねえし、脈もあるわけねえ…！ しかもあいつ、最後に何て言ってた……………？）

『拓にいのバカ！ 鬼畜！ クズ！ 林檎お姉ちゃんに言いつけてやる！！！！！！』

「やめれ……………！！！！！！！！！！？」

「おほほほー！ じゃあ本当は回覧板じゃなくて庄治君のバインダーを……………」

「おかーさん！ 早くどいてっ、警察呼ばないとー！！」

幸か不幸か、桂は電話の所で母さんの服を振り回しているところだった。警察なんて呼ばれたらたまんねえ、どう説明したって信じとくれやしねえぞきつと！

「んもー、しょうがないわね。あ、すみません。うちの娘が電話を使いたみたいなんで……ではまた今度……はいお待たせ、桂、外で何かあったの？」

「中、中ッ！　うちん中！！　殺人、人殺し！　拓にいの部屋、女の人の死体、あった！！！」

「桂ッ、早とちりすんな！！　あいつは死体なんかじゃないって！！」

桂は俺の声を聞くと、ビクッと身体を震わせ、母さんの後ろに隠れるように逃げ込んでいた。

母さんもタダごとじゃないと思ったんだろう。桂から遠ざけるように、俺の腕を強い力で引つ張ってきた。

「……拓二。何をしでかしたのか知らないけど、嘔吐したら膝蹴り50回だかね！」

「だから違うんだって！　俺は嘘なんか一つも吐いてないんだってば！？」

しかし母さんは、どちらかと言うと桂の言うことを信じているらしく、俺を掴む手は緩まなかった。その後ろで、桂が受話器を取っているのが見えた。

「あつ！　もしもし、警察ですか！？」

「だあーッッ！！？　やめるバカッ、母さんも早く止めてー！！」

「往生際が悪いんだよ！　さっさと白状をしー！！」

どう説明したらいい？　どう説明したら2人に納得してもらって、騒ぎにならずに済む？

……無理だ。この家はこうなったらもう、とことん目茶苦茶になる。全部、そのまんま伝えるしかないだろう。

（警察が来たら、全部スージマンに押し付けてやる……）

「マスター・カラポン」

……え？

その声に、誰もが振り返っていた。何故なら、誰も、その声に聞き覚えが無かったのだから。

……いや、違う。俺は、聞いたことがあった。だけど、思い出せなかったのだ。

「き、君は……」

だって、一度しか聞いたことが無かったのだから。

「イエリー・マナヤ、セツトアップ・コンプリーテッド」

一系まとわぬ姿のイエリー・マナヤが、そこに立っていた。限りなく人間の姿形をした彼女、しかし、腕先、腹部、ひざなどに刻まれたその『黒い筋』が、彼女が人間ではないことを物語っていた。

「拓二」

「……はい」

母さんは、ようやく強く掴んでいた袖を離してくれた。何を言われるのだろうと、目を閉じて頭を巡らせ、齒を食いしばっていると唐突に後ろから俺は背中を突き飛ばされた。慌てて目を開けてふんばると、すぐ目の前ではイエリーが、さっきと同じ格好のままで立っていた。

後ずさる背中の方で、怒ってるとも、笑っているとも捉えられるような声で、母さんがデカい声を出しているのが聞こえた。

「すまん、ごめつくり」

「ちがわいつ……!」

- 4 - 『イエリー・マナヤ 前編』 END

つづく…

4 『イエリー・マナヤ』前編（後書き）

旧前編と旧中編を統合して、前編に統一しました。 8 / 12

4 『イエリー・マナヤ』中編（前書き）

8 / 12 再編し、旧後編の前半部分を中編としました

4『イエリー・マナヤ』中編』

- 4 - 『イエリー・マナヤ』中編』

—— 貝梨市、引弧モール・アーケード入口

「……つたく。雪のやつ、どこほつつき歩いてんだろ？」

一緒に買い物に行こうと言い出したのは小雪の方だった。待ち合わせ場所も時間も、珍しく小雪が積極的に指定してきたのだったけど……もう約束の時間から、二十分は経ってる。

電話は返事なし、メールは十分くらい前に『もうすぐ着くから！ごめん！（＜＞）』の一回だけ。段々イライラしてきて、無意識に腕を組んだり、カタカタと足を踏み鳴らしていたらしかった。上着がしわだらけになって、ようやく気が付いた。

その時、キ、キューツという甲高い音がして、真新しいプラットホームとは不釣り合いの古臭い電車が滑り込んできた。プシューッとドアが開いたかと思うと、後の方の車両から見覚えのあるお下げ髪が、まだ開ききっていないドアに頭をぶつけて、慌しく駆け下りてきた。小雪だ……。

「お嬢ちゃん、切符！」

「へっ？ あ、あわわわ、ごごご、ごめんなさい！」

運転士に呼び止められた小雪は、ポケットから財布を出した途端、するりとそれが手から滑り落ちて、ホームに小銭をばらまいてしまったらしかった。ここからじゃよく見えないけれど、チャリン、チャリンという音がここまで聞こえた。

「あのバカ……」

私がホームまでやってきた頃には、ちょうど小銭を拾い終えた直後だったらしく、何べんも何べんも小雪は運転士に頭を下げていた。

私がすぐ隣まで来ても、小雪は全然気付いてないらしく、財布に左手の小銭をしまい始めた。

「雪下がりな、危ない」

「ひゃうああ!？ …… な、なんだ、ぼたんちゃんか、おどかさないでよ」

おどかさないでよ、なんてよく言えたもんね！ さんざん人を待たせておいてっ。

「あ、そう。じゃ、電車にぶつかってもいいんだ」

「えっ？ わっ、わっ!？」

シュワアーン、という空気の抜ける音がして、ゴゴゴゴ…うお〜ん …… と、電車は小雪の“目の前”を勢いよく発車していった。もちろんぶつかったりなんてしなかったのだけど、小雪はふらふらと駅の掲示板にもたれかかって、俯いてしまった。

「もうやだ …… 」

「雪のドジは今に始まったことじゃないでしょ」

ちよっとぐらいフローしてよあ、と、弱弱しく下を向いたまま言った。この様子だと、ここに来る前にも口クナことがなかったんだと思う。いつものことだけど。

「電車使うほどでもなかったんじゃない？ 雪んちからだったら自転車でも来れたろうし」

「うゝ、今日はバスで来てたの。帰り荷物いっぱいになると思ってたんだけど …… そしたら、渋滞に引っかけちゃって」

なるほど。小雪のことだ、バスの中だったから電話にずっと出なかったのだろう。そういうのをいちいち気にする子だったのはわかっているけど …… ちよっとぐらい、いいじゃないの。

「 …… ぼたんちゃんごめん、遅れて。怒ってる…? 」

「別に、いつものことだし。さ、行こっ。遅れた分も楽しまないと」
壁に寄りかかったままの小雪の両手を取って、私は強引に彼女を引っ張った。小雪はバランスを崩しながらも、うゝあゝ言いながら、だんだん楽しそうな顔になってきていた。

「ぜったいぶにちゃん怒ってるぅ」

「その名前で呼ぶなあっ！」

「……………なんで俺がこんなことせにゃ」

シャツのボタンを下から留めながら、俺はぶつぶつとそんなことを呟いていた。

母さんと桂にイエリーが見つかってしまい、もうどう説明したらいいのかもわからなかった。ただ一つ、確実に俺はやっておく必要があることがあった。

それは、彼女を着替えさせる（もとい、服を着させる）ことだった。とりあえず、今は、そういう名目で二人から彼女を切り離していた。

「しかし……………ったく、」

どういうわけか、彼女は着替えを渡しても、ほとんど何の反応も示さなかった。まるでそんな物は初めて見る、とても言いたげに無表情な瞳を動かして、着替えと、俺の顔とを何度か見比べていたのだ。

その間ずっと目を逸らしていたのだが、やっとのことで衣擦れの音が聞こえたと思い安心したのも束の間。『マスター・カラポン』という呼び声に振り返ると、彼女はとんでもない格好をして立っていて、俺をひどく驚かせてくれた。

シャツをズボンのように穿き、袖から無理やり両足を出して、肩には腕から通したであろう、トランクスがタスキのように引っ掛けられ、反対の手にはどこにも着るところがなくなってしまったGパンとTシャツが握られていた。まるで、『これはいりません』と言っているかのような風に！

（普段服を着ていないのかこいつ……………そっぴやあっちでも、裸だったり、布きれみたいな服しか着てなかったもんな……………）

「……………」

何より困ったのは、彼女が喋らないことだった。俺が、キツイか？　とか、こんなんで悪いな、とか言っても、彼女は表情すら変えず、反応を示さない。何をしても文句を言われないから、着替えさせるのは楽だった。が、どうも気持ちが落ち着かなかった。じつとしてろ、なんて俺が言ったせいなんだろうか？

「……………ふう、終わった…」

「……………」

終わった、という言葉に反応したのか、イエリーはようやく自分から身体を動かして、自分の身なりを確かめ始めた。身体をひねって背中を覗いたり、シャツを持ち上げて柄を見たり、襟を持ち上げて自分の胸元を覗きこんだり……………。

「…ごめんよ、こんな服しなくなつて」

「ちよーっ！　なんで拓にいの服なんか着せてんのよーっ！？」

ドアから桂が、首だけを伸ばして覗きこんでいた。まるでろくろ首だ。

「な、なんだよ。これしか無いんだからしょうがないだろう？」

「そうじゃなくなつて！　その……………この人が元々着てた服があるでしょう！　ブラは！？」

何をそんなに苛立っているのか……………桂は不躰にもイエリーの服をめくつて頭を突っ込み、この世の終わりを見たかのような顔をして、「ノーブラ！！？」と叫んだ。

「まさかパンツも！？」

強引にお腹とズボンを押さえ、ズボンの隙間から股を覗き込むその行為はただの変態その物だ。挙句、強烈な吐き気を催したように、「おええええ」とわざとらしく不快感をあらわにしていた。

「拓にいのバカ！　不潔！　バイキンマン！！」

「んだとおっ…バイキンマンは悪くねえよ！」

もはやヤケクソだった。そして事を中心であるイエリーはと言うと、あれだけ桂にイタズラされても、シワ一つ立てず、さっきと同

じ顔をして桂の背中を見ていた。……………少し、怒ったのかな？

「マスターカラポン」

「…は、はい！」

ぜ、絶妙なタイミングで声を掛けてくるな、さつきから……………？
桂も驚いて、ビクツと体を震わせていた。

「記憶領域にはロックが掛かっています。これ以上のデータを保存するには、システムディスクによるロック解除が必要です。ディスクを」

「ディスク……………？」

そんな物、段ボールに入ってただろうか？ 早速段ボールを調べてみたが、それらしい物は見つからない。軽油タンクが入ってる方には……………まず無いだろう。折れちゃいそうだし。

「……………ねね、拓にい。マスターカラポンって何？」

「…後で説明する、今はそれより……………ディスク、見当たらないんだけど」

しかし、イエリーは何も反応を示さなかった。『私はもう言うこととは言いました、早くディスクをください』と、無表情な顔がそう言っているような風に見えて、なんとなく腹が立った。

「拓にい、それには？」

桂は机に放られた、月刊雑誌並みの厚さがあるイエリーのマニュアルを指さしていた。巻末付録でも付いてたとすれば……………どうだろう。

「どれどれ……………あっ」

その答えは、持ち上げてみてすぐにわかった。裏表紙が紙の質感よりも、少し硬くなっていて、開いてみるとやはり、ビニールの袋に入れられたディスクが貼り付けられていたのだ。……………なんだけど、

「…あつたけど、これって……………ディスクだけ……………」

そう。ディスクという言葉のイメージから、CDかDVDのような円盤状の物が入っているのだろうと思っていたのだが……………これはどう見ても、四角くて、黒い。たぶん、大きさは三・五インチで

間違いないと思う。

「なにその黒いの？」

「これだから今時娘は…フロッピーも知らんのかえ、ほーほー、嫌じゃのー歳を取るのは」

ラベルには事務的な印字で『システムディスク＋補助ディスク』と、日本語で書かれていた。注意書きで、『紛失時に備え、バックアップディスクを作ってください』と丁寧にも書いてあった。

なんだからー、と思ってディスクを裏返したり、シャッターを動かしたりして眺めていると、ずっと、ディスクに手が伸びてきた。イエリーだった。

「ディスクを」

「お、おう……」

表情に出ない分行動が積極的なのかな…？ 半分脅し取られるような形で、俺はイエリーに“フロッピー”ディスクを渡した。

（でもどうやってディスクと接続するんだ？ やっぱ、お腹とかに差込口とか隠れてんだろうか…）

桂も何をするのだろうと、興味津々な様子でイエリーを見ている。イエリーはそんな視線を全く気にする様子もなく、シャッターがちゃんと開くことを確認すると、おもむろに口へ………って、えええ？！

「ちょ、ちょちよつとー！！？ それ、食いもんじゃ…！？」

まるでおせんべいをお行儀よく食べているように、イエリーは、両手でフロッピーディスクを持って、シャッター部分をかじり始めたのだ。しかしどうだろう。耳を澄ますと………

……… ツー、ツツツー。 …… ツツツツツー。

……… どこからか、少し懐かしさを感じさせるような、あの独特のフロッピーの読み込み音が聞こえてきた。イエリーの顔を良く見ると、フロッピーのシャッターをくわえ込んだ口元は、時々もごも

ごと動き、両目はワープロに打った文字を追っているかのように、左から右へ行ったり来たりせわしなく動いていた。

「まさか、本当にデータを読み込んでるのか……？」

「何………なんなの？ このお姉ちゃん、何でそんな物食べちゃってるの？ あ、わかった。ホントはそれ、チョコなんでしょ、ブラツクチョコ………ふぐががが！」

口を開けたタイミングを見計らって、俺は後ろ向きのまま四本の指を桂の口に突っ込んだ。何かと口うるさい奴だったから、昔っからこうやって黙らせてきたのだ。もちろん、ちよっと………結構、痛いけど。

「拓にい………一本鼻に入ってる」

「うわっ、ばつちい」

ばつちいって何よー！ ……結局桂を怒らせてまた騒がしくしてしまった。さりげなくティッシュで左手を拭いたりしていたら、いつの間にか、既にイエリーはフロツピーディスクから口を離していた。「ロックの解除が完了しました。」

「そ、そうか………」

なんだかどんだん勝手に話が進んでるような………もしかして俺、主人公じゃない？

「…マスターすじまんより、伝言を預かっています。『イエリーには蒼ちゃんの秘密を探る手助けをしてくれるように命令しておいたから。燃料は軽油。毎週月曜日の朝に届けるように手配したけど、足りなくなったら言ってね。あと何か足りない物があったら、それはそっちで何とかして』」

スージマンからのメッセージとやらを、イエリーは終始無表情のまま、しかし文章はおそらく忠実に読み上げてくれた。………さっき電話で言っただこととほとんど同じだな。

「『あと、おそっちゃんめーだぞ』。一文字文字化け、『（はあと）』」

「……………速攻でデリートしといてくれ。メモリーの無駄だ」

頭が痛い……。ツツー、という音がして、『メッセージを削除しますか?』と聴いてきたので、「はい」と答えておいた。ツツー、ツツー、という音が聞こえた。

「結局……スージマンの言う通りに、俺も動かないといけないのか……」

椅子に座り込んだ俺は、両手を頭の後に回して、天井を仰いだ。真っ白な天井に、昨日のコイントス社でのやりとりが映し出されるように思い起こされてきて、なんだか溜息が出た。

スージイ長万部、サーゲス長万部、アヤミク・B、エルグナ・ラクサ、そしてイエリー・マナヤ……。あいつらが知れたがつていたことはただ一つ。――『蒼井林檎はロボットか、否か』。

（あいつらはいったい……）

「……何者なんですか、あなた」

ふと目を下ろすと、桂がイエリーに直接話しかけていた。俺のこゝとをじっと見ていたイエリーは、身長の高い桂を、目だけを動かして見下していた。

「……」

目がまた俺の方に向いた。……答えてもいいか、許可でも求めているだろうか？

「……いいよ教えて。俺の妹の、桂だ」

「……私は、電気指令式・デューゼル駆動・電子演算方式・汎用型人造人間Type・E・A。コードネーム『イエリー・マナヤ』」「デューゼル……人間???」

疑問符だらけになつてゐる我が妹は、助けを求めるように俺とイエリーを交互に見比べる。……頭の悪いこいつにや、この説明だけで理解できるわけがないよな。

「ロボットのイエリーさんだ。ちゃんと挨拶しろよ、桂」

ああ、そっかロボットか、と激しく頷いた後、「はあああ!?!」と、奇怪な驚きのポーズを披露した桂。ほんと、忙しい奴だ。

「んふう、おいしい。パイ生地もサクサクしてて超おいしい！」

「……もう、そんなに食べたたら太っちゃうよー？ 一個ぐらいちょうだいよう」

ダーメと言って、迫ってきた小雪の手を妨げるぼたん。そして自分は、また一つプチシュークリームを口の中に放り込んだ。遅刻したお詫びとして、小雪がぼたんに買った物だった。

「これはお詫びの品なんだから、あたしが食べなきゃ意味が無いでしょ！ それにこーゆーのは別腹って、女子の常識でしょっ」

しかしなぜか、小雪は口を押さえて笑っていた。

「今のダジャレ？ “じよし”の“じょーしき”って……ぷぷ」

「は……わ、笑うなっ、ちがーう！！ あげない！ 絶対雪にはあげないもんね！！」

アーケードのど真ん中で、食べ歩きをしている少女達に自然と視線が集まっている。土曜日の引弧モールは、今日も盛況だった。

「おおよその説明は、たぶんいらない。何か聴いても理解できそうにないし、こっ、なんつーの？ 設定集とかその内まとめて出してくれるんでしょ？」

何のことを言ってるんだ……と思いつつも、状況の飲み込みが早い母に心から感謝していた。愚妹のなんと説明の面倒くさかったことか。

「まあ……そう言ってもらえると助かる。とりあえず知っておいてもらいたいのは……彼女、名前はイエリー・マナヤ。ディーゼルロボットで、燃料は軽油」

「デイズルだもんねえ」

ポットから急須にお湯を入れた母さんは、四人分の湯のみを用意していたのだが、その内の綺麗な一個を引っ込めて、三人分のお茶を配膳した。椅子に丁寧に座ったイエリーも、特に反応を示さなかった。

「ふー。で、拓二はこの子とどうするの？　うちに来たってことは、何かやることがあって来たんでしょけど。子作り？」

「ちがわいつ！！！」

「いやわかんないよお母さん、だってさっき裸で下に降りてきてたし……」

せんべいの袋を開けて、バリバリと齧り始める我が母上。相手がロボットと分かってから、何か無遠慮すぎるような気もするが……「共存調査を依頼したいのです」

「え？」

「は？」

「……ん？」

三人が三種類の反応を示す中、イエリーは0種類の表情を崩さぬまま、唐突にそう切り出した。

「我が社では私のような、人型ロボットの開発が研究されています。しかしながら、未だにその完成には至っておらず、機能面において不十分な点が指摘されています。」

そこで、マスター・カラポンには共存調査の依頼をしました。私に不足している人間的機能を検出し、データを我が社へと送らせていただきます」

「マスターカラポンって………ダサッ」

（俺だつて嫌だよ………ていうか）

そういう話だったのか？　さっきまで俺にしてくれていた説明とは一変し、蒼井林檎の“あ”の字も無くなってしまってる。

「はんはん、なるほど。つまりうちに住み込みたいってわけね。いいんでない？　ロボットなんだし、色々手伝ってくれるんでしょう」

しね？ ラッキーもうつけっ、うちのロボット達はまーたく手伝ってくれやしないもんねえ」

「…私は時々手伝ってるもん！」

「いちいちうるせえなあ……母さん、本当にいいの？　なんか、あつさりすぎて拍子抜けするんだけど……」

バリリンとせんべいを食いきると、母さんはお茶をすすって大きく息をついた。

「イエリーちゃんって言ったね。ロボットならとことん使わせてもらうよ？　その辺の覚悟はOK？」

「はい。私は人と共存するために造られて来ました。私にできることならば何なりとお申し付けください」

即答。何の躊躇いもなく、イエリーはそう言い切った。

「ですが、マスターカラポンの承諾を。私はマスターカラポンに所属する身である以上、私の使用方法を決めるのは、私ではなく、マスターカラポンです。私は、マスターの命令に従います。」

ほお、と感嘆の声を上げた母さんは、次に俺を“睨みつけた”。

なぜか口元が笑っていやがる。

「“調教が進んでる”ねえ、命令に従いますってか。聞くまでもないね、いいってさ、あんたのマスターは」

「はああ！！？　俺何も言ってねえだろ！？」

「そんじゃあ、」

ダメなのかい？　と、すかさず聞き返されて、俺は言葉に詰まってしまう。唐突に色々なことがありすぎたおかげで混乱していたが、結論としてたどり着くのは、『イエリーがうちに住もうとしていて、母さんの手伝いとかをやるうとしている』、ただそれだけだ。母さんは許可してる。じゃあ俺は？

（けして嫌じゃないけど…）

イエリーを見た。イエリーも俺を見ている。

目の奥に生氣こそ宿っていなかったが、その顔はやっぱり、人間だった。『早く返事をください』と催促しているように見えたのだ。

なぜだか、自然と口元が緩んでいた。

「……………わかったよ。また段ボールに詰め直して送り返すのも、可哀想だしな」

「おやまあ、あの中に入ってたんかい。どうりで重かったわけだね、ぬあっはっはっは！！」

「…知ってたな。なーにが『おやまあ』だよ、わざとらしい！

「では、私に命令を。マスターカラポン」

「ああ……………えと、どうすりゃいいんだ？ 単に言葉で言えばいいだけなのか？ ……そんじゃ、うん」

天井を見上げる。何て命令しよう、深く考えないで、思った通り言えばいいのかな。女の子に面と向かって“命令する”なんて、何だか小っ恥ずかしい。長めのまばたきを終えて、俺は口を開く。

「イエリー・マナヤ。君はこの家で、俺達と共に生活していくこと。俺からの命令だけでなく、母さんや、妹の桂の命令もよく聞くんだ。…うん、こんな感じかな……………って、」

ツツツ、という音がして、どこから取り出したのか、イエリーは真っ黒のフロッピーディスクをかじっていた。ハムスターが食事をするみたいに、丁寧に両手で持って、『カリカリカリ』、と。

「ま、またやってる…?!」

「…あのー、イエリーさん？」

「……………ツツツ……………」

食事中(?)の目が、一度こちらに動いた後、またフロッピーへと視線が落ちる。よく見ると、フロッピーを持つ白く細長い指が、時々意図して動かしているように見えた。オカリナでも吹いてるみたいだ。

「……………只今の命令内容を、“内臓”メモリと外部メモリに保存しました。命令は受諾され、只今から実行されます」

「よっ、おめでとさん！ じゃあ早速洗い物をお願いしちゃおっかな。あ、いや待てよ…………イエリーちゃん、ちょっと立ってごらん？

……………はあゝん、そこでくるつと後向いて。ははん、桂が嘆くわ

けだねえ、こりゃいくらなんでも可哀相だ」

イエリーは言われるまま、腕を開いたり、服を広げたりしている。
「お人形さんか何かと勘違いしてるんじゃないだろうか。

「でしょでしょ！ ロボットとはいえ女の子なんだからさー。しかもあん中トランクスだよ！ 信じられないっしょー！」

はっはっはっは！！…よっぽどツボにはまったのか、母さんは机をバシバシ叩き、腹を抱えて爆笑していた。そんなに俺の服のセンスが悪いつてのかよ…。

「仕方ないだろ、裸で送られてきたんだから…選んでる余裕なんかなかったんだよ」

「そんじゃあ、じっくり時間をかけていい服を選んできてあげなさいな。桂、あんたも行つといで、ほら！」

ぎよつ。

…こんな言葉を、日常会話で使う機会が訪れるなんて、誰が思っただろうか？ …いや、非日常なのか、既に…？

「ど、どうしたのお母さんこれ…？」

「ぬふふー、実は宅配のおじさんになが、段ボールと一緒にたくさん渡していつてくれたんだよねー。『くれぐれもよろしくお願いします』、なーんて言われちゃってさー。さ、イエリーちゃんの服を買ってきてあげなさい！ あ、お釣りは返すのよ！」

そして母さんはニコニコした顔で、決して食卓の上には似つかわしくない“ソレ”から、数枚の一万円札を取り出して俺に手渡した。厚さ約1cm、綺麗な茶色い長方形をした、パリッパリの『札束』から…。

――引弧モール内、洋服チェーン『グランシャリオ』。

「うーん……………こういうのって私なんかが着ても……………あー、値段が無理…」

「ははっ、何ソレ。小学生じゃないんだからさー、やめなよそんなの」

「ザザ、と振り返ると、ぼたんが苦笑いを隠しきれない顔をして腰に手を当てていた。小雪は頬を膨らませて、品定めしていた水着を握り締めていた。

「嘘ばっかし。大人っぽいを選んでら選んだで、似合わないって笑うくせに！」

「だからってさー……………くくく、ぶ、いつそ、さ、スクール水着がいいんじゃない？ 雪って小学校の頃の奴だってまだ着れるんじゃないの？」

「着れるわけないじゃん！ と、小雪は大声を出してしまったことを後悔した。洋服を選んでいたカップルが振り返って、小雪と持っている水着とを見比べてクスクスと笑っていた。

「……………もういい」

「わー、わかった、わかったって！ 雪が似合う水着私も選んだげるから！ 今年の夏は気合入ってんでしょ。カラポン先輩が振り向いちゃうような大胆な奴探したげるって」

ハンガーを元に戻そうとしていた小雪が、びくん！ と動揺したのを、ぼたんは見逃さなかった。…いや、見逃してても、ハンガーを落とした音で気付いていたかもしれない。

「……………いつから気付いてたの？」

後を向いたまま、小雪は小さく呟くように言った。ぼたんはハンガーを一つ一つチェックしていて、小雪の方を見ないようにしていた。

「バレバレだし。撮影補助とか、ミキシングとか、配線とかやり始めた時点で。アナウンスがやりたかったんじゃないかってっけ、雪は？」

「……………そつか。」

落とした水着のほこりを払って、ハンガー掛けに戻す小雪。まだぼたんの顔を見ることはできなかった。

「まー、いいんじゃないの？ 好きになるのは自由だし、勝手だし、法律で禁止されてないし。私は雪の補助をするだけであって、後押しはしないし。雪がしたいようにすればいいだけのことじゃない？ それとも、」

一組の水着を取ると、ぼたんは小雪の背中にその水着を押し当てた。ボトムが少し小さそうだった。

「こっついうのも、やめよつか？」

ようやく振り返った小雪は、ぼたんが持ってきた水着と、ぼたんの顔とを交互に見て、少し考えた後に、それを受け取った。

「…試着してくるね！」

たったか小動物のように駆けて行く小雪の背中を見送って、ぼたんは苦笑いして溜息をついた。

「マジなんだ…ていうか、わかってんのかな雪……………カラポン先輩よりも、林檎先輩の方をどうにかしないといけないでしょうに……………ん？」

試着室の向こうに、ぼたんは見覚えのある顔を見た気がした。しかし、その人はすぐにどこかへ行ってしまったらしく、すぐにその姿は見えなくなってしまった。

「まさか…でも、まずいけど……………平気だよね…？」

——路線バス車内

「ありえない。ありえなすぎる！」

「…でけえ声出すなよ」

北貝梨駅へ向かうバスの中で、桂はまだ興奮覚めやらぬ様子で、ブツブツ独り言を言っていた。

「だって、見たでしょう?! 何でお母さんがあんな……っ、…

…… 札束なんか持ってるのよ。ありえないでしょ、絶対ッ」

「まあ……な」

札束、という単語に抵抗があつたのか、急にコソコソ声になる桂。俺は努めて冷静を装って答えを考えるが、たいした物は浮かばず、その内桂の方が勝手に喋り出していた。

「ていうかさ、イエリー……って、呼び捨てでいいよね、ロボットなんだし? イエリーってさ、本当に、ほんつつつとくに、人間じゃないの?」

そりゃー、さっきフロツピーをかじってる所は見たけど、それだけじゃない? なんかイマイチ実感が湧かないって言うか、ロボっぽくないって言うかさー」

そんなロボっぽいところが剥き出しになってたら、こんな堂々とバスの最後部座席に陣取ってるわけがないだろう。桂を挟んで窓側に座っていたイエリーは、窓に向けていた顔を振り向かせ、

「ロボっぽい所?」

と、聞いてきた。

「たとえば……ミサイルとかレーザーとかの武器とか! それか、空飛ぶための羽とかエンジンとか。そういうの、全然無いじゃない」

「ははは……ミサイルに翼ねえ……」

思わず俺は苦笑いしていた。だって、ミサイルに翼って、俺の夢に出てくる林檎のイメージそのままじゃないか。

「……ミサイルも翼ありませんが、」

「ほら見る、イエリーが困ってるじゃないか」

「だってさ」

……せいぜい、起動の時に背中電源ボタンを押したぐらいだもん。俺が見たロボらしいところってのも……。

あれ？

俺は今強烈な違和感を感じたのだが、その結論に至ったのは家に帰ってからだった。それは――、

「ビーム砲ならあります」

「ほらな、ビーム砲しか………？」

「えっ！ マジマジ！？ 見せて見せて！！！」

――なんか、それどころじゃなくなってしまったから、かも、しれない。

「では………」

「では、じゃねーよ！ やめろ、出さなくていい――」

2秒遅かった。突然、ブクブクと膨れ上がったイエリーの左腕は、綺麗な楕円状に形成されて、手首の手前のカバーが左右に突出したかと思うと、そのできた空間に手首が収納され、代わりに筒状の砲身のような物がスライドしてきた。……昔テレビゲームに出てきた、青い少年の武器によく似ているかもしれない。

「ロックオン・バスターです。手動で発射させることもできます」

（名前からしてギリギリだな………おい）

「…すごいっ！ これ、えっ、マジ、撃てるの？ 撃てるの？」

あつ、ここから持つ所が出てくるんだ、へー」

バスには5、6人の人が乗っていたが、幸いにもほとんどが中扉より前の方に座っていた。多少ごちゃごちゃやっても、誰も振り返ったりはしなかった。…最後部座席で、本物の光線銃がむき出しになっているとも知らずに。

『次は、区役所入口、区役所入口。こだわりのそば処・馬井屋前でございます………』

「ほら、もうすぐ降りるとこなんだからさ、…イエリーもその物騒な奴をしまってくれよ。あとさ、それって簡単にポンっと出しちゃ

つてるけど、安全装置とかなんかあるんだよね？ 簡単に撃てないように、セーフティロックが掛かってるとか、なんか」

ちよつと目を離れた隙に、桂が色々いじったのか、イエリーの左腕はおもちゃのボーガンのような形にできあがっていた。あの細い腕にそんなに色んな物が隠れていたのかと、驚いたぐらいだ。

「ありません。トリガーを引けば、発射されます」

「…は？」

「チャージ・ショット！」

バカっ、やめろ！？ …俺の言葉は、今まで聞いたことのないような音でかき消されていた。おかげでバスにいた他の人達には、俺の声は聞こえていなかったかもしれない。

チュイイイン……ズドオアアアアン！！！！！！！！

…また、2秒遅かった。

「…よし、これでOK。二人とも、文句は無いな？」

バスの電光案内板が“原因不明”の爆発を起こし、フロントガラスも割れてしまったバスは運行継続不能になってしまった。傍から見れば電柱にでもぶつかったんじゃないかとも見える。

代わりのバスを手配するという運転士の申し出も断り、そそくさと降車した俺達が逃げ入ったのは、近くにあったドラッグストアだった。

「うー…確かに私が悪かったけどさー。何もここまでしなくてもいいんじゃないの？ イエリーがかわいそうだよ」

イエリーは包帯でぐるぐる巻きにされた自分の左腕を不思議そうに眺めていた。…こうでもしないと、また何かの拍子で、あの“ロツク…何とかバスター”ってのを街中で撃たれるかもしれないと思ったからだ。見た目は悪いがしょうがない。誰かに聞かれたら火傷をしたとでも言っておこう。…実際、皮膚がちよつと変色してたしな。

「ロツクオン・バスターは使用禁止ということでしょうか」

「そうだ。これからは、よっぽどのが無い限りバスターは撃っちゃいけない。…って言うか、あんだだけ破壊力があつて、安全装置も無いのが不思議なんだけどな…」

俺の目を直視するイエリーからは何の感情も伝わらない。表情の無いその両目の奥で、イエリーはバスターを封じ込まれることをどう思っているのだろうか。…考えてないのかな、やっぱ、ロボットだし。

「では」

「ん？」

包帯を巻いた左腕と、巻いていない右腕を交互に見比べるイエリー。

ブクブク、つと、右腕が膨らんだかと思うと、手首のカバーがスライドして………って、まさか…?!

「右腕のロツクオン・バスターは使用可能ということですね？」

「…あははのは」

………もしかしたら、イエリーには“反省”という感情さえ入っていないのかもしれない。

包帯ぐるぐる巻きの左腕と、バスターに変形した右腕とを俺に披露する彼女の目からは、何の感情も伝わってこない。“悪意”という感情さえも。

「…イエリー、右手を出すんだ」

…ツツツ、ツツツ。

多目的トイレから出てきた俺達を、レジの店員が怪訝そうな顔で眺めていた。

そりゃあそうだろう。三人いつぺんに同じトイレに入って、しかもイエリーは両手を包帯ぐるぐる巻きで、おまけにフロッピーディスクをかじりながら出てきたのだから。

…驚きとか疑問とか苦笑とか、どの表情を出そうか迷ってるようにさえ見えただらいいだ。

「…さつさと行くぞ。引弧モールまでお散歩だ」

「えー、遠いじゃん！ お金あるんだしさー、タクシーとか使わない？」

「アホか、そんなもつたいないことできるか！ 贅沢言つてないで、歩くぞ！」

ふと道路を見ると、さっきのバスがまだ路肩に止まっていて、警察が写真やらを撮っていた。一車線道路の片側を塞がれ、渋滞ができて何やら混み合い始めていた。

「マスターカラポン、プログラムの更新が完了しました。『包帯が巻かれている間は、ロックオンバスターの使用は禁止』です」

「よし、よくできましただイエリー。これからはしっかり守るように」

はい、と短く答えて、イエリーはフロッピーをズボンの後ポケットに押し込んだ。

「…そんな所に入れてたのか。危なっかしいからカバンに入れといてやるよ、ディスク貸しな」

イエリーは首を傾げる。

「収納には最適な容積ですが」

「座った時に割れちゃうって…」

俺がポケットに手を伸ばそうとすると、意外にもイエリーはその

包帯ぐるぐる巻きの手で遮ろうとした。結果として、触れ合う二つの手。（え、さつきより……）

暖かい……？ 包帯越しからでも伝わるくらいに、彼女の手には温もりが宿っていた。今朝、ダンボール詰めになされてた時には、死んだように冷たかっただけに、尚更驚いた。

「あ……………」

「……………」

視線が、合う。彼女の手の温もりを感じながらだと、なんだか目に見えない感情が肌を通して伝わってくるような気がする。

変わらぬ表情の奥から伝わってくる彼女の感情、それは――。

「そこは臀部です。男性には触らせてはいけないと、マスターズジマンよりロックされております」

――沸々と湧き上がる、怒りの感情だった。…ああ、これは俺の感情でもあるな、スージマンに対しての…。

「…そうか、イエリー。それはすまなかったな。じゃあフロッピーは自分で割らないように気をつけてくれ。さー、いくぞイエリー、桂！ おら歩け！！」

「やつ、ちよつと！ 引つ張らないで！！ 聞けコラッ、くそ兄い！！」

北貝梨駅。星流地区への玄関口であり、在来線と星流川セナテツ溪流鉄道との乗換駅でもある。

俺達を通う県立貝梨高校は、ここからセナテツで4駅乗った所にあるのだけど、普段は自転車通学をしている。4駅って言ったって、1駅1駅の間隔がかなり短いから、家からでも20分ぐらいあれば

着いてしまうのだ。

たまに、何かの間違いで遅刻しそうになった時などには、この駅前バスターミナル辺りに自転車をほっぽりだして、セナテツに駆け込み乗車するという場合もある。

（今まではそういう位置付けの駅でしかなかった。けど、今となつては、嫌なことばかりを思い出す駅になってしまった…）

ネジ。

彼女の……蒼井林檎のパンツの中から、ありえない物が出てきた。あの時の恐怖を、今も忘れることができない。

別れ際のキス…そのまま殺されるかと思った。目を開けることが怖かった。

（そしてその直後、ここであいつと出会った）

スージィ・長万部。…思えば、アイツらは最初から怪しかった。

なぜ、蒼井林檎のことを知っていたのだろう。

なぜ、蒼井林檎がロボットかもしれないと疑うのだろう。

…なぜ、イエリーマナヤをうちに送ってきたのだろう？

（思い出すとキリが無いな……でもやっぱり、最悪の思い出は、）

「拓にいい？ 拓にいい！ どこ行くの、引弧モール行くんじゃないの！？」

「…ん。ああ、そうだけど。別に歩いて行けるだろ、もったいない」
「ケチンボ！ と、桂は人目もはばからずに大きな声を上げていた。
イエリーはというと、桂の手を握り、黙って付いてきていた。」

トウントウントウントウン……

セナテツの急カーブに沿って歩いていると、北貝梨から出てきた電車がキンキン金切り声を上げながら真横を通り過ぎていった。

踏切の遮断機が上がり、俺達は反対側へと渡る。既に、引弧モールの赤いアーケードが見えていた。

「あゝあ、あれに乗ってればもう着いてたのに」

「1人140円×3で420円。歩いて5分の所にそんな金掛けられるかよ」

ぶーッ、違うもーん、と、桂は口をとんがらせて言った。

「引弧モールまでは100円だもーん！馬鹿クソ兄い、そんなことも知らないのー、超ダサくない？ねえ、イエリー」

「必要ならデータを更新します。マスターカラポン、『馬鹿クソ兄い・超ダサい』」

カリカリ…ツツ…。

イエリーはまた、歩きながらフロップーをかじっているらしかった。振り返らなくてもあの独特の音ですぐに分かってしまう。

「…それでも往復600円だろ。ソフトクリームでも買ってやろうかと思ってたけど、いらねえか。帰りは電車にするか」

「ソレとコレとは話が――」

後方から微風、と気づいた時にはもう手遅れだ。あ、やべっ、と思った瞬間、

「べっッ！！」

ビタあッ！！…という音と共に、平べったい激痛が背中に張り渡った。手形にヒリヒリしやがる。

「にやるお…」

後ろの方から、『ツツッ』という音が鳴っていた。…あとでデータをチェックしておかないと、大変なことになってそうだな。

引弧モール。貝梨市の再開発によって誕生した、工場跡地を利用した巨大なショッピングモールだ。去年完成したばかりで、セナテツは入口近くに新駅を開業、本数も増えた。

今まで遠くまで行かないと買えなかったような専門店などが多く入っているため、駐車場はいつも混んでいる。土日はその渋滞のせいで、よくバスが遅れるほどだ。

「うわぁ………広っ！ 超吹き抜け！！」

「ん？ 桂は前にも来たことなかったか？」

「って、イエリーが言ってた。心の中で」

暑く苦しくもイエリーの腕に抱きついている桂。イエリーと目が合うと、にやにやと笑っていた。

「すっかり仲良しさんなんだな。心の声とか、俺にはわかんね」

「心を閉ざされちゃってるんじゃないの？ エッチなことしようとするからさ！ ……あいたっ」

ぐりぐり。

「声がでけえつつの！ ……それに俺は何もしてねえつつの、勘違いされるようなこと言うな、バカ！」

「嘘だあゝ、すっ裸で家の中歩かせてたぐらいだもん、お部屋の中でどおんなお楽しみをしたのやら………いたいっ、いたい！！」

ぐりぐりぐり。…おかしいな、桂ってこんな性格だったろうか。（たしかに生意気な奴ではあったけれど………これじゃまるで、スージマンみたいじゃないか）

「もうっやめてっば！ 早くイエリーの服買いに行こうよっ、私が可愛いを選んであげるから！ ね、イエリー？」

「……………」

無感情な瞳が、桂と俺との顔を見比べている。どう答えたものか、言葉を搜しているようにも見えた。

「ま、そのために来たんだしな。イエリー、桂の着せ替え人形になりたくなかったら、自分で選べよ。自分で着る物なんだからな」

「……………」

口を開きかけるイエリー。腕に張り付いた桂が、アピールするように身体を揺すった。

「マスターカラポン」

「おう。何だイエリー」

『マスターカラポンの指示に従います』、よし、俺にも心の声が聞こえたぞ。

「なぜ服を着るのですか？」

「……………はい？」

…心の声、聞き間違えたかな？

「可動範囲の障害、外部端子接続への支障。機能効率上、推奨されません。現在着用している衣服を全て脱着すれば、冷却循環効果が10%向上されます。許可を」

「裸がいいってこと？」

「…却下だ」

…なんだか溜息がこぼれた俺。

許可なんかできるわけねーだろ！ ……そう叫んだ所でしょうがない。俺は目に入った洋服チェーン店の看板に向かって、ぶらぶらと歩き始めた。もう、説明する気にもなんね。

「グランシャリオか…普通の服とかならここで揃うよな」

——つづく

4『イエリー・マナヤ』中編（後書き）

グランシャリオって北斗星の食堂車のことなんだよね

4 『イエリー・マナヤ』後編（前書き）

8 / 12 再編しました。

4『イエリー・マナヤ』後編

4『イエリー・マナヤ』後編

「これいいよね！ うん、これ、これ決定！！」
「……………」

遠くでは、桂の着せ替え人形と化したイエリーがチラチラとこちらを見ている。良さそうな服を見つけては、イエリーに押し当ててキヤーキヤーと騒いでいた。

「うーん、このブラック・ペッパー・コーラは失敗だったな」

俺はというと、スタンバイモードという奴だ。店の入口正面向かいにある花壇のベンチに座り、一息ついている。

ここのグランシャリオは女性物コーナーが圧倒的に広いせいもあって、男が一人ではんやりつつ立つてるには、あまりにも浮いてしまふのだ。桂もイエリーに付きつきりだし。

（ま、桂に任せてりや失敗はないよな……………ん？）

桂が、手招きしてる？ あまり顔がよく見えないが、随分大振りで腕を振っているようだ。

「試着するから運ぶの手伝って！」

「うわっ、もうこんなに選んでたのか」

机の上に置かれた買い物カゴには、シャツ、スカート、ズボン、下着に至るまで、様々な衣類がハンガーごと収まっていた。しかもカゴは床にもう一つあって、同じぐらいの量が詰められていた。

「イエリーは何でも似合いそうな気がするんだもん、全部試してみたくなっちゃった」

「予算考えるよ予算……………ていうか、」

カゴの隙間から、カラフルな紐がこぼれ出していた。引っ張り出してみると、案の定、虹色ビキニが出てきた。…水着まで買うのか？

「も、もう夏なんだしさ！ いいじゃない、そーいう季節だよ、これから！」

「イエリーはロボットだから水はダメだろ……………」

あつ！ という顔の後に、『チッ』と舌打ちしたのを俺は見逃さなかった。こいつ…自分の買い物も相当力ゴに入れてるんじゃないだろうか。

「防水加工が施されているので、短時間の水中活動は可能になっています」

「ほら、ほらあ！ イエリーだって欲しいって言ってるって！ 買い、買い！ 試着しよ、ね、イエリー！」

欲しいとは言っていないだろ…とツツコむ隙すら無い内に、桂はイエリーの手を引いて試着室の方へ走って行ってしまった。イエリーがチラリと俺の方を見ていた。

「へいへい…ただいまお持ち致しますよ、お嬢さ、ま…！？」

いったいどれだけ詰め込んだんだ？ そう思うぐらい、2つの力ゴはとてもつも重かった。…プラスチックの取っ手が、妙に柔らかく曲がっているように見えて、折れるんじゃないかと思ったほどだ。

（これじゃあ桂には運べなかっただろうけど…………俺だってキツイわ、バカ！）

しかも後で全部持って帰るんだよな…………誰が持つんだって、決まってるよな…………はあ。

「ほんとゴメン、ゴメン！ ほんつ、とに今日はゴメンばたんちゃん！！」

「だから、もういいからつ。早く行ってきなさいよ、荷物見といてあげるから」

小雪は持っていた紙袋やカバンを花壇前のベンチに置くと、いそ

いそと店のレジに向かっていった。グランシャリオのスタンプカードを、会計時に受け取り忘れていたことに気が付いたのだ。

（ま、気が付いただけマシよね。もうすぐいっぱいになるって覚えなかったら、帰るまで気付かなかったんでしょけど）

ぼたんはベンチに座ると、小雪がバラバラと置いていった荷物を自分の方に寄せた。自分はカバンに入りきってしまう程度の小物ぐらいしか買っていなかったが、小雪は水着以外にも色々な物を買っていた。

ビーチサンダル、サンバイザー、サンオイル、そしてうきわ……。
「うきわってのが雪らしいのよね……それにしても、夏休みに海にでも行くつもりなのかしら」

もう一つ大きな紙袋があったが、そっちは何が入っているかわからなかった。ぼたんが本屋であまりにも立ち読みに夢中になってしまつて、その間に小雪が一人で買い物をしてきた時に買ってきた物らしい。中には更に紙袋で包まれた何かが入っていて、確認するとはできなかった。

「あー、何か飲みたいかも……自販機……何あの広告、ブラック・ペッパー・コー……」

突然、ぼたんは視界が真っ暗になって、ドキつとした。な、なに……？ と、声を出そうとした瞬間、聞きなれた声が顔の真後ろぐらいから聞こえてきた。

「だーれだ！」

「その声……もしかして、」

ぼたんがその人物の名前を口にすると、当人は嬉しそうな声を上げ、視界を解放してくれた。と、ほぼ同時くらいに、小雪がレジの方から戻ってくるのが目に入った。

「お待たせぼたんちゃん、聞いて聞い……あれえー！？ えー、何で何で？」

小雪もまた、その人物の姿を見て大いに驚いていた。『彼女』は

そんな小雪を見ると、更に嬉しそうな声を上げて、両手を広げて小雪にぎゅっと抱きついた。驚いた小雪は、今返してもらってきただけのスタンプカードを手から離してしまっていた。

「うっぷぷ」

「ほら、雪、カード落とした。……それにしても偶然ですね、林檎先輩。先輩もお買い物ですか？」

小雪の頭に顔を埋めていた林檎はぼたんに振り向き、上機嫌な笑顔で『ウン！』と答えたかと思うと、次には口をとんがらせて、ぷくーと頬を膨らませていた。

「ホントはカラポンと来たかったんだけどねー、お家お邪魔したら出かけてるって。ぶー、つまらないじゃん」

（ああやつぱりさっきそこで見た人、林檎先輩だったんだ…見間違えじゃなかった）

「あ…でもでも、私さっき……」

小雪は林檎の腕から解放されると、ぼたんからカードを受け取り、2度、3度、深呼吸した。よっぽど圧迫されていたのだろう、と、ぼたんは思った。

「…そう、カラポン先輩、見たんですよ！ 試着室の所にいるの…たぶんそうだと思います」

「えっ、ホントホント、カラポンいるの？ やったッ！ どことどこ教えて雪ちゃん！ ぷにちゃんも行こっ！」

「ぷ、ぷにちゃんはやめてくださいってばあ…」

「どう？ ねえ、どうどう？」

「んー、いいんじゃない？」

先に試着室から出てきたのは桂の方だった。やつぱりお前の買い物混ぜって……なんてツツコミさえ、もうする気にもならない。

「ちゃんと見てよお。ノースリーブって腕が太く見えるっていうから嫌だったけど、実際に着てみると涼しくっていいよね！ 下の所がフリルになってて可愛いし、これは決まりかな」

「右のワキンとこ、毛が一本伸びてんぞ」

「バツ！」と音がするほどの勢いで、桂は中の鏡に振り返った。ワキを押さえて隠すあたりが滑稽で可愛い。

「見ないでよ！」

「ちゃんと見て、って言ったからだろ」

「シャツ！」と乱暴にカーテンが閉められて、数秒としない内に元のシャツを着た桂が出てきた。

「トイレ行ってくる！」

「このタイミングで？」

今更のことだが、どうも俺の一言二言がいちいち気に触るらしく、カバンを拾うと『バカ！』の一言と、鋭い拳を俺の腹にぶつけていった。試着室の中を見てみると、さっきのタンクトップが脱ぎ捨てられたかのような状態でカゴの一番上に重ねられていた。波打ったような黒い毛が一本、フリルにくつついていた。

「まったくガサツだよなあいつは……」イエリー、着替え終わったか？」

隣で同じく試着をしてるはずのイエリーに声を掛けてみたのだが、試着室からは返事が帰ってこない。着替えの衣擦れの音さえ聞こえなかった。

「イエリー？ サイズが合わなかったのか？」

「……………」

あ、もしかして。…………ふと、思い当たる節があって、俺は左右を見回した。近くには、誰もいないようだ。

「イエリー、入っても大丈夫か？」

「……どうぞ、マスターカラポン」

もう一度左右を見渡して、誰もこちらを見てないことを確認。俺は小さくカーテンを開け、素早く試着室の中へと入り、カーテンを

閉めた――。

「あつ……試着室、入っちゃった」

「うん、見えたよ。アレ、カラポンだね、間違いない」

小雪、ぼたん、林檎の三人は、試着室から見て正面方向の通路を通ってきた。壁際の試着室までは、およそ10mほど離れた所にいた。

「試着室の前で待ち構えて、脅かしちゃおっかな」

「あ、ズルい！……じゃなかった。そんなことしちゃ、カラポン先輩がかわいそうですよ」

（どうでもいい……）

小雪の一言が火を付けたのか、林檎は洋服掛けの陰にしゃがみ込むと、試着室の方を盗み見た。すると今度は、一列奥の洋服掛けの陰に素早く移動して、やはり同じようにしゃがんで試着室の方を覗き込んでいた。

「……何やってんですか林檎先輩」

「しっ！　ぷにちゃん、今は作戦行動中だよ。隠密活動中は、通信を最小限にするように」

通信つて……と、ぼたんが呆れていると、いつの間にか林檎の隣で、小雪が同じようにしゃがみこんで、洋服の隙間から試着室の方を覗き込んでいた。その表情はいつになく真剣だ。

「雪まで……」

「ぷにちゃ……じゃなかった、ぼたんちゃんも早くしゃがんで！　見つかったらうよ！！」

そんなことをする方がよっぽど怪しい……と、茶々を入れられる雰囲気ではなかった。二人がほったらかした荷物を回収して、ぼたんは渋々小雪の後ろにしゃがみこんだ。スカートも気をつけないといけない。

（ていうかさつき、カーテンが閉まつてる試着室に入つてなかった
つけ？ この辺だつて女性物ばっかだし……………中に誰かもう一人い
るのかな？ 彼女とか…）

「え？ 何か言つた、ぼたんちゃん？」

シーっ、と、林檎が指を立てる。小雪もぼたんも、同じように指
を立てて『しーっ』と真似た。ぼたんは、なんだか恥ずかしくて、
しかもウンザリしてきた。

「…後でプチシュードパパ、ビッグサイズつて言つたのっ」

「ひええ、もうお金無いよお…」

「やっぱりな…」

「何がやっぱり、なのでしょうか」

やっぱり、…着替えてなかったんだもん。足元に置かれたカゴは
そのまま、一切手をつけた様子も無い。

なにしろ今着てる服だつて、俺が着替えさせなければどれ一つ正
しく身に着けることができなかった。そんな彼女が、初めて見る洋
服の試着なんて、できるわけがなかったのだ。

「着替え方、わからなかったんだろ？ せっかく桂が色々選んで
くれたんだ。どれか、着てみたいのはあるか？ イデッ！」

カゴの中の洋服を手に取りうとして、俺は試着室の壁にしたたか
に尻をぶつけた。あたり前だが、試着室つていうのは一人で着替え
するための個室であつて、とにかく狭い。隣に響いてしまったらう
か？

「……………こちら側へ。カゴを入口側に置けば、空間が確保できます」

「お、おう……………でも、そしたら…」

真ん中にあつたカゴが向きを変えて入口側へ、そして入口側にい
た俺が鏡の方へ。…当然、イエリーは鏡側にいたので、鏡の前には

二人がいることになる。

「……………」

「…狭い、よな、やつぱ」

密着。腰が、肩が、それから脚が触れているを感じる。何をやってるんだ、俺……………」

「ま、まあとにかくだ。服っていうのは、体とのサイズが合わないとか、何かと面倒なことになる。それでまず、一度その服に着替えてみることで、サイズが合っているかどうかを確認する、それが試着ってものだ。」

あとは自分に似合っているかどうかとか、上と下の組み合わせがいかにとか……………まあとにかく、試しに着る。そう、だから試着」「この洋服を試しに着る。つまり、私の体へ試験的に身につければよろしいですね」

おおつ、なんだか今回のイエリーは理解が早いぞ。…でも、何で俺が入ってくるまで試着してなかったんだ？

「着衣に関するドライバは、マスターカラポンにより、既にインストールされました。しかし、脱着ドライバはまだインストールされていないため、着衣することができません。脱着ドライバのインストールを」

ああ……………つまり、服を着る方法は家でのアレで覚えただけ、脱ぎ方がわからないってわけか。

「…アナログな方法でいいのか？ その…つまり、俺がイエリーの服を脱がしてあげればいいんだろう？」

コクリと、頷き肯定するイエリー。その表情が恥じらいに溢れていて、ほのかに頬をピンク色に染めていたなら、俺はどんなに発狂していたことだろうか…！ もちろん、イエリーは相変わらずの仏頂面で、頬も白く生命感の無い白磁色のままだった。

「よし…じゃあまずはイエリー、胸についているボタンを外すんだ。…そんな引つ張ったらボタンが外れちゃう……………って、そういう意味の外すじゃなくってな。こうやって、穴を押さえながら、ボタン

をななめにして……………」

「あつたまきちゃうなー、もうっ。毛なんか無かつたしっ！」

トイレから戻ってきた桂は、小箱をカバンにしまいながら不機嫌に歩いていった。トイレから、というよりも、ワキのケアから戻ってきたというのが正しい。

「むー、なかなか出てこないじゃん！」

「時々カーテンが動いてますから、中にいるのは間違いないはずなんですけど……」

「男のくせに着替えるの遅すぎ……………」

どこからか、ヒソヒソと会話が聞こえてくるのに桂は気付いた。

試着室から見て、正面の洋服掛け辺りにしゃがみ込んでいる人の足が見えた。痺れているのか、時々小さく足踏みするように動いていた。

「…覗き？ まさかね…………… イエリー、着替え終わった？ ……んっ」

カーテンを少し開くと、桂にはズボンをちょうど脱いでいる最中のイエリーの後姿が目に入った。なぜか後ろからは、『ひゃあ』という声が聞こえた。

「あ、ごめん。まだ着替え中だったんだね。私ももうちょい試着するから、着替えたら一回見せてよね」

しゃっ、と、カーテンを閉める桂。隣の試着室に戻り、自分の試着の続きを始めた。

（そういえば拓にどこに行ったんだろっ？ 荷物ほったらかしじゃない…………… あれ、このタンクトップ、こんな畳み方だったっけ？）

「……………あ、あぶねえ…殺されるかと思った」

恐ろしく見計らったかのようなタイミングだった。ズボンのフックを外させ、まさに今、屈みこんだ状態でズボンをずり落としている最中に、天からお声が掛かった。逆に言えば、このタイミングじやなかったら確実に見つかったいただろう。心臓がバクバクと激しくドラムを打っているような気がした。

「マスターカラポン」

「あ、ああ……………後は、足を交互に持ち上げて、ズボンを外せばいい。」

…まあしかし、桂も言っただけど、トランクスつてのはシニールだったかもしれない…。罪悪感というか、なんだか見ていてかわいそうになってきた。

「そういえば下着もあいつ選んでくれたのかな……………なんか女子の洋服が詰まったカゴを漁るのって、見栄えがいいもんじゃないよね……………」

そうこう独り言を呟いている内に、それはカゴの中から出てきたブラジャーとパンツ……………ハンガーに収まったそれを持ち上げて、思わず唾を飲み込んでしまった。

シャツ状になった……………タグにインナーと書いてあった……………肌着も出てきて、下着だけでも実はかなりの数が入っていたことに気付かされた。

「それは？」

「……………肌に直接着る服だ。これは家に帰ってからにしよう」

だいたいの大きさは合っているだろうし、会計の時にまた外したりしないといけないから、時間が掛かるだろう。

何より、桂が戻ってきてしまった以上、なんとしても桂が着替え終わるまでに俺が試着室を出ないといけない。早くイエリーに一通りの試着を完成させなければ…！

「イエリー。このスカートを穿いてみるんだ。そう、さっきのズボンみたいに正面のボタンを外して……………」

「やってみます……………」

しかし、ハンガーから外すのだけでもたついてしまっている。結局、俺がまたそのスカートを受け取って、足を通して持ち上げることとなってしまったのだった。

「…おし、OK！」

『あれー、拓にい、戻ってきたの？ どこ行ってたのよ、ちゃんと荷物見ててよねー』

思わず声が大きくなってしまい、慌てて口を塞ぐ俺。着替えの終わったイエリーは、鏡ではなくそんな俺の様子をじっと見ていた。

「…桂に見つかる前に一旦外へ出よう。イエリーも、一回桂に見てもらおうな」

「わかりました」

カーテンを少し開け、桂がまだ試着室に入っているのと、左右に誰もいないことを確認する。よし…、今なら大丈夫だ。

「よし、出るぞ！」

俺は勢いよくカーテンを開けて、中に隠しておいた靴を床に落とす。靴に軽く足を入れて、俺は試着室の中のイエリーに手を伸ばす。イエリーはそれに気が付くと、自然に俺の手を握り返してきたのだった――。

「あ」

「あ……」

「……………え？」 小雪は驚きのあまり立ち上がるうとしたが、足が痺れて尻餅をついてしまった。ぼたんが慌てて小雪を支えた。

「バカっ、見つかつちゃうでしょ!？」

「ご、ごめん……でも……………」

あらためて試着室の方を見る二人。

唐突にカーテンが開いたかと思うと、拓二が中から靴を投げ出し

て、慌ただしく足を突っ込んでいた。そして……

「……………あの子、誰か知ってる？」

そう聴いたのは、林檎だった。誰に問いかけてるのか、目線はカラポンに手を引かれて出てきた人物に釘付けだった。

「…知りません」

「わわ、私も知らないです」

林檎だけは、最初と同じ洋服掛けの陰にしゃがんだままだった。銀色のパイプを握りしめ、彼女の表情を伺うことはできない。

「そう……………」

拓二と、もう一人の少女は、床に降りるやいなや、いきなり抱きつき合って、さらに3人を驚かせた。遠目に見ていても、今は拓二の方からとわかる、と、ぼたんは思った。

「ていうか——」

「あたしも知らないじゃん」

フツと立ち上がる林檎。もうその位置からは、姿は隠れていない。

「ご、ごめんイエリー。足が……」

「お怪我はありませんか、マスターカラポン」

靴をちゃんと履いていなかったせいで段差を踏み違えた俺は、前のめりになる形でイエリーに倒れてしまった。

俺自身、バランスを崩していたせいもあって、イエリーに支えを求め、強く肩を掴んだのがいけなかったのかもしれない。だけど、まさかイエリーまで俺を強く掴んでくるとは思わなくて、一瞬思考が滞ってしまったのだ。

「あなたに怪我をされるわけにはいきません。私は、マスターカラポンの身体警護も、マスタースジマンに依頼されているのです」

「そ…そう、なのか…わかった、ありがとう。わかったから…そろそろ、離してもらえないか？」

誰かに見られる前に、誰かに見られる前に…具体的には唐林桂に何抱き合っつてんのか言われない内に…。

「何抱き合っつちゃってんですかあ、先輩!!」

「うわほらまた面倒くさいことになっちまった…って、」

先輩？ え、誰よ今の声…？ 俺はイエリーの手を解いて恐る恐る後ろを振り返ると、なんと、私服姿の小雪ちゃんが両手を胸に当たって立っていたのだ。

「小雪ちゃん…!!？ 何でここに?!」

「そんなことより説明してくださいよ!! 浮気ですかっ、不倫ですかっ、誰なんですかその子、カラポン先輩の何なんですか!？」

「雪、ちよつと落ち着きなつて、声デカいから、ちよつと!」

どこから出てきたのか、やはり私服姿のぼたんちゃんが現れて、小雪ちゃんを後ろから押さえつけていた。それでも小雪ちゃんは収まらないらしく、振り切つて俺の腕を取って掴んで来たのだ。

「こ、小雪ちゃん…!!？」

「最低ですよ先輩! 私…林檎先輩っていう彼女がいるのに、何でこんなことするんですか!？ 見損ないましたよっ、ガツカリですよ、カラポン先輩!!」

ど、どうしたらいい？ 小雪ちゃんに誤解だと説明したくても、この様子じゃ簡単には納得しないだろう。

…かと言つて、イエリーがロボットだということをバラしてしまつていいのだろうか。そりゃ、隠し通すよりかは遥かに楽だろうけれど…。

「うるさいな。何やってんのさつきから」

全部会話が聞こえていたのだろう。桂が試着室から、怪訝そうな顔をして出てきて、その場にいた全員の視線が桂に集中した。

「あっ! まだ浮気相手を隠してたんですね! しかもこんな小さい子!!」

「いや、だから違うんだって！話を聞いてくれ小雪ちゃん！」

「ハア…？浮気って………もしかして、修羅場ってる？」

露骨にニヤニヤしゃがって…ム力つくな！俺は軽くげんこつを落として、桂の両肩を掴み、自分の前へと持ってきた。

「痛い！」

「紹介しよう、二人とも！コイツは俺の妹、唐林桂！ちよつと生意気、チヨイ生・五年生、おうし座のA型、あだ名はカラオケ！好きなパンツは白地に黒のハート柄！！」

ああ、あと何を言おう。もうネタが無くなってきた。

「ちよ、バカッ、クソ兄い！いい加減なこと言わないで！！」

「うるせーチヨイ生！というわけで、コイツは俺の妹！そつちはいとこ！なあーんもやらしいこと無し！これで納得・オーケイ小雪ちゃん？」

…だつたなら、良かったんだけど。への字口を強く引き締めた小雪ちゃんは、まだ不機嫌そうな上目で俺を睨み上げていた。

「じゃあ何で抱き合ったりしてたんですか」

「それは…転んだだけさ。抱き合ってるように見えたかもしれないけど…」これは本当だしな。闇雲に嘘を増やすのはよくないだろうから、正直に答えた。

「じゃあ何で試着室に二人で入ってたんですか！？おかしいじゃないですか、女の子が着替えてる所に入り込むなんて！」

「げっ、そんな所から見てたのか…？」

「そんなことしてたの？うわ、やらしー、どうりで見あたらないと思った」

「うるせい、お前は黙ってる！それはだな小雪ちゃん………それは…」

どう切り抜けたらいい…？俺は助けを懇願するように、無意識にイエリーに目を向けていた。当の本人はというと、よくわからないといった感じの顔で、包帯を巻いた腕を掴んで立っていた。包帯を巻いた…？

「そ、そう、腕！」

俺は思わず叫んでいた。そして、頭に次々とひらめいた“設定”を、思いつくまま披露していた。

「彼女は両腕に火傷をしちゃってて、自由に腕を使うことができないんだ。ほら、見てごらん、両方グルグル巻きだろう？ だから服を着替えるのだったってとても大変なんだ。」

だけど今日は、久々にいとこの桂の所に遊びにこれたからね、買い物にはどうしても行きたいと言ってさ、この洋服も桂が選んでくれたんだ。桂の奴は身勝手だからさ、自分で選んだ服の試着に夢中になっちゃってて、彼女をほったらかしにしちゃってたんだ。で、着替えられないからって、彼女が中から……俺に声を掛けてきてね？」

…ダメだ。話せば話すほど、ボロが増えてる気がしてきた。案の定、小雪ちゃんの顔はとても納得しているようには見えなかった。

「…だから、試着室に入って着替えを手伝ったって言うんですかあ？」

「…そう」

イエリーを見る小雪ちゃん。その顔は、とても今日、初めて会う人に対して向ける顔をしていなかった。

「あなた、お名前は？」

「い、『イエリ・マナヤ』って言うんだ」

「先輩には聞いてませんっ」

拒絶された…。その後ろでは、ぼたんちゃんがヤレヤレと両手を挙げていた。

「イエリさん。さっきからあなた、何にも喋ってないじゃないですか。あなたが説明してくれなきゃ、私、何にも本当のことがわかりません。唐林先輩が言ったことは本当なんですか？ あなたの口から説明してください！」

とうとう小雪ちゃんは、イエリーにまで詰め寄り始めてしまった。本当にあの、いつもあわあわしてた小雪ちゃんなのだろうか…？

そう思うぐらい、今の彼女は驚くほどに堂々としていた。

そしてイエリー……。彼女は、何と答えるのだろうか。やはりその顔に、表情は何一つ浮かんではいなかった。

「何を、説明すればよろしいのでしょうか」

「事実をありのままに。試着室の中で、あなたと唐林先輩が何をしていたのかを教えてください」

イエリーがチラリと目だけで俺を見た。命令を求めているのか、あるいは小雪ちゃんに正直に答えていいか許可を求めているのか、それは伝わらない。

（もう何でもいい……。イエリーに任せる……！）

果たして俺のテレパシーは伝わるだろうか。俺は、全ての意味を込めて、ゆっくりとイエリーに頷いた。彼女も、小さく首を動かしていた。

「私は……」

「私は？」

桂も俺も、そしてぼたんちゃんも、向かい合うイエリーと小雪ちゃんのやりとりを、緊張した面持ちで見守っていた。果たして小雪ちゃんは、納得するのだろうか……？

「……私は、服を脱ぐことができなかった」

イエリーが、少しずつ口を開き始めた。

「桂が選んでくれた服を試着するため、試着室に入った。しかし、私は着替えることができなかったため、ただずっと中にいた」

更にイエリーは続ける。

「彼は外から私に声を掛けた。私が彼に、服の脱着を依頼し、彼は私の服を脱着し、着衣させた」

「（……たしかに、合ってる、よな……）」

嘘は言っていない。抽象的なように聞こえるが、淡々としてるだけで内容は十分具体的だ。

小雪ちゃんと言うと……。腰に両手を当て、なんだかものすごい表情でイエリーの目を見ていた。

「ふ…ふ服の脱着つて、ちや着衣いいつて、どどんな風に！」
「説明するのですか？」

またしても、チラリと俺の顔を見るイエリー。…いや、それ以上はやめてくれ。という意味を込めたつもりで、俺は右手を上げた。

……なぜ首を縦に動かす、イエリー？

「最初は胸のボタンを……」

「ぼぼぼぼたんちゃんは関係ないでしょっ！…！」

「ちよつと、落ち着きなさいって雪……っ、って、雪、雪！？」

ぼたんちゃんが興奮した小雪ちゃんの肩に触れた途端、そのまま彼女は、まるで地面に突き刺した棒が傾いて倒れるかのごとく、ベチャアン！と、大きな音を立てて床に正面から倒れてしまったのだ。

「小雪ちゃん！？」

「雪っ、雪！？　しっかりして！！？　…わっ、熱出てんじやないの？」

「うひゅう……」

彼女を仰向けに起こすと、なんと鼻血が出ていて、おでこもぶつけたのか赤くなっていた。ぼたんちゃんの言う通り体温が上がっているらしく、服越しでも熱いと感じるほどだった。

「小雪ちゃん…興奮しすぎちゃったのか…？」

「あ、違う！　そういえばさっきから、色々あつて走り回ってたから……」

「拓にい、とりあえずあつちのベンチに運んだ方が。行け！　お姫様抱っこー！」

「くそーっ、やっぱ俺かあ！…！」

……俺とぼたんちゃんが小雪ちゃんの介抱をしている間に、桂とイエリーは自分達の服の会計を済ませて来たらしく、手提げの紙

袋を一つずつ持つて戻ってきた。

「…拓にい、大丈夫そう？」

「ああ、軽い熱中症みたいなものだろ。さっきお医者さんが来てくれて、少し休めば大丈夫だろうって言うてくれたよ。……それよりお前らの買い物つて、そんなに少なかったっけか？」

桂は袋を持ち上げて、呆れたような仕草を試みせた。

「自分で持てるぐらいの量にしとかないとね。拓にい、その子の荷物で両手がいっぱいになっちゃうでしょ？」

ああそうか……つまり、小雪ちゃんを送ってけって言うてるんだな。変な気を遣いやがって。

「ううん……カラポン先輩あい……」

「雪、目覚めた？ 大丈夫？」

冷やしたタオルをずらして、小雪ちゃんの目が垣間見えた。焦点が合って無いのか、なんだか虚ろな表情だった。

「あれ……？ 私、どうしちゃったの……？」

「カラポン先輩が荷物持つてってくれるってさ。やったじゃん、雪」
小雪ちゃんの両目が、右へ、左へと、ゆっくり動く。ようやく意識がハッキリしてきたのか、俺の方に向きが合つと、なぜか、微笑んだ。

「あれえ……カラポン先輩じゃないですかあ。……どうしてここにいますかあ……？」

ぼたんちゃんと目を見合わせる俺。ほっと、二人で息をついていた。

「…小雪ちゃんを助けに来た、っていうのじゃダメかい？」

「えへへえ……嘘はいけませんよあ、先輩あい……」

おでこに手を当ててみると、さっきよりも熱は下がったように思えたが、まだ少し熱いようにも思えた。

「…先輩あい……」

「ん……？ 何、小雪ちゃん？」

小雪ちゃんはずらしたタオルをひっくり返して、元の位置に戻し、

眼球を冷やしていた。もう大丈夫だろうなと思って、立ち上がったその時――、

「浮気しちゃあ……だめですよ……林檎先輩が……怒ってましたよお……？」

「……………え？」
……小雪ちゃんの、その、一言、が、俺の、頭の、中を、真っ白、に、した、。。。

「……………林檎、いたの……………？」
「うにゅう……………」

しかし、それ以上小雪ちゃんが返事をする事はなかった。ぼたんちゃん――。ぼたんちゃんに目を向けると、彼女もまた、ビクツと身体を震わせるほどに、驚いていた。

「林檎が……いたのか？」

「……さつき、そこでバツタリ会って……………私達と一緒に、試着室の所にいたはずなんですけど……………」

試着室――。その言葉を聞いた瞬間には、俺は彼女達の声を振り切って駆け出していた。

三つの試着室のカーテンは開いていて、中には誰も入っていない。フロアを見渡しても、それらしき姿は見当たらない。レジ、他の試着室、どこにもいない。なら、この店の外か？

俺は通路に出て辺りを見回すが、吹き抜けの引弧モールはあまりにも店が多すぎるし、人だつてたくさん歩き回っている。こんな広い所で、ただ一人の林檎を見つけられるのだろうか？

（あいつならどこへ行く……駅か？）

星流鉄の駅まではアーケードの端、そこまでここからは一本道。

北貝梨への電車は10分おきで、あと2分……！ 走れば間に合うか……？！

（迷つてられるか！）

駆け抜ける。すれ違う人々を掻き分けて、店々の看板を無視し続けて、ただひたすらに走り続ける。

それでも目を凝らしながら、彼女の後姿が無いかを探し続ける。彼女は、いない。

（プチシューdeパパ……アーケードの出口……！）

二重の自動ドアの向こうで、踏切の警報機が鳴っているのが見えた――。

カン、カン、カン………シュパア――

「はぁ……はぁ………はぁ………」

自動ドアを出た瞬間、波打ったような熱波に一瞬めまいを感じ、無意識に俺は足を止めてしまっていた。胸の奥で突き上げるような鼓動のリズム、せり上がってくるような熱い内側の熱流を感じ、今まで走ってきたのが嘘のように、身体を動かす気力が失せていく。そんな俺の眼前で、今まさに、北貝梨行きの電車がブレーキの圧力空気を放出して、発車しようとしていた。

ウオオオオン………ガッタン、タン、タタタン………

「………っ、間に合わなかったか………」

鈍い重低音を唸らせ加速していく鋼鉄製の電車。座席に座っている人達の後頭部が、なぜかハッキリとピントが合って見えていて、吊革がどのように揺れ動いているのかさえイメージできていた。

だから、俺はハッキリと見る事ができてしまったのだ。

「……………!!」

一人だけ、一番後ろの車両に、一人だけ、後頭部ではなく、振り向いた横顔の人がいた。アーケードの入口を振り返るように、そして、目線が下がり、俺を見下ろすかのように――。

「りん……………」

蒼井林檎が、生気の無いような目で、窓から俺のを見ていたのだ――。

カン、カン、カン、カ……………

遮断機が上がり、人や、自転車や、車が、今そこに電車がいた場所を渡っていく。今そこに、林檎がいた場所を、皆が通り抜けて行く……………。

「……………林檎……………」

彼女は、何を思ったのだろうか。俺を見て、何を考えたのだろうか。……………何も言わず、なぜ、帰ってしまったのだろうか。

林檎。蒼井林檎。彼女の姿が、表情が、感情が、頭の中で溢れ出そうになっている――。

「マスターカラポン」

……………膝を押さえる俺の後ろから、俺のあだ名を呼ぶ声がした。振り返ると、両腕に包帯を巻いた彼女がそこに立っていた。後ろで、自動ドアが静かに閉まった。

「……………イエリー、か……………」

彼女の視線を背中を受け止めながら、俺は次の言葉を探していた。イエリーへの言葉を探しているはずなのに、何故か、林檎……………りんごという単語しか思い浮かばないのだ。

「……………ごめんイエリー……………。俺……………今何にも考えられないん

だ……しばらく……そつとしておいてくれないか……」

返事は無かった。きつと、無感情な目をして立っているのだろう。俺は、日陰になっている自動ドアの壁にもたれかかり、腰を落とした。

「林檎……」

火照った身体は、情けなくも、容赦なく俺から体力と氣力を奪っていく。膝を抱えた俺の姿は、きつと町行く人々にみじめに映るのだろう。何もする気になれない。いつしか俺は、膝の中に顔を埋めていた。

近くで、布が擦れるような音がした。

「……………」

「……………、？」

何かが、俺の頭に触れた。それは柔らかく、そして、ヒンヤリと冷たかった。しかし、決して不快ではなく、程よい冷たさだった。

「…………… イエリー？」

「ロックオンバスターの冷却装置を起動しました。お加減はいかがですか、マスターカラポン」

イエリーは俺の隣にしゃがみ込み、俺の頭を抱きかかえるようにして、腕を絡めていた。俺が巻いたはずの包帯は外されていて、イエリーの足元に落ちていた。

「…………… ロックオンバスターは、」

「包帯装着中は使用禁止です。ですが、包帯の脱着は禁止されていません」

……なるほどな。包帯を外してしまえば、バスターの使用は自由ってわけか……こりゃ、説明が難しそうだな。

「…………… 包帯の脱着は、するべきではなかったでしょうか」

「……いや、いいよ。それより……………」

それより……………？ 何だろう……………自分で言って、わからなかった。イエリーの顔が、とても近かった。

「それより、何でしょう。マスターカラポン」

「……………ありがとう、イエリー」

彼女にそうされているように、俺はイエリーの頭を、抱くようにして撫でた。サラサラとした髪の毛の質感は、人間のそれと全く変わらない。

「どういたしまして、マスターカラポン」

それから少しの間、俺達はそうして頭を抱き合っていた。小雪ちゃん達を待たせているんだ、いつまでもぼんやりしているわけにはいかなかった。

「……………本当に、反省してるんですか。カラポン先輩……………」

…ぼたんは、自動ドアを開ける手前で、振り返って今来た道を戻り始めた。嫌な予感がしたが、イエリーに付いて歩いていつて正解だったと、思った。

（……………小雪。あんたの憧れるカラポン先輩は、とんでもない奴だよ……………早く目を覚ませよ、バカっ）

チクリ。

胸の中で、今まで感じたことの無いような、奇妙な痛みが疼いた。（…何だろう。なんかすごく、ム力つく。それもこれも、全部カラポン先輩がいけないんだ——）

ぼたんは、ますますイライラした足取りで、アーケードの中を一人歩いて行くのだった……………。

ガッコン……………オオオン……………ガタン、ダタン……………

「…ほんとすみません先輩、荷物全部持ってもらっちゃって」

「いいんだよ、気にしないで」

グランシャリオまで戻ってきた俺達は、小雪ちゃん達と共に引弧

モールを出て、星流鉄に乗った。桂が自分達で持てるだけの買い物に減らしてくれたおかげで、俺は小雪ちゃんの荷物を運ぶことができていたのだ。

電車に乗る頃には、小雪ちゃんもだいぶ調子が良くなってきたらしかった。

「それにしても、すごい買い物量だね。いったい何を買ってきたの？」

「わっ…そ、それはその、えと………な、内緒です」

「…いいじゃないですか、他人が何を買おうと」

うむむ、どうもさつきつからばたんちゃんの発言に棘があるぞ。

俺、また何かやらかしたんだろうか…？

「拓にい、帰りどうすんの？ その子送ってくなら、私達バスで帰っちゃうけど」

ドアに寄りかかっていた桂が、背中をぐりぐりしてきた。もっと普通に声を掛けられんのか、こいつは。

「あのな…“この子”って言うけどな、小雪ちゃんは高校生で、お前より5つも年上なんだぞ。言葉遣いには気をつけろって、いつも母さんに言われてるだろ」

「あ、そんな、別にいいですよ先輩っ。そんな怒らなくても」

そうか？ 舐められちゃってると思うんだが、小雪ちゃん…？

「…で、どうすんの？ 送ってくならさ、バス代ちようだいよ。イエリーと二人分。私財布持ってきてないし」

「財布持ってきてないのにそんな買い物してきたの…？」

ぼたんちゃんが呆れたような、驚いたような声を上げる。小雪ちゃんも不思議そうに首を傾げた。

「…色々訳があってね。二人分な、大人二人分だから………あ、違うか。お前子供だから、大人1の子供1人分………めんどくせ。ほれ、千円」

「へへへ、ありがたき幸せ、兄者！」

お札を引つたくと、嬉しそうにそれをイエリーに見せびらかす

桂。こうして見ると、なんだか本当の姉妹みたいだ。

「帰りにアイス買おうね、イエリー！」

「おいおい、お釣りは返せよな」

ていうか、イエリーはアイス食えないしな。

電車はカーブを曲がりきって、終点到着を告げる放送を車掌が流していた。

ぼたんちゃんが、座席から立ち上がった。

「シスコンにブラコン……」

「……何か言ったかな、ぼたんちゃん」

北貝梨駅に着いた俺達は、バスに乗る桂とイエリーの二人と別れ、俺、小雪ちゃん、ぼたんちゃんの三人で歩いていた。小雪ちゃん達の家は俺の家とは正反対で、駅の南口を出て右側方向だった。

「じゃあ私、こっちなんで」

「おう」

「えっ、あ……ぼたんちゃん、今日は本当にありがとう」

コンビ二前の交差点で、ぼたんちゃんは角を曲がっていった。小雪ちゃんの家は、もう少し奥にあるらしい。

「……」

「……」

……… 会話が、無い。実を言うところに来るまでの間も、小雪ちゃんとぼたんちゃんの二人だけが喋っていて、俺はほとんどただの荷物持ち状態だった。

ましてや、さっきあんなやりとりがあつたばかりなのだ。引弧モールでの弁明をすべきなのかどうかもわからず、ただただ黙々と、夕方前の住宅街を歩き続けていた。

「あの…」

「あのさ」

沈黙……ああ、また気まずい…。

「…先、どうぞ」

「いや、小雪ちゃんの方からどうぞ…」

小雪ちゃんは何度か下を向いたり俺の顔を見たりを繰り返すと、不意に、立ち止まって、真横の家を指差した。

「…ここ、ぼたんちゃんなんです」

「え？」

見ると、その一軒家の表札には『斉藤』と書かれていた。…忘れていたが、彼女の名前は『斉藤ぼたん』なのだ。

一階はガレージになっていて、洋風のお洒落な造りで、階段を上がった柵の所では小さな犬がこちらを覗き込んでいた。

「何でぼたんちゃん、こつちに来なかったんだ？」

「さあ…」

どっか買い物でも行ったのだろうか？ …いや、さっきコンビニあったよな。あそこまで来て、何で家に帰らなかったんだ？

「小雪ちゃんちはここから近いの？」

「はい、もうすぐそこです。…あの、カラポン先輩。さっき、何を言おうとしてたんですか？」

うつ…。そこはスルーしてほしい所だったのだが、小雪ちゃん…。

「…とりあえず、歩きながら」

「いえ、もうすぐそこですから。ここでもう、教えてくださいっ」

笑った。彼女は、身体を屈めて、上目遣いに俺を見て、作ったような笑顔で笑った。それを何と捉えるべきか…俺は頭をフル回転させて、答えを考え始めていた。

「なんだっけかな、忘れちゃったよ」

「そうなんですか？ じゃあ…」

少しずつ、段々と笑顔が変化していく。小雪ちゃんは、様々な感

情を抑えつけているような、我慢しているような、そんな目をして、口元をきゅっと引き締めた。

「私から、聞いてもいいですか？」

「……何を、かな」

人通りも、車も無い。雲間から、閑静な住宅街に低い太陽が下りてきて、ちょうど小雪ちゃんの真後ろに回りこんだ。きつと、俺の表情は彼女からよく見えるのだろう。

「……ずっと、気になってたことがあったんです。できれば……その……嘘なんかつかないで、正直に答えてください。嘘をつくなとは言いません……あはは……私、何言ってるんだろ」

「……気になってた、って……？」

作り笑い、苦笑い、彼女の不安定な表情と違って、身体はしっかりしていた。ずっと胸に手を当てて、自分を励ますように押さえていたのだから。

「先輩」

やがて、決心が着いたのか。彼女は、力を入れて目を閉じ、そのまま、下向き加減に、俺に問いかけてきた。影になってしまい、そして、太陽があまりに眩しすぎて、彼女の顔は見えなくなってしまうた。

「本当に……先輩は……林檎先輩の、ことが……好きなんですか……！？」

「……！」

シャリ……自然と、小雪ちゃんの買い物袋を持つ俺の手に力が入ったらしい。その音は、なぜかとても大きく耳に轟いて、頭を伝って、胸にまで響いているような気さえしたぐらいだ。

「私、わ……わかんないんです。先輩……カラポン先輩と、林檎先輩、付き合ってるのに……恋人、同士のはずなのに、どうしていつも……どうして、楽しそうじゃないんですか。林檎先輩という時の先輩って……いつも、つまらなそうにしてるじゃないですか。楽しそうにしてるのは林檎先輩だけで……なんか、押し付け

られてるみたいな感じで……だからわかんないです、私……先輩は、本当に、林檎先輩のこと……好きなのかな、って……」

「……」

小雪ちゃんは、顔を上げなかった。…今度は、俺が答える番か。

「小雪ちゃん」

「……はい」

そうか、気付いていたのか。そう思いながらも、俺の頭の中ではもつと違うことを考えているらしく、その思考が順繰り順繰り投影されていた。

（前にもこんなやりとりをしたことがあった）

ブシドーだ。星流山岳公園で、撮影の合間にジュースを買いに行つた時だ。

「俺、林檎が嫌いなんだ」

「………！ ……え、そんな、え………」

ここで止めてはいけない。驚き、顔を上げる小雪ちゃんに動じることなく、俺は口を開いた。

「俺は蒼井林檎が嫌いなんだ。小雪ちゃんが普段感じていたことは、たぶんほとんど正解だ」

「………他に、好きな人がいるからですか？」

それは違う。

「好きな人はいない。………林檎も、好きじゃない」

「……今日会った、あの白い髪の人？ あの小さい子は？」

…イエリーと桂か。小雪ちゃん、やっぱり覚えていたんだ。…当たり前前か。

「いとこと、妹、って言っただろう？」

「そっか………じゃあ、本当に今、先輩には、今、今………今、太陽が雲に入り始めて、少しずつ周りが陰り始め、強烈なあの光が視界から消えていく。小雪ちゃんの顔が、目がよく見えるようになって………」

（………え？）

「先輩には好きな人がいない……って、いうことなんですね……？」
まったく変化が無かったから、俺は気付くことができなかった。
……彼女は、ポロポロと、涙を流していたのだ。

「あ……ああ……そういうことだけど………小雪ちゃん、大丈夫？」

「い、いえ、何でも無いです。これはその……… 何でも無いんです」と言いつつも、いくら目尻を拭いても彼女の涙は止まらなかった。心配になって近付こうとしたのだが、手で制止されてしまった。

「見ないでください……」

「わかった……じゃ、せめてこれ使いなよ……」

荷物を片手に集め、俺はポケットから普段絶対持ち歩いてないようなハンカチを小雪ちゃんに差し出した。今日は暑くなるからと、出かける時に母さんから半ば強引に手渡された物だった。

「……ありがとうございます。あの……荷物ももう、ここまでで大丈夫ですから。ほんと、ありがとうございますました」

「いや、ここまで来たんだから、家まで持つてくよ」

しかし、本当にすぐそこですから、と、断られてしまった。小雪ちゃんは、荷物を俺の手から直接外して、両手に持ち替えていたのだが、やっぱり彼女には重そうに見える。

「無理してない？」

「いいえ！……先輩の手、初めて触っちゃった。あつたかいんですねっ」

林檎を追っかけて走ったりしたからな……手提げが食い込んでたつてのもあるけど、言うわけにはいかないな。

「……知ってる？ 手が温かい人は、心が冷たいんだぜ？」

「そんなことないですよ、私が知ってる話では、心もあつたかいんですよ」

すっかりいつもの小雪ちゃんに戻っていて、いつの間にか涙も止まっていた。俺はあえて、何もコメントをしないでおいた。

「……じゃあ、気をつけて」

「はい。カラポン先輩、今日は本当にありがとうございました」

頭を下げた小雪ちゃんは、今日一番の笑顔をしていたように見えた。…さっきの、嘔泣きだったわけじゃないよな？

（何で小雪ちゃんは急に泣き出したんだろう…？）

両手に紙袋を下げた小雪ちゃんが、だんだんと小さくなってゆく。交差点に差し掛かったらしく、こちらへ振り向いて、荷物を置いて手を振っていた。あつちにわかるよう、俺も大きく手を振り返した。

「さて、帰るか………ん？」

180度振り返ると、誰かが電柱の陰に隠れているらしかった。

…まさか、と思って近付いてみると、あまりにも予想通りな答えに溜め息が出してしまった。

「ノゾキ、ヨクナイ、ジョウレイイハン」

「…そこ、あたしんちだし」

ワンワン——。

階上の小犬が、柵に寄って甘えるような声を上げ、尻尾を振ったり飛び跳ねたりしていた。

電柱の陰から出てきたばたんちゃんは、無言で俺の横をすり抜け、ポストを開けていた。

「何でまっすぐ家に帰らなかったんだ？」

「さあ。そっちこそ何話してたんですか、人んちの前で」

…よく言うよ、聞いてたくせに。もしかして、

最初から覗き見るつもりで、中途半端な所で別れたのか…？

「そうか、想定外だったってわけか。まさか自分んちの前で話し込むとは思わなくて、逃げられる場所も無くて」

「う、うるさい…！ 先輩が優柔不断だからいけないですよ！ 荷物持ってってあげれば良かったじゃないですか、小雪んちまで！」

そしたらばたんちゃんに都合がいいだけじゃないか。なんだか計画的犯行のように見えて、頭の至らなかったことが随分見え隠れしてるような気がする。

「それにしたって、覗きはダメだろ」

「自分が悪いって認めないわけですね。いいですよ、先輩。でもその内、必ず先輩が痛い目を見ますからね！ 小雪を泣かせたら、私絶対に許しませんからね！！」

ぼたんちゃんは階段を駆け上がって行くと、門扉を開けて小犬のジャンプを屈んで受け止めていた。かなり熱烈な愛情表現を受けているようだ。

「おい、覗きの謝罪は？」

「覗いたんじゃないやありませんっ、偶然、ばったり、思いがけず見ちゃったんです！」

彼女は振り向きもせずになんか言い放った。悪いと認めてないのはそっちじゃないか……そう思いながら、俺は地面にあぐらをかいて座り込んだ。

「そんじゃー俺もばったり、偶然、思いがけず見ちゃったなー！うちの妹とおんなじ、白地にハート柄のパンツ！」

実は見えてなかったケド。相当激しく動揺したのか、慌ててお尻を封筒で隠し立ち上がったぼたんちゃんは、顔を真っ赤にして向き直っていた。

「バカっ、スケベ！ 女の敵！ 覗き魔！！」

「やっぱ覗きじゃねーかつ、謝れよおら！！ なら俺が先に謝ろーか？ パンツ覗いてすみませんでしたーっ！！」

土下座してみせる俺。チラッと“覗いて”てみたが……あ、やつぱり違った、普通の白だった。

「な、な……馬鹿じゃないの？！ 恥ずかしいからやめて！！ 他の人に聞かれちゃうでしょ！！」

「ああーん？ よく聞こえないからもっとデカく言えー？」

ぼたんちゃんの、白いパンツを覗いてしまつて、ごめんなさあーいっ！！！！

再土下座。すると、カンカンカン、という階段を駆け下りるような音が近づいてくるのが聞こえた。

「やめてって——」

「覗きつて嫌だろ」

顔を上げると、スカートが目の前にあつた。スカートに話しかけたつてしょうがない、視線を上げると、眉間にシワをよせたぼたんちゃんの顔があつた。

「ム力ついただろ。他人に見られたくないもんを、わざと覗かれたら」

「それはあんたが……」

「俺じゃねえよ！」

……ぼたんちゃんの顔に、怯えのような物が浮かぶ。……少し力み過ぎたか、俺は意識して声のトーンを落とし、彼女の肩に触れた。

「……小雪ちゃん、泣いてたのわかつたろ」

「触らないでください」

「いいから聞け！」

……もうなんだか感情が抑えられない。目を閉じ首を背けるぼたんちゃんに構わず、俺は彼女の両肩を掴んでいた。

「お前が何で嘘まで吐いて俺達を覗いてたのかはわからない。ただだな、小雪ちゃんはたぶん、誰にも聞かれたくない話を俺にしていたんだ。少なくとも俺はそう思った」

「それは先輩が……」

「最後まで聞け」

反抗しようとする度に彼女の顔は苦痛に歪む。だがそれ以上に、俺の彼女を許せない気持ちは勝っていた。ここで止めるわけには、いかない。

「小雪ちゃんは泣いてた。お前は自分が泣いている所を他人に見てもらいたいと思うようなDMなのか？」

「………違います」

それはとても小さな声だった。

「じゃあ小雪ちゃんだってそうだろう。彼女はきつと君に見せたくない所を見せてしまった。もしかしたら、君のことには気づいてい

たかもしれない」

「……気づいてないかもしれない」

「だとしてもだ」

飼い主の異変を感じ取ったのか、小犬が一段一段、階段を下りてきては、こちらを見ていた。

ワンワン。

さっきぼたんちゃんに向けてたのとは、明らかに違うような鳴き声を発しだした。

「……隠すのか？ お前と小雪ちゃんは、そんなコソコソした秘密を隠し合うような、信頼も無い友達なのか？ 友達じゃねえな、そんなの。お前ら二人友達なんかじゃないんじゃないの？」

「違う！ 私と小雪は友達！ そんな関係なんかじゃない！」

「だったら謝れよ！ 友達ならよお、信頼できる友達ならよお、ちゃんと謝ってこいよ！ それで終わっちまうような仲ならよお、最初から友達なんかじゃなかったんだよ！ 信頼できんだろ小雪ちゃんのこと？！ なら平気じゃねえか！ 謝ったって平気だってわかってんならよお、ごめんなさいぐらい簡単に言えることなんじゃないのかよ！！」

逃げようとするぼたんちゃんを、俺は渾身の力で掴み止めた。彼女は殴る蹴る激しく抵抗してきた。

「離して！」

「離すかよ！」

ワン！

階段を下りきった小犬が、突然俺の足に飛びついてきて、俺は思わず掴んでいた両手をぼたんちゃんから離してしまった。

その隙に階段を上っていった彼女は、玄関に入っていつてしまったらしく、大きく扉を閉める音がここまで聞こえてきた。

小犬もまた、ひとしきり俺の足にまとわりついた後、飼い主を追いかけるようにして、たったか階段を上っていつてしまった。

「ちっ……強情な奴め」

本当に人通りの少ない住宅街で良かった。でなければ、下手したら警察を呼ばれるような騒ぎになっていたことだろう。ぼたんちゃんの家も留守なのか、あれだけ大声で叫びまくってたのに、結局誰も出てこなかったしな。「……………帰ろう。ビデオの編集もまだ残ってるしな……」

長い一日だった。イエリー到着に始まり、小雪ちゃん、林檎とのトラブルが続いて、ついにはぼたんちゃんと喧嘩までしてしまった。……なんという厄日。……いや、女難日か？ ハハッ。

「笑えねーつつの……」

家に帰れば、桂と母さんという女難がまた待ってるしな。

ああ、帰るのが憂鬱だ……………。

焼け始めた西の空に背を向けて、ようやく俺は家路へとついたのであった……………。

——でもまさか、その日の内に更なる女難が待ち構えていたなんて……………。

「ただいま……………あ！？」

「よっ！ お帰り、カラポン星人……！」

「ご無沙汰しております唐林様。あつ……昨日お会いしたばかりでしたね、失礼致しました」

幕間『次回予告』（前書き）

テレビアニメの次回予告チックな感じで。

幕間『次回予告』

前回までのあらすじ――

カラポン
唐林拓二は同じ夢に何度もうなされていた。彼女の蒼井林檎が、実はロボットであり、カラポンを殺そうとするのだ。

しかし、夢の最後には必ず、カラポンの方もロボットとなって、林檎を返り討ちにしてしまう。

何度も同じ夢を見ていく内に、本当に林檎はロボットなのではないだろうか、カラポンは疑い始める。

ある日、カラポンは『スージイ・長万部』スージマンという少女と出会う。彼女もまた、蒼井林檎がロボットかもしれないと疑っていた。

おもちゃ会社の社長であるスージマンは、カラポンを自分の会社へと連れていき、既にほぼ完成型となっていた、人型ロボット三体を披露する。

アヤミクB、イエリー・マナヤ、エルグナ・ラクサ。三体のロボットは、いずれも人間そっくりで、外見だけでは全く人との区別がつかなかった。

そして、林檎の真相を確かめるべく、コイントス社からカラポン宅に、イエリーが送られてくる。

カラポンは裸で送られてきた彼女のため、妹の桂と共に洋服を買いに出かける。

しかしそこで、メディア部の後輩の小雪、ぼたん、そして蒼井林檎にイエリーの姿を見られてしまい、蒼井林檎はカラポンに何も告げることなく、その場を去ってしまう。

誤解を解こうとするカラポンだが、蒼井林檎にはとうとう追いつけなかった。

自宅へと帰ってきたカラポン、そこには……

「ただいま」……………あ!？」

「よっ! お帰り、カラポン星人!」

「ご無沙汰しております唐林様。あっ…昨日お会いしたばかりでしたね、失礼致しました」

…ボタン。頭より先に、手が動く時があるだろう? だから今は、ドアを閉めたのではなく、ドアが“閉まった”と俺の頭は解釈していたらしい――。

―― 起動不能に陥るイエリ――

「FD容量限界、キャッシュメモリ過負荷、リブートスパイラル、オーバーヒート…」

「…やっぱりまだ、早すぎたのかなあ……………」

―― 繰り返される悪夢――

「あなたは何も恐れることはない。私はあなたを守る…それが私の使命」

「カラポンはああ、ああたしんだあああああああ!……………」

―― 心を揺さぶれる少年少女――

「……………ちょっと、言い過ぎた」

「関係無い」

「……………ねえ、もっと、私を必要としてよう。私がカラポンをどれだけ必要としてるのか……………教えてあげるから……………」
「もー、いーかーい？」

—— 繋がっていく違和感に、拓二は ——

「……………なんだ、これ……………？」

■ ■ ■ ■ ■ K a r a p o n t h e S t o r y ■ ■ ■ ■ ■

■ ■ ■ ■ ■ 次回 ■ ■ ■ ■ ■

■ ■ ■ ■ ■ 5 『ミステイク』 ■ ■ ■

8 / 2 3、更新予定

幕間『次回予告』（後書き）

コミケ週間につき、こんなんで勘弁してください（苦笑

5 『ミステイク 前編』（前書き）

再編集により、1～4を統合しました。

5『ミステイク 前編』

前回のあらすじ

林檎の真相を調べるため、拓二の家にロボットのイエリーが送られてきた。

彼女の服を買いに妹と出かける拓二だったが、後輩達と林檎に見つかってしまい、浮気をしたと勘違いされてしまった。

小雪を送り届ける拓二と別れたイエリーと桂は、ひと足先に自宅へと向かうのだった。

「…あんまソレ、人前でやらない方がいいと思うよ？」

ツツツ、ツツツツツ……

ヒンヤリとしたバスの中で、小さく鳴り響く磁気の書き込み音。フロップीडィスクをかじるイエリーは、俯き気味に、しかし熱心に、黙々とデータの書き込みを行っていた。

「私のキャッシュメモリは容量が大きくありません。蓄積された一時データは外部メモリに保存しなければ、演算能力が著しく低下し影響を与えます。特に今日は、多くの新しいデータを取得しました」
そう言い終わると、再びフロップीडィーに口を付けるイエリー。ガタンとバスが揺れても、一心不乱にかぶりついているその姿は、まるで子供がゲームに熱中しているようにも見えると、桂は思った。

「……………まあ、いつか」

『次は、下貝梨、下貝梨でございます……………』バス停を告げるアナウンスを確認して、桂は手すりに付いた押しボタンを押した。小さな電子音がして、バス中の押しボタン機が赤く点灯する。その瞬間、イエリーが驚いたように座席からスッと立ち上がった。

「今のは…？」

「え、ボタン押したただけだけど。次で降りますよーって言うのを、運転手さんに教えるんだよ」

「次、止まります。バスが止まってから、席をお立ちください……」

「……」 何に驚いたのだろうか？ バス停に止まるまでの間、イエリーはずっと立ったまま、フロップीडィスクをかじっていたのだった。桂はそんなイエリーを不思議そうに、しかし、見守るような優しい目で見ていたことに、自分では気づいていなかった。

「この地域の名前は？」

「下貝梨だよ。下って言うのは、貝梨市の南側って意味なんだよ。もう少し南の方に行くとかね、すぐ海が見えるんだよ！ イエリーは海行ったことある？」

看板、電柱、公園、犬、セミ。自宅までの短い距離の間で、イエリーは桂にたくさん物の物について質問をした。桂がそれに答えると、イエリーはフロップीडィスクをかじってデータを保存する。その繰り返しだった。

「……海というデータは保存されていません。私が行ったことのない所ようです。海とは、どのような所なのでしょう？」

「うーんとね……青くて、大きくてね、水がいっぱいある所って言えばいいのかな？ 海の水はね、スツツゴいしょっぱいんだよ、辛いくらい！」

「しょっぱい……辛いくらい？」

イエリーは首を傾げながらも、新しいデータをフロップीडィスクに書き込み始めた。

……ツツツツ……ツツ。

すると、イエリーはディスクから口を離れたかと思うと、それまでずっと手に持っていたソレを、スカートのポケットにしまいこんだ。

ポケットから2、3枚のフロッピーを取り出してはかじって確かめていたが、結局、全部のフロッピーディスクをポケットに入れてしまった。

「どうしたの？」

「フロッピーディスクの容量が限界に達しました。新しいディスクをお持ちではないでしょうか？」

新しいディスク？　しかし桂の荷物は、引弧モールで買い物した洋服の紙袋だけだった。ましてや、今日初めて見たようなフロッピーディスク。家にあるかどうか分からない。

「ごめん、私は持ってない。拓にいの部屋にならあるんじゃないかな？」

「…いえ。この3枚が、マスターカラポンの部屋にあった最後のフロッピーディスクです。…容量限界です。会話ログの保存を一時中断、身体保護の為の重要プログラム以外の削除候補検索を開始します」

イエリーが何を言っているのかは分からなかったが、何か大変なことが起きはじめているのかもしれないと、桂は思った。早く家に帰らなければ――。

「と、とにかくさ、早く帰ろうよイエリー！　ディスクがあればいいんでしょっ！　あるよきつと家に、早く帰ろ！」

歩みを止めてしまったイエリーの手を引き、走り出す桂。危なげな足取りで、イエリーは上を向いたまま走り出していた。

「フロッピー？　へえ〜CDとかブルーレイとかじゃないんだ。面白くないイエリーって」

「そんなことはどうでもいいから！　ねえお母さん、無い？　新しいディスク」

乾電池や電球などを置いている棚を探してはみたものの、やはり

ディスクは見当たらない。父親の部屋のパソコン周辺も探してみたが、見つけることはできなかった。

「うーん、困ったなあ。パソコンで使う物なんて、あたしよくわかんないし……… ったく、こんな時にクソ兄いはどこほつき歩いてんだか！ …… あれ？ イエリー、何してるの？」

イエリーは階段の踊り場にしゃがみ込んでいた。ティッシュやトイレトペーパー、カップ麺などが詰め込まれている棚がある所だ。「初めて見る物がたくさんあります。これらについて、桂は何か知っている物はあるでしょうか」

「知ってるも何も、うちにある物だし… うん。それは缶詰って言うて、保存食なんだよ。イエリーが持つてるのは焼き鳥缶」

保存食とは？ 缶の構造、中身の取り出し方、ラベルに描かれた屋台のイラストの意味、疑問は続々と湧いてくるらしく、乾パンや水のペットボトル、レトルトカレーなどでも同じようなことをイエリーは聞いてきた。

「これこれ何だい、邪魔つけだねえ。そんなところでお店広げてるんじゃないよ」

「うわあ、ごめんお母さん！ ちょっと待って、今片づけるから！」

階下からドッド、ドッド母が音を立てながら上がってきて、開け放たれた戸棚の中身を避けて踊場を通ろうとしてきた。カップ麺やらを端に寄せる桂の一方、イエリーは踊場を遮る形で、まだ夢中になつて非常食を吟味していた。

「はい、イエリー、ちょっと後ろ通るかね。はいはい、ごめんなさい……… よ？」

何と言うことはない、ただその場を通り抜けようと、母がイエリーの後ろを跨いで通ろうとしたのだ。

その時、二人の足と背中がただ少し触れた。ただ、それだけだった、のだが………

「…………… あ？」

「お……つちやいい、つあち!!？」

——ゴトン、という音ともに、崩れるカップ麺の山、そして横倒しになるイエリー。母は階段の手すりに寄りかかって、しきりにスネを手ではたいていた。

「イエリー!？」

「あちい! 熱いよその子! 今触んない方がいい!!」

熱い? さっきまで全然そんなことは無かったのに。でも桂は見失ってしまった。

カップ麺を包装していたビニールが、イエリーに触れた瞬間に波を打って、溶け始めていたのだ。

「どうして……? イエリー、イエリー! 大丈夫なの!? ねえ、どうしたらいいの私!？」

イエリーは倒れたまま答えず動かない。発熱で、空気が澱んでいるのが目に見えるほどの高温がイエリーから発せられている。混乱した桂には何も考えることができず、母もまた自分の焼けどを冷やそうと階段を上っていつてしまった。今イエリーを助けられるのは、自分しかない。

「どうしよう……?！」

——ピンポン。ピンポン、ピンポンピンポンピンポン……

……。

その時、唐突に家に鳴り響くインターホンの音。拓二が帰ってきた……? それにしては何度も連打して、段々と荒々しくなっているような気がする。

「だ、誰……?」

ドンドンドン!

ついには扉を叩き始められて、桂は危機感と共にただ事ではない雰囲気を感じていた。イエリーのことがか心配だったが、玄関へ行くべきだろう。その人にイエリーの助けを求めることだってできるは

ずだ。

「…ごめんイエリー！　すぐ戻ってくるから、待っててね！！」

玄関に降りてくると、いよいよドアを叩く音は大きくなってきていた。足でも蹴飛ばしているのか、時たま一際大きな音がすることあつて、桂の手を躊躇させていた。

（そうだ、インターホン…！）

リビングに入った桂は、壁に掛かった受話器を取った。モニターに電源が入って、外の様子も分かるタイプだ。

「…はい、どちら様で——」

『おしっこーっ！！！！』

割れんばかりの大声と共に画面いっぱいに映し出されたのは、見知らぬ少女の苦悶した顔だった。あまりにカメラに近く、ツバで画面が歪み、桂は思わず受話器を落としてしまった。

「お、おし…？」

『は～～～や～～～く～～～！！！！　ヤバイヤバイヤバイ、漏れちゃうよおおおお！！！！！！』

ドンっ！　ドンっ！！　…玄関から聞こえる扉を叩く音よりワントンポ遅れて、画面の少女がZ軸に沿って揺れている。扉を叩いていたのは、このショートヘアの少女のようだった。

「わ、ちょ、今開ける！　開けますからっ！　もう少し我慢して！！」

こういう時に限って受話器がうまく掛けられない。ガチャガチャという音が煩わしくて、とうとう受話器を宙ぶらりんにしたまま、桂は玄関へと走って行ってしまった。

そうこうしている間にも、玄関の扉は激しく叩かれ続けている。早く開けなければ——。桂は急いで玄関の鍵を開けた。

ピピピピピピピピピピ！！！！！！！！

「イエリー！！」

「おしつこお!!」

「えっ、え…、え…??」

鍵を回した瞬間、勢い良く開いた扉に怯んだ桂の横を、誰かと、耳障りな警報音とが通り過ぎていった。それも一人ではない。一人は一目散に階段を上り、一人は廊下を突き進んで手近のドアを開けて中に突っ込んでいた。

「ドラム型洗濯機っ!」

「…トイレはその隣」

桂の言葉をちゃんと最後まで聞いたか否か、ショートヘアの少女は隣の扉の中へと飛び込んで消えた。きっと電気が点いていないと思いい、桂はさり気なく壁のスイッチを押してあげた。

「まーったく、スージイったら下品なんだから。トイレぐらい出かける前に済ませときなさいよね」

唐突に後ろから声がして、桂は身を震わせて驚いた。玄関にまだ誰かいたのだ。

「あらごめんなさい。驚かせちゃったかしら?」

「…どちら様でしょうか? 今ちよつと、けつつつこつ、取り込んでるんですけど」

玄関に入ってきたのは、ウィンドレスのような服を着た女性だった。あまりにも綺麗な、まるで造ったかのような美しい曲線を描く身体。

桂は無意識に語気を強くしていたことに気づいていなかった。

「あんたは………フン、コイントスのデータベースに入っていないってことは、ファーストコンタクトみたいね。私の名前はエルグナ・ラクサ。神経接続式・有機演算駆動型ヒューマノイド、まあ早い話が人型ロボットよね。あんたは?」「ロボット……イエリーの仲間なの?」

エルグナは腰に手を当て、見下すように首を上げる。

「聴いてるのは私よ。あんたの名前は何?」

「…唐林、桂です」

「ああ、カラポン・Kってわけね。よろしくね、K。よつ、と」

エルグナは土足のまま一段跳ね上がると、ズカズカと廊下を歩いていき、階段の手すりに手を掛けた。呆然と見ていた桂が慌てて止めに入った。

「ちよつと！ 靴ぐらい脱いでよ！！」

「うん？ 何でよ、靴なんてお風呂の時ぐらいしか脱がないでしょ。私まだお風呂の時間じゃないんだけど」

「そんなの関係ないっ、うちが汚れちゃうでしょう！！ とにかく脱いでつてば！」

ロボットはイエリーみたいにみんな常識知らずなんだろうか？

桂はそんなことを考えて、そうだ、さっき倒れたイエリーはどうなったのだろうと思ひ出した。

「ふうん、緊急事態でも靴つて脱がなきゃいけないの？ アヤも律儀よねえ。ていうか、人間が？」

エルグナは階段の踊場を指差して言う。アヤ？ 何のことを言っているのだろう。桂はエルグナの横をすり抜けて踊場へと段を飛び上がった。

「わっ……！」

桂は驚いて、危うく階段から落ちそうになった。またしても見知らぬスーツ姿の女性が、仰向けになったイエリーに馬乗りして服を剥いでいたのだ。それは遠目に見れば、まるで強姦にでも遭ってるような光景だ。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。……。

さっきの警報音はこの人から鳴っているらしい。彼女はドリルのような工具を使って手早くイエリーの胸のカバーを開くと、スカートの中から通信ケーブルのような物を引き出して接続していた。

「FD容量限界、キャッシュメモリ過負荷、リブートスパイラル、オーバーヒート、エンブティータンク………どういうことでしょう、

ロックオンバスターの冷却履歴が1時間以内に2回も…？」

シャッ、という音がして、ケーブルを繋いでいるイエリーの胸元から黄色のフロッピーディスクが飛び出てきて、彼女はそれを取り出すと、どこから取り出したのか、別の黄色いフロッピーディスクを代わりに差し込んだ。

「一緒に配送したポリタンクがあるはずですよ！どこにありますか！」

「えっ、え……ポリタンク？」

「おうよっ、こいつのことかい！」

二階から赤いポリタンクを担いだ母が、ダツダツダと降りてきて、ドンとタンクを踊場に置いた。スーツの女性はケーブルを外すと、イエリーのお腹から蛇腹状のホースを引き出して、ポリタンクの口に差し込んだ。

「それじゃ入っていかないんじゃない？ポンプは？」

「手動の非常用ポンプがあります」

そう言うと、何をするのかと思ったら、胸のカバーを更に開いて胴体から首にかけての内部機構を剥き出し状態にした。ピーナッツバターのような臭いがして、桂は思わず顔をしかめた。

「あなた方も覚えておいてください。真ん中にあるのが燃料メーター、向かって右が給油用、左が排出用です」

「へえ…何だか制作者の意図が垣間見えるような造りだねえ」

「いや、ていうかそれ、……あゝ、」

桂が目を逸らすのも無理は無い。何故ならそのポンプは、人間でいう乳房がある場所に左右一つずつ配置されていたのだから。

スーツの女性が、向かって右側のポンプを握りしめると、ポリタンクの中であぶくが立って、ジョロジョロと音を上げながら軽油がイエリーの中に入っていった。

「あゝスッキリしたあ。あっ、イエリーやっぱただの燃料切れだった？」

「あ…さっきのちびっこ」

階段を上がってきたのは、グレーのスーツを着たショートカットの少女だった。スーツ姿、ではあるのだが、小さな身体にはどうにも違和感があつて、それに、『ちびっこ』という言葉に、随分と反応をしているように見えた。

「ちびっこじゃないもん。私の名前はスージい長万部、聞いて驚けっ、株式会社コイントスの社長！　どうか参ったかつ、社長だぞっ、偉いんだぞっ！」

「社長……？　おしっこ漏らしそうになつてたのに？」

「あう、あうう……う、うるさあい！！　漏らしてなんか無いしっ、ちよつと我慢してただけだしっ、ばかあ！」

スージいと名乗った少女は、みるみる内に顔が赤くなつていつてあつという間に耳まで染まりあがつてしまった。そんな彼女の両肩を、後ろからポンポン、と撫でるように叩く者がいた。エルグナだった。

「Be quiet, Suzi-man！　今はそんな小娘と喧嘩してる場合じゃないでしょう？　アヤの報告を聞きましょう、イエリーが今どうなっているのか、それを確かめるのが先決だわ」

「そ、そうだよねエルグナ！　今コンナ小娘ヲ相手ニシテイル場合デハ無イ！　ビシイっ！」

スージいは奇怪なポーズをとりながら、両手で桂を指差した。顔の後ろ半分がエルグナの胸に埋まっているようで、なんだかとても滑稽だった。桂はつつこむ気力も失せてしまったようだ。

「で、いったい全体どうなつてんだい。イエリーちゃんは大丈夫なのかいな」

高い所から見下ろすように見ていた母が、その場をまとめるような的確な質問を発すると、それまで鳴っていたピピ……という警報音がふつ……と鳴り止み、スーツ姿の女性……アヤと呼ばれていた女性……がおもむろに立ち上がつて、桂やスージい達の顔を見比べた。

「……………危機は脱しました。しかし、安全と言える状態では決してありません」

「それって……どういうことですか？」

桂は思わず聞き返していた。彼女は、一瞬目を細めて桂を見ると、納得したように小さく頷いた。

「申し遅れました。わたくしはアヤミク・B、コイントス社所属の内勤特化型アンドロイド。イエリー・マナヤは姉妹機に当たります」
恭しく頭を下げられて、桂は、母までもが釣られてお辞儀を返していた。

「あ、ども……」

「これはこれは」

頭を上げたアヤミクは真剣な表情をしていた。それは、今のイエリーの状態を表しているからに違いない。桂は、そう思った。

「動作履歴を詳しく調べてみなければハッキリとしたことは分かりません。ですがこのままだと、最悪の場合イエリー・マナヤが再起不能に陥る恐れがあります。それほどに、エラーログは深刻な内容でした」

「……ログ、見せて、アヤビー」

アヤミクは先ほど取り出した黄色いフロッピーディスクを、スージに手渡した。

「この家って、パソコンありますか？」

「イエリー・マナヤは人間の汎用性再現を重視して造られたため、我が社でも初期型に部類されるロボットですが、その環境適応性、応用発展力は未だに引けを取っていません。稼動持続時間の長いパワーディーゼルエンジン、スタンダードG・B・A・I、私達第二世代と呼ばれる『特化型アンドロイド』には無い装備も施されています」

「えっと……よくわかりません」

拓二の部屋のパソコンを起動したスージは、カチカチカチカチ

とマウスを打ち鳴らし、時々、カタカタカタとキーを打ち込んでいた。

「たぶんカラポン星人が説明してないんだよ。この子達ホントに何も知らないみたい」

こんな小さい子に『この子』と言われて、桂はいい顔をしなかった。いくら社長だからといって、初対面の相手に言いたい放題言われて、気分のいい人のほうが珍しいだろう。

「社長って何歳なんですかー？」

「んー？ 11歳だけとお、なんで？」

桂は目がパチクリするほどの衝撃を受けた。スージいと桂は同年だったのだ。

「そつえばあなたのお名前なんてーの？ カラポン・ザ・シスタ
ー？」

「唐林桂です。桂って呼んでください、タメなんだしっ」

そうなんだっ！ と、スージいはニマッと嬉しそうに笑った。隣のアヤミクも、なぜだか微笑んでいた。何か勘違いしている？

「スージイ。出たんじゃない、ログ？」

「あ、出た？ …… うん、アヤビーが言った通りだね」

パソコンモニターには、黒地のウィンドウがポップアップされ、白地の文字列がズラズラと流れ出ていた。日付と時刻のような数列と、英語のような単語がワンセットになっているようで、次々と下から上へと流れていく。

「ここから今日の履歴ってわかる？ 今日の日付、それから記録された内容とか、エラーの種類とか。この番号の組み合わせがデータの種類を表してるんだけど…… まあいっか。説明すると時間かかるし。大事なのは、ここからここ…… だね。今日の13時から16時頃にかけて。ログの量が急に増え始めてるの、わかるかな？」

スージイが指し示す範囲。たしかに、短い時間で多くの情報が書き込まれていらしく。似たような数字の列が連続して並んでいた。「イエリーの症状を説明すると、倒れた原因は大きくわけて3つ。

1つ目は『データのパンク』。イエリーには、自分の記憶とか、集めた情報データを保存するのにフロッピーディスクを使ってるんだけど、そのフロッピーが満パンになっちゃったってわけ」

スージいは、フロッピーの使用領域と空き領域を円グラフで示した画面を出した。青色の使用済み領域が完全に円を形成していて、ピンク色の空き領域を示す部分は、細い線のような形でしか表示されていない。

「使用領域99・99%、空き領域0・01%。あと、イエリーがポケットに入れてたフロッピーが3枚あつただけど……ほら、同じような感じでしょ？」

イエリーはパソコンから黄色いフロッピーを取り出して、黒い普通のフロッピーを挿して、同じ画面を表示させた。ツツツという、イエリーがフロッピーをかじっていた時と同じ音がした。

「ほんとだ、全部いっぱい」

他の2枚も同じことをしてみたが、やはり、グラフは全て同じ。使用済み領域で埋め尽くされていた。

「そうすると、新しい情報データをディスクに保存したくても、満パンだから入れられないでしょう？ キャッシュメモリって言って、計算用の別のメモリがあるんだけど、イエリーはそこにまでデータを保存し始めちゃったの。」

言ってることわかるかな？

桂はいまひとつわからなくて、母と顔を見比べていた。アヤミクが口を開いた。

「キャッシュメモリは、人間で言うなら呼吸したり、心臓を動かしたりなど、生命活動をするために必要な計算をするための電卓、指令器と言えます。手を動かしたり、歩いたり、物をつかんだり……」

キャッシュメモリにまでデータを保存し始めたということは、その分そういった行動をするための計算能力を落とすということ……つまり、自分の身を少しずつ危険な状態にしながら、見たり聞い

たりしたことを覚えようとしていたということなんです」

「あ……」

「二つ目は過負荷！」

桂は言葉を発しようとして、スージいっ重なってしまった。エルグナはその一瞬の桂の変化に気が付いたが、一瞬促そうとして、あえて、そのままスージいに喋らせていた。

「ディスク容量はいっぱいなのに、もう一度データを保存しようとする。もちろん無理でしょう？　だけど、イエリーはそれを繰り返して、むしろエラーログを更に増やしてしまったの。そのログはどこに保存されたと思う？」

スージいは自分の頭を指差して、ピストルを撃つような仕草をしてみせた。

「またキャッシュメモリにデータが増えたわけ！　そうこうしてる内に、とうとうキャッシュメモリまで満パンになって、もうどうしようもない！　何もできない！　だけど同じことを繰り返し繰り返し再起動リブートされる！　そして最後の3つ目！」　「燃料切れ……ってわけねえ」

ぼそりと呟いたのは母だった。

「ご名答！　再起動を繰り返し指示していく内に燃料の軽油が切れてエンプティー！　エネルギー源を失って、イエリーはようやく活動を停止したってわけ！　さっきのイエリー、スッゴク熱かったでしょう？　ディーゼルエンジンがフルパワーで動き続けてた証拠だよ」

桂は拓二のベッドに運ばれたイエリーをチラと見た。さっき、床に接していた右半身側だけ、服もズボンも生地が変色し、伸びてしまっているように見える。

母が熱がつていたのも、納得できる。

「……ま、つまりだけど。記憶容量も少ないくせに、色々詰め込もうとして、エラー連発の熱暴走の末に、燃料切れ・ハイお陀仏ってわけよ。こう言えばあんたにも分かるでしょ、K？」

それまで壁に寄りかかって聴いていたエルグナは、小バカにしたような目つきで桂に言い放った。桂もさすがに我慢ができなかった。
「…そういう言い方、無いんじゃないですか。ロボットのくせに生意気…！」

「じゃあ聞くけど？ イエリーに容量オーバーになるぐらい、色々なことを教えたのは誰？」

「…エルグナ、それ以上はやめなさい」

アヤミクはエルグナを手で制止しようとするが、エルグナはアヤミクを睨みつけると、その腕を払って桂に歩み寄った。

「ロツクオン・バスターを手動で発射させたのは誰？ 何の予備知識も無いのに、イエリーを外へ連れ回したのは誰？ さあ誰、ねえ！」

「何でそんなことまで…」

やっぱり、と言われ、桂はしまったと思った。

「あんたは知らないだろうけど、私達はカラポン星人…唐林拓二と会ったことがあるのよ。ヘタレよねえ、あんな性格じゃ、イエリーを外に連れ出すどころか、押し入れにでも隠してしまってたんじゃない？」

ましてや、イエリーの手を取りあげて、町中でバスターを発射させるだなんて、そんな非常識なことをやる度胸があいつにあると思う？ ムリムリ。となると…他にその時一緒にいたのは、誰だったかしら…？」

エルグナはもう分かりきった質問をしている。そしてその先に言おうとしていることを、桂も、アヤミクも読み取って、俯いてしまっていた。

「ハッキリ言わせてもらおうわ。イエリーが倒れたのは、あんたのせいなのよ、K」

「…とまあ、カラポン星人がいない間にそんなこともあつてね」
「はあ…なるほどなあ」

どつりで皆がお茶してるのに、桂の奴が見当たらないわけだ。
帰宅して早々、また面倒くさいことになっちまったなあと、俺は
特大の溜め息を床に落っことした。

——つづく

5 『ミステイク 前編』 (後書き)

猫電が全然書けないのは、カラポンも書けてないからなのです…

5『ミステイク 中編』（前書き）

再編集により、5〜9を統合しました

5 『ミステイク 中編』

「ハッキリ言わせてもらおうわ。イエリーが倒れたのは、あんたのせいなのよ、K」

「…とまあ、カラポン星人がいない間にそんなこともあつてね」
「はあ…なるほどなあ」

どうりで皆がお茶してるのに、桂の奴が見当たらないわけだ。
帰宅して早々、また面倒くさいことになっちまったなあ、俺は特大の溜め息を床に落つことした。

「…いや、つかさ、肝心のイエリーはどうなつたんだよ。随分とくつろいでるみたいだけど、もう目が覚めたんじゃないのか？」

「ううん、まだ。ていうかー、本社持つてかないと無理だと思う」
「ハア！？ …俺は思わず、大きな声を出してしまっていた。「チ

ッ。あんたもちゃんと監視しときなさいよねー、マスターカラポン様あ？ こんなイエリーの一大事つて時に、ご主人様はいつたいどこへお出かけになられていたのかしらあ？ あーあ、イエリーったら、ほつたらかしにされちゃってかわいそうな子よね、ほんと」

「エルグナ…！ 口を慎みなさい」

もう一瞬アヤミクさんの言葉が遅ければ、俺はエルグナに掴み掛かっていたところだろう。

フン、と鼻を鳴らしたエルグナは、堂々と机に足を乗せ、目を逸らしていた。

ガチャン、と、食器が音を立てた。

「…イエリーはどこにいるんだ、スージマン」

「ん、カラポン星人の部屋借りてる。桂も一緒じゃない？」

…1階の賑やかさが嘘みたい、2階の廊下は死んだように静かだった。電気も付いてなくて、少し薄暗い。

コンコン。

「…なんで自分の部屋にノックして入るんだ？」

無駄なことをしてしまった。…どうしてそんなことをしてしまったのかも、今一つよくわからない。

ドアノブを握ると、奇妙な緊張が手を伝ってくるのを感じて、なんだかとても自分の部屋に入とは思えないような気持ちになっていた。電気が、付いていた。

「…………桂、か？」

返事は無かった。しかし、真っ先に目についたのは、椅子に体育座りしてマウスをいじっている、桂の姿だった。カチ、カチと、クリック音が定期的に鳴っていて、パソコンで何かをしているらしかった。

「…ただいま」

「……………」

桂は返事をしないで、目をこちらに向けて、また画面に戻ってしまった。

「…ん」

イエリーは俺のベッドの上に寝かされていた。綺麗な姿勢で上を向いていて、ブランケットが掛けられている。ちょうど、コイントス社で初めて会った時の格好に似ていたかもしれない。

「まだ30分も経ってないよ。私たちが帰ってすぐだったし」

「…………そうか」

ブランケットから右手がはみ出っていて、俺はそのイエリーの手に触れていた。あんなにヒンヤリと冷たかったのに、ハッキリと違いがわかるほどの温もりを帯びている。なぜだか、引弧モールの入口でイエリーに『冷却』してもらった時のイメージが頭をよぎった。

「私のせいなんだって」

「…何が」

キュルキュルと、椅子ごと振り向いた桂は、思っていたよりは普通の顔をしていた。蛙のような格好をして、俺ではなく、イエリーの顔を見ていた。

「聞いたんじゃないの、話」

「簡単には…でも、全部が全部お前のせいじゃないだろう。偶然が重なっただけだ、桂が悪いわけじゃない」

…と、思う。エルグナが言っていたことは全て本当だけど、桂に全てを押しつけるのはなんだか納得がいかない。それに、

「俺が意地でもイエリーを外に出さなければ、全部防げてたことなんだ。責められるのは俺の方さ」

「……………」

「お茶おかわりいるかい、スジマンちゃん」

「欲しい！でも茶柱立てないでね、飲みにくいから！」

アヤミクはテーブルの上にノートパソコンを広げ、キーを打ち込んだり、カチカチマウスを動かしたりしていた。その電源ケーブルの先は、スカートの中に消えていた。

「アヤまだ終わんないのー？大きい車で来てるんだしさー、イエリーそのまま積み込んだじゃえばいいじゃない。本社の方が早く終わるって」

「もう少し待ってください。最低限やれるだけのことをここでやっておきたいんです。あと4分51秒で終わります」

カタカタと、キーを打つ速度が速くなっていくアヤミクを見て、エルグナは不躰に乳白色をした脚を机の上で組み替えた。両手を頭の後ろに持ってきて、椅子に寄りかかって揺れている。

瞬間的に、エルグナの視界がY軸方向にブレた。

「痛い！」

「コレ！ レディがそんなお行儀の悪いことするんじゃないよ。せつかくの美人が台無しじゃないかい」

器用にも、湯飲みを乗せたお盆を揺らすことなく、母はげんこつを落としていた。エルグナは椅子ごと倒れそうになって、慌ててテーブルにしがみつき、ガタン、と激しく揺らしてしまった。

「…エルグナ！！」

ノートパソコンに向かっていたアヤミクが、手を止めて睨みつけていた。しかし、エルグナはまた椅子に寄りかかって、不満そうな顔をしていた。

「今のはあたしのせいじゃないし！」

「あんたもロボットなんだろう？ どうにもあんただけ他の子達と違っていけないね、妙に人間臭い。欠陥品なんじゃないかい？」

「それは最高の褒め言葉だね！」

スージいは間髪入れずに大きな声を上げた。

「エルグナはあなたの言う通り『人間に限りなく等しいロボット』をコンセプトに開発されたんだよ！ それは有機構成物による人間構造の再現から始まり、人間の持つ曖昧で常に変化する感情やランダムイズな学習知性！ 更には怠惰や欲望といった感情に至るまで、人間が持ちうる物を全て搭載した、まさに人類が作り出した人造人間^トの究極体！ 人間臭いなんて、私たちの研究成果が認められたその物ズバリを表現した言葉だよ！ 最高ーおっ、うひゃあーおい！

！」

エルグナは何かを母に言おうとしていたらしいのだが、スージいの迫力に押されて結局何も言わなかった。なんだか中途半端な表情になったエルグナは、お盆の上から湯呑をひったくって、お茶をグイと飲みこんだ。

「あちぢー！？」

「あらら、お気を付けあそばせ？」

「…………ふう」

気づかれないよう、小さくため息をするスージイを見て、アヤミクは手を休めずに微笑むのだった。

「イエリーって、いったい何者なの？」

「…ロボット」

そうじゃなくて、と、桂は言った。

「ロボットなのは分かってるけど、何でイエリーみたいなロボットがいるのかってこと！ 見た目じゃほとんど人間と変わらないし、だけどバスの時みたいなの…ビーム砲とか持ってるし。なのに、何かあまり知識っていうか、常識が無いっていうか、融通が利かないっていうか……」

「それは……生まれたばかりみたいなのもんなだろう。試作品っていうか、完全に出来上がったロボットじゃないんだよ、………たぶん」

体育座りしていた脚を椅子の下へおろした桂は、なんだか納得がいかないような顔をしているらしかった。…いや、何だろう。あれは怒ってる顔だ。

「拓にいつてさ、あのロボット達と前にも会ったことがあるんだよね？ 今下にいるあいつら。どこで知り合ったの、っていうか、何でイエリーをうちに連れてきたの？ なんかすごいム力つくのアイツら！ 勝手に人の家にズカズカ入り込んできて、勝手に言いたい放題訳のわからないこと言って！ 特にあのド派手な服着てるアイツ……」

エルグナのことか。

「あいつはああいう性格だから、ほうっておけ。いちいち気にしてたらキリが無いさ」

「それが気に食わないんだし！ 何でロボのくせにあんなム力つく性格になってんのさ！ ロボって人間の役に立つために造られてく

るんでしょう？ あいつが役に立つとこんなか全然想像できない、
っていうか考えれば考えるほどム力つくだけだし！！」

そんなの俺が知っているわけがないだろう…。

だが、イエリー、エルグナ、アヤミクという3体のロボットは、
全て違う性格というか、異なる自我を持っているのは確かなようだ。
一号、二号、三号機みたいな感じなら、コピーして貼り付けたよう
に同じであってもおかしくない。それぞれの目的用途が違うとはい
え、それらは意図的に変えられたと考えるのが自然だろう。でも、
なぜ？

「この世に全てが一致する人間って、二人もいるのかしら？」

「……！！」

…部屋のドアが開き、石鹸のような香りが忍び込むように充滿し
てきた。ワインカラーのドレスに栗色の長髪……エルグナだった。
「うわ何この部屋、真っ暗じゃない！ 陰気くホコリ臭いし、段
ボールとか散らかりすぎ！。部屋の主の性格がそのまんま出てる感
じよねっ」

「…悪かったな、陰気でホコリ臭くて」

「一回入ったことあるくせに、嫌味ったらしい……！」

そんな俺達兄妹の声が聞こえてるのか聞いていないのか、栗色の
髪を両手で広げると、イエリーが横たわっているベッドに……つ
まり、俺の真横に腰を下ろしてきた。ドスン、と。

「な、何だよ……？」

「この世に全てが一致する人間って、二人もいるのかしら？」

振り向いた目が合い、エルグナの顔がだんだんと近づいてくる。
さっきと同じ問いを発したその表情は、決してふざけているもので
はない。……そうだとわかってるに、俺はのけ反りながらもチ
ラチラと唇やら胸やらに目が泳ぎ動いてしまっていた。

「エロ兄い、クソ兄い……ッ！」

ガタンと、椅子が机にぶつかる音がした。エルグナの顔が消え、
まばたきをして見渡すと、エルグナが桂の腕を掴んでベッドから身

を乗り出していた。

「あんたも答えてみなさいよ、K。ム力つくロボが出した問題ぐらい、簡単に答えられندیしょ？　ロボよりおバカじゃないならねえ？」

「う……うつつう！！！！」

ベッドから立ち上がったエルグナは、もう一方の手もガツチリと掴んで、桂を完全に正面に捕えてしまった。身長も、力も、明らかにエルグナの方が勝っていた。

「ほらあ、どうしたのお。何をそんなに焦っているのかしらあ？　早く答えてくだらないかしらあ、人間様あ？　んもう、お話する時は相手の目を見ましようね、って学校で教わらなかったのお、Kえ？」

最初に腕を掴んでいた手を頭に持つてくると、桂のアゴを掴んで、強引に自分の方へ顔を向け始めていた。見ると、桂の腕にはエルグナの指の跡が赤々と残っていた。

「おいっ、やめろエルグナ！　俺の妹だっ、暴力はやめろ！！」

「暴力じゃないわ、質問と教育をしているだけよ？　握力だって加減してるけれど、…本気を出したら、あんたなんか簡単にバラバラなんだからね」

「ぐ……………」

しかし、桂が一枚上手だった。解放された方の手でもう一方の手を上から掴むと、そこを支点にして体を回し、浮かんだ両足でエルグナを蹴り飛ばしたのだ。驚いたエルグナはバランスを崩してイエリーの寝ているベッドへと倒れこみ、その隙に桂は部屋を出て行ってしまった。

「あっ……！！？」

「おいっ桂……エルグナ！？」

一瞬迷ったが、俺はすぐ傍にいるエルグナの方に声を掛けた。肩に触れようとしたのだが、すぐさま手を払われてしまった。

「触らないで！　あんたは関係無いでしょ！！」

「大ありだつ、俺の部屋だぞ！ 何で桂にあんなことしたんだ。あんなことやられたら、誰だつて怖がるに決まつてるだろ！」

しかしエルグナの感情は火に油を注いだだけで、激しさを増すばかりだった。

「怖い？ ええ、そうでしょうよ！ でもね、イエリーはもっと怖い思いをしたのよ。Ｋなんかとは比べ物にならない、破滅の恐怖をね！ 一歩間違えればイエリーは、回路が焼き切れて再起不能だったんだからね！！ 分かってんのアンタ！？」

「いち」

そんな大袈裟な、と出かけたのをグツと飲み込んだ。俺はイエリ
ーやエルグナのことは漠然としか知らない。彼女がここまで取り乱
すからには、嘘とは思えなかったのだ。……………エルグナは、嘘はつ
けないよな？

ふおん、キュルキュル……。

…ファンが回り始めたような排気音がして、聞き覚えのある回転音が、小さく聞こえた。

「……イェリー……？」

ベッドのシートを通して、その弱々しい振動は伝わってきた。

エルグナは体を翻し、イエリーの体を揺らした。

「イエリー、イエリー！　目を覚ましたの？　ねえ、どうなのよ、ねえ！　返事しなさいよポンコツ……！」

しかし、音も振動も、霧散するかのように段々と消え始めていた。エルグナの声はまだ、イエリーには届いていないのだ……。

(起動……不良……？)

その時の感情をどう表現したらいいんだろう—— 凄まじい

スピードでハンドルを切り、幹線道路からビル狭間の裏路地へノーブレーキで走り抜けたような、鋭く体を貫いたソレは、しかし快感をも感じさせるほどに脳を揺らした。

『あの子はただでさえ起動時間が長くて、しかも起動不良を起こしやすいんです』

『あーれ？ 何でイエリー起動しないの？ ちゃんと給油してないんじゃないの？』

『イエリー・マナヤはディーゼル式内燃機関を搭載しています。長時間放置すると接触部にホコリが溜まり、起動不良を起こすので――』

＊

「……イエリー、イエ………ちょ、あんた、何すんのつ、触らないで！」

「いいからどいてくれ」

エルグナからイエリーを奪った俺は、彼女を慎重にベッドに寝かし直した。彼女はまだ、微かに振動していた。

「保健体育の授業で実習をやったことだってある。いいから俺に任せてくれ」

「はあ？ あんたいったい何のことを………ヒッ?!」

ここからは時間との勝負。額を押さえ、あごを持ち上げて気道の確保、そして……

「わーっ、馬鹿馬鹿！ 何してんのよこの変態っ、痴漢っ、ゴーカ
ンマッ！……」

「うるさいっ黙ってる！！ スージマンがこうやってんを見たこと無いのか！」

エルグナをベッドから遠ざけて、改めて、イエリーの顔と正面から対峙する。…ロボットなんだから、そんなに緊張するなって？

（できるか…… イエリーだって…こうやって見たら、人間と変わらないだろ…！！）

——重なる唇。息を呑む音が、後ろから聞こえたような気がした。

「――」

吹き込んで、離れて、息を吸って、また唇を重ねて、吹き込んで……何回やるんだっけか。夢中になっていて、何回やったかももうわからない。顔を離して、胸に手を当てて――。

「待ちなさいっ」

「何だよ…！ まだ邪魔するつもりか…？」

しかし、エルグナは俺の予想に反して、自らの両手をイエリーの胸に乗せると、俺がそうしようとしていたように手を組んで、胸を押し始めた。

「こっちは、私に、任せなさい。あんたじゃ、正確な、リズム、刻めない、で、しょっ！」

ギシッ、ギシッ…と、ベッドが規則的なリズムできしみ、鳴る。

その音は力強く、しかし、優しくイエリーの体を揺らしていた。

「…エルグナ！」

「…ほらっ、次！ 息を吹き込んで！」

言われなくなたって…！ もう、一切の躊躇も、後ろめたさも無かった。とにかく夢中だった。

「あのね！ 人間の、心肺、蘇生と、違うからっ、息の、吹き込み、

の、方が、重要、だかんね！ 真面目に、やんな、さいよ！」

「分かつてる……！ って……！」

その内、人工呼吸と心臓マッサージ（に相当すること）を、ほとんど同時に行っていたのに気づいたのは、相当後の方になってからだった。数分間経って、冷静さが戻ってきた頃――。

キュルルル………ツツ、ツツツ………

「イエリー……！」

聞き覚えのある電子音と、ディーゼルエンジンの起動音が鳴り始め、俺達はそれぞれの作業を止め、彼女の挙動を見守った。

……………リビングはとても静かだった。

アヤミクは相変わらずノートパソコンと向き合っていて、エルグナとスージいはお茶を飲み干してしまつて退屈そうにしている。母はバリボリと、好物の厚焼きしょうゆせんべえを噛み砕くのに夢中になっていた。

「んー、暇だなあ。ねえねえお母さん？」

「バリガリ………お母さん？ あたしやのことかえ？」 ポロポロとテーブルにせんべい屑が落ちて、答えるより先にそれを拾って食べていた。それを見たアヤミクは苦笑いした。

「そうそう、お母さん。ねえねえ、カラポン星人つてさあ、彼女っているのかなー」

「彼女あ？ 拓二にかえ」 スージいの聞き方はいかにもわざとらしい物だったが、それでも母は意外そうな顔をして、少し考えてから答えた。

「いないんじゃないかい。ほれ、あの鈍クサさ、地味っぷり、意地っ張り。妹の尻に敷かれてるぐらいだからね、あんなのに惚れるの

は、よっぽどの物好きかトンチンカンだね。頭のネジが一本か三本抜けてるぐらいの」

「ワハー、やっぱそうなんダァー」

わざとらしい返事だったが、内心スージイもアヤミクもがっかりしていた。蒼井林檎のことを、何か聞き出せるかと思っていたのだ。（唐林様…お母様には内緒にしていらっしゃったんですね。でも、何ででしょう…？）

「じゃあさー、じゃあさー。もう一個聞いていい？ あおい——」
「スージイ！」

ドタドタと騒がしい音がして、エルグナがリビングのドアを荒々しく開けて入ってきた。スージイは、玩具を取り上げられた子供のような顔をしていた。

「ほえ、どしたの。ぶーっ」

「イエリーが起きた！ アヤも早く来てッ！！ ほら、早く！！」

「あつ、え、でもまだ、あの…きや…！？」

強引に席から立たされたアヤミクは、ピンと張ったケーブルにみんなのめるのだが、それでもエルグナは乱暴にパソコンからUSBケーブルと壁のコンセントを引っ抜いて、手を掴みあげると階段を登っていつてしまった。シュルシュルと、床に引きずられた二本のケーブルが、アヤミクのスカートの中に消えていった。

パチンッ！

「痛っ……………！」

「アヤうるさい、トロい！ 早く来てって！！」

そんな二人を、母はポカンとした顔で見送っていた。

「はー、まあ良かったじゃないかい。ほれ、アンタも行ってきておやりよ。……………んー？ どうしたんだい」

なぜか、スージイはリビングに残って座ったままだった。何か、考えているらしい。

「おかしいな……………たしかに給油はしたけれど、まだデータの復元

が終わってないはずなのに……」

…桂の部屋は静かだった。電気も点けず、カーテンからこぼれる光だけが薄明るく部屋の輪郭をなぞっている。

布団を抱き込んだ桂は、ベッドの上で横向になっていた。

「……… 何で私のせいなのよ……」

エルグナが言っていたことの意味を、桂はよく分かっていて。あまりにも正解すぎて、怖くなってしまったのだ。

イエリーに目覚めてもらいたい一方で、イエリーを苦しめてしまった自分を受け止めなければならぬ。

その時に、イエリーは何と言ったのだろうか。何と声を掛けられるのだろうか。…桂には、自信が無かったのだ。

「何をそんなに気にしてるの？」

「！？ …… いつの間に入ってきたの？」

勉強机の椅子に、スージイがカエル座りをして、不思議そうに見下ろしていた。ドアの開く音さえ、全く聞こえなかったというのに「ずっと目え瞑ってるんだもん、気付きっこ無いよ。桂ちゃん…お케이でいい？ あ、唐林桂だから、『カラオケい』なんてのもいいかもね」

「何ソレ……」

あだ名。と、スージイはこともなげに言った。自信作らしく、フンと鼻を鳴らしていた。

（ああ…こういうのがドヤ顔って言っんだ…）

「あ、ドヤ顔してるし、なーんて思ってるでしょ？」

え？

…ドオン、と、低く小さな音がしたような気がして、桂は頭の中

から驚掴みされたような気分になった。目の前のスージイが、ニイツと笑顔を完成させていた。

「あたり？ ふふっ、ねえねえ、私たち気が合いそうじゃない？ 友達になろうよ。イエリーのこともいっぱい教えてあげるから！」

「あ…う、うん…うん…？」

頷いてから、桂はしまったと思っていた。が、それも長くは続かなくて、次第に全く違うことを考えて、頭を埋め尽くし始めていた。
(目………キレイ………ね………。………)

スージイは椅子を降りて、ベッドにポスンと腰掛けてきた。もう、桂は何も考えていなかった。

コンコン――。

「桂…いるか？ つか、出てこれるか？」

ノックしてきた声は、拓二だった。

「桂…いるか？ つか、出てこれるか？」 扉の前で返事を待つていると、ガチャリ、と、ドアノブが動く音がした。出てきたのは、何故かスージマンだった。

「あれっ！？ スージマン、いつの間に…！」

「うんとなー、カラポン星人、空気読め」 はあ？ という声と同じに手………いや、足が動いていた。スージマンがドアを閉めようとするのを阻止した。

「お前も来てくれ。イエリーが目を覚ましたんだ」

「待って、桂にはまだ――」

「気が付いたの…？ イエリー、大丈夫なの！？」

失敗した、とでも言いたいような顔をして、おでこに手を当てるスージマン。桂はヨロヨロと、ベッドから立ち上がって来ていた。

「あ、ああ…今、俺の部屋にいるよ」

パシューウン……！

「なっ……に！？」

熱気は唐突に通り過ぎた。部屋の扉が動いた……いや、“膨らんだ”ように見えた瞬間、白く眩い光が吹き出して、廊下の壁に突き刺さり、そして歪ませた。

表面に泡のような物が見えたかと思うと、赤くなった壁は、やがて黒く炭化してしまった。

「まさか……！？」

もう一発飛んで来ないか警戒しながら、部屋の様子を覗き込む……その時、光の塊に貫かれた壁に触れてしまい、左手が燃えるように熱くて、声を出さずにはいられなかった。

「あぢっ！？」

「カラポン星人！ 入って来ない方がいいよ！ 離れてて……！」

スージマンの声は本気だとわかっている。だが、それでも中を確かめないわけにはいかない。桂が今、俺の部屋にいるはずなのだから。

意を決して、俺は部屋の入口に立った――。

「な……ッ、？！」

そこから見えた俺の部屋は、背景となっていていつも通りの姿を保っていた。

だが、違う。違っていた。違うと、信じたかった。

「……………キケンです。絶対基本対象保護を発動中。退去せよ。キケンです――」

イエリーが、桂を拘束し、ロックオン・バスターに変形した腕を、アヤミクさんに向けていたなんて、絶対に現実なわけがないと、信じたかった。

――つづく。

5 『ミステイク 後編』

扉を閉めた後、ガツンという震動が伝わってきた。顔でもぶつけたのかな…？

「イエリー…！」

イエリーは…拓兄いのベッドの上で体を起こしていた。何故か、上は裸だったけど。

「ちっ…Kアンタ、どの面下げて来たつもりよ。アンタ今、最悪のタイミ」

「目を覚ましたんでしよう！？ イエリーっ、私だよ、桂だよ！わかる？ わかるよね？！」

ベッドの脇にはエルグナ、そしてアヤミクがノートパソコンを開いていた。イエリーに何かをしていたらしく、背中からは2本のケーブルがパソコンと繋がっていた。

「呼んでも無駄よ」

両肩を揺すって呼び掛ける私に返事したのは、イエリーではなく、エルグナだった。彼女はあくまで冷静に、感情を入れることなく私に答えた。

「今、キャツシユメモリのクリアリングと、G・B・A・I・のエラーチェックを行ってるわ。目は開いてるけど、放心状態みたいなものよ、わかるかしら？」

「…わかんない」

溜め息が聞こえた。と、その時、部屋のドアが思い切り、バン！と開いて、トナカイ顔負けの真っ赤なお鼻をしたスージイが、今にも泣き出しそうな顔で入ってきた。

「エルグナ！ そいつ捕まえて！！ イエリーから今すぐ離して！！」

「え、ええ？ なんでアタシが…」

「アヤビーでもいいーからっ、はやくーッ！！」

すぐさま立ち上がったアヤミクに迷いは感じられなかった。ズンズンと私に近づいてきた彼女は、決して優しい顔はしていなかったのだ。

「お引き取りを、桂さん。イエリーはまだ目覚めきっていないのです……あつ」

プツン、という音がして、床のノートパソコンが揺れ動き、ケーブルが外れて、パチンとアヤミクのスカートの中に収納されていた。痛みを感じるのか、『あ……』という声を出して顔をしかめていた。「……失礼。今イエリーは、必要最低限のデータ以外の記憶を削除している所なのです。今イエリーに話しかけても、返事をすることはありません。作業に支障をきたす恐れがあるので、イエリーには触れないようお願いします」

「やだツ！　だって、このままだとイエリーが私のことを忘れちゃうんでしょ！？　そんなの嫌だよ……！」

では仕方ありません——そのアヤミクの言葉を最後に、私の記憶は、途切れた。

「イエリーが暴走したつ。まずいよ、近づかない方がいい」

スージマンは冷淡に、しかし、俺に振り向くことなく、そう告げたのだつた。

……イエリーが、暴走……？

「唐林さま……近づいては、いけません……いけま……せん……」

アヤミクの呼吸は荒く……いや、声に“ノイズ”が混じっている、ただ事では無いことを物語っていた。

「……何があつたんだ」

「だから、暴走したつて言っただけでしょ！　イエリーがアヤミクを撃つて、Kを人質に取ってんのよ……！　そんなことも見て分かんないのつ、バツカじゃないの……！」

エルグナまでもが、声を震わせて感情を爆発させているなんて…。

スージマンは、ただ一心にイエリーの目を見ているらしかった。
『話しかけないで』と、背中が語っていた。

「………… イエリー、桂、何があっただんだ。イエリーがこんなこと、するはずが無いだろう」

「聞いても無駄だよ、桂ちゃんは気を失ってる。イエリーもまともな返事をするかどうかは、ちよつと保証できないかな。ごめんね、カラポン星人」

「……………」

突然、イエリーの首がカクンと動いて、目が、瞳孔にあたる何か、が、俺の方に向かって見開いた。その黄色い何かに人型の影が映っていて、それが俺だと気づくまでに何秒かの時間が必要だった。

「…………… チャンスっ！ 行けッ、カラポン星人！！」

「…………… はああ！？」

何言ってるの…と言おうとして、エルグナと声がかぶって飲み込んでしまった。スージマンは振り向いて、まっすぐに“奇麗な瞳”を向けて、叫んだのだ。

「カラポン星人にしかできないのっ！ イエリーから桂を受け取って！！」

その言葉の意味が理解できるだろうか？ 普通に考えたなら、その場で彼女の口から飛び出すような言葉じゃないことは、誰が考えてもわかるようなことだ、ったはずだ。

「…………… だ、ど、け、ど…？」

「バツカじゃないの！？ 人間じゃ無理なのよ、できっこないのよ……………」

「…………… エル…………… に……………」

「だめっ、エルグナ！！ エルグナじゃ無理なんだってば！！」

「…………… ロボにはロボが戦わなきゃいけないのよ！！ 人間を傷つけたら…………… いけないんでしょう！！！！」

「……ゼツタイ……ホン……」

、きこえた

「……タイショウガイ」

ロツ スターの。

「……！！」

ザシュウアアアアア！！！！！！！！！！

「エルグナ！！……カラポン星人、早く！！」

、。

恐怖心は無かった。ただ当たり前のように、歩いてイエリーの前で立ち止まった。所々に黒筋の描かれた裸が印象的だったのも覚えている。

そして。

イエリーは、何事も無かったかのように、腕に捕まえていた桂を、俺に差し出したのだ。そして桂を受け止める俺。よっこらせ、そう、確かに呟いた。覚えている。

振り返り、何にも考えないで、イエリーに背を向けた、そうしたら。

「……あ、れ……？」

ガシャンという音がして、後ろから空気が流れてきたような気がした。でもそれを確かめようとする気にはなれなかった。

……スージマンの姿を見たら、……アヤミクさんがうずくまっているのを見たら、……エルグナが、派手に髪を散らして倒れているのを見たら――。

「……なんだ、これ……」

どうして桂を抱きしめてるんだろっ、俺は……？

「……ありがとう、カラポン星人」

スージマンは優しく微笑んで、そう言ってくれた。膝の力が抜けた俺の頭を、撫でてくれたのだった。

「ご迷惑をお掛けいたしました、申し訳ありません。壊れた壁の補修は明日、業者を手配します」

スージマンの口から出たとは思えないような言葉だった。

彼女は轟音を聞いて駆けつけてきた母に、開口一番そう言ったのだった。

「アヤB…立てる？」

「………は、…じゅぶ…！」

声がうまく出せないらしく、彼女は黙って立ち上がってお辞儀をした。その他は大丈夫だということらしい。

「二人を運べる？ 本社に戻って検査をしたいの」

アヤミクは頷くと、イエリーの隣にしゃがみ込もうとするのだが、バランスを崩して前のめりに倒れ込んでしまった。危うく、机の脚にぶつかるところだった。

「アヤミクさん…!？」

「バランスもやられたか…バスターの熱のせいかも…？」

桂をベッドに下ろした俺は、改めてアヤミクさんの姿を見て息を飲む。

髪の毛が三分の一くらい焼けてしまっていて、溶けて破けた服の中では、機械やコードが剥き出しになって見えてしまっている。

それはまるで、いつの日かに見た、林檎の夢のようでもあった…。

「カラポン星人、お願い。運ぶの手伝って」

「お、おお」

母さんに桂を預け、今度は代わりにアヤミクさんを抱え上げようとした。

（…持ち上げられるかな）

桂は小柄だったが、アヤミクさんは大人、しかもロボットだ。運動部でも無い俺が彼女を玄関まで運べるのか、今更ながら自信がなくなってきたしまった。

「…うでお…ザザ」

「…大丈夫ですよアヤミクさん、俺頑張りますから」

何の宣言だ、と自分にツツコミを入れてしまいたい。これじゃまるで、『アヤミクさん重そうですね』って言ってるも同然じゃないか。

半身を起こして、自分で立ち上がるうとするアヤミクさんだったが、やはりまた、バランスを崩して転びそうになってしまった。俺が肩を持って支えてみたのだが、なんだか立つことすら怪しいくらい、足に力が入らなくなっているらしかった。

「…アヤミクさん、さっき俺が桂にしてみたにいきますよ?」

「ザザ…え…ザ、ザザ…ッ!」

いわゆる、お姫様抱っこ。足は動かないけれど、顔の表情と腕がちゃんと動くので、思いつきり抵抗されてしまったけれど。半ば無理やりに膝と背中に手を伸ばして、俺は彼女を持ち上げて立ち上がった。…ごめんなさいアヤミクさん、やっぱ重いです。

「ザザザ、ザザザ…!」

「聞こえないっすアヤミクさん、何言ってるかわかんないんで、俺にしっかり捕まっててください」

途端に静かになったアヤミクさんは、俺の言った通りにガツチリと背中に腕を回して、ピツタリと体を張り付けてきた。…ピツタリと張り付いた胸同士の感触…柔らかい……いったいどの辺まで人間として再現しているんだろう、スージマンめ…。

そんな余計なことを考えたせいか、ただでさえふわつている足がもつれて、前のめりになってしまった。危ない危ない…アヤミクさんごとすつ転んだら、シャレにならないぞ。

「あ、そうやって持ってるの。キツくない?」

「そうやってるも何も、お前はどうやって……って、ええ!?

見ると、スージマンは米俵でも担ぐかのように、イエリーの体を肩に乗せて、その腹を掴んで歩いていたのだ。両手、両足が、床と床とのスレスレの高さで、ブランブランと揺れていた。

「この方が楽じゃないかなー。まあ、どっちでもいいんだけどね。さ、早く下行こつ。あ、もしもし？　ちよつと今からさ——」

空いている方の手でポケットから携帯電話を取り出したスージマンは、涼しい顔をして部屋を出て行った。……イエリーって、そんなに軽いのか？　それとも、スージマンが実は隠れムキムキマツチョガールなのか？　確かに胸がべったんこつぽいしな…。

「……ザザ、ザザ……」

「あ、あはは、すみませんアヤミクさん。とりあえず下に降りましょう、ええ、そうですね、持ち替えることよりも早く下に降りることを考えないと、いきましょいきましょ」

「あんた……顔真つ赤だけど、大丈夫？」

母さん、そのツツコミの前に手伝ってほしい——。

「あんれまー、こらまたすんげえ光景だなア、おい！」

「……へ、……？」

……玄関に出て、……が、止まらなかった。何でうちの玄関の前に、赤帯の路線バスが止まってんだ？　しかも、この辺じゃ珍しい折りたたみ式中扉のノンステップバス。でもよく見たら、座席は前半分までしか無くて、後ろの半分には、ベッドや白い機材やらが置いてあって、まるで保健室みたいになっていた。カーテンも閉じられている。

そして何より驚いたのが、俺達が玄関に出てくるのを待ち受けていたのは、あの、コイントス社の駐車場で会った、路線バスの運転手だったのだ。

「運ちゃん！　至急コイントス社まで戻りたいのつ、急いで準備して！　急行急行、快速急行！」

「よしきた合点！　特別快速特急でぶつちぎってやらア！」
プー、という音がして、バスの中扉の床が、ゆっくりと地面にス

ライドしてきて、上にあったベッドが下りててきた。スージマンはその上にイエリーを寝かせ、今度は俺からアヤミクさんを受け取って、イエリーの時のようにして肩に抱えて持ち上げた。アヤミクさんが「ひゃあ」とでも言っつてそんな顔をしているのが見えたが、…ノイズしか聞こえてこなかった。

「ありがとね、カラポン星人。ところでさ、何でエルグナじゃなくてアヤビーを先に運んだの？」

「え…あつ…！」

…しまった。いくらアヤミクさんが目の前で倒れたからって、気を失ったエルグナとイエリーを運ぶ方が優先じゃないか！…だからアヤミクさんは、運ばれる前にあんなに暴れてたのか…？

「んー、結果的にそれで良かったんだけどさ、わかってたんならすごいなー、と思っつて。まあいいや、そろそろ起きてると思うから、連れてきてくれる？」

「連れてくるって…誰を？」

「アタシよ、アタシ」

振り返ると…、なんと、玄関にエルグナが立っていた。乱れた髪を両手で払いながらも、しかし、ハッキリとした足取りで歩いてきた。

「お前…もう目が覚めたのか?!」

「何よ、残念だったーとでも言いたいわけ？ お生憎様、アタシのG・B・A・Iは特別製なの。ちよつとやそつとの衝撃程度だったら、自己修復プログラムが働くようになってんのよ、ご心配なさらずー！」

べーっ！ と、真つ赤な舌を突き出すエルグナにおかしな様子は見られない。…だが、彼女のドレスはボロボロだった。何かの拍子に全部落っこちてしまふんじゃないかというぐらいに、赤色が黒く煤けて、溶けるように破れた穴が大きく開いていた。露出した素肌、薄ピンク色の下着のような物が見え隠れしていて、どうにも目のやり場に困ってしまった。

「エルグナ、コイントスに戻るよ。歩けるんならバスに乗っちゃって」

「むっ。何よー、あたしだけ随分な扱いじゃないの！　ちよっとそのカラポンっ」

お前まで俺をカラポンって呼ぶのかよ！

「アタシをバスの中まで運びなさい。ヘビー級のアヤを運べたんだからチヨロイもんでしょ？」

「な、何でそうなるんだよ…！　歩けるんなら自分で…うわっ！？」

どうしたもこうしたも無い、いきなり背中を向けたかと思ったら、跳ね上がって尻から体当たりをしてきたのだ。結果は言うまでもない、庭の芝生の上で俺はエルグナの尻に下敷きにされてしまったのだった。

「ぐえふっ…」

「なによっ、失礼な男ね！　言っとくけど、アタシの方がアヤより重いつたら、ぶっ殺すからね！」

「絶対基本で殺せないけどね」

そんなツツコミはいいから助けてくれよ……。

結局、エルグナは俺がおんぶしてバスに運んだのだった。座席に座ったアヤミクさんと一緒に、イエリーのベッドを囲んでパソコンを開き、何かを始めているらしかった。バスのステップに立ったスージマンが、準備OKと、親指を立てて見せていた。

「それじゃ、私達もう行くから。じゃね、カラポン星人、桂が起きたらよろしく言っといて！」

「ちょ、待て待て待て！　まだお前には聞きたいことがあるんだっ。わからんことだらけにしたまんま行くとか無しだろ、無し！」

えー、と、スージマンはひどく面倒くさそうな顔をした。

「だって、イエリーの点検を早くしたいんだもん。…んじゃー、一個だけ答えたげる、はいどうぞ」

…聞きたいことは山ほどあるというのに。イエリーが暴走した理

由、なぜ暴走したイエリーから俺は無傷で桂を取り返せたのか、なぜアヤミクさんとエルグナは撃たれてしまったのか、…他にもたくさん。

チツチツと、スージマンの時計の口真似をしている。早くしろと、言いたいんだろう。

……その時、今までずっと疑問に思っていたことを思い出して、俺は呪文を唱えるように無意識にそれを呟いていた。

「お前の目……変だよな。綺麗だけど……見ていると、頭がおかしくなる、そんな気がするんだが……」

「……………」

そうだ………今回が初めてじゃない。今まで何度か、あいつの両目を見ていたら、頭がふわふわしてきて、なんだか見当違いなことを……って、アレ？

…なんて、綺麗な、瞳なんだ……………。

「じゃあ、行くね。カラポン星人」

「……………え？」

スージマンはクルリと背中を向けて、ステップを登ってゆく。プー、という電子音がして、バスの中扉が畳み閉められた。

…今俺、質問に答えてもらったっけか？ 全然答えの内容を覚えていないのに、なぜだか俺の頭の中は、期待していた答えを受け取ったという、奇妙な充実感を感じていた。…あいつ、何て言ったんだっけ？

「あつ、そうそう！」

「のわっ！ な、何だよ急に窓から…！？」

発車しかけたバスが急に止まって、中扉近くの窓が開けられ、スージマンは近所中に聞こえそうなぐらいのでかい声で、こう俺に叫

びやがってくれたのだ。

「林檎ちゃんの裸はちゃんとチェックしてねー！ 写真撮ってきてくれると嬉しいかもー！」

「ば、バツカヤロオ！！！！ そーゆーのはもつと近くにいる時に言えーっ！！！！」

窓から身を乗り出してブンブンと手を振るスージマン。落っこちそうだし、電柱に当たりそうで見ている方が怖い。やがてその姿がバスの中に消えると、赤帯の路線バスは交差点を曲がって見えなくなった。…俺と、母さんの二人はその軌跡をたどるように立ち尽くしていた。

「元気な子達だったねえ」

「元気すぎて訳がわからねえ……………桂は？」

部屋で寝てるよ、と、母さんは答えた。

「しばらく放っておいてあげなさい。お腹が空いたら出てくるですよ」

…あいつは、どれだけ傷ついてしまったんだろう……………考えただけで胸が痛くなってくる…。

家の中に戻った俺は、二階に上がって桂の部屋の前へ立ち寄った。…考えてみれば、ここが桂の部屋になってからは一度も入ったことが無い。前は兄ちゃんの部屋だったから、間取りなんかは鮮明に覚えている。その兄ちゃんも今は、アメリカに行ってしまった。

（兄ちゃんなら……………桂になんて声を掛けたんだろう）

『放っておけよ』

どこかで、そう言っている兄ちゃんの声が聞こえたような気がした。もちろん、俺の中にいる兄ちゃんの幻聴にすぎない。背が高く、かつこよくて、だけど、時々とても冷たかった兄ちゃん。兄ちゃんの言葉は、いつだって、絶対だった。

「……………」

結局、ドアをノックすることも、声を掛けることもできず、俺は

穴の開いた自分の部屋へ戻っていった。

ドアは形を保ちながらもその役目を全く担っていないくて、物は散乱し、少し焦げ臭くて、パソコンはスクリーンセーバー状態でつけっぱなし。赤いポリタンクから洩れる軽油の臭いと、開け放たれたダンボールが、イエリーの姿を脳裏に思い出させた。

「さっきまで……ここにいたんだよね……」

エルグナのものと思われる金髪や、アヤミクさんのスーツの切れ端のような布も落ちている。それらを部屋の片隅に集めて、俺は黙々と掃除を始めていた。何かを、したかった。

「……編集、やらないとな」

片付けが終わったら、メディア部のビデオの編集をしなければ。大会までもうそんなに時間が無い。俺は、パソコン周りの物を、一気に掻き揚げるようにして持ち上げた――。

夕陽眩しい町外れの田んぼ道を、溶け込むように走り去る赤帯の路線バス。しかしそんな所を通り抜ける路線バスは、一本も無い。

「ザザ……ザ」

「ログが出たわ。最後は『絶対基本保護』で終わってる。私は人間として認められなかった、ってことね」

「ありがとう、エルグナ」

プリントアウトされた紙を見て、前の座席に足を掛けたスージイはウンウンと頷いていた。それほど予想外な結果では無かったのだろう。

「何とかーなるなる、そんなー気がするよお」

「……ふざけてんなら、ぶっ飛ばすわよ」

「ザザザ……」

バスの後部には、カーテンで隠されていて外からは見えないが、大型コンピュータや医療機器のような物がたくさん積まれていた。

それらのいくつかには電源が入り、イエリーとケーブルが接続されている。

「大丈夫、イエリーは直るよ。今日はタイミングが悪いのが重なりすぎただけ、運が悪かった。次は同じことはおこさせないよ」

ひょうひょうと言っているように見えて、その語気は実に強気だ。アヤミクは言葉を発せなかったが、しきりに何度も頷いているように見えた。エルグナもそれを感じ取ったのか、座席に深く腰を落として腕組み足組みしていた。

「……………帰ったら早く直しなさいよね」

カーテンの閉まった窓に目をやるエルグナ。当然景色は見えるはずがなかった。

スージイはそんなエルグナを横目に見てふっと笑うと、再びログの紙を見上げて目を細めるのだった。

「…やっぱりまだ、早すぎたのかなあ……………」

…日は落ちて、電気も点いていない部屋は真っ暗だった。母が気を利かせてエアコンを入れていつてくれたおかげで、六月の嫌な暑さは全く感じていなかったが、布団を剥いでしまつて少し寒いくらいだった。

（まるで私、死んでしまつたみたい……………）

桂はなんてうまい表現をしたのだろうと、自分の中で拍手を送っていた。アハアハ、と、乾いた笑いをしている自分が不思議でならなかった。何故、笑えるのだろうと。こんなにも悲しい気持ちなのに、どうして自分は笑つてられるのだろうと、不思議で仕方が無かった。

「私が悪い…私が悪い…？」

でもそれ以上は考えられなかった。頭が、考えることを拒否しているのだ。それは怖いからなのか、それとも考えられるだけの糖分が不足しているのか、そんな判断さえも今の桂にはできなかった。

自分のことさえわからない、他人事のように感じる、他人事と決め付けてしまいたい。グルグルと、そんな思考が繰り返し螺旋階段のように渦巻いていた。

(…カレーの、匂い………)

その時、足元から『ドン、ドン』という突き上げるような音がしてきた。…母だ、とわかった途端に、お腹の奥底から生き返り始めた桂は、それまでの思考をフルデリートして、全神経に一つの命令を下した。

『よし、ご飯を食べよう。きっと今夜うちはカレーなのだ。腹が減ってはなんとやら』

暗闇の中ベッドから立ち上がった桂は、パンパンと自分の頬を叩き、よしっ、と、声を上げた。部屋から出ようとドアに向かった所で、何かが足に当たり、バサツと倒れる音がした。

「ん…？ なんだっけ」

ドア横のスイッチを手探りで見つけ、部屋の電気を点ける。彼女はあっ…と、声なき声を上げ、その倒れた物の姿を見て立ち尽くしてしまった。どんどん込み上げてくる、津波のような感情。それは抑えることも、逃げることも、桂にはできなかった。

「…うつ、うつ、…うつうつ…う…！」

グランシャリオの倒れた茶色い紙袋。そこには、イエリーのために桂が選んで買った服や、下着が、ギッシリと詰まって、溢れ出ていたのだった……。

月曜日の朝。俺は登校してすぐにメディア部部室・兼・放送室へと立ち寄っていた。…今日の夢見は、いつもに増して最悪で、思い出すだけで憂鬱になってしまうほどだ。今まで見てきた夢の中では、一番見たくない夢だったかもしれない。

そんな気分を打ち払おうと願を込めるかのように、俺は放送室の合鍵を差し込む…。

——力子。

「あれ、開いてんのか…あつ」

「あつ……………」

スタジオ部屋に人影……………中窓越しに見たその姿は、よりにもよって、ぼたんちゃんだった。…と同時に、イエリーやスージマン達とのやり取りですっかり忘れていたゴタゴタの記憶が、不思議なくらいに自動的に蘇ってくるのだった。

「あー、おはよう…」

「…おはようございます」

…ぼたんちゃんは、少し驚いた表情でスタジオから鞆を持って出てきた。いそいそとして、そのまま出て行こうとするのを見て、俺は思わずその背中を呼び止めてしまっていた。

「……………なんですか。遅刻したくないんですけど」

「…その……………昨日はごめん。何ていうか、俺…ちよつと言い過ぎた、…と思う。…ごめん」

ぼたんちゃんは放送室のドアノブを握ったままで、振り向きもしなかった。今にも、バン！ とドアを開けて出て行ってしまいうで、俺は思いつくままをそのまま口に出して投げかけていた。力子、コチ、と、壁時計の小さな音が、うるさく耳を横断していく。…何か、言わねえと。

「俺は、ぼたんちゃんと小雪が——」

「関係無い」

…今出かけていた言葉を忘れてしまうほどに、それは強い言葉だった。一度賞状の額縁を見上げると、彼女はドアに言い聞かせるように言った。

「…小雪は、関係ないじゃないですか……………」

「……………」

それに、と言って、ようやくドアノブから手を離れたぼたんちゃ

んは、前髪を払って振り返った。目がチラチラと泳いでいて、決して俺のことは見ないようにしているらしかった。

「私、全然怒ってませんから。カラポン先輩のこと。昨日何かありましたっけ？」

「あ、おい……！」

バン！ と大きな音を立てて、重厚な防音扉が、勢いよく廊下側に開いた。 ガツン！ ！

「あっ……」

「ふぁッ？！ ……にゃんッ！！」

廊下からドサドサという音がして、ぼたんちゃんは青い顔を一瞬だけ俺に向け、扉の向こうに消えた。 ……なんてことだ。嫌な予感。廊下に飛び出してみても、全部肯定されてしまった。

小雪ちゃんが両手両脚をおっ広、蛙をひっくり返したみたいな格好になっていたのだ。

「小雪！？ 小雪っ、大丈夫！！？ ごめんね、ごめんね……！！！」

「ひゃうわう………ぼたんちゃん、おはよう………」

半べそになって膝をつくぼたんちゃんに対し、小雪ちゃんはのんきに手を挙げて挨拶でする余裕っぷりだった。 ……頭、打ってないよな？

「だ、大丈夫か小雪ちゃん……？」

「大丈夫なわけじゃないですか！ 小雪、保健室行こうっ、すぐそこだから、ほら……！」

「あー、カラポン先輩……おひゃようござや、……ズズズ、あれ……はな……、あ、……いじゅ？」

体を起こした途端、サラサラとした赤い液体が彼女の鼻から流れきて、ポタ、ポタと、彼女のスカートに垂れ落ちた。ぼたんちゃんがそれを見えますます白い顔になって、慌てて鞆からティッシュを出し、小雪ちゃんの鼻に押し当てた。

「先輩見ないでください！！ 今小雪の顔見たら、先輩も鼻血出し

ますよ！ ええ、出したいなら今すぐ出させますよ、いいんですか！？」

いいんですかって聞かれて、「ハイお願いします」って答えたら相当なDMだよな。なんてふざけたことが言えるわけもなく……。

「わ、わかったから、そんな怒るな……」

幸いにも、保健室は放送室の目と鼻の先の場所にあり、大きな音を聞きつけた先生達の方から駆けつけてきてくれた。白衣を着た二人の養護教員は、授業が始まるから任せるようにと俺達に言ったのだが、ぼたんちゃんが付き添うと言って聞こうとしなかった。

「しょうがないわね、あなたも来なさい。唐林君、二人のクラスの担任に事情を説明してきてあげてね」

「俺もついて行っちゃダメですか？」

なんだか自分にも責任を感じての発言だったのだが、もう一人の擁護教員——研修生の小松先生、通称コマちゃん——が、ぶんぶん！ と指を立てて俺に詰め寄ってきた。

「だめでしょー、わがまま言っちゃー！ 芝井先生の言うことちゃんと聞かなきゃ、メッ！！ ここはー、お姉さん達にまっかせなさい！」

「は、はい……わかりました」

甲高いハスキーヴォイスでそう言い切ると、えっへんとその巨大な胸を張る小松先生「コマちゃん。……林檎といい勝負かもしれないとその時思ったのは、内緒だ。

「そんな訳だから、よろしくね唐林君。早くしないとあなたも遅刻するわよ」

「あ、はい……」

芝井先生の言葉に我に返った俺は、拾った小雪ちゃん達の鞆をコマちゃんに預けた。……そんな至近距離でニコつとされたら顔が緩んじやいますってばっ、やばいやばい！

「と、ところで芝井先生、何で俺の名前知ってたんですか？ 俺、

保健室つて行ったことなかったと思うんですけど……」

あらっ。と、芝井先生は意外そうな声を挙げた。

「あなたってこの学校じゃ結構な有名人なのよ？ 林檎ちゃんの彼氏、って言い方じゃ不満かしら、空っぽ頭のカラポン君？」

……ははは」

クイツと眼鏡を持ち上げ、不敵に笑う芝井先生。……コマっちゃんにまでクスクスと笑われてしまった。あっ、小雪ちゃんまで！

「失礼しまっす！ 二人のことよろしくお願いしまっす！！」

ビシッ！ と敬礼なんぞして、俺は脱兎の如く保健室正面の階段をダッシュしていった。始業三分前、二階の職員室に立ち寄っても、なんとかギリギリ間に合う時間だな――。

「いったい何があったというのだっ」

「……うつとうしい」

コーンキーン、カーンコーン……。

へっぽこなストレスを醸し出すチャイムが、昼休みの終わりを宣言する。それは、今日がいつもと違うという確信を、平助に持たせたらしかった。

「お前アホか。昼休みにカラポンが教室で弁当食ってる時点で、あきらかにおかしいだろ！ ……ケンカでもしたのか？ 林檎先輩と」

「……知らね」

いつもなら、林檎は授業が終わった瞬間が終わる前ぐらいには俺の教室に入ってきて、昼ごはんに誘いに来ていた。昼の放送の担当だったなら、放送室の鍵を開けて待ち構えているぐらいだ。

だが、今日は来なかった。もしかしてと、廊下も覗いてみたのだが、それらしい影も見当たらなかった。

「こりゃ明日は雨だな。日本沈没級の、いや、地球崩壊、銀河系の

危機！」

「勝手に滅んでろ……」

久々に一人分の弁当を一人で食べたので、満腹感がいつもの二倍だ。既に頭がぼんやりとしていて、机に突っ伏してたら三秒で落ちてしまいそうならいだった。

「何があつたか知らねーけど、早めに謝つといた方がいいんじゃないの？ 怒るとやばいんじゃないかなかつたっけ？」

「……ぐう。……イデデ、冗談、冗談だつてば。頭掴むなっ……イイツデ……！」

文字通り割れんばかりの痛みに怒つた俺だったが、しかし、平助はそれ以上に怒つた顔をしていた。アホの平助、マジモードらしい。「カラポン。実は俺な、昨日林檎先輩にバツタリ会つたんだよ」

「えっ……」

昨日の、林檎に……… いったい、いつ……？

「夕方前ぐらいだったんだけどさ。何ていうか——」

ガラガラと音がして、ハゲ頭バーコードに丸眼鏡の数学教師が入ってきた。ガタガタと椅子の揺れる音で、一気に教室が騒がしくなった。

「はい、じゃあちよつと早いけど始めよう。えー、今日はちよつと力試しを用意してきたから、最後にやるからね」

「えーっ……！」

コーンキーン、カーンコーン………。

へっぽこストレスな予鈴が鳴り、平助も慌てて自分の席へと駆け戻る。最後に平助から聞いた言葉が頭にこびりついてしまっていた俺は、号令もワンテンポ遅れて、上の空だったらしい。

（何なんだよ……… 魂抜けてたみたいだった、って………）

翌日、抜き打ち小テストは。が一つだけついて帰ってきたのだが、それはまた別の話である。〇と言っても、0点の0だったが………。

「あつ、カラポンせんばあいゝ今朝はどうもありがとうございましたー」

放課後、重い足取りのまま放送室の防音扉を開くと、手前のミキサールームで小雪ちゃんがちょこんと座っていた。鼻の周りが少しくすんだ色になっているような気がしたが、鼻血は止まったようだ。

「おつす、小雪ちゃん。もう大丈夫なの？」

「はい、おかげさまで……あの、あの、本当に、ありがとうございました」

そんなに深々と頭を下げられるほどのことじゃ……ああ、立たなくていいってば。

「ていうか先輩は何もしてないし」

「……いたのか、ぼたんちゃん」

奥のスタジオルームの柱の陰からぼたんちゃんが顔を出していた。まるで狙っていたかのような、計算尽くされた立ち位置のように思えた。

「アフレコしないでいいなら、あたし帰りますけど」

「あー、わかったわかった！俺が悪かった、何もしてませんでしたが、ああ確かに。……今日のぼたんちゃんとブシドーの録音が終われば、もう録音しないといけない物は終わりだからな。何としても今日中に終わらせよう。もう日にちねーし」

聞いているんだか聞いてないんだか、あいうえおいうえー……と、発声練習を始めるぼたんちゃん。……普段はこんな調子だが、彼女の演技力は決して悪くない。ブシドーといい勝負ができると言っても過言では無いだろう。

小雪ちゃんと顔を見合わせて苦笑いすると、あつ！と言って、小雪ちゃんは椅子から立ち上がった。

「今朝のお礼に何かジュースでも買ってきますよ！小雪ちゃんも

小雪ちゃんも！先輩、何がいいですか？」

「え、いいの？」

ふふん、と、小雪ちゃんは誇らしげな顔をして胸を叩いた。

「こう見えても私、バイトしてるからお金持ちなんですよーっ。先輩にご馳走させてください！」

「じゃ、あたしストレートティー」

すかさず返事をしたかと思うと、また再び発声練習を始めるばたんちゃん。抜け目ない奴め…。

「あ、やっぱ私も行こっ。小雪だと何か間違えそうだし」
「もー、私のこともっと信じてよおー」

そんなこんなで、二人は離れたって放送室を出て駆けて行った。
…よかった、今朝あんなことがあっても、二人の仲は変化が無かったようだ。実はそれもちよっと心配だった…。

「さつて、準備すっかな…」

録音に使う機材は、基本的にお昼の放送と同じものを使う。ただし、配線を変えたり付け加えたりしないといけないから準備には多少時間が掛かる。放課後の限られた時間、しかもブシドーのように他の部活で忙しい人もいるから、時間は少しでも多く作っておきたい。俺はミキサー席に座って、配線をプチプチ差し替え始めた。

（ブシドーすぐ来てくれるといいんだけど………ん？）

突然、顔にヒンヤリとした感触がして、前が何も見えなくなった。これはひよっとして………。

「だーれだ！」

「…えー」

聞いたこともないような声だった…猫なで声のような、たぶん作り声なのだろう、これじゃ誰だか分からない。

「んー…」

小雪ちゃんとばたんちゃんは今さつき出て行ったばかりだから、いくらなんでも早すぎるだろう。あと来てないのは…ブシドーか、考えたくはないが、平助という可能性もあるか………。

「ブシドーかな? …お?」

一拍間を置いてから、白々とした明かりが目に入り込んできた。少し目が眩んで、俺は二、三度、意識して強めのまばたきを繰り返した。

「ふうん……ブシちゃんか、へえ……」

「……あ」

スタジオとミキサー室の間にある正面の窓ガラス。光が反射して、俺の後ろに立っている人物の制服姿が映っていた。

スカート…女子。だが、そのリボンの色は、三年生の色だった――

「私の声って、ブシちゃんに似てたんだ……ふうん、全然知らなかったなあ」

「あ……、あ、あ、」

それはまるで死刑宣告のように、俺の胸に冷たく、深々と突き刺さった。また視界が眩んできて、寒いわけが無いのに体が小刻みに震えているような気がしてならない。

「林……林……」

蒼井林檎が、俺の真後ろに立っていた。…俺の頭は今、真っ白に、まさに、空っぽ頭のカラポンになってしまっていたのだ……。

「何でかなあ……何でわかんないのかなあ、カラポン?」

…昨日の記憶が蘇ることに、林檎への恐怖がますます大きくなっているのを感じていた。

勇気を振り絞って、後ろに振り返る。…林檎は、両手に腰を当て、わざとらしく怒った顔で俺を見下ろしていた。

「こういうポーズ何て言うか知ってる? “アキンボ” って言うんだって、辞書にも挿絵付きで載ってたよ。昨日退屈すぎてさあ、英和辞典一ページから全部読み切っちゃった。

辞書に載ってるってことは、ちゃんと意味があるってことじゃん? どういう意味なんだろうねえ、分かるかなあカラポン?」

ズイ、ズイと、腰に両手を当てたまま一步步近づいてくる林檎。
ふざけているように聞こえるかもしれないが、注釈を付け加えて
おこう。

林檎は微塵も笑ってないのだ。

「ねえカラポン。何か言つてよ」

「……や、いや……その……」

目を見ることさえ、怖くてできない。だが、目を逸らせばそれ
ほど、林檎はますます近づいて問い掛けてくるのだ。

答えられない。怖くて答えられない、見ることができない。だっ
て……

（だって林檎は……林檎は……、林檎はもしかしたら……）

——ロボットかもしれない。

ドクン。心臓が跳ね上がる音がした。

林檎の両手が、…迫ってくる。

——そして、林檎は俺を……

「カラポン…ねえ、カラポン…？」

——殺そうとする。

「…っ！」

……その瞬間、俺は堪えきれずに思いっきり目を閉じていた。
直後に、首への強い圧迫感。…林檎の体温を感じていた。

「カラポン……——私、いらぬ子になつちやつたの……？」
え……………？

恐る恐る目を開けると、林檎は…俺の首を締め付けて…いたのではなく、抱きついていたのだ。握っていたヘッドフォンが床に落ちて、カツンと小さな音を立てた。

「何で…どうして……………？ 私のこと、嫌いになつちやつたの？ カラポンにとって、私は必要じゃなくなつちやつたの、いらなくなつちやつたの？ 他に好きな女の子ができちやつたの？」

「りんご……？」

ぎゅっ…と、腕の力は強くなる。痛めつけるような強さではなくて、大切な物を守るためのような、そんな力使い。胸が潰れていく感触も、今は何のよこしまな感情を起こさせない。

「私はこんなにも……………カラポンのことを必要としてるじゃん……………カラポン……………」

（林檎……………お前は……………）

…空いてしまった両手が、林檎の背中へと回り込む。強い力は必要無い。添えるように優しく、だけど、温もりが感じられるように、そつと引き寄せて、トントン、と、背中を叩いた。

「大丈夫だよ……………」

「え……？」

それは泣いた子供をあやすように。兄が妹をなだめるかのように言葉よりもずつと感情を伝えるための方法だと、昔ある人に教わった。

「俺は林檎を裏切つたりしない。ちゃんとあの時約束しただろ。覚えてないのか？」

「…覚えてる。でも……………」

林檎は一度体を離して、両手で俺の肩を掴んだまま、上目でこんなことを言つたのだ。

「……………知らない子と買い物してたでしょ」

「桂とその友達だよ。友達っつーには、年が離れてるけどな……………」

何でカラポンも一緒なの、と聞き返す林檎に、『お財布係と荷物持ち』と俺は正直に答えた。嘘じゃないだろ？

「あはは…何それ。桂ちゃんに尻に敷かれちゃってるんだ…そっか、おつきくなつてたから私、分かんなかったよ」

またギューツとされて、肺から押し出された空気が声にならない変な音を奏で、それでまた林檎が笑った。…もう、大丈夫だろう。

（よかった…）

掴まれていた心臓が、ようやく解き放たれたような感覚。俺はもう一度、彼女の背中に両手を回し、トントンと優しく叩いた。

「でも…私とは最近、あんまり遊んでくれないよね」

「……………え」

林檎は、……………ああ、もう、コレが卑怯なんだ、この上目が卑怯なんだ。今までの論理とか作戦を、木っ端微塵に吹き飛ばす破壊力を持ったこの上目で、しかもこんな至近距離で、彼女は言うのだ。

「寂しいよう…もっとカラポンと一緒にいたい、一緒に遊びたい、一緒にくつついてたい、いっぱい、いっぱいカラポンとしたいことがあるのに。……………ねえ、もっと、私を必要としてよう。私がカラポンをどれたけ必要としてるのか……………教えてあげるから……………」

そうして、林檎はゆっくりと目を閉じて…その長くしなやかな曲線を描くまつ毛達を強調させる。

ぷくん——。

そんな音が聞こえてきそうなくらい、柔らかそうでキレイな、さくらんぼ色をした唇が——。

「……………ん……」

…無意識の内に、俺もまた目を閉じていた。熱い、熱い…、体が、顔が熱い。こんなキスは、初めてじゃないはずなのに、学校で、町で、人前で、俺達二人は所構わず何度もやってきたはずなのに。なぜ今日のキスは、こんなにもドキドキするのだろう……………こんなに求めてくる林檎は……………こんな気持ちになったのは、俺は——

(林檎……………！)

「もゝ、いゝかい？」

「！！！！！！？ つ、ぶほお、おほ、ツハっ！？」

…ああ、なんということだろう。その声は、閉じられているはずの重厚な防音扉から聞こえたのだった。ブシドー…寒来魂子の声に、間違いなかった。

「まゝあだだよ…へえーえ、とてもじゃねーが、こりゃ小雪ちゃんには見せられねえよなあ」

「あーっ…」

「栗野…小雪ちゃん“達”まで……………」

目が合った瞬間そっぽを向いたブシドーの隣には、栗野が小雪ちゃんの後ろから目を手で隠していた。小雪ちゃんは缶ジュースを持った両手が宙をさまよっていて、その少し離れた後ろでばたんちゃん、廊下の窓に寄りかかって…蔑むような目で俺達のことを見ていた。やっぱり目を逸らされて、動いた口が、『ああエロエロしいエロエロしい…………』と言っているような気がしてならなかった。

「み、みんな、いつの間に……………」

「ちよおっとー、かあらばおんツー！」

…さっきの変なセキで、俺のツバをモロに顔面に受けてしまった林檎は、それはそれは不機嫌そうな顔をしていた。次の瞬間、ゴチン！ という音がして、頭突きされたのだと気づくまでに、三周ぐらい宇宙を回ったような気分になってしまっていた。

「ひどおいつ！ 途中でやめないでよおっ、本当は謝る気ないんでしようー！！」

「ち、違うつて！？ お前、そんな、あれ以上のことみんなが見てる前でやれるかっての…！」

「おーやれやれー、俺たち帰るけどなー」

…栗野がヒラヒラと手を振ったことにより、小雪ちゃんはその束

縛から解放され、一気に視界が開けたことだろう。一瞬眩しそうな顔をしたかと思うと、次の瞬間、缶を持った手で俺達を指差し、指差し、指差し……を、繰り返していた。ふるふる震え、だんだん早くなってきたような気さえする。

「あゝっ、あつ、あゝゝゝゝゝゝ！　〇　\$@?!　ゑ」

「お、落ち着きなさいユキ！　つかそれ、四ツ矢サイダー……」

みるみるうちに小雪ちゃんの“頭”は真っ赤になつていく。慌ててブシドーが、暴れる小雪ちゃんの体を回れ右させて、『オーヨシヨシ』と謎の呪文を唱えていた。「小雪ちゃんには刺激が強すぎたよねー……　ちよつとバカラポン！　いつまでも抱き合つてんじやないわよつ、ていうか林檎先輩も！　録音しないならアタシもう帰るからねっ！」

また変なアダ名がついた……なんてばやいてる場合じゃない。俺は椅子から立ち上がつて、膝立ちしていた林檎を半ば強引に引き剥がした。当然林檎は、アヒルが更に不機嫌になつたような口をして抗議してきた。

「やだ！　まだカラポンから『好きだよ』って言われてないもん！」

「……！？」

「ぶっ！？」

「はっ！（笑）」

……おいおい誰だ最後に笑つたの、って、栗野しかいねえか……。

「……先輩、時間がもつたいたいですから。早いとこ言っちゃってください。……　何怖じ気づいてるんですか！　一言言っただけじゃないですか、その……　林檎、す、好きだ、って言えば……！」

「おいおいぷにちゃん、自分でも言えないことをこの小心カラポン野郎が……　イデデデ……！　つね、つねんなってコラ！」

廊下を通る生徒達が、チラチラと放送室をのぞき込んでいた。ニヤニヤ笑つてるのまでいやがる……チキシヨウ、こんなことしてる場合じゃないんだって……もう大会まで日にちが無いんだから……！！

「……林檎！」

「にゃん？」 何かにゃんだ、と喉から前歯まで出かけたのをぐつと飲み込んで、俺は——覚悟を決めた。猫みたいな顔をした林檎の両肩を掴み、……………まっすぐに両目をにら…見つめた。

「……………好きだ、林檎」

「……………嬉しいっ！」

そう言っ、林檎は俺の頭に腕を回して、唇を奪ったのだった――

5 『ミステイク』 END

つづく……………

5ex『ミステイク・エピソード』

「…なあ、田んぼの方寄り道していったいいか？」

「ん、いいよ。何か用事？」

昨日や今日の“罪滅ぼし”ということで、録音が終わった後は半強制的に林檎とデートということになっていた。

本当は今すぐにでも家に帰って、編集作業の続きをやりたいのだが、また林檎を怒らせてしまったら今までの苦労（と羞恥）が水の泡だ。

引弧モールへ買い物付き合うという約束になっていた。

「…実はこないだもこっちに来て、帰りにバス乗っちゃってさ、うつかり」

もちろん、スージマン達のバスに拉致られた時の話だ。嘘じゃないだろ？

「じゃあ自転車はどうしたの？」

「ほったらかし。今日になって思い出したから、これから拾いに行くところ」

カラポンまぬけじゃん、と言われ、俺は小さく笑った。

田んぼ道を歩く俺たちの他に、人はおろか、カラスやスズメさえも見当たらない。稲穂が風にそよぐ音だけが規則的に聞こえ、晴天の空に雲は静かに座り込んでるようだった。

ふと、林檎がピツタリとくつついてきた。

「…やめろよ、恥ずかしい」

「誰も見てないじゃん。手でもいいよ」

組もうとした腕を離し、林檎は手を握ろうとするのだが、俺の左手はポケットに突っ込んだままだ。手だって十分恥ずかしい。

「んもうつ、いじわるっ」

意固地になった林檎は、強引に握りこぶしを引っこ抜くと、こぶしのまま包むように手を掴んできた。…どうしても、繋がっていた

らしい。

道路の脇に止めておいたはずの俺の自転車は、横倒しになって田んぼの中に落ちていた。風が、ひよっとしたら車がぶつけていったのか……まあ、盗られてないだけマシと考えるしかないな――。

「……………え？」

「なに？ どうしたのカラポ……うわぁ、」

俺達二人は、田んぼを見下ろしながら呆然と立ち尽くしてしまっただ。と同時に、俺はなぜ今まで気が付かなかったのだろぅと、その再生され始める光景に恐怖した。

（あれは……夢じゃなかった……………?!）

泥に埋まっているように見えたのだが、違っただ。見た、そのままが答えだった。

俺の自転車は、田んぼの泥の上で、真つ二つに“切られて”いたのだ。

――ピピッ。「スキャン完了。データを表示します」

「OK。……………うん、異常無し！ エルグナも大丈夫だね、起こしてあげて！」

ゴウン、とベッドが一段下がると、横から階段状の板が出てきた。白い服を着たエルグナは目を開けると、スージイの姿を探した。

「スージイ」眠そう、というよりは、消沈した声だった。いつもの覇気はどこ行ったのよ、と、スージイは思った。

「エルグナどうしたの？ 何にもおかしい所は無かったんだってば、もつと元気出してよ！ 髪の毛はちよつと燃えすぎちゃったけど、

また植えたげるからさつ。すぐ元通りだつて！」

「…そうね」

しかし、エルグナは体を起こすと、下を向いて溜め息をついていた。スージイとしては、そんな人間くさい姿を見せられてむしろ喜んでいただが。

「……………ねえ、スージイ。聞きたいことがあるんだけど」

「ほえ、なーに？」

いつになく、エルグナは弱気な顔をしていた。こんな顔のエルグナは、初めて見るかもしれない。

スージイはエルグナの言葉を、ベッドに頬杖をついて待った。

「……………見られちゃったの、かな……………アタシの、…あそこ……………カラポン、達……………」

“あそこ”と聴いて、スージイはすぐに何のことを言っているのかを理解した。一瞬可哀相な顔をして、しかし、すぐにまたいつもの能天気顔に戻った。

「だーいじょーぶッ！　ずっと私が守ってたから平気だってば、安心して！」

本当に？　と聴かれ、改めて念を押すスージイ。

あんなの見られたつて…、と思うのだが、彼女にとってはとても重要なことなのだ。以前それで、スージイは失敗してしまった。

「よかった…」

胸に手を当て、ほっと息をつくエルグナ。だが、だんだんと俯いて、次第に顔が見えなくなっていく。ついには両手で顔を覆って、

“泣き”始めてしまった。

「早く人間になりたい……………」

「……………」

…今のエルグナの姿を見て、誰もが悲しみにくれる少女、一人の人間と見て疑わないであろう。

しかし彼女は、有機ロボット。限りなく人間に近い材質、構成でありながらも、その事実是不変わらない。

食事もする、トイレも行き、身体も成長する。人と同じでありながら、演算、通信能力を持ち、ロボットとしても申し分ない性能を兼ね備えるエルグナ――。

しかし、彼女はあくまでも“本物”の人間に憧れていた。ある、自分と人間との違いに、彼女は……永遠に叶わぬ夢を見ていたのだ。

「大丈夫だよ。エルグナは、いつか人間になれる」

言葉の上では断言できる。しかしスージイも、その願いが叶うことは無いと一番よく知っている。……彼女が作ったロボットであるのだから。

「……ありがとう、スージイ。不思議よね、絶対にそんなこと、ありえないって分かっているのに。あんたの目を見てみると……なんだか、いつか本当にそうなるんじゃないかって、また願ってしまうの。……ほんと、不思議よね、あんた……」

「……私は、エルグナ、あなたが羨ましいです」

そう口を開いたのは、今まで黙っていたアヤミクだった。彼女は先の事件で見た目ほど深刻なダメージは受けておらず、不良部品を交換して一番早く復旧していたのだった。

「あなたのその滑らかな動き、柔らかくて黒い筋の無い肌、そして……最も人間らしさを持つ感情。全て、私には無い物。当たり前のように持っているあなたにこの気持ちは分からないかもしれないかもしれませんが、きつと、イエリーも同じように思っているはずですよ」

スージイは、その言葉をウンウンと頷きながら、嬉しそうに聞いていた。黒くて綺麗な瞳を輝かせながら……。

カラポン・ザ・ストーリー

6 『青い林檎』

3 / 1 3 更新予定

6 『青い林檎』 前編（前書き）

新話突入

6 『青い林檎』 前編

「おはようございますう 芝井先生え、買っておきましたよお、ミラクルドリンク！」

午前7時半過ぎ。保健室にビニール袋をぶら下げて入ってきたのは、養護研修生のこまっちゃん。小松先生だ。声音もテンションも甲高い彼女を見て、芝井先生は少しうんざりするような顔をして迎え入れた。

「おはよう」

簡潔に挨拶を済ませると、芝井先生は立ち上がって冷蔵庫を開けた。すかさずしゃがみこんだこまっちゃんは、袋からドリンク剤の箱を取り出すと、メシメシとダンボールを丁寧に切り取って、一本ずつ小瓶を冷蔵庫に収納し始めた。私服とはいえ、タイトなミニスカートでその格好は危険だ。冷蔵庫君（野菜室）が羨ましすぎる。

不意に、横からスツと手が伸びてきた。

「あつ、ダメですよ！ コレは授業をちゃんと受けてたのに、疲れちゃった子のためのお薬なんですから！ 勉強してない子が飲んだら毒薬なんですよう！」

茶色い小瓶をひったくった手の主はクルクルと漫画のように回転しながら、優雅にベッドの上へ墜落した。

「いーじゃん！ これからいっぱい勉強するんだもん」

蒼井林檎は何の躊躇もなくフタを開けると、それはそれはいい飲みっぷりを二人に披露してくれた。芝井先生に至っては、声を上げて大笑いしてしまうほどだ。

「ごちそうさまっ。いい味じゃん、新商品？」

「教えませんっ、ぶん！ それよりいいんですか林檎ちゃん、こんな所にいて。カラポン君が知ったらまた怒られますよ？」

林檎とカラポンの仲は、先生の間でもほぼ170%認知されている。尾ひれ羽ひれついた話も広まりがちだったが、保健室の二人は

林檎の良き理解者だった。

「いいもん、バレないし。それにカラポンが来るまでまだ時間あるし、ちよつと寝かせてねこまっちゃん。ぐうー」

「誰が寝ていいと言ったっけ？」

芝井先生はシーツを剥ぎ取って、膝を抱えた状態の林檎を外気に晒した。化学反応なのか、ぶるぶると震えていた。『ムカム化反応』だろう。

「うーっ、いけずう」

「後でシーツをアイロン掛けて、ホテルのスイートみたいにピシッと敷きなおせるんだったら、30分許可する」

「スイートなんて泊まったことないもん」

「いけない子ですねえー、飲んだり食べたりした後ですぐ寝たら、豚さんになっちゃいますよお？ ぶひぶひ」

なぜ豚の真似で、頭の上でにゃんにゃんポーズを取るのかよくわからないが、とにかく、こまっちゃんは精一杯、林檎に文句を言ううとしているのだ。会話は噛み合っていないけれど。

「だいたいあなた、早く来すぎなのよ。私達は仕事があるから早めにここに来てるの。あなたの相手をするためじゃないの、わかった？」

「ぶう」

「ほら、豚さんになっちゃった！」

林檎はしぶしぶベッドから飛び降りて、保健室の入口に放った鞆を拾うと、クルつと一回転して二人に向き直った。

「じゃー、カラポンを迎えに行ってくる！ 寝てたら押しかけて、おはようのキスしちゃうかな？ あー、それいいじゃん！」

「好きになさい」

「遅刻しないようにねー」

じゃっ、と言い残して、林檎は保健室の扉を目いっぱい横に流して、颯爽と廊下を駆けていった。はためくスカートの下には、今日も半ズボンサイズにまでめくったジャージが覗いているのだった。

「元気ですねえ、幸せなんでしょうか林檎ちゃん」

「そうね……………毎日充実してるみたいだけれど」

芝井先生はチラと書類棚の端の方を見上げる。

『持出厳禁』

鍵の付いたガラス棚に、存在感無く佇む薄いファイルが、彼女の目に張り付いて離れなかった。

「…それを決めるのは私たちじゃないわ」

「ほえ、何か言いましたか？」

どこかの高速道路、雨、高層ビル群。車は一切通らないが、ビルの赤いランプは静かに明滅している。

ガシン。

一步、前に踏み出したソレは、高いとも鈍いとも言い難い機械音を響かせる。二足歩行のシヨベルカーみたいなロボットに、なぜか俺は乗っていた。

「……………」

ガシン、ガシン――。

左右にあるシヨベルカーのアームが、腕のように揺れながら、ロボットは前へ前へと高速道路を歩いていく。二本のレバーを前後交互に動かしながら、まるでそれは竹馬のようだ。

これでちゃんと屋根があれば、もっと売れただろうに。何故か、そんなことを考えていた。

「リバースド・エンジェㇿう」

グウイン！ 方向転換した先には、比較的低めのビル。その屋上に、……………彼女が立っていた。

「蘇る天使は蜜の味。蜜に溺れる悪魔は膾の味。ねえ、カラポン。」

キスしよう?」

髪をかき揚げる姿は、俺の知る彼女よりずっと長い長い金髪。……いや、今、伸び始めてるのか?

「その前にお前をコロス。それ以上近づくな」

スラスラと口から飛び出した言葉——林檎へのサツイが、止めどなく溢れ出てくる。3本目のレバーを握り締め、右のシヨベルアームを振り上げた。

「いいじゃん、やってごらんよ。アタシのスピードについて来れんならサア!!!」

光の剣、光の翼。それらはドロリとした残像を残して、しかし確実に速く俺に迫って来た。隠しもしない、林檎の角張った赤い機械的ボディとは対象的な速さで、俺を斬りつける……!!!

「うオオオオ!!!」

臆さない。光の剣を持つ右腕を狙って、振り上げたシヨベルアームを回転させる。

ガキンツ! という、金属をねじ曲げたような音がして、光の剣が回転しながら宙を舞い、ロボットの右肩を溶断した。

ドロリ、ゴトン、と落下する音に遅れ、林檎は高速道路に降り立った。右腕を隠すその表情は、決して穏やかではない。

「……………何で? 何でそんなに私をコロせるの。あんなに私とコロし合うの、嫌がってたじゃん」

「ぶっコロす」

4本目と2本目のレバーを動かして、立て膝を着き、左のシヨベルアームを回転させる。地面に落ちた、光を失った剣をすくい上げ、カゴに収容させた。

——まだ、使える。

「…それでアタシをコロすつもり? 無理。アタシがもう一度奪い返して、カラポンをぶっコロす…!」

光の翼を広げた林檎は、一直線に、ツバメのように低く滑り飛ぶ。カゴを回転させ、刃の無い剣をコクピットに転がし落として、俺は

それを握りしめる。

ドロリとした、鋭い剣先が光り、そして林檎は、目の前だった。

「ぶっコロす……！」

「ぶっコロしてやる……！ ニセモノの——」

林檎のキックは俺の右腕に直撃。跳ね上がる光の剣を空中でキャッチし、逆手のまま、林檎は勝利の悦笑を浮かべた——。

「ニセモノの、カラポンめえッ……！！！」

「……！」

ガリッ……！！

……突き刺された光の剣は、内側を溶かしながらコクピット内部を横断した。それもそのはずだ。

剣を握りしめていた林檎は、左のショベルアームに弾き飛ばされていたのだから。

……そして、その光の刃は、俺の体をも一閃していたのは、言うまでもない。

「……ニ、セモノ……だと………？」

だんだん、ドロリと斜めに落ちていく視界の端に、赤いボディの林檎らしき物が映る。長い長い金髪以外は、どこがどの体なのかも分からない。光の翼も、その残像を残して消えてしまった。

そして俺も………コクピットの中に、ゴトリと上半身が落ちる。

その時になって、初めて林檎の言っていた意味がよくわかったのだ。俺の体は、最初から上半身しか無かったのだ。下半身があるはずのそこは、コクピットの床に飲まれ、ショベルロボットと一体になっていた。だから、血なんて出ない、だって俺は……。

「………ロボット………ニセモノ………だっ………のか………！」

フェードアウトしていく視界にも、冷たい雨は降り続ける。ロボットが倒れたのか、大きな音と共に強い衝撃があって、世界は真っ黒に消えてしまった——。

「んーーーー!!」

「……………っ!!? わっ、わあ、あああ!!!!?!!!!
!?!?」

息苦しく、そして、ドロリとした味覚で、急速に俺は目が覚めた。
それもそのはずで、林檎が布団の上から俺にまたがって、キスをし
ていたのだ。……………林檎が、俺の布団の上で…?

「な、何で俺んちにいんだよっ!!?」

「んー、ピンポン鳴らしたらお母さんが入れてくれたよ? ねー、
ねー、って……………最悪な想像図が瞬時に浮かび上がって、その通
りの光景が、大穴の開いた部屋の入口で出来上がっていた。

「おっと、邪魔しちゃったかい? こりゃ失礼」

「見てんじゃねえよおおお!!!!」

ゲラゲラと下品な笑い声を響かせて、母さんは足早に階段を下り
ていったようだった。…それが、今日の目覚めだった。

さんさんと輝く太陽。青い空、白い雲。人によつては清々しいと
表現するかもしれないが、目覚めの悪かった俺には、暑苦しいだけ
の迷惑な天気だった。

「…あのさ、陸上部の朝練はどうしたんだよ」

「だって、そんな気分じゃなかったんだもん。いいじゃん別に」

いいじゃんとか、気分でサボっていいもんなのか、運動部って?

しかもわざわざ電車に乗り、うちへ訪ねてくるだけの時間があるの
だから、相当早い時間に学校に行ってたはずだ。何やってんだこい
っ?

「でも残念だなー、自転車二人乗りしたかったのに」

「……………」

…そう、いつもなら俺は自転車通学。だが俺の自転車は昨日、フレームごと真つ二つに“切断”され、田んぼに転がっていた。そのため今日は、電車通学を余儀無くされたのだ。

いったい誰があんなひどいことを——その怒りよりも、ある恐怖の感情が勝っていた。

(…現実な訳がない)

数日前、俺は確かに夢を見た。田んぼの中で林檎と俺は殺し合い、その中で林檎は、放置されていた俺の自転車をチェーンソーで切断したのだ。

だが、それが現実だった訳がない。もしそうだったとすれば、今ここに『生きた』林檎がいる訳がない。ましてや、死んだ林檎が生き返ってここにいる訳もない。

あれは間違いなく夢だった。だというのに、なぜ……………

「……………」

「カラポン？ カラポン、ってば！」

林檎が俺の肩を叩く。それが、俺の首を締めようとしてきたように錯覚して、反射的にのけぞってしまった。当然林檎は、不機嫌そうな顔になってしまった。

「……………私のこと、避けてないよね？」

「ち、違うつて…ちよつと、寝不足なだけさ」

駅までの道のりはそう長くはないが、何か話をしないとマズいだろう。林檎は「寝不足？」と、首を傾げた。

「ようやく完成したんだよ。俺達メディア部の、テレビドラマがつ……………」

メディア部。それは、元々放送部から発展したヘンテコな部活。その名残もあって、毎年開催される国営放送主催の全国高校放送コンテストにも参加している。

アナウンス、朗読、ドラマ、ドキュメント番組…様々な部門に分かれて、日本全国の高校生達が競い合う。いわば、放送の甲子園みたいな大会だ。

例年うちの貝梨高校はラジオドラマ部門で参加していたのだが、今年はテレビドラマ部門でエントリーしていた。というのも、今年部費で新しいノートパソコンを買ったのだが、その交換条件に、顧問の柴本先生から『最低でも奨励賞受賞』を要求されたのだ。さもなくば、放送室に置かれた漫画・ゲーム類の一斉撤去を実行するという、俺達にとって死活問題だ。

「『編集に使うから』という理由でお前んちに持ってきてかれて、早半月といったところだ。これであやうく、ゲーム三昧の毎日に戻るってわけだ！」

「ていうか勉強しなさいよ、アホスケベ」

今日はブシドーも揃って、メディア部メンバーが放送室に全員集合した。…まあ、若干の+αがいるが。

「ほら、カラポン！コマツちゃんも待ってるんだから、早く見せてよ！ 遅いじゃんもー」

「楽しみですねえ、うふふ」

続々と人が入っていく放送室を見て、何だろう、と、目をキラキラさせながら覗き込んでいた所を林檎に発見された。「ふニヤっ！」という奇声は、たぶん一生俺の耳から消えないだろう。

「それじゃあ皆さんお待たせしました…栗野、電気消してくれ」

俺はカーテンを閉めると放送室は真っ暗になり、TVモニターの画面だけが青々と静かに光っていた。

「それでは……できたてホヤホヤ。貝梨高校メディア部、テレビドラマ部門作品『さらば櫻木』を上映いたします」

パチパチと拍手がおき、誰かが『ブ〜』とブザーの真似をして、笑い声が上がった。

モニターにカウントダウンが映し出され、一斉にシンと静まり返った。 製作期間約2ヶ月。主演・ブシドーこと寒来魂子による、

SF青春恋愛ファンタジードラマ『さらば櫻木』。

剣道部で忙しいブシドーの予定に合わせ少しずつ撮影を重ねてきた甲斐もあり、かなり良い物ができたと自信があった。小雪ちゃん、ぼたんちゃん2人も熱演を奮ってくれたしな。

（今年は…マジで全国行けるかもな…！）

ちよつとした優越感と何とも言えない緊張の、八分間。きつとみんなんも、全国大会進出への確信を持ってくれるに違いない。

再生が終わり、俺は満足した気持ちで、おもむろにカーテンを開いた。

「カラポン、」

真っ先に口を開いたのはブシドーだった。そうだろう、そうだろう。何しろ自分が主役のドラマなのだから、ブシドーが一番に感動の言葉を放つ権利が――

「これ、まだ編集できる？」

「――へ？」

それを皮切りに、感想のつぶやきがぼろぼろと、あちこちからこぼれ落ちてきた。

「音がちっちゃくないですか？」

「ちよつとフェードアウトが多すぎる気もするしな」

「ていうかアタシが出てないじゃ〜ん！ どーゆーこと、カラポン！？」

「……あ〜」

痛い所をつかれた、というのが正直な気持ちだった。どれも編集の時点で気づいてはいたことだったが、手間や時間のことを考えて、目を瞑っていた所だったのだ。

「…林檎は元々、役が無かったし、撮影だっしてなかっただろ？」

「何でよーっ、いっぱい手伝ったじゃん。私だって出番ほしい〜っ！」

手伝ったというよりは、金魚のフンみたいにくっついて、メンバ〜とワイワイ遊んでたようにしか見えなかったけどな…。

「ま、まあまあ。カラポン君も頑張って作ったんだし、そんなに文句ばかり言っちゃ、かわいそうですよお」

「でも先生、これは私達の作品なんですよ。カラポン先輩だけが作ってるんじゃないです」

コマツちゃんのフオローに救われた気でいた俺の心は、3秒と持たず、ぼたんちゃんにあっけなく粉碎されてしまった。しかもそのとおりであるからして、ぐうの音も出ない。

「あの…」

最初に何か言いかけていたブシドーが、申し訳なさそうに手を挙げた。皆が一斉にブシドーのことを見た。

「あ、いや…不満とか、そういうんじゃないくて、ね…………撮り直したいなーって所があつて。私のところで…」

結局のところ、俺が予想していた以上に皆からの評価は悪かった。実際、家のモニターで見るのと、学校のモニターで見るのでは、見え方が違うことを自分でも感じていた。

(…ちくしょうっ)

ようやく編集作業から解放されると思っていた。県大会まではもう一週間も無い。ブシドーは撮り直しをしろと言っていたが、撮影して、更に編集する時間を考えたら、間に合うかどうかもわからない。他にも、皆から指摘された点はたくさんある。

「カラポン」

甲高い声が狭い空間に響いた。その一声だけで分かる、林檎だ。心配してきたのか知らないが、今あいつと顔を合わせたら何を言ってしまうか分からない。無視しようかと思ったが、あいつは、コンコンとノックしてきたのだ。

「…ここ、男子トイレ」

「いいじゃん別に」

…よくない。催して来た先生に見られたら、どう説明したらいいんだ。

「ねえ。私、考えたんだけどさ」

ドアの下の際間に、上履きのつま先が見えた。と思った瞬間、フツといなくなつて、ドカン！ と大きな音が個室に響いた。ドアの上に林檎がよじ登つて覗き込んでいたのだ。

「私をヒロインにすればいいんじゃない？」

「もう、帰れよおまえ！」

ガタン、ゴトン――。

電車に乗つて二時間ちよつと（嘘）桜の木の下で（ホント）。試写会後、早速やつて来たのは星流山岳公園、こないだメディア部全員で撮影に来た所だった。

「ごめんね、もう間近つて時に」

「いいって。主役のブシドーが言うんだから、当然のことだろ」

ブシドーは、ここで撮影した映像で気になった所があった。逆光が激しくて、ほとんど顔が見えていなかったのだという。しかし、よりにもよつてそのシーンとは、あの桜の木の下での告白のシーンだった。

「でもさすがに…桜はもう、」

「…うん。そうだね」

今は5月末。どんなに遅い桜でももう散つてしまつている。もちろん前回使った桜の大木も例外ではなかった。そのことはブシドーだつて分かつているとは思うのだが…。

「私に考えがあるの」

そう言つて、ブシドーはスカートのポケットから小さく結んだビニール袋を取り出した。

「…驚いたぜ。ホント頭いいよな、ブシドー」

「ふふん、でしょー？ でもちよつと不安だったんだよね」

桜の太木は崖の淵に立っている。崖、と言っても、柵はちゃんと立っているし、少しぐらいだったら降りられるスペースがある。俺達はその木製の柵をまたいで、一段分下の空間に降りていた。

そこには、散ってしまった桜の花びらが溜まって土にへばりついていた。決して量は多くはないが、手付かずの状態のまま放置された花びらが残っていて、それを俺達はビニールに拾って集めた。

「洗った方がいいのか、コレ？」

「ダメダメ、やぶけちゃうって。土だけ払っておいてね」

これでなんとか“桜吹雪”が確保できた。ビニールいっぱい、にはとてもならない量だが、1、2回ぐらいなら撮影ができそうだ。

俺達は再び柵をまたいで、桜の太木に戻ることにした。

「おっと…ブシドー、ここ危ないぞ。柵がグラついてる」

「ほんとだ…。よつ、と」

さて、撮影だ。こないだと違い放課後に来ているので、日も傾き始めている。早めに撮影しないと。

「花びら取れたのか？」

「あー、こんな感じ」

栗野達には機材の準備をしてもらっていた。といっても、反射板とか、三脚ぐらいしか無いんだけどな。

「うほー、すげえなあ！ よくこんだけ集められたなあ。…でも、誰が撒くんか？ まさか花咲かじいさんみたいに、隣でばら撒くわけじゃないだろ？」

「…栗野って、木登りできない系男子だった？」

ブシドーの鋭角な質問に、図太く両腕を組んで肯定する栗野。…失笑だぜ。

「じゃー、カラポン登れよ」

「俺は…カメラとか扱わないといけないし…うつ」

みんながそれぞれの『あつ！』という顔をして、俺に注目する。

…もつ言うまでも無いと思うが、俺も木登りできる系男子ではなかった。

「…えー、せつかく花びら集めたのに…」

「だっさー」

どこぞのぷに娘が何か言ってるようだったが、いちいち相手している暇はない。あーくそつ、あんまり頼みたくないけど、さっきからそこでニヤニヤしてる林檎に頼むしかないか…できたよな、たしか…？

「林檎さ、たの——」

「あのお…」

ん？ 挙げようとした腕の袖をツイッと摘まれて、俺は何事かと一瞬考え込んだ。何のことはない、小雪ちゃんがワイシャツの袖を（結構力強く）引っ張っていたのだ。

「な、何だい、小雪ちゃん…？」

「私…き、木登りできます！」

意外な申し出により、木登り花びら撒き担当は小雪ちゃんに任せることとなった。最初はぼたんちゃんが止めたのだが、結局他に誰もできないと分かったので、引き下がった。

「…しょうがないけど…けど！ ホント気をつけなさいよ雪！ 枝の先とかに乗ったら落ちるからねっ、しかもそこ崖だし！ 何でこんな危ない所撮影に選ぶんですか、カラポン先輩は…！」

ガッシ、ガッシと小雪ちゃんの両肩を掴みながら、ぼたんちゃんは烈火のごとく吠え叫んだ。あまりの気迫に、俺もぼたんちゃんもタジタジだった。

「頭が空っぽだからだろ。空っぽカラポン、だもんな？」

「そーそー！」

林檎まで同調してきやがった。うるせ。

「さっ、つえゝゝい。あんま時間、無いと思うんだけど」

トントン、と腕時計をアピールするブシドー。…彼女だって、貴重な剣道部の時間を削って来てくれてるはずだ。待たせるわけにはいかないな。

「よし、始めよう。小雪ちゃんとブシドーはスタンバってくれ。ぼたんちゃんも小雪ちゃんの代わりにカメラ、アホ助はボード。林檎は…おとなしく座ってろ」

えゝ、と林檎はぼやいていたが、付き合ってる暇も惜しい。俺は新品のDVテープの封を切って、カメラに差し込んだ。前みたいに、変なトラブルがあって潰してしまうのはもうコリゴリだしな。

「…それじゃ、S-6でいいんだよな。ブシドー、準備はいいか？」
ブイサインが出た。むしろ待ちくたびれた、と言いたげなような顔をしている気もした。

貝梨高校メディア部が製作したテレビドラマ『さらば櫻木』は、とある桜の木と、櫻木という名の一人の少女とを巡る物語だ。これから撮影するシーンは、ブシドー演じる少女櫻木が、主人公の少年に自分の正体と、別れと、自らに閉じ込めていた想いを告白する、一番のクライマックスシーン。

そんな大事なシーンだったからこそ、ブシドーにはどうしても気になってしまい、やり直しておきたい所があったのだろう。実はそれがどこのかは、まだ聞かされていなかった。

（うまく撮れてたら説明するって言ってたけど…何なんだろうな）

桜の花びらも順調だった。『あんま無いんだからね！』とぼたんちゃんが釘を刺しまくっていたので、やや控えめ気味な感じだが、映像的にはちょうどいい。上手くやってくれている。

「私は…あなた達とは違う。だけど、私は通じ合えたと思ったの。ようやく私を理解してくれる人を見つけた、って」

ブシドーもさすがだ。前回よりも演技に磨きがかり…何と云うか、真剣味が増している。彼女の表情、仕草、言葉遣いが、前にも増して…その、愛おしく見えたのだ。

「カット」

「…あいよ」

そんなんだから、ぼたんちゃんの声が、夢から叩き起こされるようなストレスを感じさせるのだろうか？ ふう、と一息ついたブシドーだったが、その表情はまだ“少女櫻木”のままだった。すぐに次のシーンに行きたいらしい。

「一気にやっちゃお、感覚がある内にやっちゃいたい。…あと、カラポンさ、」

「ん？」

手招きしている？ ブシドーの所に行くと、コソコソと耳打ちしてきて…え、え？

「おいブシドー。本気で言ってるのかそれ…？」

「あたし、いつだって本気なんだけど」

チラリと、草っぱらで腰掛けている林檎を見るブシドー。案の定、林檎は千枚通しみたいに尖らせた唇をしてこつちを睨んでいた。

「はあ？ 林檎先輩を出すのかよ…何でまた？」

「さあ…ブシドーがさ…」

ブシドーの提案はこうだった。林檎を、主人公と仲のいい女の子役で登場させ、演技をしてもらうというもの。それも、主人公の男の子を我が物のようにして、櫻木が告白している前からひったくるという、考えもしていなかったアレنجだった。

「確かに結局櫻木は桜の精でした…って終わるんだから、その前に…一ついなくなる理由がほしいとは思ってたんだけど…やっぱ、微妙？」

「…いや、いいんでね？」

意外にも、栗野は抵抗無いようだった。「林檎先輩がつてのが、なお自然の流れな気がするよな。セリフも適当にやってもらおうぜ」「そんなうまくいくかな……」

俺の不安は見事に無視され、台本を書き足すこともなく、ぶつつけ本番で撮影に挑むこととなった。幸い、林檎がノリノリで快諾してくれたおかげもあり、一回やったりハーサルはかなりいい感じになった。

林檎はようやく与えられた自分の出番に、終始ご機嫌の様子だった。「あつはは、超楽しーじゃん！ やだ、顔笑っちゃうしー！」「じゃー、本番撮るぞー…あれ、カメラ回ってたのか。ずっと撮りっぱなしになってた」

ぼたんちゃん…君に任せといたつもりなんだけど……わざとか？「ゆーきー、次本番やるって」。花びら撒いてよちゃんとー」

「うーん、わかったあ」

ぼたんちゃんは桜の木の上にいる小雪ちゃんに連絡を済ませるとトコトコとカメラへと戻ってきた。すぐに気が付いたのだろう、「あつ」と口が開いて、俺を睨んでいた。「何で止めたんですか」と、ラジオ番組でも受信してる気分だ。

「じゃー、本番行くぜー、スタンバイ」

何か変に言われる前に、さっさと撮影を終わらせてしまおう。みんなが所定位置に移動するのを見て、ぼたんちゃんもペンでそこに書いたような『への字』口をして、むつつりとカメラの後ろに付いた。

「ぶつぶつぶつぶつ……」

「ぼたんちゃん聞こえてるから…。じゃ、本番5秒前ー」

俺が片手をパーにして上げると、みんながそれまでの表情をキツと引き締めて構える。4、3……指を全部折った、その瞬間――

バキィッ！！　バリバリバリ……　パサア、バキドン……！！

…もの凄い音がした。何が起きたのだろう、と俺が答えに至るより早く、大声を発した人物がいた。

「ゆきッ！！！！！」

「マジかよ?!」

小雪ちゃんが、桜の木から落ちた――。

それだけではない。落下のエネルギーの凄まじさは、あるいは老朽化した木柵の脆さが、事態を更に最悪な物へと運ぶ。

小雪ちゃんの体は、柵の向こうの崖の方へ転がっていつてしまったのだ――！

「きゃあ!!?」

一番驚いたのはブシドーだったろう。頭上からいきなりデカい音がして、当の本人よりよっぽど大きな悲鳴を上げていたのだから。

折れた枝と、ビニール袋に入れてあった桜の花びらがそこら中に飛び散って、まるでその先を見るかと遮っているかのようにも思えた。だが――

「小雪……ッ！！！！！」

俺の脚は迷わなかった。折れた柵を飛び越え、崖の土坂を一段、二段と滑り降りる。勘は当たっていた。さっきブシドーと、桜の花びらを拾った僅かな平面部分に、小雪ちゃんは横向きに倒れていたのだ。

「小雪ちゃん！　大丈夫か!?　小雪ちゃん……！」

見ると、小雪ちゃんの額からは一筋の血が流れ出ている。白いワイシャツは泥が擦り付いて、紺色のスカートは柵にぶつかった時に破けたのか、大きな裂け目ができていた。

（……えっ、息をしてない……!?）

落ち着け、落ち着け俺、まだ、間に合うはずだ。保健体育の授業でやったばかりだろう、順番通りに、数字の順を追ってやれば小雪ちゃんを助けられるはずだ……！！

「1、状況の確認：周囲の安全を確保つ、やばいけどこれ以上落ちない場所！ 2、意識の確認、なし！！」

声を出して俺は一つ一つを思い出す。教科書に載っていた番号とノートに書いた内容を思い出して、俺は思い出したことを一つ一つ叫んだ。AEDなんて便利なもんこんな田舎には無いから……次は、3だ！ まだやってないぞ。

「3！ 応援を呼ぶつ！！ 119番つ、ヒヤクジュウキウバア アアアアン！！！！！！！！！！」

上の柵の向こうで、栗野が手を振っていた。その手には携帯電話を握っていた。

「救急車呼んだぞー！」

「大丈夫ーっ、小雪ちゃん、カラポーン！？」

ブシドーの隣でばたんちゃんがこちらを見下ろしているらしかった。柵から降りてこようとしているのを、誰かに後ろから止められているらしかった。

「呼吸の確認…無し、胸骨圧迫…あっぱく……」

つまり心臓マッサージ。気道の確保と人工呼吸よりもこちらが先だと、何度も講師に口をすっぱくして教えられたことだ。その言葉を口に出し意味をかみ締めて、俺はふと最近こんなことをしたような、というデ・ジャヴを感じた。…イエリー？

（まさか一週間で2回もやるハメになるとはな…）

ただし今度は真正銘の心肺蘇生だ。イエリーはロボット、小雪ちゃんは人間なのだから。俺は心の中で“小雪ちゃんごめん！”と唱えながら、ワイシャツのボタンを胸からお腹の辺りだけ外して、左右にずらして開かせた。ほのかに芳香がして一瞬クラッとしたのもつかの間、おへそと白いブラジャーの下部が露わになり、なぜか無意味な咳を二つこぼしてしまった。

「カラポーンッ！！」

「林檎か…！ ちょうどよかった、心臓マッサージをするから——え？」

...<u>u

6 『青い林檎』後編

「キャンユー・フライ？」

ノー、アイキャン・ト・フライ。

「イエース！ ユーキャン、ト・フラアアーーーーーイ！！！！！」

それは、昔見た映画の冒頭シーンによく似ていた気がする。ああ、昔のことを思い出すだなんて。これが、走馬灯なんだ、きっと。

―― ^ - ^ ――

コンピュータグラフィックスが人間の目をごまかせるほどぐらの技術がやつとできてきたかな、と言えるくらいの頃。主人公がいきなり絶叫しながら、片瀬橋から境川へ飛び込むという斬新なオープニングで始まる映画だった。高校生の青春映画と説明したところで、ピンポンと正解を導き出せる人はなかなかいないだろう。

なぜ彼がそんなことをしでかすのかは映画の後半で分かるのだが、そもそも彼と俺とは状況が違いすぎる。一番の違いは言うまでもなく、『自分の意志で落ちてるのか』『そうでないか』だ。

「イエース！ ユーキャン、ト・フラアアーーーーーイ！！！！！」

「う……うん………？」

だから、目が覚めた時見た光景を、俺はよくわからなかった。空だ。それも、雲がだんだん遠ざかってる。…まだ堕ちてる、…とか？
「人生そんな捨てたもんじゃないだろう。いい言葉がある、教えてやろうか」

聞きなれない声がすぐ間近から聞こえてくる。…だが、どこにいる？ 俺の体以外に、周りの空間には何も無い、ような気がするのだが……！！？

「なんとかなるなる、ってな」

「なっ………何だこれ、落ちてる……のに、落ちてるわけじゃない！」

「…俺、やつぱ走馬灯見てるのかな」

「おつ。じゃああんちゃんは、前にも喋る犬に会ったことがあるのかい？」

いや、あるわけ無い。ということは、これは過去の経験を思い起こしているのではなく、今まさに体験して記憶を海馬に刻み込んでいる最中ということだ。…なんで？

「あるお方からあんちゃんの護衛を頼まれていたんだ。あんちゃんには死なれちゃ困る、ってね。真相を暴くまでは、俺が守ってやるから安心しなよ、あんちゃん！」

そうして、犬は地表の河原へと軟着陸したらしかった。ざあざあ
と川の水が流れる音が嫌というほど俺を囲みこもうとしていた。

「…スージマンだろ」

「おつ、あんちゃんは察しがいいねえ！」

河原に降り立ち、俺は改めてその姿を確認する。体長は約60cmほどで、その三分の一はまん丸な頭の大きさと言ってい。手抜きの漫画家が書き損じたみたいなしょくれた目が二つ、覇気を失くした「W」みたいな口。その口からはだらしくよだれを弾き飛ばしている真つ赤な舌が伸びていた。

何より特徴的なのは、その頭に巻かれた赤いハチ巻き。額の所には太々と「団結」の二文字が黒い筆字で書かれていた。何で…？

「………んで、何でまたそのコイントスの犬型ロボットが俺を助けてくれたんだ？」

「おつと、そいつは勘違いだぜあんちゃん！　って、犬型ロボット
つてところな？」

ご察しの通り、オイラは株式会社コイントスの開発したロボット
泉西入来だ。

だがオイラは犬じゃない。犬型ロボットですらない！　ちゃんと
歴とした人型ロボットなのさ！」

俺を差す前脚（右手？）の裏には、ご丁寧に肉球型に大小5つの
バーニア穴が開いていた。…この脚が変形して人型になるという

のだろうか？

「…へー」

「へー、つておま、全然その目は信用してないだろう？　だが無理もない、今のオイラのボディは確かにどこからどう見ても、犬型・犬形式・犬タイプのちゃんまくキュート！　な、ワンコ・ロボットだ。だがな、オイラのこの頭の中に搭載されたG・B・A・I・は、真正銘二足歩行の人型ロボット用なのさ！　何ならその目で見て確認するか？　よし、今ドライバーを出すぜ！」

向かって右側の“側腹”が引き出しのようにスライドし、+、-、大小各種のドライバーが八本整然と並んで出てきた。

「いや、別にいいから……俺たぶん見たってわかんないし……」

「なに、そうかよ。そいつあ残念だ……おっと、スジマンから通信が入ってるぜ、ちよつと待ってな！」

そう言つと、スライドしてきた引き出しを収納し、泉西入来と名乗った犬はピョンとジャンプして、90度旋回して俺から見て真左の方向を向いた。おいおい今度は一体何が始まるんだ、と思つてみると、彼(?)は小刻みにその白い毛を揺らし始めた。

それはなんだか、アメリカ製の3Dアニメを見ているような、少々滑稽な変形の仕方だった。脚部が地面にぶつ刺すように固定され、背中が二つに開き、中に収納されていた長方形形状のモニターが回転して、背中側面に展開したのだ。頭からは穴が開いて、家の天井にあるようなUHFアンテナ状の物体が伸縮・展開して、いかにも電波を受信してますとアピールしているようだった。

「…おまえ本当に人間なのかよ」

『ラッキーは人間なのー！　馬鹿にしたら怒るぞー、バカポン星人！』

背中 of 長方形のディスプレイ……液晶テレビというより、私はpad的なタッチパネルっぽい……に、すっかり見慣れてしまった顔が画面いっぱいに映し出されていた。スージマンこと、スージイ・長万部だ。

「さすが地デジだな、鼻毛までバッチリ」

『いや〜ん!』

何がいや〜んだよ……画面には、もぞもぞと動くスージマンの後頭部が画面いっぱい……ああ、鼻毛を抜いてるのか、わかりやすいやつめ。

『いたつ! ねえ、取れたあ? ちゃんと取れたーアヤビー?』

『はい、大丈夫ですよスージ様。この通り3本も抜けました』

「その声は…アヤミクさん? もう直ったんですね!?’ 後頭部に代わって、アヤミクさんの整った顔立ちがズームアップされた。うーん、今日もお綺麗です!

「こんにちは唐林さま。その…先日は大変ご迷惑をお掛けしてしまい申し訳ありませんでした。何とお詫びを申し上げますればよいか——」

「アヤビーのおっぱい見るー?」

画面下のおっぱいから…じゃなくて! 画面下から、スージマンの“デコ”がニユツと突出した。えっ、と驚くアヤミクさんのスーツの胸元に、左右からほっそ腕が迫って…って、おい!!

「アホかつ!! やめろスージマン!!!」

「えー、だってお詫びはしなきゃでしょー? ペケポン星人の部屋に穴空けちゃったしー、遠慮なくていいよ!」 もっと違う形にしてくれ…。そう言いつつも、俺の心のどこかの涙腺がホロリとしているような気がしてなからなかった。やっぱり、そこらへんも人間に似せて作られているのだろうか?

「おうおう、オイラが体を張って通信してやってるのを忘れてないかい、三人とも?」

「あ、ごめんごめんラッキー。早速大活躍だったねー、巡回任務頼んどいてよかったよー」…巡回任務、ラッキー? 「スージマンは俺に“ラッキー”っていう二つ名を付けてくれたんだ。『秘密作戦にはコードネームが必要なの!』ってな。秘密作戦つてのは、巡回任務、つまりあんたを監視・護衛することさ。おかげで助かったろ、

な？」なるほど、確かにその通りだ！　…と、言っているものやら何なのやら…。

「…それなら落ちる前に助けてくれよ。俺じゃなくて小雪ちゃん——」

ハッと、俺は大事なことを思い出した。そうなのだ、そもそも俺より先に小雪ちゃんが落ちたから、今こういうことになってるんじゃないか。

助けてもらっておいというのもアレだが、小雪ちゃんを助けてくれたってよかつたんじゃないだろうか？

「そりゃ無理だ。オイラは唐林拓二を監視護衛するように命令されてんだから！」

「融通が利かねえロボットだなあ、おい——」

ますます俺は心配になってきた。一刻も早く上に戻らなければ…でも、どうやって？　今いる谷底は、川があるだけで左右はほ

とんど直角の絶壁。俺の力で登れるとはとうてい思えない。

『ラッキーに乗っけてってもらったら？』

「それだ！　おい犬、もう一回頼む、上まで！　な？」

「あいよあんちゃん！　ビビってちびんじゃねえぞ——」

ディスプレイとアンテナを変形・収納した犬は、再びプラモデルのような組み換えを繰り返し、飛行モードへと変形した。赤いハチマキが際立って、何度見てもシニールな姿だと思いつつ、俺はその背中にまたがった。

『バカポン星人、』

「うおっ、まだ繋がってたのか…何だよスージマン、それにバカポンじゃなくてカラポンだっつーの」

私だつてスジマンなんだけど、と、不満そうな声が股の辺りから聞こえてきた。どうやらそこにスピーカーがあるらしい。『お願いがあるんだけど』と、前置いて、

『蒼ちゃん…蒼井林檎には、ラッキーが見つからないようにね』

いつになく真剣な、冷たく響くような声で言ったのだった。

「オイラはまだ未完成品なんだ。だからあんまり他の人に見られたくないんじゃないかな？」

いや、それだけじゃないと思うが……あまりにも自信たっぷりそうに言うので、俺は泉西入来こと、ワンコロボのラッキーの言葉をそのまま受け止めることにした。

それにしても、なんて格好だ。俺は再び、ジェット飛行携帯に変形したロボ犬の背中に跨り、谷川を這うように低空飛行していた。赤いボディペイントだったら名犬Rシユと間違えそうなフォルムだが、残念ながら赤いのは額のハチマキだけだった。

「もつと速く飛べないのかよ」

「いいけど、アンちゃん落ちるぜ、きつと」

そりゃ困る。

「おつ……あそこだぜ、アンちゃんが落ちてきた崖。何か赤いのがピカピカしてんなー」

「……警察？」

ドキリと、胸が鳴る。が、それはもつと現実的な車の装備品だった。壊れた柵のすぐ隣に横付けされていたのは、三台の救急車と、レスキュー車だった。

少し離れた崖に着陸した俺達は、野次馬に見つかからないようにコソコソと人だかりの中へ近づいて行った。

「適当に距離を置いて監視してるぜ」

そう言っただけ名犬ラッキーは本来のワンコモードへと変形し、何食わぬ顔でトコトコと草むらに隠れていった。……野良犬にでもなりきったつもりなんだろうか？

「…結構人が集まってるな」

ちようど、担架が救急車に収容される所だった。サイドドアから救急隊員とブシドーが乗り込んでいるのが見える、付き添いだろう。他の三人…林檎は？

「あつ…」

撮影をしていたあの桜の木の下で、制服の女子高生が膝を抱え頭を埋めていた。その隣にはやや長身の制服男子高生……間違いない、ぼたんちゃんとアホ助だ。

「おい、栗野つ、ぼたんちゃん！ 林檎は！？」
「…！！」

「カラポンお前、無事だったのか…！ バッキャロウ、何でもっと早く戻ってこなかったつ、心配掛けさせやがって！」

二人があんまりにも驚いた顔をするので、一瞬何故こんなにも心配されているのかをすぐに理解できなかった。そんなことよりも、気になるのは林檎のことだ。

「おい、林檎は？ あいつは無事なのか、どうなんだよ、おい」
「先輩は、ほら、今上がつてきた」

見ると、オレンジ色の服を着たレスキュー隊員がちようど、壊れた柵の所から林檎を担架に乗せて引き上げてきた所だった。そのまま担架は、二番目の救急車に収容されようとしている。

「俺が付き添う」

「待て待て、お前が乗るのはそっちじゃないだろ！ 何のために？ 台救急車が来てる、つて……カラポンお前、…無傷なのか？」

当たり前だろと言つてから、しまったと気付いた。俺は崖から落ちたのだから、むしろ無傷の方が不自然じゃないか…！

「お、おう。運が良かったんだ。じゃ、悪いけど後のこと頼んだぜアホ助」

そう言つて俺は、今まさに閉められようとしている救急車のドアに滑り込んで、半ば強引に乗り込ませてもらった。

救急車は、グンとアクセルを踏んで動き出した――。

二台の救急車は貝梨市内の病院へと滑り込んだらしい。すぐさまキャスターで運ばれていく林檎を、俺は看護士達と一緒に走って追いかけてようとした。が、誰かが肩を掴んで、それを阻んだ人がいた。「そこまで。どうせ追っても手術室は入れなでしょ」

「っ…………えっ、あれ…なんで？」

白衣を身にまとったその人物は、あまりにも違和感なくそこに立っていた。放送室の廊下を挟んだ隣室の住人、保健室の『芝井先生』だった。

「後で話をしましょ。林檎と小雪ちゃんは私達に任せておけば大丈夫だから。小松、この子を応接室へ」

はい、と聞き覚えのある声がして、俺はすつとナースに手を握られた。顔を見てさらに仰天、またまた保健室の住人、養護研修生の小松先生だったのだ。

「こ、こまつちゃん?!」

「ふふ、ここでは“コマちゃん”って呼ばれてるのよ。さあ、後のことは芝井先生達に任せて。こちらへどうぞ」

小雪ちゃんの乗ったキャスターが救急車から下ろされると、芝井先生はそれを運ぶ一団に加わり、林檎の運ばれていった方向へと消えていった。俺はというと…こまつちゃんに手を引かれながら、別の廊下の方へとドキドキしながら歩いていった。なんだかまるで、迷子の子供になったような気分だ。

（それにしても、なんてナース服が似合ってるんだ、こまつちゃん…）

我ながら不謹慎なことを考えているな、と思いつつ…。

「もともと医者さんを目指してるの。学校の保健室はあくまで研修、芝井先生について勉強を教わってるのよ」

応接室でお茶を出してもらって、こまつちゃんからそのような説明を受けた。芝井先生が学校の保健室にいるのは、言ってしまうと人手不足の補填なのだという。

「お医者さんはいつでも足りないから。でも大丈夫、芝井先生はちゃんと教員免許も持つてるのよ？」

「それは、すごい……」

お茶をすすりながら、話題を考える。…だめだ、何も浮かばない。こまつちゃんと二人きりで狭い部屋にいる緊張に加えて、林檎達の事故の状況を説明したくてもできないという、もどかしさのせいもあった。

（どうしてもラッキーのことを話さないと、俺の状況を説明できない……）

「……………林檎ちゃんと小雪ちゃんが心配なのね。でも大丈夫つ、芝井先生がなんでも治しちゃうから！　ね？」

黙っているのを察してか、こまつちゃんはお盆を抱えて笑顔で問いかける。…へへ、なんて苦笑いしかできなかった。

「それじゃあ、私もちよつと行かないといけないから。あ、トイレはそのすぐ向かいにあるよ」

「…ありがとうございます」

頭を下げたまま、俺はそのまま色々と考え事をしようと思って目を閉じた。真つ暗な闇の中で、俺はいくつかの場面をイメージングする。

スージマンはコイントス社で、『林檎がロボットかどうかを確かめるために、裸を見てきてほしい』と言っていた。

桜の木から崖に落ちた小雪ちゃんとはかく、崖から落ちて頭をぶつけただけの林檎は、身体も病院にチェックされるのだろうか？　だとしたら、俺よりも先に、病院の人たちが林檎の裸を見ること

になるだろう。

…もしも、林檎が本当にロボットだったなら、裸を見て気づくはず。あるいは、レントゲン写真とかで、身体の内部も………？

——わしゃわしゃ。

「うわっ！？ ぶっ、」

…危うく理性が吹っ飛ぶところだった。だって、顔を上げたら目の前にこまっちゃんの巨乳が——もとい、柔らかな手で頭を撫で撫でされていたのだから。

「カラポン君は優しいねっ。えらいえらい」

「…こまっちゃん、これ、めっちゃ恥ずかしいっす」

うふふ、と、こまっちゃんはとても大人とは思えないようなスキップで、ドアまで軽やかに跳ねていく。去り際にいたずらっぽく、人差し指を唇に当てていた。

「林檎ちゃんには内緒にしといた方がいい？」

「…できれば、みんなにも」

だから、そのウインクはいつたい何なんですか、もうっ！

「お待ちどう様」

ガチャ、と音がして応接室に入ってきたのは芝井先生だった。時計を見ると、まだ5分も経っていなかった。

「え…早過ぎないですか？」

「大丈夫だったってことよ。すぐ目を覚ますはずだから」

白衣のポケットに両手をつ込み、ドツカリと対面のソファに腰を落とした芝井先生。何か四角い物を取り出したかと思うと、よりもよってタバコとライターだった。

「あ、煙ヘーひ？」

「大丈夫ですけど」

今、答えを聞く前に火を点けませんでした？ 先生……

「もつとも」

ぷかぁ、と特大の副流煙を吐き出して、先生はもう一服する。だからもつたいぶつても、どうせ大したことは言わないんだろうなと思っていたから、危うくその言葉を聞き逃してしまうところだった。

「人間だったなら、の話だけれど」

「……………！？」

どくん――。

…ドロドロとした血溜まりが波打ったような感触が、胸の中で蠢いた。それはまるで、何か得体の知れない生物が、心臓の中でジャンプをしたような、恐ろしく、吐き気のするような衝動だった。

「…………… ということですか？」

「その説明の前に、一つ確認したいことがあるの」

先生はタバコを取り出した白衣のポケットから版紙を取り出し、それを俺に手渡した。ほのかに熱を帯びたそれは、プリントしたての一枚の写真だった。

「現場には三台の救急車が来てたでしょう。…おかしいと思わない？ 通報があった時、その場にいたケガ人は、蒼井林檎さんと、野村小雪さんの二人だけだったはず。あなたはまだ、発見 “されていなかった” というのに」

「……………」

雑談をするかのような調子でたばこ片手に語る芝井先生。だが、その言葉の陰に潜むのは、そんな軽い物では無いらしい。そう確信させるのが、この焼きたてホヤホヤの写真に写っているものだった。「それはあなたのお友達かしら」

「……………」

デジタルズームで荒くはなっているが、それが救急車の運転席付近を、前を走る車から撮影した物だということはすぐにわかった。だが、俺に救急車の運転手の友達なんている訳がない。いるとすれば――。

（スージマンパパ………！）

白色のヘルメットをかぶった微笑の運転手は、どう見てもスージマンの父、サーゲス長万部にしか見えなかった――。

ウオオオオン………！

独特の唸り音を上げて、星流鉄の電車が動き出す。ガタガタと小刻みに左右へ揺れながら、速度を上げずに、キーキーと車輪が悲鳴を上げながらカーブを曲がり始めた。

トンネルをくぐると、川を挟んで向こう側の山から、大きな夕日がバツ！と車内を真っ赤に染め上げた。たった二人の乗客はその眩しさに思わず顔をしかめたが、太陽に背を向けていただけマシだったかもしれない。

「………あちいな」

「………」

栗野は立ち上がると慣れた手つきで後ろのガラス窓の上端を掴み、ゴトン、と、手前の隙間の中へ落とした。代わりに、そこから白色の板窓を引き出して、カッチリと窓枠の間にはめ込んだ。ブラインド状になった板窓からは、光を遮り、風だけが入ってくるようになっている。

「髪挟むぞ」

「いいです、自分でやりますから……！」

重いぞ？　一応の一言を述べて、栗野は座り、ぼたんは立ち上が

り、クルッとスカートを翻した。

案の定、ぼたんの思っていた以上にガラス窓は重く、揺れる車内の中悪戦苦闘を強いられる形となった。

「ん、ん……痛っ!？」

バコン! と、ガラス窓は数mmズレた瞬間、ぼたんの力では支えきれず、大きな音を立てて溝に落っこちた。指を挟んだか、ぶつけたかしたらしい。

「だから重いぞって言ったろ……大丈夫か？」

しかし、ぼたんは指先を右手で隠したまま見せてはくれなかった。背中を向けたまま、そのまま奥の、中間運転席の前の座席に移ってしまった。

「………ったく、何だって言うんだよ………」

栗野は“ブラインド板”を持ち上げて、更に残りの一枚の窓も同じようにセッティングした。「はあ」と溜め息がこぼれ、ドツカリとシートに腰を落とした。

「お前のせいじゃねえんだからさあ、泣くなよ!」

「泣いてない」

泣いてんじゃねえかよ。…とは、さすがに言えなかった。栗野の中では、今自分は怒っているわけじゃない、というのを強く意識するあまり、どうしたらこの気まずい空気をこれ以上悪化させずに乗り切るか、という方法が全く思い浮かばなかった。

自然と二人は黙ってしまう。しかし、栗野は沈黙というのが、親父の長つたらしい説教の次に大ッ嫌いだった。

「死なねーよ、あんな高さから落っこちたぐらいじゃよお。もちつと、いつもみたいに元気になれ! ねちっこく、生意気になれ! バンバンバン!」

バンバンバン! というのは、栗野が座席を叩いた音である。それも、普通にじゃない。一回目のバンで右、二回目で左、三回目で両方に、バン↑・バン↓・↑バン↓といった具合だ。

ぼたんは、ぼたんとした…いや、ぼかんとした顔をしていた。

「…何やってんですか、アホ助先輩」

「そう、そんな感じでいい」

ちようと電車は、星流川の支流を跨ぐ鉄橋を渡り始めたところだった。

「その救急車はね、この病院に着く直前に違う方向へ走っていつてしまったそうなの。誰も乗せていないのに、赤色灯を回しサイレンを鳴らしながら。どこへ行っちゃったのかしらね」

消えた救急車。便宜上こう呼ぶことにしよう。

小雪ちゃん墜落現場に駆けつけた一台余計な救急車。それだけでも十分に怪しいが、誰も乗せずにいたいどこへ行ってしまったのだろうか。

「先に私の考えを聞いてくれる？」

芝井先生は灰皿にタバコを置くと、立ち上がって俺の後ろにある窓のブラインドを降ろし、外の光を遮断した。次に何をするかと思えば、この部屋の唯一の出入口である扉の前に立って、カチリ、コトン。と、鍵を閉めたのだった。

「あの消えた救急車は、最初からあそこで誰かを乗せるつもりで待ち構えていたんじゃないかしら。もしかすると、野村小雪さんが墜落する事故が起きる前から、どこかで待ち伏せていたのかもしれない。その誰かを連れ去るためにね——」

（ありえるかもしれない……）

なにしろスージマンパパは一度、路線バスを運転して、俺を半強制的に拉致していったことがあるぐらいだしな。バスが救急車に変わっただけと考えれば、充分ありえそうな話だ。

…だとすれば、連れて行こうとしたのは…

「…林檎、ですかね」

スージマンがしびれを切らして、そう指示したのかもしれない。

林檎は人間かロボットか確かめるために――。しかし、率直な意見を言ったつもりだったのだが、芝井先生はむしろ意外そうな顔をしていた。

「あら、どうして？ 私はあなたを狙ってたんだと思ってただけれど」

「え、俺ですか？」

何故？ 芝井先生はスツと俺の隣に腰を下ろしてきて、グツと顔を近づけてきた。

「唐林君。あなた、危険な世界に巻き込まれようとしてるわ。今はそれしか言えないけど、あの男とは関わらない方がいい」

タバコの匂いが鼻をついた。刺激が強くて、目線が泳いでしまった。

「……………知ってるんですか、この人のこと」

手に持った写真を示すと、芝井先生は写真を受け取って、顔を離した。

「あなたはどこの。この男のことを、どこまで知っているのかしら」それはYESと受け取っていい答えだろう。そしてたぶん、本当は芝井先生も知っているのだ。

俺がこの写真の男が誰かを、“知っている”ということ。（隠す方が…危険かもしれない）

俺は、ここ最近身の回りに起きた出来事を、一つ一つ芝井先生に説明しながら話した。

撮影帰りに林檎と川に落ちたあの日、駅の改札での、スージマンとスージマンパパとの奇妙な出会い。学校帰りに路線バスで拉致（？）され、コイントス社で見せられた物、説明されたこと。それから、イエリーが自宅に送られてきたこと、故障したこと、暴走したこと、回収されていったこと。今日の撮影では、小雪ちゃん、林檎、俺の3人がという経緯で転落し、また、ラッキーと名乗る犬型ロボに助けられたこと。

……覚えている限りのことは、全て話し尽くした。

「それで今に至るわけね、なるほど。一つだけ、君には忠告しておかないといけないわね」

「はい？」

芝井先生は七本目のタバコに火をつけると、火をつけたままのライターを俺に差出してきた。

「コイントス社関係の話は他の人にはあまり話さないほうが良さそうね。私みたいに聞きだそうとしてくる人がいたとしても、知らない、よく分かりませんって言うておいた方が、君の身のためだと思いなさい。私が超危ない人だったら、今ここで殺されてるかもしれないわよ？」

一瞬、目の前がパツと明るくなったような気がして、ヂリヂリという奇妙な音がした。…自分の髪の毛がライターで焼かれたのだと気づいたのは、結構後になってからだった。

「…芝井先生って、超危ない人だったんですか？」

「そうねえ、ちょっと危ない程度かもね」

あんまり安心できません……。

「でもまあ、あなたを拉致しようなんては思っていないから。もつとも、その男…サーゲス・長万部がどう考えてるかは分からないけどね」

とは言っているが、今のこの状況って軟禁って言うんじゃないだろうか。さっき鍵掛けてましたよね？

「軟禁じゃないわよ、鍵なんかあのツマミを回せば自由に外に出れるじゃない」

「そりやそうですけど…ていうか、そろそろ教えてくださいよ。芝井先生はスージマンパパ…サーゲス長万部のことを、いったい何を知ってるっていうんですか？」

芝井先生は半分ぐらいの長さになったタバコを灰皿に持って行き、何かを考えるようにトントンとリズムをつけて灰を落とした。そして、俺の方を見るなり、

「昔付き合ってたのよ。大学に通ってた頃にね」
なんて、すごい情報を言い放ってくれたのだった。

「あ、あれれえ？ 何で開かないんですかあ？」

ふと気がつくと、ドアの方からガチャガチャと音が聞こえてくる。
この声は…… コマツちゃんだ。

「はいはい、今開けるから」

芝井先生はいつものかったるそうな表情に戻ると、応接室の鍵を開けた。小松先生は不安そうな顔をしていたが、俺と目が合うとニコツと笑顔を見せてくれた。

「実は、蒼井林檎さんのことで……」

「ん、わかった。歩きながら聞いわ」

チラと、目配せすると、「ちよつと先に行つて」とコマツちゃんを促した。ドアが閉められ、彼女が離れたのを確かめると、芝井先生は俺の名前を呼んだ。

「唐林君。林檎さんがロボットか否か、私が確かめてきてあげるわ。
…それが知りたいんでしょう？」

「は……はい」

そうして、先生は部屋を出て行った。

一人残された応接室は、途端にしいんと静まり返る。

「……… ついに、わかるのか。アイツの、真実が……」

いや…… そうじゃないな。

林檎は、蒼井林檎は、人間に決まってる。

… ロボットなわけない。

「… ようやく、安心できるんだな」

当然なことの確証が得られる。ただそれだけなのに、俺の心は、
古沼のように濁り、渦巻いているようだった……。

「…大きな傷は特段見あたりませんでした。出血も無く、脈拍、血圧共におかしい値ではありません」

「意識だけ戻らず、か……まあ、頭をぶつけたならそれもおかしいことでは無いんだけど」

芝井は小松の報告を聞きながら、さてどうしたものかと思考を巡らせていた。肝心の、人間かロボットかを判断する方法がまだ分かっていなかったのだ。

開閉式自動ドアをくぐると、二人が移された集中治療室は目と鼻の先だ。

「…ねえ、静かすぎない？」

「そういえば…さっきはもっと、人がいっぱいいた気がするんですけど……」

ナースステーションにさえ人気はなく、幾台と置かれたパソコンの排気音、そして心電図の淡々とした電子音のみが廊下に響き渡っているだけだ。

…まさか、

「…小松、林檎と小雪ちゃんの部屋はここで間違いないのよね？」

「え、ええ！ ハイ、ここで間違いないです！」

間違いないのに、二人が動揺していることは言うまでもない。なぜならば、それは――

「なんてこと……やられたわ！」

「そ、そんなあ！？」

集中治療室ベッドは、二台とも空になっていた。それだけではない。

その周りでは、白衣の男女が、糸切れた操り人形の如く、あちらこちらで倒れていたのだ――。

「…ん、あれ…？」

いつの間にか、俺はソファの上で眠ってしまっていたらしい。誰かが掛けてくれたのか、上着のようなものが乗せられていた。

「目、覚めた？」

「ん……？ あっ！？ り、り林檎！？」

誰かが向かいに座っていると思ったら、それは林檎だった。ワイシャツ姿…よくよく見たら、俺に掛けられていたのは林檎の上着だったのだ。

「あんまりよく寝てるから、ずっと見ちゃってた。えへ」

「起こしてくれりやいいのに……怪我は無いのか、大丈夫なのか？」

しかし、林檎はそれには答えず、何やらドアの方をしきりに気にしているようだった。やけに落ち着きがない。

「ねえ、カラポン……私達、誰かに見られているような気がしない？　なんか、おかしいよ、あそこ」

「え、どういうこと？　別に誰もいないと思うけど…見てこようか？　ああ、俺が行くよ」

あ…と何かを言いかけるも、それ以上林檎は何も言わなかった。何だろう。何かに怯えている？　いったい、何に？

——ガチャ。

「…何だ、誰もいないじゃないか——」

ドアを開けたら、そこには静かで水色な病院の廊下。誰の視線も感じなければ、人の気配すら感じられない。

林檎の勘違いだろう、そう思って、俺はドアを閉め、応接室の中へ振り返った——だが、

「——あ、」

「動くな——」

男の声。1人ではない…いや、もっとたくさんいる。

電気の点いていたはずの部屋が黒に染まるほどの人数。機銃、防護服、重厚な装備の彼らは、いったい何者なのか。

「お前の役割はただ一つ。黙って、黙って黙って黙り抜くこと。そうすれば命まで奪われることはないだろう」

誰が喋っているんだ？ ヘルメットで口が隠れているのに、いやにそいつの声だけがハッキリと聞こえてくる。

その疑問に答えるかのように、その男は、“黒闇”の中から姿を現した。両手に抱えているのは……口を封じられた、林檎だ……！！

「んーっ、ん——」

「林檎……！」

「言っただろう。黙れ、と」

光が二、三、明滅したかと思うと、体が宙に投げ出され、視界が渦を描くように回転した。それまで一切が無音。90度曲がった床一面の世界に、黒い靴の行進が横切る……いや、縦切る。

（何なんだコイツら……！？）

「……らば……カラポン……！」

林檎が苦しそうな叫び声を上げているのが聞こえる。それは足音に邪魔され、しかもだんだん遠ざかっていくから、言葉がよく聞き取れなくなっていく。

（りん……ご……）

「……や……なして……いや……カラ……ン……！！」

だが、何故だか、最後の林檎の一言が、ハッキリとよく聞こえてきた。

そんな気がした瞬間、俺は“夢から覚めた”のだった。

「……」
「……」
「……」

「！！？ ……ハッ…あ、…………ハ…………ハッ…………夢……………か…？」
飛び起きた瞬間、右手が宙を掴んで冷や汗がドツと浮かび上がった。

ここが病院の応接室で、ソファの上で寝てしまっていたと思い出すまでには、10数秒ほどの時間が必要だった。

「……………ああ。あの夢の、新バージョンってわけか」
今回の夢は、いつもの夢と随分異なる点が多い。

俺も林檎もロボットにならないし、林檎は俺に殺されていない。

…連れ去られた、というのが、殺されたと同義ならば、まだ多少説明できそうな気もするが、いずれにしろ、気持ちのいい夢ではない。
「…たまには違う夢も見させてくれよ」

「あら、いつもどんな夢を見てるの？」 うおっ、誰だ？！ と思つたら、他でもない。芝井先生がドアの所に立っていたのだ。…そう、夢の中では、あそこから林檎がさらわれていったわけなのだが……………。

「……………まさか」

「そうね、夢の話はまた後でしましょう。青井林檎さんと、野村小雪さんが行方不明。誘拐された可能性が高いわ」

芝井先生は眼鏡を持ち上げ、無表情のままそう言った。

『“GAの收容完了、これよりK地点に移送する”』

『“了解”』

英語の無線交信が狭い車内に行き交う。カーテンは締め切られて薄暗く、外の様子は分からない。いや、“外から中が分からないようににされている”のだ。

「“見事な手際ですよ軍曹。君の任務遂行は完璧だった。奴らに邪魔されるまでは、ね”」

助手席に座っていた男が、さも愉快そうな調子で後ろの軍曹に声

を掛けた。後ろ、と言っても、座席はない。

中央に固定された一台のキャスターが場所を取りすぎていて、他の男達はみな、それに掴まるようにして立ち膝を着いていた。

「……上官。あの男は追わなくて良かったのでしょうか。」

「Ah-hum? 心配する必要は皆無だよ軍曹。奴の正体は分かっている。必要とあらば、奴の愛する会社ごと吹き飛ばすこともできる。」

今はその必要が無いだけだ。この意味を良く考えたまえ、軍曹。

——いや、」

軍曹は、また自分の嫌なニックネームを呼ばれるのかと察知し、無線機のマイクを取った。

「K地点到着は1845。医務員とメカニックを待機させてくれ

」

「“全て右”」

無線機を戻すと、前からくぐもった笑い声が鳴り響いてくる。上官は大層ご機嫌のようだった。

「“実に優秀ですよ、Colored ponce! 狙撃兵なんかよりもよっぽど天職だ。自分でもそう思うだろう、え? カラポン?」

上官は、とても和訳もできないような汚い英語で大いに笑い声を上げた。上官に付き合うように苦笑いする者もあれば、やはり困った顔をして黙っている方が大半だった。

「——」

別に悔しかったわけではない。だが、彼はそう言いたくて仕方がなかったのだ。

ついつい、彼の口から日本語がこぼれてしまったのは、つまりはそういうことだったのだ。

「久しぶりだな……林檎」

「何か、言ったかね」

“はい、故郷を懐かしむ言葉を発していました。”と、彼は英語で答えた。

一台の救急車が、サイレンも鳴らすことなく、猛スピードで田んぼ道を走り去っていく。黒いカーテンで閉め切られ、中の様子は伺えない。

「話せる男で助かった、といったところかな」

「……わかんないよ。だったら最初から2人もさらう必要は無いはずだし」

水車小屋の中に隠された“救急車”から甲高い少女の声が聞こえて、サングラスの男は、ふうつ、とタバコの煙を吐いた。その口元は、なぜか笑っていた。

「安心するんだ。彼らもまだ確証が無いのだろう。彼女のこと心配だが、我々も最低限のビジネスを果たす必要がある。これが最善の結末さ、スージマン」

走り去った救急車はもう、見えない所へと消えてしまっていた。

と、その時、小さなダンボール箱のような物体が、救急車が通っていた道をなぞるようにして飛んでいくのが見えた。チュンツ、チュンツと、時々炎を吐き出しながら、それは物凄いスピードで、あつという間に見えなくなった。

「ラッキーの調子も良さそうだな」

「とーぜん、私が作ったんだもん。しばらくはあのままにしようかなー」

ポケット灰皿にタバコをしまうと、彼は、小屋の中の運転席に座

り、エンジンを掛けた。チラと、スージマンは横目でその顔を怪訝そうに盗み見た。

「…ねえ、サゲマン。何か私に隠しごとでない？」

「…いいや。あといい加減、そのサゲマンって呼び方はよしてくれないか？ パパなりお父さんなり、色々あるだろ」

しかし、スージマンはそれには答えず、ぷうつ、と頬を膨らませて、そつぽを向いてしまった。ため息が車内にこだました。

「…では、送迎のお時間だ。後ろは頼むぞ、アヤミク」

「はい、サーゲス様」

後部から、キャスターに寄り添うようにしていたアヤミクが小さく返事をした。その視線は、眠ったままの野村小雪を哀しく見つめていた。

6 『青い林檎』 完

7 につづく…

6 『青い林檎』後編（後書き）

次回の更新は年明けになる見込みです

7「本当のカラポン」part・1（前書き）

おまたせしました、連載再開します。

7「本当のカラポン」 part・1

ピピピピピピピ……

目覚まし時計が耳障りな電子音をかき鳴らしているが、持ち主はなかなか起きる気配が無い。いや、起きてはいるのだが、止める気にならないのだ。こんな甲高い音ぐらいのストレスよりも、動きたくないという気持ちの方がよっぽど勝っていたのだ。

ピピピピピピピ……

——ドン、ドンドンッ。

床下から、棒で突かれている音がする。聞こえているが、返事を返す気にならない。そして起き上がる気持ちも湧いてこない。やっぱり、目覚まし時計の甲高い電子音は止まる気配が無い。

ピピピピピピピ……

ガチャッ!!

「拓にい、うるさい!! いいかげん起きなさいよっ!!」

とうとう、しびれを切らして入ってきたのは桂だった。まず真っ先に目覚ましの電子音を止めると、それからかけ布団を問答無用にひっぺがしたらしい。一気に寒くなった。

「あきれた! 着替えないで寝ちゃってるじゃない……もーっ、起きろー……っ!!」

「……ほっといてくれ……まだ寝たいんだよ……」

ああ、やっと自分の意志で言葉が出たな。でも、そこまでだ。ふとんを奪い返す気にもなれないが、それ以上に何にも頭が考えてくれない。思考の底が抜けているような、全部が流れ出てしまってい

る感じだ。

「…バカクソにいい！！ バカ、バカバカバカ、バーカッ！！！」
そうして桂は、ドカドカと床を鳴らしながら俺の部屋を出ていった。半分壊れたままのドアが、勢いよく『ドンッ！』と閉められたらしい。また蝶番が外れなければいいのだが。

あれから2日。林檎の行方は、未だにわかっていない。

7「本当のカラポン」 part・2

「まあまあ、元気出しなよあんちゃん。その内いいことあるって！」
「うるせえなあ、だからほっといてくれ……………って、えっ!？」

今の声、どこから…?! その時、桂に引つ剥がされた布団の塊がもぞもぞと動き出して、ベッドの端まで来ると、ボトン! と、何かが床に落ちた。

あの時のロボット犬、“ラッキー”だった。

「よっ、あんちゃん!」

「どつりで温かいと思ったぜ……………つか、いつの間に入ってたんだよ! 気色悪いな」

前脚で耳を掻きながら、ラッキーは『何を今更』と、答えた。

「こないだ言っただじやないか、オイラはあんちゃんの監視と護衛を任されてる、って。御傍に付くのが当然、ってもんだろ?」「近すぎるっつの……………じゃあもしかして、病院にもいたのかお前?」

「あたばーよ、救急車の上をずっとバーニア噴かして追いかけてたんだぜ?」

あきれた。何で今まで教えてくれなかったんだろう? この2日間、スージマンに聞きたいことが山ほどあったというのに。

「仕方ないさ。スージマンはこの2日間、もんつのすげえ忙しかったんだから。オイラも報告したって、全然アクセスしてくんないんだもん!

あんちゃんもダメダメな感じだったしさ。オイラはしばらく様子見程度にしてくれ、って、アヤミクの姐さんに命令されてた訳さ」
…確かに、この2日間は何もしていなかった。土日で学校が休みだったから良かったものの、今日もできれば学校に行きたくない。

…ああ、ビデオの編集もまだ終わってなかった。大会はもうすぐだっというのに。

「そうやって現実逃避するのもいいけどさ、あんちゃん。一個忘れ

てることがあるんじゃないかい？」

「忘れてる？ … いったい、何のことだよ。何かあったか？」

ラッキーは生意気にもため息をついて、左右に首を振った。

「行方不明になったのは何人か、ちゃんとわかってる？ 名前を言
つてごらんよ」

「え… 林檎に、小雪ちゃんだろう？ 二人だ。小雪ちゃんのこと忘れてるだろ、って言いたいのか？ ちゃんと覚えてるよ。俺、そこまで冷たい人間じゃないぞ」

違う違う、と、前脚を振るロボット犬。そしてそいつが言った次の言葉が、事態の重さを俺に気づかせることとなった。

「3人だ。もう一人いただろう、ほら。あんちゃんがブシドーって呼んでた子だ。あの子も救急車に乗ってからいなくなってる。つまり、行方不明になったのは3人なんだよ、あんちゃん」

つづく…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1178h/>

カラポン・ザ・ストーリー

2012年1月13日21時52分発行